
魔法少女リリカルマテリアル 仮面と魔導師の物語

A G I T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルマテリアル 仮面と魔導師の物語

【Nコード】

N2287X

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

消えるはずだった、だが消えず存在していた。
気が付いたら私は仮面の戦士が平和を守る世界にいた。
そんな闇の欠片から生まれた私、マテリアルSこと星光の殲滅者、
又の名をシュテル・ザ・デストラクターがその世界で生活する物語。
魔法少女リリカルマテリアル 仮面と魔導師の物語
始まります。

第00話【序章】（前書き）

仮面ライダー単体で書き直します。

前回とは異なります、最初は少し同じですが。

アギト見て変に目覚めた事を申し訳ございません。

第00話【序章】

— — — — A
第00話
【序章】
A — — — —

私は、彼女に負けて消えた

いや、消えるはずだった……

消えるはずだったのになぜまだ考える思考を持っている？

なぜ私は………

気が付いたらどこか見知らぬ場所に居り激しい雨が振り、風が吹き、雷も鳴っていた。

雨を凌ぐものがない私は雨に打たれ全身ずぶ濡れだった、冷たい…

……… 体で感じる冷たさじゃなかった、

そう……… 心が冷たい、わからない、闇から生まれたはずの私が心が冷たいと思うとは、後、助けを求めている自分がいた。

「はぁ……………はぁ……………」

豪雨の中、一人の、学生服に似た黒く赤いラインが流れる服を着て胸に紫のリボン、栗色のショートヘアの少女が傘を差さず、息を切らしながら歩いていた。

「ここは……………どこなのでしょう……………」

どこに居るかもわからず少女はただ歩いていた、雨の中を、その雨の冷たさに耐えながら。

「冷たい……………体も……………心も……………誰か……………」

だんだん薄れていく意識の中、目の前にうつすら光が見えていた、その光がもしかすれば自分を救ってくれるかもしれない光だと思い意識を手放した。

魔法少女リリカルマテリアル 仮面と魔導師の物語

始まります。

第00話【序章】（後書き）

シュテルがもうちょっとどのようにな心を開いていったかを描写したいなと考えております。

第01話【黄金の魂】（前書き）

アギトへの愛が爆発しました、もうしちゃいました。

やっちゃいました、もうどうしよもないぐらいアギト愛が。

最初と最後に注目してください、見ていた人ならわかる表現がしてありますので。

第01話【黄金の魂】

A — — — — —
— — — — —
— 第01話 —
— 【黄金の魂】 —
— — — — —
A — — — — —

「ん……ここは？」

雨に打たれていた少女は気が付くと室内のベッドの上で布団を掛けられ寝ており最初に目に入ったものは木の板でできた天井とそれにぶらさがる電気だった。

（バリアジャケットが解除されてる？）

雨に打たれていた日の服ではなくパジャマを着ていた。

（いつの間に……）

その今居る部屋の中には本棚、机と椅子が一つずつと自分が使って

いるベッド、隣には電気スタンドにその置かれている棚に水色の宝石が置かれていた、

カーテンは窓が開いているため風が入り少し揺れていた、
空気の入れ替えをしているのだろう。

少女は少し困惑していると足音が聞こえてきた、様子を見るために横になって寝た振りをしようと布団を被る。

「
」

入ってきたのは二十歳ぐらいの茶髪の癖毛がある青年、青年は淵にタオルが掛けられ水が入った桶を持って鼻歌を混じらせながら入ってきた。

「ん？お、やっと起きたんだ」

（何を言って……………私は寝た振りを……………）

「寝た振りなんて可愛いことするね、布団のしわ見れば起きたか起きなかったかわかるよ」

寝た振りまで見破られ諦めて少女は起き上がった。

「まさか見破るなんて、あなた、何者ですか？
管理局の魔導師ですか？」

「管理局？何それ？何かのアニメの組織？」

「管理局を知らない？」

少女は隣の棚の水色の宝石をゆっくり手に取る、青年に警戒しているからだ。

「何か俺すごく警戒されてるなあ、君の名前は何か？」

「人にものを訪ねる前にまず自分から言うのが筋ですよ？」

「おつしやる通りです」

頭を掻きながら詫びを入れる、普通の大人なら子供に言われれば怒るはずなのにこの青年は素直に聞き入れた。

「じゃ、俺の名前は津上^{つがみせいいち}星一、この喫茶店の店長だよ」

喫茶店、この部屋は二階の住居だろう、窓から見える景色が少し高かった。

「ささ、俺が名前言ったんだから君も言って言って」

「名前……………」

少女は少し戸惑うが口を開き自分の名前を喋った。

「私はマテリアルS、星光^{せいこう}の殲滅者^{せんめつしゃ}、又の名をシュテル・ザ・デストラクターです」

「マテ……………せい……………シュテ……………」

覚えきれなかったのか最初の二文字しか言えていなかった。

「シュテルと呼んでおいてください」

「名前はまあいいや、シュテルちゃんはどこから来たの？」

「私は……………先によろしいでしょうか？ここは何という世界なのでしょうか？」

シュテルは管理局という組織がこの世界にないとわかり何という世界なのかを聞いてから話すことに。

「ここは……………うーん……………星の名前で言えば地球だね」

「地球!？」

驚くのも無理はない、シュテルも事実上なら地球から来たのだから。

「ここは何という街なんですか？」

「ここ?ここは風都ふうとにある海鳴市うみなりしという街だよ」

「海鳴市!？」

その街の名前を聞くと更に驚く、無理はない、それも事実上なら地球の海鳴市出身になるのだからだ。

「あの、この喫茶店の名前は？」

「この喫茶店の名前はアミーゴって名前だよ」

「住所、教えていただけませんか？」

シュテルは星一に喫茶店アミーゴの住所を訪ね聞いてみると自分の記憶にあるとある喫茶店の住所と重なり。

「わかりました、ここは私がいた地球とは別の世界の地球のようですね」

「別の世界？」

シュテルは世界が無限に一つずつ異なる世界が広がっていると説明し自分がその中の一つの地球の海鳴市から来たと話した。

だがその海鳴市は風都という街にはない様子。

そして管理局についても説明、本当の名は時空管理局、ミッドチルダという世界を中心に活動し様々な世界を管理している組織、だがシュテルが来た地球はそれに含まれていない。

「そんな組織がね……」

普通ならそんな小説地味だ話を信じるわけないがこの男、津上星一は違った、シュテルの話をすべて信じていたのだ、その青い瞳を見て、だが。

「信じてもらえるのはありがたいのですが私はまだ貴方を信用しきれていません、もしかすれば貴方が管理局の魔導師という可能性だつてあるのですから」

魔導師についても説明した、簡単に言えば魔法使い、管理局は警察や軍隊のようなことも行っていると教えると。

「シュテルちゃんは管理局に捕まるようなことしたの？」

「……………はい」

理由を話した、自分は闇の書という魔法の本の欠片から生まれたバグと。

闇の書は魔導師や様々な魔法に関わる生物が持つ魔力を蒐集しページを埋めていくプログラムがされており、全て埋めると大いなる力を得るのだがことは別の海鳴市で破壊され欠片となったがある事が切っ掛けで過去に蒐集したある魔導師を元に自分と後二人、マテリアルが生まれ闇の書の復活を試みたが闇の書を破壊した者に妨害され失敗に終わり消えたはずだった。

マテリアルは魔力を蒐集しなければ消えてしまうからだ、魔力の限界が来て消えたと思っていたらこの世界に存在していたと。

「なるほどね……………」

「ですがやはり腑に落ちません、なぜまだ私が存在しているかが」

「腑に落ちないか……………まあ何となくわかるけど」

星一の言葉に少し耳を傾ける。

「俺、実は記憶喪失なんだよね」

「記憶喪失？昔の事は何も覚えてないのですか？」

星一は頷く。

「気付いたらこの街の港に流れ着いていたのをこの喫茶店の元々の持ち主が見付けてくれてね、ほとんど何も覚えていなかったけど料理や野菜づくりだけは覚えててね」

「……………ならなんでそんなに明るいのですか？普通記憶喪失ならシヨック受けたりしてこんな事できるわけ……………」

喫茶店がどのような店か知っていた、元になった魔導師の記憶もあるからだ。

「星空を見たから」

「星空？」

「うん、病室から満天の星空を見てね、数多くの散らばった星を見てたら記憶喪失なんてちっぽけに見えてね、落ち込むのやめたんだ」

星一は窓の方を向く、今は昼間なため青い空が広がっていた。

「この街はね、夜になると満天の星空が見えるんだ、星空町って町もあるぐらいなんだよ？」

今ここは自分の住んでいる街、自慢気に話していた。

「シュテルちゃんはこれからどうする？」

前の世界にいた時みたいに闇の書って奴を復活させるために動くの

？」

悪い事と言わなかったのはそれが今日の前にいる少女の生きる意味と悟ったからだ。

「……………この世界が私がいた地球と違うのならばその生きる意味はないに等しいです、それにもう闇の書の復活はできないかもしれません……………それに」

一旦区切ると。

「もう一つ別の目的があります」

「別の目的？」

「その世界で私と戦い、勝利した魔導師ともう一度戦い今度こそ自分が勝利する、それが今の目的です」

星一を信用していないと言っていたがなぜか自分の目的をほとんど話していた、気付かぬ内に自分のペースを崩され星一のペースに乗せられていたからだ。

「それじゃもうこっから出ていっちゃう？」

「いえ、今出ていき再戦しても負けるのは見えていますから、もう少し時間を掛けてからにします」

「それじゃこの部屋、好きに使っていいよ！」

その言葉を待っていました！と言わんばかりにそう言ってきた。

「え、あ、はい」

やはり星一のペースに乗せられていた。

「それとやっぱシュテルちゃんって名前はね……………」

「おかしいですか？星という意味ですよ？」

「星……………それじゃせいる……………星輝^{せいる}ちゃんって名前はどうか？」

星一は紙にペンで『星』と『輝』と漢字を書いて見せた。

「星の輝と書いて星輝ちゃん、星の字なんて俺とお揃いだよ？」

「お揃いとかはともかく名前は気に入りましたが……………」

「いいじゃん星輝ちゃんって名前」

ニコニコしながら言ってくる星一、呆気に押されながら「はい」と返事してしまった。

「それじゃよろしくね星輝ちゃん」

なんだか完全に乗せられながらもこの喫茶店アミーゴで暮らすことになったシュテル・ザ・デストラクター改め星輝、星一はある所で嘘を吐きながらも一緒に生活することになった。

「おい星一」

「あ、オヤっさん！」

星輝が目覚めてから時間が経ち、この喫茶店アミーゴの元々の経営者で店長だった老人、立花たちばな とつへえ藤兵衛、現在はアミーゴと同時経営していたバイク屋タチバナレーシングクラブの店長であり、星一を助けた張本人だ。

星一の料理と野菜づくりの腕を買い、このアミーゴの店長にした男だ。

「あの子目が覚めたのか？」

「あ、はい、当分はここで暮らすみたいです」

「そうか、そうだ、一応子供服とか持ってきてやったから使えよ」

藤兵衛は一つの段ボール箱を持ってきており星一はそれを受け取った。

「オヤっさん……昔の子供が着ていたようなものじゃ……イタッ！」

「バツキヤロウ！俺がそこまで年老いて頭がイカれてると思ってたのか！？」

「すんません」

しょんぼりとしながら謝る。

「オヤっさんにはホント感謝してますよ、記憶喪失で身寄りが本当にない俺をここの店長にしてくれて」

「イイって事さ」

藤兵衛は少し会話してからバイクで去っていった。

「さてさて、お仕事お仕事とその前に」

星一は二階に上がり星輝に籐兵衛から預かった荷物を渡すことに。

「気に入るか分からないけどないよりはましでしょ？」

「はい、ありがとうございます」

星輝は素直に礼を言うと段ボールを受け取りベッドの上に置き星一は一階に降りた。

（この人といると何か乱れる）

とか思いながら段ボールの蓋を開き中から衣類を出し広げる。

余談だがそれは星輝が気に入る落ち着いたものだったとか。

「あ、いらっしやいませ！」

星一が店内に戻る、店内はカウンター席と数個のテーブル席がありお世辞にも広いとは言えない。

店に客として入ってきたのはサングラスを掛けタバコを啜えた中年の体格がいい男だった。

「あれ？立花のオヤっさんは？」

「籐兵衛さんならタチバナレーシングクラブの方にいて今は俺がこの店長なんです」

籐兵衛を尋ねてきた男に居場所を教えると、男はカウンター席に座る。

「まあいいや、近くに來たから会いに來ただけだから急ぎじゃない、コーヒーもらえるか？」

「かしこまりました」

星一はすぐにコーヒーを淹れる準備に取り掛かり数分して注文された品を男に出した。

「どうぞ！オヤっさんには及びませんが味には自信がありますから！」

自信満々にそのコーヒーを勧め男は一口飲む。

「…………… 美味しいな」

「ありがとうございます！」

男は星一と少し会話したいのかゆつくりとコーヒーを飲む。

「俺は滝和也、FBIの人間だ」

「FBI！？それはすごいですね！」

「なんで滝さんはオヤっさんに会いに？」

「…………… せっかく近くに來たんだからオヤジに会いたくなるのは当たり前だろ？」

「なるほど、滝さんも」

星一は洗った食器を布巾で拭いていく。

「あ、名前言うの忘れていました、俺、津上星一です」

「津上星一か、覚えておくよ、ごちそうさま、釣りはいらねーよ」

俺は代金を置くと店から出て外に停めていたバイクに乗りその場を後にした。

「釣りはいらないって……………ぴったりだから出ないって……………」

「あの」

すると二階から星輝が降りてきた、籐兵衛が持ってきた服を着て。着ているものは白いワイシャツにブラウンのネクタイとミニスカトだった。

「あ、似合うじゃん！」

「そうですか」

後ろを振り向き背中を見たりとかしながら服装に気を使う素振りを見せていた。

「少し外に出ます、夕方までには帰ってきますので、では」

星輝は足早と外へ出ていった、足早なのは背後から狙われるかもしれないという警戒心から。

「まだ警戒されてるな」

（記憶にある風景と変わらない……）

海鳴市の市街を歩き回りを見回し自分の記憶と照らし合わせていた。

（遠くに行くには人の目につかないように飛ぶしかないですね）

星輝は路地裏に隠れ紫に近い桃色の光に包まれると雨の日に着ていた黒く赤いラインが入った学生服のようなバリアジャケットに着替えられていた。

（では行きますか）

星輝は気付かれぬように速く飛び立ち一瞬にして遠くへ移動した。だがその近くで人間ではない、頭が蟻に似たような異形が見ており左手の指を胸の前で伸ばして添えると右手の人差し指と中指を伸ばし何かを描くように という字を書くように動かしていた。

「闇の書の残骸ですか」

その異形をビルの屋上から黒い服を着た青年が見ていた。

「まさかアギトと接触するとは………人は人のままでいればいい………」

青年の姿は薄れていき一瞬の内にその場から姿を消した。

星輝は海鳴市を一望できる丘に来ていた、これも元になった魔導師の記憶を辿り、訪れたのだ。

（ここから街が一望できるのでですね）

風が吹き、草木は揺れバリアジャケットの胸元のリボンとスカートが揺れる。

（なぜか、落ち着く……闇の書の欠片から生まれたはずなのに、やはり高町なのはの記憶が影響しているのでしょうか？）

そう思いながら空を見上げていた。

（青空……この目でやっと見れた気がする……）

前は夜空だったが星のない夜空で、朝焼けは消える直前に見た事がある。

（いくら記憶があっても目で見るのとは違いますね）

少し、この景色に感動を覚えつつ次の場所へ移動しようとしたら。

「っ！」

背後の雑木林の中から先ほどの異形が一体、また一体とぞろぞろと出てきた、この異形はアンノウンと呼ばれる種類の怪物達である特定の人間を狙う、この固体名はアントロードのフォルミカ・ペデス、蟻の怪人だ。

「魔導生物？」

星輝には微かにペデスから魔力を感じていた、魔力とはバリアジャケットや魔法を使うためのものである。

「逃がしてはくれないみたいですか」

気付けばペデスは十数体もあり回りを囲まれていた。

「なら消し去るまでです」

水色の宝石を手にとるとそれは形を杖に変えた、三日月のような赤紫に染まった飾りに先ほどの宝石が中心にある杖、ルシフェリオンへと。

「では、いきますよルシフェリオン」

【わかりました】

星輝の回りに桃色の光の球が無数現れ。

「パイロ！」

【シューター】

光の球は飛び交いペデス達を攻撃し始めた。

「ッ！」

その頃星一は何かに気が付きグラスを置くとエプロンを取り背もたれに掛け店から出ていくと同時にプレートを開閉からCLOSEに変え、銀のバイクに跨りその場から走りだしたと同時にこう叫んだ。

「変身！」

そして星輝は雑木林の中に入りペデス達をパイロシューターを使い攻撃していた。

二、三体は倒されていたが倒された倍の数が出現してくる。

「キリがないですね……………こうなれば一気に倒すのが」
【ルベライト】

星輝は上空に上がり雑木林の中に潜むペデス達を光の輪で拘束し一ヶ所に集めた。

「プラス……！」

【ブラストファイアー】

「ファイアアアアアアアアー！！！！！！！！」

ルシフェリオンの飾りが変形しペデス達向けると桃色に輝く砲撃を放ち一掃し同時に雑木林もペデス達が居た地点だけ吹き飛んでいた。

「少し可愛そうなことをしましたね」

ペデス達に言ったのではない、草木に言いながらその吹き飛んだ中心に降り立つと回りを見てまだ敵がいなか確認。

（可愛そうだなって、何を思っているのでしょうか……そんな事構わずに闇の書を復活させようとしていたのに）

少し隙ができた瞬間、背後にフォルミカ・ペデスに似ているが胸部が赤く染まったフォルミカ・エクエスが斧を持ち襲い掛かってきた。

【プロテクション】

ルシフェリオンが先に反応してバリアを張り星輝の身をエクエスの斧から守るが。

「なっ……！」

バリアに罅が入り、割れてしまい。

「ルシフェリオン！」

更には斧によりルシフェリオンが折られるとバリアジャケットの上着の部分が破損し消えると。

「がはっ！？」

エクエスの蹴りにより吹き飛び一本だけ太かった木に背中から激突しずり落ち口を抑え咳込むと吐血、手の平に血がついていた。

もし普通の人間だったら死んでいるかもしれないがバリアジャケットもあり更には普通の人間ではない体、死なずに済んだのだがこのままではまた消えるかもしれない。

「なぜこんなに体が重く……………」

だがそれだけではない、ペデスと交戦している時はそんな素振りを見せなかったがいつもより体が重く感じていた、まるで人間の体になったかのように。

エクエスは斧を持ちゆっくりと近付いていたがその間に立ちふさがる戦士が現れた。

「ハッ！」

後ろ姿は黒いが胸部の鎧は金と銀が着色されており腕も金が、頭にクワガタような二つに別れた金色の角に赤い眼の戦士は後ろを振り向き星輝を見る。

「魔導生物？いや違う……………貴方は？」

戦士は前を向きエクエスを見ると構え戦う意志を見せ。

「仮面ライダー……………アギト」

それだけを教えるとエクエスに挑んだ。

「仮面ライダーアギト……」

アギト・グランドフォームは先にパンチを繰り出し先制攻撃するとエクエスは怯み後退り更に回し蹴りを連続で二発食らい横へ飛ぶ。

「すごい……」

相手に攻撃を一度もさせず、余裕を見せた戦い方を見て星輝は呟く。

「ハ、ハッ！」

左手で肩を殴ると右手で胸部を殴り吹き飛ばす。

エクエスはバランスを保ち斧で斬り掛かろうとしたがそれを掴まれ取り上げられるとキックを食らいまたもや吹き飛ばされた。

アギトは斧を投げ捨てると頭の角クロスホーンが六枚に開き足下にクロスホーンを模した金色に輝くアギトのマークが現れ足に吸い込まれていきアギトは一步後ろへ下がり右手を前に伸ばし姿勢を低くする。

「ハアアアアア……！」

エクエスは立ち上がりふらついているとアギトはジャンプし右足を前に伸ばし必殺技ライダーキックを炸裂、エクエスの胸部にぶつかり蹴り飛ばすと地面に着地、

後ろを向き先ほどのように右手を伸ばし姿勢を低くしエクエスに背を向ける。

（これは油断ではなく自信？
自分の技に自信があるから敵に背を向けられる……）

エクエスは立ち上がると頭に光の輪が現れ苦しみ出すと爆発し絶命したと同時にクロスホーンは閉じる。

「貴方は……いつ……た……い」

星輝は立ち上がるが痛みが限界にきておりこの世界に来てから二回目、意識を手放しその場で崩れそうになるとアギトが駆け寄り体を支える。

意識が手放された事によりバリアジャケットは解除され籐兵衛にもらった服装に戻る。

アギトは全身が光りだすと人間の姿に変わった、津上星一の姿に。

「星輝ちゃん……」

するとそこに一台の白バイに乗った三本に別れた銀の角に赤い眼、青い装甲服を着た男がやってきたのを見て安堵するのだった。

— A
— T o b e C o n t i n e d —
A —

第01話【黄金の魂】（後書き）

どうでしたか！？番組っぽく表して見ました、因みにこの表現はどんなライダーでも共通ですがAと が変わる可能性があります、クウガだったら空 我だったり龍騎なら龍 騎かな？
剣？剣は

A J

— —

Q K

ですかね？

この表現はかなりこだわりを持ちました。

星輝に早くも正体バラす気で居ます、3話目、早くて2話にはもうなるかも？。

A

— 次回予告

A —

正義

「警視庁未確認生命体対策班の氷川正義です」

星—

「ちよつと氷川さん！」

星輝

「ルシフェリオン……」

小沢

「私が直してあげようか？」

星輝

「どうして津上星一の名前が出てくるんですか!？」

鈴木

「確実にショック受けますね」

御室

「ですね」

星一

「変身!」

星輝

「貴方がアギト!？」

A

— 次回 第02話 —

— 【青の嵐】 —

A —

目覚めろ、その魂！

第02話【青の嵐】（前書き）

今回は二つの青が登場します。

第02話【青の嵐】

— — — — A
第02話
【青の嵐】
A — — — —
—

（また知らない天井だ……）

気を失った星輝は白い部屋の中のベッドで目を覚ました。
この部屋は病院のベッドであろう。

「私はあの時……」

起き上がろうとすると身体中に痛みが走りまた横になる。

「起き上がれないですか……」

横を向き外を見ると青空が広がっており白いカーテンが風で揺れていた、その光景はアミーゴの住居での自分の部屋で見たものとはほぼ同じだった。

（私は負けたんですね……あの怪物に、そしてあの黄金の戦士、
仮面ライダーアギトに助けられ）

最初は右だったが次に左を向くとテーブルが置いてありその上に少し罫が入った水色の宝石、ルシフェリオンの待機状態が置かれており点滅していた、自己修復機能が起動しているのだ。

「ルシフェリオン……貴方ですか」

いつもなら答えるはず、だが自己修復機能が起動しているためそちらが優先になっている。

「ボロボロですね……これでは再び戦っても彼女には勝てない……」

ルシフェリオンに向かって話していると。

「何ぶつぶつ喋ってるのかしら？」

そこに警察の夏服の制服を着た髪の毛を後ろで結んだ女性が入ってきた。

「貴方は？」

「私は小沢すみれ、警視庁未確認生命体対策班の警官よ」

「未確認生命体？」と疑問符を浮かべながら尋ねた。

「貴方が戦ったあの怪物のことよ、アレを私達はアンノウンと呼んでいるわ」

「アンノウン………後、なぜ私が戦ったと？」

「このデバイスを少し調べさせてもらったわ、その記録を見てね、悪いわね勝手に」

ルシフェリオンを見ながらそう言い。

「いえ………」

「それにしてもすごいわね貴方の世界の技術力は」

「それもどこで聞いたのですか？」

「津上くんによ、このデバイスは本当にすごいわね、持ち主の戦いを支援したり、破損したら自己修復ができる」

小沢は星輝の目を見て。

「これを私に預けてみない？」

「何をするつもりですか？ルシフェリオンはまだ完全には」

「修復できていない、だからよ、私に預ければ完全に修復して更に強化までできるわよ、この私の頭脳さえあれば」

星輝は小沢の発言を聞きはったりではない感じた、彼女は本当に天才であると。

「それに貴方はもつと強くなりたい、ならばこの子自身も強化しないと着いていけなくなるわよ？」

少し考え、出た結論は。

「お願いしても、よろしいですか？」

「もちろんよ、未知の技術、もつと調べてみたいわ、全力で修復し、強化してあげるわ」

「よろしくお願いします……」

交渉が成立し小沢はルシフェリオンを預り去ろうとすると。

「……………最後によろしいですか？」

「何よ？」

「仮面ライダーアギトとは一体何なのですか？」

アギトについて尋ねてみたら。

「アンノウンと戦う仮面の戦士よ、貴方は彼に助けられたの」

「それではアギトの正体は誰かわかりますか？」

その質問に小沢は首をかしげ微妙な表情に。

「どんな風に思っているのかしら？」

「率直に言いますと颯爽と現れ人間を救う正義のヒーローですかね？
そして正義感に溢れしっかりして毎日様々な鍛練をしながら

過ごしていそうです」

それを聞いて更に小沢は微妙な表情に。

「なら津上星一のことどう思うかしら？」

「彼は……それは正反対ですね、なぜ彼の事を？」

「……………まあいいわ、後、アンウンに襲われ生き延びた被害者には警察から護衛が付くわ」

それを言い残すと部屋から出ていき入れ替わるように二人のスーツを着た男性警官が入ってきた、一人は大柄のずっしりとした体格で一人は頼りなさげな男だった。

「警視庁未確認生命体対策班の氷川正義です」

「同じく鈴木一哉です」

大柄は氷川正義、頼りなさげなのは鈴木一哉である。

「当分の間護衛をさせていただきます」

「……………よろしく願います」

先ほどは小沢の自信満々の態度に押されていたがこの二人には流されないようにと思う。

「星輝さんですね？」

「まあ……………そうですが……………」

そういえば名字を考えてもらっていなかったなと思うとデストラクターではアレだから。

「高町星輝です、よろしくお願いします」

元になった魔導師、高町なのはの名字を使うことにした。

「こちらこそ」

横になったままでは失礼だと思い痛みを耐えながら起き上がる。

「無理しなくても……」

「いえ、このぐらいの痛み何とも……」

かつて受けた砲撃魔法よりは痛くないと強がるのだがやはり痛いものは痛い。

「お水、飲みますか？」

「お願いします」

正義の行為に甘え水を飲むことに。

「彼は？」

「あ、津上さんなら喫茶店の方に戻っていますよ」

「そうですか………はあ………」

何か意味ありげなため息に疑問を浮かべながら聞いてみた。

「住もうとか勧めて来たのにこのようなことになっているのに一緒にいてくれないなんて」

なるほどと思いながら話を聞いていると。

「大丈夫ですよ、津上さんは貴方のこと心配していますよ」
「……………どうだか」

小沢にルシフェリオンを預けた事を後悔しつつ星一の事をやはり信用しきれていなくこのような一言を吐いた。

「もしまたアンノウンが現れても僕達が居ますから！安心してくださいー！」

鈴木はそう言うがやはり頼りにならなそうで自分の身を守るにはできる限り自分でやるしかと隙を見て小沢からルシフェリオンを取り戻そうと考える星輝だった。

その頃小沢は病院から出て未確認生命体対策班が所有する車両のGトレーラーの荷台に設置された部屋である人物と通話していた。

「……………久しぶりね、三年ぶりぐらいかしら？貴方の力を貸して欲しいのよ、ESPリミッターを開発した貴方のね、皆本光くん、そう」

皆本光一なる人物と通話しているようだ。

「未知の技術をね、修復して強化するのに強力して欲しいのよ、特務エスパーの主任になって忙しいのは承知よ、いいかしら？」

話を進めていく小沢。

「そう、ありがとう、明日対策班の方に顔出してくれる？ ESPリミッターの設計図と一緒に、よろしく頼むわ」

携帯の通話を切りポケットにしまつと預かつたルシフェリオンを見て考え込む。

「小沢さん、本当にやるんですか？」

「やるわよ、必ずね」

そこにはもう一人居り名前は御室孝宏^{おむろ つかひろ}、凡人の中の凡人警察官である。

「小沢さん、対策班の開発チームは今G5プロジェクトにマスクドライダープロジェクト、IXAプロジェクトにACCイクサELプロジェクトにBIRTHプロジェクトって五つも掛け持ちしているんですよ？」

「大丈夫よ、この天才小沢すみれに掛かれば一つ増えても問題ないわ、貴方は気にしないで仕事すればいいのよ」

と言うとルシフェリオンを構造を調べるのに没頭しながら片手でノートパソコンのキーボードを打ち違う作業も行っていた。

（本当に小沢さん天才だなあ……………僕もオペレーター以外に何かできればいいのに）

そう思いつつ自分にできる作業を始めた、少しでも上司の助けになるようにと。

「オヤっさん！」

「滝？ 滝和也か！」

籾兵衛が経営するタチバナレーシングクラブに滝が訪れてきた。

「久しぶり！」

「久しぶりだな……」

籾兵衛は何かを予知していた、特殊な能力があるからとかではなく経験により。

「お前が来たという事は……」

「……ああ、今回は少し違うよ、今話題のアンノウンや他の怪人達の事さ」

タバコを加え火を点け一服する。

「アイツらの居場所、わからねーの？」

「猛、志郎に結城の居場所はわかってるが他はな」

「アイツらはな…… 実際俺はアイツらに頼まれて来たからな」

「そうなのか？」と聞きバイクの整備の作業を止める。

「ああ、未確認対策班を手助けしてやってくれだってさ」

「そうか……………滝、死ぬなよ」

「わかってるよ」

「後」、まだ籐兵衛は言う事があった。

「アミーゴにいた星一だが」

「津上がどうしたんだ？」

「アイツも手助けしてくれ」

なぜそう言ったのかはわからなかった、だがある考えはあった。

「まさかオヤっさん、アイツも？」

頷くとそれ以上は言わず作業に没頭した。

「……………じゃあオヤっさん、俺行くから、また来るぜ」

滝はバイクに乗りその場を後にした。

「……………なんでかな……………なんでまだ怪人が出る世の中なのかな……………」

……………もうアイツらが戦わなくていい世の中になってもいいぐらいアイツらは戦ったのにな」

目から滴を垂らしながらバイクの整備を進めていくのだった。

「星輝さん、その体でどこに行く気なんですか!？」

「大人しく病室で寝ていて下さい!」

星輝は病院から出てどこか行こうとしていた。

「ルシフェリオンを返してもらおうかと」

「それは小沢さんに任せれば!」

「やはり信用できないんです、自己修復機能で直せばいいだけです
やはり私が一番に強くないと」

そう言いながら重い体を引きずる、やはりなぜか前にいた世界より
重く感じていた。

(なぜこんなに体が重いのですか……まるで本当の人間みたいに…
…)

そう思うが足を止めようとはしない。

「それにアギトが何なのかも気になりますので」

「アギト?それが知りたいなら津上さんの所に一緒にいた方がいい
ですよ!」

「なぜ津上星一の名前が出てくるのですか!？」

睨みながら怒鳴る、二人の男はその目付きに少し怯むと星輝は歩き
だそうとしたが。

「それじゃ強くなって何がしたいんですか？」

「彼から聞いているならわかつているはずです」

歩き二人から離れると。

「なら勝ったら、その後はどうするつもりなのですか？」

「決まっています、次の強い相手と戦う事、ですがその前に戦いたい相手がいます」

「誰ですか？」

正義はそれを問う。

「仮面ライダーアギトです、彼と戦い、勝利したい、さすれば高町なのはに勝てる」

それを言うのと正義が放った言葉とは。

「貴方じゃアギトには絶対勝てません、ましてやその高町なのはさんにも」

「なぜ言い切れるのですか？」

「貴方には足りないものがある、それを持つまでは絶対に勝てません！」

二人はしばし睨み合う、鈴木は後ろからじっと見ていたら。

「氷川さん！上を！」

鈴木が病院の屋上に指を指し二人はその方向を向くと。

「アンノウン！」

スズメバチのような姿をし背中に二対の羽根が生えたビーロードの

アピス・ウェスパが屋上に立ち、ミツバチの姿をした女怪人のアピス・メリトウスが屋上に座り下を見て星輝達を見下していた。

「アアア……ア……」

メリトウスは飛び降り羽根を動かしゆつくりと地面に足を付くとウエスパも地面に降りた、病院の患者や職員達はそれに混乱していたが二体は見向きもしなかった、それより今は目の前にいる人であつて人ではないものを狙いゆつくりと前へ進む。

「逃げますよ!」

「一人で走れます!」

鈴木は星輝を担ぎその場から走りだす、氷川は拳銃を持ちビーロードに銃口を向けながら後退しGトレーラーへ向かう。

「小沢さん! G3-Xを!」

無線機を使い連絡すると小沢は御室とともにすぐにG3-Xというもの動かす準備に取り掛かった。

正義はGトレーラーの荷台に乗り込むと黒い服を着て次々と青い装甲を装着していく、最後に銀の三方向に別れた角に赤い眼の青い仮面を着けた、

これはアントロードの事件現場に來た時に装着していたもの、正義は仮面ライダーG3-Xとなると拳銃より大きな銃GM-01スコーピオンを脚に付け、黒いアタッシュケースみたいなものを持ち外へ出た。

「アレは?」

「アレはG3-X、警視庁が作った仮面ライダーです」

「アレも！」

G3-Xはケースみたいなものを地面に置くとビーロードに戦いを挑む。

「ハッ！」

「ギシャアアアッ！」

二体は猛毒が刃に染み込んだ剣を取り出しG3-Xに斬り掛かるが硬い装甲を切断することはできずウエスパは殴り飛ばされ、メリトウスも殴り飛ばされる。

GM-01を抜きウエスパに銃弾を打ち込み攻撃していく。

「強いですね」

「うん、小沢さんが開発したからね」

「そうなのですか？」

鈴木は頷く。

「だけどG3-Xが強いんじゃない、本当の強さが何なのかわかっている氷川さんが強いんだ」

「本当の強さ……」

「それはアギトと同じ、だから氷川さんは君じゃアギトには勝てないって言ったんだ」

「本当の強さ……」と呟いているとウエスパが隙を突いてG3-Xを払いのけ星輝の方へ飛び立とうとしたがGM-01の銃弾に落とされる。

「聞いてよろしいですか？なぜアンノウンは私を狙うのですか？」

「アンノウンは特殊な能力を持った人間を襲うんだ、その血縁者も、アンノウンは人間が進化するのを恐れているから」

特殊な能力、自分は魔法と思った、だが狙う理由がもう一つあった、それは自分が元は人間ではないから、アンノウンはその紛い物を抹殺しようとしたのだと。

「だから私に……………」

メリトウスは高く飛んで急降下し体当たりで攻撃しようとしたがG3-Xは好機と見て置いたケースを持ち片面についていたボタンを1、3、2の順に押しその横に付いたボタンを押すと【カイジヨシマス】という電子音声で鳴り響き後部をスライドさせるとグリップが現れ、それを握ると更にスライドさせ前部を前に上げると巨大なガトリング、GX-05ケロボロスが起動し銃口をメリトウスに向け引き金を引き銃弾を連射し、すべて命中するとメリトウスは爆発し絶命した。

「すごい威力ですね」

「まあ対未確認用に開発された銃弾だから…………あれ？もう一体いない！？」

気付けばUESパが居らず回りを見渡すと鈴木は肩を叩かれ振り向くと。

「うわぁ！？」

横に吹き飛び気絶、星輝も後ろを振り向くとそこにはUESパが居りルシフェリオンを出そうとするがそのルシフェリオンは今はない、本当に預けなければよかったと思いこれで終わりかと考え目を瞑る

とウエスパの苦痛な声とバイクのエンジン音を聞き目をゆっくりと開ける、

「大丈夫？星輝ちゃん」と銀のバイクを背にする笑顔で言う津上星一が目の前に座っていた。

「なんで……貴方が？」

「ん？なんでって言われてもなあ……まあそれが俺の使命だからかな？」

うんうんと頷き自分のペースに持ち込む星一。

「それに俺は目を覚ます前に喫茶店に戻って仕事して後の事を刑事さんに任せちゃうような大雑把な男だけど」

病室での会話を聞いていたのかと思うぐらい星輝が喋っていた事を言う。

「だからって見捨てたりするような男じゃない、それが今の俺、津上星一だから」

屈託のない笑顔でそう言う胸がドキツとし頬は少し赤に染まる。

（一体この方はなんなんだ……裏表がなくて正直で大雑把だけど、その笑顔を見ると落ち着く、だけど落ち着けない、この感情は何？）

そう思っていたらウエスパは立ち上がり逆上し羽根を震わせ戦闘態勢に。

「津上さん！」

G3-Xは星一と星輝の下に駆け寄る。

「氷川さん、後は俺に任せちゃってください！」

星一は立ち上がり二人の前に背を向け立つ、左腕を曲げて後ろへ引き右腕を左、そして前へ伸ばし後ろへ右側へ引くと腰にバックルに金色に光る賢者の石が埋め込まれたオルタリングというベルトが現れ右腕を再びゆっくりと前へ伸ばす。

「変身！」と叫び左腕も伸ばすと右手とクロスするよいに重ねオルタリングの両脇のスイッチを押すと賢者の石は更に強く輝き星一の姿を変えた。

「そんな……………！」

まさかと思ったが目の前の現実を受け入れるしかなかった。
津上星一が仮面ライダーアギト・グランドフォームに変身したことに。

「ハッ！」

アギトはジャンプしウェスパにチョップを叩き込む。

「ギイ！」

攻撃された事に更に腹を立たせ剣を振るうが避けられアギトは横に振るって左腕を後頭部に叩き付ける。

「……………」

星輝はその戦いを真剣そのもので見ていた、自分に足りないものが

何なのかを見つけるために。

「フ、ハッ！」

アギト・グランドフォームには特別な能力や武器はない、だが最大の武器はその超越肉体、接近戦に強い姿なのだ。

「ギギギイ……！」

ウエスパは追い詰められていくが抵抗をやめず戦う、アギトはオルタリングの左脇のスイッチを押すと賢者の石は青く輝くと青い体に左腕の防具だけが青くなり左肩の防具は少し大きくなり青く金の着色がついた超越精神の戦士、ストームフォームに変身すると賢者の石から黒い棒状の物が飛び出しそれを握り持つと両先の金色の刃が展開し長くなる、ストームフォーム専用の武器ストームハルバードである。

「槍……」

アギトはストームハルバードを両手で持ち振るっていく、ウエスパはアギトの素早い動きに着いてこれず攻撃をただ食らっていただけだった。

「ギシヤアアアッ！」

ウエスパは剣をがむしゃらに振るい攻撃するがアギトは素早く避け、ストームハルバードで受け止める。

「ハ、ハッ！」とアギトはストームハルバードの棒の部分でウエスパを殴り付けていく。

「ギギギイ！」
「っ！」

ウェスパはアギトを思い切りはねのけ吹き飛ばすと走り目の前に接近すると剣を振るうがアギトは高くジャンプしウェスパの背後に降り立つと最後に振り向くと同時に。

「ハアアアアアーツ！！！！！！！」

ストームハルバードで敵を切り裂く必殺技ハルバードスピンで横に一閃しウェスパは爆発し倒されアギトが勝利を収めたのだった。

「……………」

アギトは変身を解き星一の姿に戻った。

「ふう……………」

しばらく沈黙していると。

「どうして……………」

いきなりの一言、星一とG3-Xの仮面を取った正義は耳を傾ける。

「どうして彼がアギトと言ってくれなかったのですか！？どうして！どうしてですか！」

顔を真っ赤にしながら正義に怒鳴る。

毎日鍛練していたりしていると思っていたアギトがまったくの正反對の星一だと思わず、あんな理想を抱いた自分を恥ずかしいと思い

ながら怒鳴った。

「ショックを受けると思ったので……僕も津上さんがアギトだったのにショック受けたので」

正義も同じ経験をしていたのだった。

「~~~~~!」

声にならない叫びを上げ自分を戒める。

「どんなふうな人だと思っていたのかな？」

「僕とまったく同じですよ」

「あらら」と言つと星一は星輝の頭を撫でて「ごめんね」と軽く詫げる。

「そう思っているのなら、私に本当の強さを教えてください！星一！」

「やっと名前呼んでくれたね」

本人の前で言うのが初めてである。

「それを知るまで私はアミーゴから離れません！」

「そう、気が済むまで居てもらっても構わないよ」

そこに小沢がやってきた。

「ならまだ預かってていいわよね？」

「はい、直して強化したら返してくださいよ」

まだ貸すことを了承、すると正義は。

「何か忘れているような……………」

だが誰も思い出せずいいやという事になったのだが確かに忘れている。

「もう食べられないよ」

吹き飛ばされ気絶していた鈴木のことだった。

「さて、だけど君、小学生でしょ？」

「小学三年生の歳ですからね」

「学校に通わせなきゃならないわよ」

なぜかと言うと平日に辺りをうろつろし警察の厄介になるのはかなり面倒なため。

それを説明すると星輝は確かにと思い。

「学校のことは私に任せておきなさい、ルシフェリオン共々悪いようにはしないわ」

小沢には何か考えがあった、警察や政府のコネが効く学校があるからだ、しかも海鳴市に。

こうして星光の殲滅者、シュテル・ザ・デストラクター改め高町星輝の本格的な生活が始まるうとしていた。

— — — A
T
o
b
e
C
A — n t —
i
n
e
d
—

第02話【青の嵐】（後書き）

鈴木ネタキャラ決定でワロタwww

A

— 次回予告

A —

星一

「もう一人のアギト？」

星輝

「あの女性、星一に雰囲気似ていたような……………」

メイドの少女

「美味しかったわ」

星一

「いや、俺の姉さんはもう……………」

正義

「津上さん！アンノウンと銀色のアギトが交戦中って報告が！」

星一

「何ですって!？」

メイドの少女

「変身!」

銀色のアギト

「フッ」

A

— 次回 —

— 第03話 —

— 【もう一人のアギト】 —

—

A —

目覚めろ、その魂!

第03話【もう一人のアギト】（前書き）

運命の出会いと対決と言ってもいい話ですかね？これは。

第03話【もう一人のアギト】

「ここはどこかしら」

早朝の海鳴市の市街の歩道を銀髪のメイド服を着た女性が歩いていた。

流行りのメイド喫茶のようなバイトの店員とは少し違った雰囲気醸し出していた。

「お嬢様の部屋へ行こうとしたらこんな所に迷ってしまったわ……
…さてさて、どうしたものか………」

女性はどうか迷いながら歩いていき早朝で発生した霧の中へ消えていった。

A
—
— 第03話 —
— 【もう一人のアギト】 —
—
A —

「またあの夢か……………」

そして喫茶店アミーゴの二階の住居の星一の部屋では星一が眠りから目覚め起き上がり頭を掻く。

「あの銀髪の女の子、誰なんだろう？」

星一は毎日のように同じ夢を見ていた、浜辺を走る一人の女性と一人の懐中時計を持った少女を、女性はわかっていて、わかっていたのだが少女がわからなかった。

「……………まあいいか」

ベッドから降りパジャマから私服へ着替え部屋から出ると。

「あ、星輝ちゃんおはよう」

「おはようございます、星一」

部屋から出ると同時に起き、着替えた星輝と鉢合わせた。

「星輝ちゃん早いね」

「貴方こそ」

取り敢えず顔を洗いに洗面所へ、そこでどっちが先に洗うか口論になったとか。

「さて、菜園の手入れをしますか」

一階に降りて庭に出て菜園の手入れを始めた。

「私はどうしますか……」

何をしようか迷っていると無意識の内に外に出て箒を持っていた。

「掃除しろってことですかね」

というわけで店の入口の掃除を始めた。

（ここに住み始めて一週間、星一から何もまだ学べていません、アンノウンが現れたらお店を任せてすぐ出掛けて追えなくなる）

あらかた掃除を済ませ中に入ると厨房からいい匂いが漂ってくる。

（ですがこの匂いは好きですね）

「お掃除ご苦労さん！」

すると朝食の調理を終えた星一が厨房から出てくる。

「料理運ぶの手伝って」

「わかりました」

朝食とかは店内でしていた、二階に運ぶのに時間が掛かるから。

「いただきます」

そしてテーブル席で朝食を食べる。

星輝が来る前はカウンター席だが今は二人なため。

「女性と少女ですか？」

「うん」

サラダを食べている時に星一は夢の話を切り出した。

「もしかしたら姉弟か何かでは？」

「そんなわけないよ」俺の姉さんは「……………」

「姉さん？確か記憶喪失でしたよね？なぜ血縁者のこと覚えているのですか？」

「あ…………忘れていたと言うと嘘になるんだけど…………俺、姉さんが居たんだよ」

「居るじゃなくて居た？」

なぜか過去形みたいな言い方をすることに疑問を抱いた。

「…………姉さん、三年前に自殺したみたいなんだ…………姉さんの事は思い出したんだ、俺が記憶喪失でオヤっさんに拾われたのも三年前で」

三年間で一つしか思い出せていないのかと思いつつ話を聞く事に。

「では貴方の今の名前は？」

「今の名前は持っていた封筒の宛先人の名前をね、その封筒を持っていたからそれが自分の名前なんだなって」

差出人の名前は水に浸かっていたのか、滲んで読めなくなってしまうと付け加えた。

「姉ではないのなら妹では？」

「妹ね……… だけど銀髪で……… 似てないんだよね」

「兄妹が全員顔が似ているなんてことあり得ません」

おっしやる通りとトーストを噛りある懐中時計を出す。

「だけどその子、同じ時計を持ってるんだよ」

「懐中時計ですね」

まじまじと懐中時計を見ると。

「まあこれで隠し事はなくなりましたね」

「ごめんね、隠してて」

「気にしていません」

黙々と朝食を食べ続け、食べ終わると食器を片付け開店の準備を始める。

「……………」

そしていつもの事で星一に向け熱いのか冷たいのかわからない視線が向けられるのだ、なぜ星一は強いのかを知るために。

「そんなに俺見ても強くなれないよ？」

「いいんです、なぜ強いのかを知りたいだけですから」

苦笑しながら開店の準備を進めると店の扉が開きまだ開店時間でもないのに客が入ってきたため注意しようとしたが。

「あ、氷川さんに滝さんじゃないですか！」

「うっす」

「おはようございます津上さん、開店時間ではないのにすみません」

正義と滝が来店してきた、この二人は別という事でカウンター席に座らしコーヒーを準備を始めた、後は時間を待つだけなため余裕がある。

「それにしてもこんな朝早くにどうかしたんですか？」

疑問に思った事をすぐに質問すると口に咥えたタバコを灰皿に置き。

「これから共に戦う事になるからな、挨拶ぐらいはしておくかってな」

「滝さんは今日から未確認対策班に配属することになったんです」

「そうなんですか！」と嬉しそうに声を上げた。

「これからよろしくお願いします！滝さん！」

「俺こそな、仮面ライダーアギト」

星一と滝は握手を交わすと。

「あの、正義」

「どうかしましたか星輝さん？」

星輝が正義に話し掛けてきたのだ、だが何を聞いてくるかわかっている正義は。

「小沢さんが後三日待っててと言っていましたよ」

ルシフェリオンの修復と強化の進みを聞こうとしていたのはお見通しのためそう伝えた。

「わかりました」

それを聞くと二階へ上がっていった。

「……………別の世界じゃあんな幼い子供も戦っているんだよな」

滝は遣り切れないと言わんばかりに言葉を発した、この事実に悲しむように。

「戦うのは大人の仕事なのにな……………」

「滝さん？」

二人は確りと見えた、サングラスを掛けていたがそこから流れる水が。

「……………すまねえな……………」

カップを持ちコーヒーを一口飲む。

「滝さん、滝さんの言う通りですよ、戦うのは大人の仕事なんです」
「はい、だから僕達が頑張らなきゃいけないんです！」

滝は思った、この二人も本当に仮面ライダーなんだと。

「……………そうだな」

星一はニコニコしながら頷く。

「コーヒーお代わりいいか？」

「もちろん！」

その話を階段に座って星輝が聞いていた。

（戦うのは大人の仕事……………だからあの二人は強いのでしょうか、
誰かの代わりに戦うのが……………）

もしかしたら答えが見つかると思い聞いていたようだ、だが先ほどの話は心に刺さる内容だった。

（私もできるのでしょうか、誰かの代わりに戦うことが……………）

階段に居るのをわかっている星一は少し微笑んだ、参考になればいいなと思いながら。

（わかった事はここが外の世界の海鳴市という街、まさかこんな所に迷うなんて）

メイドの女性はまだ歩いていて、自分が居た場所に帰れずどうすればいいかわからず。

（それにしても回りの目が痛い、それもそうよね、この服装なんだから）

メイド服が目立っているのだとわかっていて、すると懐中時計を出しスイッチを押すと回りの人々、そして車、動物や草木が揺れる動きまでも止まる、まるで時間が止まったように。

「これなら気付かれないわね」

メイドは歩く、どうすればいいか考えながら。

（隙間妖怪がやったわけでもなさそうだし参ったわね、それに少しお腹も空いてきたわ…………お嬢様達、朝食どうしたかしら…………美^{メイ}鈴^{リン}が上手くやってくれていればいいのだけど……………）

歩いていると何か鼻に少し刺激を感じた、激しいものではなく穏やかな、コーヒーの香りが、だが信じられなかった、ここは今自分の世界、なのになぜ動いてるものが居るのが。

（私の世界なのに一体……まさか私以外に時間を操るものが？）

疑問に思いつつコーヒーの香りがする店に入っていた、そこは喫茶店アミーゴだった。

「あ、いらつしゃい」

中にはやはり星一が居るが客は居なかった、滝と正義は一足早く店から出たのだ。

星輝も星一と一階に居たからか、この時間が止まった世界で動いていた。

「いらつしゃいませ、ご注文は？」

どうやら時間が止まっている事には気付いていないらしい。

星一はこの時に夢に出てきた少女に似てるなと思っていたが、注文を聞かれたがこの世界の現金は持っていない、だが空腹、それを悟ったのか。

「お金ないなら今度払いに来てくれればいいですよ？」

ツケにしてくれるらしくこの行為に甘えた。

「コーヒーをお願いします」

「かしこまりました」

カウンター席に座ると星輝はお冷やを持ってくる、メイドは一口水を飲む。

「ここら辺じゃ見ない人ですけど遠くから来たんですか？」

星一は夢に出てきた少女に似てるなと思いつながら話す。

「ええ、まあ……………」

「この街はいいですよ、夜になったら満天の星空が見えますし」

そしてコーヒートを淹れメイドに出す。

「俺、津上星一です」

「津上……………星一……………」

なぜかこの名前に聞き覚えがあった、だが思い出せなかった。

「十六夜、咲夜です」

「咲夜……………」

星一はその名前に聞き覚えがあった、だが思い出せない。

「なんか不思議です、その名前を聞いたら自然に心が落ち着いてきました」

「私입니다」

傍から見ればこれはいい雰囲気、その初めて会っていい雰囲気を醸し出している二人を、特に星一を睨むように星輝は見ていた、何か気に入らない、そう思いながら。

「……………っ！」

息を吹き掛けて熱を冷ましてからコーヒートを飲む、すると何か驚いていた。

（私が淹れるのと同じ味……）

そう思いつつ飲み終えるとトーストとハムエッグを注文した、それも食べ終える。

「ごめんなさい、本当にいいのかしら？」

「いいですって、困っている人は放っておけないので」

それを聞き咲夜は椅子から立ち上がり「ごちそうさま、美味しかったわ」と言っと店から出た。

「また来て下さいね」

星一は見送る。

「あの女性、星一に雰囲気似ていたような」

（不思議な人だった、まるで昔から知っているような）

咲夜は懐中時計のスイッチをもう一度押すと回りは動き出したその時だった。

「っ！この感じ……まさか外の世界にも……！」

咲夜は何かを感じ取り走りだした。

「っ！星輝ちゃん！店番お願い！」

「いや今日こそは着いていきますよ！」

星一も同じ何かを感じ取った、だが星輝も着いていつてしまえばこの店は誰が切り盛りするかという事になり口論が始まった。

警視庁にアンノウン出現と報告が入りGトレーラーが発進、正義はG3-Xの装甲と仮面を装着するとガードアクセラーという警棒を持ち白いバイクのガードチェイサーに跨りガードアクセラーを差し込む、これはアクセセルと鍵になるのだ。

「俺も行くぞ」

滝は対未確認用のライフルを持ち自分のバイクに跨る。

「ではゲートを開きます！」

御室がパソコンを操作し荷台のゲートが開きG3-Xが乗ったガードチェイサーを発進させると滝もバイクを走らせGトレーラーから発進した。

G3-Xと滝が現場に到着しEアギトとオクティペスの戦闘を目撃。

「アレが仮面ライダーアギト、津上星一なのか？」

「……………違う、アレは津上さんじゃない」

G3-XにはEアギトが星一が変身しているのではないとわかった、共に長く戦ってきた間柄、間違える分けないのだ。

「……………」

Eアギトは銀のオルタリングの右脇のスイッチを押すと右肩の防具は銀に近い水色と銀の大きな防具に変わり、鎧も銀から水色に変わり賢者の石から鍔が銀のクロスホーンの飾りが付いた日本刀コールドセイバーを抜き取りグリップを握る。

アギト・コールドフォームにチェンジしたのだ。

コールド
Cアギトはコールドセイバーを両手で持つと飾りのクロスホーンが六枚に開く。

「……………」

オクティペスは走りだしCアギトに襲い掛かるが。

「っ！」

「ガアアアアアーツ!!!!!!!!!!?」

剣が届く範囲に来た瞬間コールドセイバーを横に振り一閃、オクティペスは凍り付いていき粉々に爆発した。

「……………」

「貴方は、一体……………」

G3-Xは不用意に近付くと敵と判断されたのか、突然斬り掛かられた。

「うわぁ!？」

「氷川!」

G3-Xの装甲は火花を散らす。

滝はライフルでCアギトを射とうとしたができなかった、頭では敵だとわかっている、だが体が動こうとはしなかったのだ。

（くそ!体が拒否しやがる!

動けよ!氷川がヤバいんだから!）

ライフルの引き金を引こうとした瞬間。

「ハッ!」

金と赤で龍のような姿にバイク・トルネイダーに乗った星一が変身した右肩の防具が金と赤となり鎧も赤となったアギト・フレイムフォームがコールドセイバーが赤と金になったフレイムセイバーを持ちジャンプしてG3-XとCアギトの間に割って入った。

「津上さん……………」

「氷川さん、ここは俺に」

フレイムセイバーを両手で握りCアギトと対峙する。

「お前は一体誰だ?なぜこんな事を?」

いつもの星一の声とは違うため誰かわからないことが多いのだ。

「……………」

質問を答えずCアギトはコールドセイバーで斬り掛かるがフレイムセイバーで受け止める。

「くっ！」

滝はG3-Xを連れその場から離れると星輝がバリアジャケット姿で降り立つ。

「アギトがもう一人！？」

「星輝さん！」

星輝は二人のアギトの対決を見守る事にした。

Cアギトは体重を乗せフレイムセイバーごと斬ろうとするがFアギトは斬られまいと踏ん張る。
フレイム

「ぐっ！」

だんだん姿勢が低くなる、相手はかなりのやり手と悟る。

「ハッ！」

足払いを掛けるが後ろへ飛んで避ける。

相手と同じ土俵で戦う事はない、自分が得意とする戦い方で戦うためストームフォームにチェンジしストームハルバードを取り出すとCアギトも左のスイッチを押し右肩の防具がアースフォームのに戻ると左肩がストームフォームみたいな防具が付くが色は青ではない

濃い水色と銀だった、

ストームハルバードに似た武器ウォーターハルバードを持ちアギト・ウォーターフォームにチェンジ、WアギトとSアギトは間合いを取り横にジリジリと動きながら相手の出方を伺い両者とも隙がなかった。

「隙がありませんね」

「ああ、動いた方が負けだが動かないことには始まらないな」

G3-Xはこの戦闘をカメラアイで撮影しGトレーラーのモニターに映していた。

「まさかアギトがまた一人、あしはりょう葦原良以外にも……」

小沢は静かにモニターで戦闘を見ていた。
すると同時に動きだし武器がぶつかり合う。

「ハッ！」

「っ！」

ハルバードを振るい何度もぶつかり強い衝撃が発生する。

「ハッ！」とSアギトはジャンプしWアギトの背後に回り振り向くと同時にストームハルバードで攻撃しようとしたが姿勢を低くし避けられウォーターハルバードが足に引っかけたり転び掛けたが手を地面に付いて後ろへ飛ぶ。

WアギトはSアギトの動きをわかっているように攻撃するがそれはSアギトも同じだった。

（なぜ動きが読めるんだ？）

ストームハルバードを両手で握るとWアギトは懐中時計を出してス
イッチを押す。

「何を……！」

すると回りの景色と動植物の動きが止まるがWアギトとSアギトだ
けは動いていた。

「なっ！」

Wアギトはこの事に動揺していた、自分と先ほどあつた男以外にこ
の自分の世界で動けるものがあるなんて。

（止まっている？まさか時間を止める事ができるのか？
だけどなぜ俺は動ける？）

思考を走らせ考えるがわからず、だがそこを突かれ強襲を受ける。

「うっ！」

ダメージは少量だが受けた事にはかわりない、切られた場所を押さ
え後退りながらストームハルバードを振りWアギトにもダメージを
与えた、それが影響したのか時は動き出した。

「なんであの二人攻撃を受けた後なんだ？」

時間が止まっていたため滝達三人は見れていなかった。
二人のアギトは基本形態に戻りクロスホーンを展開、ライダーキッ
クの構えを取ると同時にジャンプし必殺技を炸裂。

「うわあああああつ!!!!!!!!!!?」
「キヤアアアアアアツ!!!!!!!!!!?」

ライダーキック同士がぶつかり合うと強い衝撃波が発生、その衝撃に耐え切れず二人のアギトは吹き飛ぶ、Eアギトの声は女のものだった。

橋の柱に^{グランド}Gアギトが激突しへこむとずり落ち変身が解ける。

「星一!」

星輝は急いで星一の元に飛ぶ、Eアギトは地面に落下、同じように変身が解けその姿を見て星一と星輝は絶句した、滝とG3-Xも違う意味で絶句していた。

「女性が…………アギト!?!」

女性がアギトだったのだが二人が絶句したのは違う理由だった、アギトに変身していた女性も星一がアギトだった事に驚きを隠せずにいた。

「そんな…………咲夜さんが…………アギト!?!」

そう、先ほどの銀のアギトに変身していたのはアミーゴに来店したメイド服を着た十六夜咲夜だったのだから。

「貴方も…………アギトだったとは」

服のポケットから懐中時計が出てきた、それを見て脳裏に同じものが浮かんでいた。

「その懐中時計……！」

星一はポケットから同じような懐中時計を取り出し咲夜も更に驚くのだった。

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第03話【もう一人のアギト】（後書き）

まさかの、超絶記から少し引用してたり、互いにやっぱアレです。
因みにアースとグランドはほとんど同じ意味です。
後、ストームフォームは嵐で水じゃないからアースアギトは水、氷
となりました、なんかどこかの妖精みたいな……………

A

— 次回予告 —

A —

咲夜

「貴方もアギトだったとは……………」

小沢

「まったく、アギトだらけね」

星輝

（やっぱ似ている）

星一

「貴方が誰だったか思い出せないけど」

咲夜

「今はそんな事は関係ない！」

G
アギト / E
アギト
「ハ
アアアアア
……！」

A

— 次回 —

— 第04話 —

— 【二人のアギト】 —

— 目覚めろ、その魂！ —

A

第04話【二人のアギト】（前書き）

前回の続き、なんか二話で完結させてるから平成ライダー風な。今回はライダーキックにこりました。

第04話【二人のアギト】

「まさか……………！」

銀色のアギト・アースフォームと戦った星一、ライダーキック同士がぶつかり合い同時に変身が解け変身していたものはなんとアミーゴに訪れてきたメイドの十六夜咲夜だったのだ。

「貴方もアギトだったとは……………」

二人は目線を合わせたまま立ち上がる、星一に関しては星輝の手を借りている。

「それになんで同じ懐中時計を……………」

「それは私の台詞、なぜ同じ懐中時計を貴方が……………くっ……………！」

咲夜は喋り切ると苦痛の表情を浮かべた、先ほどの戦いによる受けた傷だけではないだろう。

「大丈夫ですか!？」

「え、ええ……」

返事を返すのだがそうには見えないため。

「星輝ちゃん、俺じゃなく咲夜さんの方に」

「言うと思いました」

星輝は咲夜に肩を貸し立たせる、身長に差はあるが手を乗せるだけでも支えにはなる。

「まったくアギトって誰でもほいほいになれるのかよ？」

「エスパ―で素質があれば、ですが高レベルのエスパ―が誰でもなれることは」

滝はタバコを啜え火を点け煙を吐く。

エスパ―とは特殊能力に目覚めた人間で人により能力が異なる、1〜7のレベルがありレベル7は日本に三人しかいない。

だが高レベルのエスパ―がアギトになれるわけではない、星一は予知能力者だがそんなに高いレベルではない、レベル3ぐらいなのだ。

「てことは悪人になる可能性もあるってことか……あのメイドは……」

「多分、敵と判断されたただだと、一般人の通報で一人助けられたと報告があつたので」

咲夜自身は悪人ではない、仮面を外した正義は遠回しに言った。
するとGトレーラーがサイレンを鳴らし近くに停車し中から鈴木が出てきた。

走ってこちらに向かって来るが途中で転けて顔から突っ込むがめげずに立ち上がる。

「ちょっとお前大丈夫かよ？」

「だ、大丈夫です、小沢さんが津上さんとあちらの女性を連れてGトレーラーへ来るようにと」

滝は咲夜を見ると。

「わかりました、こちらでも今の状況をもっと把握したいので」

了承を得て全員Gトレーラーの荷台のオペレーションルームに入ることになった。

A — — — — —
— 第04話 — — — — —
— 【二人のアギト】 — — — — —
A — — — — —

「十六夜咲夜、年齢は21歳、女性、職業はメイドでいいのかしら？」

小沢に名前やらを聞かれてそれを繰り返して間違えていなかったため咲夜は合っていると頷いて返事をする。

「こうまかん だけど紅魔館なんて聞いたことないわ」

「それはこの外の世界ではそうです、私は幻想郷げんそうきょうという場所から来たので」

また別世界かと思いながら小沢は話を進める。

「それでその屋敷の主人の部屋に行こうとして気付いたら海鳴市つてわけね」

「はい」と返事を声を出して返す。

「それでなぜ貴方はアギトに？」

「それは私にもわからないんです、三年前、気付いたら変身して奴等と戦っていたので」

三年前、その言葉に全員耳を傾けた。

「私、記憶喪失なんです、その三年前にお嬢様に拾われて炊事洗濯掃除と何でもこなせるからとメイドとして働かせてもらって」

「あら、ほとんど津上くんと一緒じゃない」

星一も同じ理由でアミーゴの店長になったから、この事を話すと驚いていた。

「彼も……記憶喪失」

「そうよ、覚えているのは姉がいたことと三年前に自殺したことしか覚えていないわ」

その内容を聞くと一瞬頭が痛んだがすぐに痛みは引いた。

「そ、そうなんですか……」

「そうなんですよ」

とお茶の準備をしている星一が会話に入ってきてすぐに緊張感が溢れていた空気は消えた。

「いつでも自分のペースを維持する、これが津上の長所か」

「短所でもありますけどね」

「滝さんはコーヒーですよね？」

それぞれの人物にコーヒー、紅茶と分けて配っていく。

「咲夜さんも、紅茶のカフェインは落ち着く効果もあるんですよ」

「ありがとう……」

ティーカップを受け取りやはり息を吹き掛け熱を冷ましてから紅茶を飲むと懐かしさを感じていた。

（あ……………この味……………）

自分が淹れる紅茶によく似ている、そう思っていた。

「猫舌ですか？」

「少し」

星輝に言われて嘔吐は吐かずに教えた。

「お店でもコーヒーを冷ましてましたからね」

「いい観察力ね」

「いえいえ」

そこで星一はある疑問に。

「そうだ咲夜さん、さっきのアレ、なんだったんですか？」

アレとは時間を止めた能力でありそれを言うと正義達はもちろん星輝も驚愕していた、普通に考え時間を止めるとはエスパーや魔法でも不可能だからだ。

「アレは私の能力で時間を操る程度の能力で、さかのぼる事はできません、やはり程度なので」

だがその時間を止めた咲夜の世界で唯一動いていたのは星一であり本人も疑問視していた。

「それにこの懐中時計、同じですよね？」
「ええ」

二人は互いに持っていた懐中時計を出し裏面を見せた、星一には「SEICHI TSUGAMI」と刻まれているが咲夜のは「SAKUYA」と名字の文字が潰れており読めなかった。

「そういえば彼女も動いてましたね」
「私ですか？」

戦闘中は動いていなかったがその前に喫茶店に来た時は星一と共に咲夜の世界で動いていたのだ、本人達は気付いていなかったが。

「多分星一の近くに居たからでしょうか、戦闘中は結構離れてましたから」
「という事は津上にも時間が操る程度のあるかもしれないってことか」

滝は再びタバコを啜えて吸いはじめた。

「さて、津上くん」
「はい」

いきなり呼ばれて返事をする、何を言い出すか分かり切っていた、それは星輝もだ。

「十六夜さんが帰れるまで貴方が面倒見なさい」
「やっぱり？」

「一人や二人増えても変わらないわよ、それに本職のメイドよ、働かせたら楽になるわよ」

喫茶店に本職のメイド、確かに作業のテンポも良くなるし店を出る時も任せられる、星輝が星一に着いていても一人は残るためいちいち一旦閉めなくてもよくなる。

「私にはコーヒーとトーストとハムエッグのツケがあるので構いません」

「もし帰ったら死ぬまでツケを返さなかったかもしれませんね」

星輝の言葉を聞いた咲夜は脳裏に「死ぬまで借りてくぜ」という台詞を思い出していたとか。

「そしたらオヤっさんに伝えておかないと」

「オヤっさんには俺から伝えておくよ」

滝がその役目を買いよろしくお願いしますと星一は言う。

「そういえばその幻想郷の所にもアンノウンが？」

「アンノウン？」

あちらではアンノウンという言葉が使われておらず単に奴等か未確認と言われていた、未確認という言葉はこの世界から神社と湖ごと移住してきた二人の神と巫女が話していたの聞いてである。

「まあ私が居なくても十分戦える人達が居ますから大丈夫ですよ」

あまり心配はしていなかった、そのもの達を信頼しているからだろう、星一も同じなのだろう、正義達が居るからもし自分が突然居なくなっても安心して任せられると思っている、それは正義もそうだが、星一と正義達未確認対策班は一年以上の付き合いでかなりの信頼を

得ている。

「部屋はまだ余ってますから好きな所使っていいですよ」

それから星一達三人はGトレーラーから降りてアミーゴへ。

「あ、後洋服とかは小沢さんが持ってきてくれると言っていたので
任せると言っても一切協力はしないというわけでもないためできる
範囲の事はするのが小沢である。」

「わからない事があつたら俺か星輝ちゃんに聞いてくださいね」
「その彼女は？」

だが、降りてアミーゴに入ったらすぐに出掛けてしまっていた。

「多分………図書館に居ると思いますよ？」
あの子も一週間前にここに来たので」

そして海鳴市にある海鳴図書館に星輝は訪れてきていた、この世界

の歴史を知るために。

（この世界の歴史は興味深いですね、仮面ライダーの歴史が古くからあるなんて）

仮面ライダーが三、四十年ぐらい前から悪の組織と戦っているという事を知り更に興味が増していた。

（ショッカーが暗躍しそれを皮切りにGOD機関やデルザー軍団と組織が増え幾度も仮面ライダーが倒してきた、すごいですね）

そしてデストロンという組織の事が記された本を取ろうとしたが。

（届かない…………）

背が届かなかった、台がないか探していると。

「これか？」

一人のスーツを着てるが着崩した男がその本を代わりに取った。

「ありがとうございます」

とりあえず取りたかった本のため素直に受け取った。

「いってことさ、困ってる女は見過ごせないんでな」

男は見過ごすんだと思いつつ話を聞いた。

「俺の名前は月村音也^{つきむらのおんや}、偉い人だ、将来歴史の教科書や国語辞典

にその名が刻まれるから覚えておけ」

月村の名字に少し引つ掛かったが気にしないでおき自分の名前を紹介した、音也からしてきたのだから自分もしなければフェアではないと。

「星輝か、いい名前だな、俺の下の子び達と同年ぐらいだな……
…じゃあ俺は」

一礼すると音也は星輝に別れを告げて図書館を後にした。

「不思議な人………」

「お父さん遅い」

「待ちくたびれたよ」

「悪い悪い、渡、すずか」

図書館の外には紫の長い髪の毛にカチューシャを付けた少女、月村
すずかと茶髪の短い髪の少年、月村渡が父親の音也を待っていた。
この二人は双子で渡が兄ですずかが妹。

「また女の人をナンパしてたんでしょ？」

「よくわかったなすずか」

「わかるよ、だって二世のおじさん言ってたもん」

「あのコウモリもどき」と呟いていると。

「早く帰ろう、母さんと忍姉さんと太牙兄さんが待ってるよ」
「だな、早く魔夜に会いたいからな」

三人は自宅へ帰っていったのだった。

そして星輝も調べごとが済み帰路に着いていた。

（図書館はいい所です、知らない知識がたくさん得れます）

鼻歌混じりに歩いていた、それほど図書館が気に入ったのだろう。

（帰ったら読書に没頭しましょう）

借りた本を両手で抱くように歩いていると。

「うわあああああつ!!!!!!!!!!?」

突然悲鳴が響き辺りを見渡していると後方に何か倒れる音が聞こえ振り向く水分が蒸発した状態で死んだ人間、いわゆるミイラが倒れていた。

左右の曲がり角の陰から二体のアンノウンが現れた、ゼブラロードのシマウマに似た金の怪人エクウス・ノティクスと銀の怪人エクウス・ディエスである。

「アンノウン……………!!」

アンノウンには胸に羽のようなバッジがついてある、それでアンノウンだと判断できるのだ。

ゼブラロードの狙いは明らかに星輝だった、しかも殺害した人間は特殊能力など持っていない、このアンノウンは産まれる前の赤子す

ら母親共々殺害するという残忍さを持ったため関係ない人間をも殺してしまうのだ。

（ルシフェリオンはない………なら逃げるしか………！）

逃げるという選択肢しかない悔しさを胸に秘め走りだし、ゼブラロードもそれを追い掛ける。

「滝さんありがとうございます、オヤっさんに伝えてくれて」

「いいさ、そんなぐらい」

アミーゴでは滝が客に来ていて咲夜はテーブルの拭き掃除、星一がコーヒーを出した瞬間。

「っっ！」「」

二人はアンノウンの気配を察知し同時に外へ出てしまった。

「おいお前ら！店どうするんだよ！」「

滝の叫びが店内に響いた。

「って咲夜さん！一緒に飛び出しちゃまずいでしょ！」
「すみません、つい癖で」

走りながら軽く会話しているとすぐにゼブラロードと遭遇。

「星輝ちゃん！」

「星一……それと咲夜……！」

星輝は二人の後ろに立つと。

「まあいつか」

「今はそんな事関係ないわね」

星一は左、咲夜は右と並んで立ち、星一はいつもの動作でオルタリングを出す。咲夜はその動作を鏡写しにしたような動作で金の部分が銀となったオルタリングを出す。

「「変身！」」

星一はアギト・グランドフォーム、咲夜はアギト・アースフォームに変身し、

Gアギトはノティクス、Eアギトはディエスにと金は金、銀は銀の相手と立ち向かっていく。

「「ハッ！」」

GアギトとEアギトは動きがシンクロするように接近し速攻ノティクスとディエスの顔面に裏拳を叩き込む。

「動きがピッタリ過ぎますね、すごいシンクロです」

星輝は一応バリアジャケットにセットアップしダブルアギトの戦いを見ていた。

「フ、ハアッ！」

Gアギトは一旦離れ相手が自分に向かって突撃してくると脚を振り上げそのノティクスの勢いを利用しキックの威力を上げ蹴り飛ばす。

「……………」

デイエスは連続パンチを打ち込もうとするがEアギトは無駄のない動きで避け続けているとその右腕に普通より大きいナイフが突き刺さる。

「ガッ!？」

「フッ!フッ!ハアッ！」

痛みで苦しむデイエスの腕を掴み左手で何発も殴り、三発目には殴り飛ばす。

「あの、そのナイフどこから出してるんですか？」

「メイドの秘密スキルですよ」

星輝は思った事を質問したがちゃんとした答えは返ってこなかった。

（私もメイドになればあんなことできるのでしょいか？）

心中で軽く天然発言しているとノティクスは斧を出しGアギトに叩き付けようとするがその腕を掴まれ回し蹴りを食らい横に吹き飛ばす。

「ハッ！ハアアア……………！」

Gアギトは右腕を伸ばしEアギトも鏡写しにしたように左腕を伸ばすと足下に金色のアギトの紋章、銀色のアギトの紋章が現れ。

「ハアアア……………！」

クロスホーンが開くとGアギトは左足を一步後ろへ退きEアギトも右足を一步後ろへ、姿勢を低くすると紋章は両足に吸い込まれていきそれぞれの色に脚は光る。

「ハアッ！」「」

そして同時にジャンプしGアギトは右足、Eアギトは左足を伸ばし。

「タアアアアーツ……………！」

ライダーキックを同時に炸裂し二体のゼブラロードに食らわす。

「……………」

二体に背を向いてクロスホーンは閉じゼブラロードの頭に光の輪が現れ爆発した。

「本当にあの二人、似ている……………」

そう思い、アギト達は変身を解きアミーゴへ帰っていった。

— — — A
T
o
b
e
C
A — n t —
i
n
e
d
—

第05話【復活】（前書き）

アナザーアギトの変身が2号に見える俺は変なのだろうか？
とよく思うAGIT です。
では始まります。

第05話【復活】

ここは長野県のとある森の中。

そこに長野県警の刑事一条薫が何人かの警官を連れ一般市民が異形なものを見たという通報があり調査をしていた。

「この辺りか……怪物を見掛けたのは」

そう呟き辺りを見回す、ある事を思い出しながら。

（九郎ヶ岳の遺跡に近いな）

九郎ヶ岳とは長野の山中にある遺跡の事であり四年前その遺跡から一年にも及ぶ戦いが起こったのだ。

（もう大量の犠牲者が出たあの事件みたいにアンノウンの事件で出なければいいのだが）

その戦いには一条も参加し多大な戦火を当時の未確認対策班と友と共に上げていたのだ。

（アンノウンは今の対策班に任せておこう、俺は今できる事をするまでだ）

今の仕事を全うしようと辺りを捜査していると草が揺れる音が響き後ろを振り向く。

「貴様は……！」

後ろに居たのは白いドレスを着て腕にバラのタトゥーがある女が立っていた。

「久しいリントの戦士」

「貴様はB1号……いや、ラ・バルバ・デと呼んだ方がいいか？」

「よく調べたな」

彼女の名はラ・バルバ・デ、四年前に起きた未確認生命体の事件に関わっていた戦闘種族の怪人グロンギ族を立場上束ねる怪人の人間態だが怪人態を見せたことはなく人間態のまま一条に射殺されたはずなのだが。

「なぜ貴様がここに？」

死体は見つからなかったため生きているという推測もあり一条もさほど驚いてはいなかった。

「忠告しに来た」

「忠告？」

「近い将来、“ダグバ”とは別の究極の闇が世界を被い尽くす」

一条は静かに「究極の闇？」と返しバルバの話聞いていた、彼女の話は嘘ではないと悟ったからだ。

「その存在は闇を押さえる事ができなくなり自ら“クウガ”に封印されダグバもそれに恐れ永遠に封印させたはずなのだが……………」

ダグバとは Grongi 族の王の N・ダグバ・ゼバの事でありクウガとは対策班と共に Grongi と戦った戦士である。

「なぜその究極の闇が復活する事に？」

「オーヴァーロードの力にこの究極の闇、Grongi の長が反応し封印が解かれ掛けているのだ」

「オーヴァーロード？」

「リントにはアンノウンと言えばわかるだろう」

だが一条が一番に気になったことはなぜその Grongi の一人である彼女がその事を敵対するリントに人間に教えるかだ、それを聞いてみると。

「……………わからん、Grongi の長を恐れているのでもない……………貴様には伝えておきたい、そう思っただけかもしれない」

するとバルバの体は徐々に薄れていく。

「時間だ」

「最後に、Grongi の長の名前は？」

「長の名は、N・ガミオ・ゼダ……………最後に、ガミオの闇により私以外の Grongi が蘇る、気を付けろ」

最後にそれを伝えバルバは光となり消えていった。

「……………感謝する……………」

一条はただ、正直に思った事を言葉にし夜空を見上げ呟いた時だった。

「アレは……………」

奥に暗くて気付き難いが紫のワンピースを着て黒い上着を羽織り黒い六対の翼が着いた少女が倒れていた。

— — — — A
第05話
【復活】
A — — — —

「おはようございます」
「おはよう」

次の日、喫茶店アミーゴでは星輝と咲夜が起床し部屋から出て鉢合わせのため挨拶。
顔を洗いに洗面所に。

「先にいいですよ」
「いや、先にいいわよ」

と譲り合い最終的には星輝が最初に、咲夜が最後に顔を洗い、一階に降りて庭へ出る。

「おはようございます星一」
「おはよー星輝ちゃん、咲夜さん」
「おはよう」

そして朝イチに採れた野菜を預り厨房で調理する、これが今の喫茶店アミーゴでの日課である。

「今日は……野菜スープとホットサンドを作りますか」
「そうですね」

朝は星一は菜園の手入れをしているため朝食の調理等は星輝と咲夜が担当している、メニューは二人の一任で決まる。

「私は野菜スープ作るから貴方はホットサンドをよろしく」
「わかりました」

この二人は短期間で何かと仲良くなっていた、立場が似ているからか、もしくは雰囲気少しシリラスめいているからなのか？
とりあえず仲良くなっていた。

「あの、咲夜も記憶喪失と聞いたのですが？」

「そうよ、それが？」

「いや、記憶喪失とはどういうものかと」

「最初は落ち込むけど……後々は普通に仕事できるまで回復するわね」

星一も同じような事を言っていたなと思いつつ。

「なぜ立ち直ったのですか？」

「星空を見たから」

「星空？」

「幻想郷は人工の光がほとんどなくて空気が澄んでいて満天の星空が見えるからよ、それを見たら記憶喪失なんてどうでもよくなったわ」

それを聞くと鼻で少し笑う、なぜ笑ったか聞かれ同じことを星一が言っていたと教える。

「彼も同じことをね」

「まるつきし、星空を見て立ち直ったのも」

そんな会話していたら朝食も出来上がりテーブル席へ運び星一が来るのを待っていた。

「お待たせ、お、今日は野菜スープとホットサンドなんだー」

椅子に座り三人同時に「いただきます」と挨拶をして朝食を口に入れていく。

【では次のニュースです、長野県で男性の変死体が発見されたと情報が入りました、

この変死体の特徴はかつて日本を恐怖に奮い立たせた未確認生命体のグロンギ族と同じ殺害の手口によく似ているとのこと、

新種の未確認生命体かもしれないので一般市民の皆様は十分に気を付けてください】

電源が入り画面が付いていたテレビではニュース番組が放映されており三人はそのニュースの内容を話し始めた。

「未確認ね……………」

「グロンギ族ですか、四年前に現れた未確認と図書館の本に」

「四年前……………確かその次の年に記憶喪失でオヤっさんに拾われたんだよね」

咲夜も記憶喪失で拾われたと言う。

（記憶喪失が集まりますねここは）

心の中で密かに突っ込んでいた。

それから店が開き客が少しずつ入ってきていたら。

「こんにちは津上さん、十六夜さん、星輝さん」

「氷川さんに滝さんいらっしやい」

正義と滝が来店してきた、ここの所いつも来店している。

「ここのコーヒー美味いからな、オヤっさんと同じくらいだからな」

「滝さん、ありがとうございます」

「だけど今日は咲夜のコーヒー飲みたいな」

それを聞いた瞬間苦笑いを浮かべたり。

「そ、そうですね」

指定された咲夜はコーヒーを淹れ準備を、因みに制服は初めて会った時に着ていたメイド服を洗濯したもので同じようなのをどっからか仕入れていた。

「そういえば津上さん、ここバイトの人居ませんでしたっけ？」

「ああ、何ヵ月前まで居たんですけど辞めちゃいましたね……………」

また募集しようかな……………最近なんかお客さん多くて」

正義と滝は理解した、なぜ客が多くなったか、咲夜という美人メイドのウェイトレスが居るからだろつ。

「何ですか？」

その本人は無自覚だった。

「そうだ、今日のニュース見ましたか？」

「長野県の変死体ですよ？見ました」

「長野県と言えば四年前の未確認の事件の中心なんで少し心配なんですよ」

星一もそれには心配になり考え込む。

「取り敢えず俺達が十分に警戒しないといけないって事ですよね？」

「そうだな、津上の言う通りだ」

こういう風に誰かの士気を年上年下問わず上げる事ができる、それが星一の魅力だろう。

「これも星一の強さの一つですかね」

階段の所で星輝がそうメモをとっておいている姿があつたのを咲夜は目撃していた。

「強くなりたいか……………」

海鳴市の港近くの海浜公園。

平日だからか人はあまり居ないのだが大道芸人等が芸を繰り広げ練習しており練習スポットにもなっている。

そして放課後の学生の帰宅する時の寄り道スポットにも、ここには平日でもかなりの出店が出店されておりテレビの夕方のニュースで取材される店も少なくはない。

今日はテスト期間中なのか、帰宅が早い高校生が何人か見れていた。

「このクレープはやっぱり美味しいね」

「そうね」

何気ない話をしながら歩き、買ったクレープを食べながら次の出店へ向かうとしていると。

「アガアア!? ガアア……………!？」

後ろから苦しむような声が聞こえ振り向くと。

「**利恵？**」

一緒にいたはずの同級生が居らず下にはクレープが落ちており地面が濡れていた。

「どこに行ったのよ？」

だが、破れたフェンスを見て外側の海面を見ると、

「キヤアアアアッ！！！！！！！！！！」

悲鳴を上げた、目にしたのは先ほどまで元気な姿を見せていた同級生の変わり果てた姿が浮かんでいたからだ。

「ヒッ！」

すると足首に滑りを感じ下を向くと赤っぽい鞭のような腕が巻き付かれておりそして引つ張られ。

「イヤアアアアアッ！！！！！！！！」

破れたフェンスを抜け海へ引きずり込まれ上がった時には息をしておらず息耐えていた。

「どうも」

時間が経ち警察が現場を包囲し捜査をしていると氷川と滝がそこを訪れ捜査に参加し被害者の遺体を見る。

「溺死……………ですかね？」

「ええ」

そこに警視庁の捜査一課の一人、北条トオルほつじょうが話し掛けてきた。

「北条さん…………」

「どうも、被害者の二名は血縁射でもなくただの同級生、ESP検査にも引っかけないただの人間です」

アンノウンは特殊能力を持った人間を狙う、そのため今回の事件の被害者はそれには当て嵌まらないためアンノウンが起こす不可能犯罪の事件にはほど遠く、人間でもできるような殺害の仕方だったが。

「目撃者の証言によると被害者の足首に何か鞭のようなものが巻き付いて最初の被害者はフェンスを無理やり破り、二人目はその破ったフェンスを潜らせて海へ引きずり込み溺死させたようです」

「引きずり込む……………か」

「ありがとうございます北条さん」

「いえいえ」

北条は怪しい笑みを浮かべて返し捜査に戻る。

「なんかあの北条って奴、裏がありそうな奴だな」

「まあG3の装着員の座を狙っていましたが、更にはV-1システムというパワードスーツの開発を立案したのですがそれも上手く行かなくて」

因みにV-1システムの開発プロジェクトを潰したのはG3-Xだったりするがその話はまた今度で。

「優秀で小沢さんとよくもめているんですよ」

「何となくわかる、小沢と北条、似た者同士だよな？」

「そうなんですよ」

「………… お前も大変だな」

「もう慣れました」

軽く会話をすると自分達が乗ってきた車に乗り込むと各警察車両に通信が入る。

【警視庁より各局へ、一般市民から風都、海鳴市市街地に未確認生命体出現との110番があり、未確認生命体対策班の氷川正義と滝和也はGトレーラーへ】

正義と滝は急いでGトレーラーと合流しようと車を走らせた。

ラジオやテレビでも未確認生命体が出現したとの情報が流れており
星一達の耳にも入っていた。

「未確認生命体……………」

それを黙って店を営業できるはずがなく。

「咲夜さん、ちょっと店をお願いします！」

「ちょっと……星一！」

星一はエプロンを取り椅子に掛けると外へ。

「私が着いていきます」

星輝が着いていき外へ。

「ちょっと危ないって！」

「いえ、貴方の戦いを見たいので」

「はいはい」

バイクに乗り走りだし事件現場へ向かう。

「アンノウンじゃないのは確かだよ、アンノウンならいち早く察知
するから」

「咲夜も反応してないから確かですね」

走っていると腰にオルタリングが現れ。

「変身っ！」

オルタリングの起動音が鳴り響きバイクごと金色の光が包み込む。

「眩しい……！」

包んでいた光が弾き飛び消えると星一とバイクの姿は変化していた、アギト・グランドフォームに変身しバイクはマシン・トルネイダーへと変化し更に加速する。

「しっかり掴まって！」

「はい！」

エンジンが響き渡り金のバイクが街中を駆けていく、人の居場所を守るために。
すると隣に。

「津上さん、星輝さん！」

ガードチェイサーに乗りG3-Xを装着した正義が並んで走る。

「氷川さん！」

「やはり来ましたか」

「いても立つてもいらなかったのだ！」

二台のバイクは走り現場へどんどん近付いていき異形の姿が人々を襲っているのが目に入る。

「アレは……！」

クジラに似た姿の怪人は二人組の茶髪と金髪の女性を狙っていた。

「グギヤアアッ!？」

G3-Xは制限速度をとくにオーバーしている速度を更に上げ怪人を跳ね飛ばした。

「大丈夫ですか？」

「は、はい!」

茶髪の女性が返事を返すとG3-Xはガードチェイサーから降り。

「早く逃げてください!」

「わかりました!」

金髪の女性が最後に答え二人はその場から逃げながらG3-Xの姿を見ていた。

「氷川さんかつこいいですね!」

「いえいえ」

アギトもトルネイダーから降り会話していると。

「クウガバ……………スダシダト……………!？」

「クウガだと!？」

G3-Xにはその名前はすぐ聞き覚えがあるがアギトはさっぱりだが四年前の事を調べていた星輝にはわかった。

クジラ怪人のズ・グジル・ギはアギトとG3-Xに襲い掛かる。

「クウガって……………何なんですか!？」

「四年前当時の未確認対策班と共に戦った名前がこのG3-Xのモデルになった仮面ライダーです！」

G3-XはGK-06ユニコーンという名の電磁コンバットナイフを取り出しグジルに対抗する。

「ブスゲ！」

何か分からない言語を言い放ちながら背中を向けその穴から水流を放ちG3-Xを吹き飛ばす。

「うわあああつ!?!」

「氷川さ………うわっ!?!」

アギトも水流に吹き飛ばされ建物の壁に激突し崩れ落ちるが立ち上がりオルタリングの左スイッチを押しストームフォームにチェンジしストームハルバードを取り出す。

「ハッ！」

アギトはグジルにストームハルバードの刃を向け立ち向かう。

グジルは水流を放つがストームハルバードの刃で受け流され動揺し水流を放ち続けるが当たらず。

「ハアアアアアアッ!?!?!?!?!?!」

「グギヤアアアアッ!?!?!?!?!?!」

ハルバードスピンによりグジルは切り裂かれ爆発し倒された。

「やりましたね津上さん」

「ええ、だけど氷川さんだってさっきの女の子達を助けたじゃないですか」

互いを誉め合っていると星輝は。

「二人共！後ろ！」

何かを見付け振り向くと。

「未確認……！」

後方には豹と女性の姿に似た怪人ズ・メビオ・ダが居りその場から走りだし逃走を測る。

「僕が行きます！」

G3-Xはガードチェイサーに跨り走りだしメビオを追跡する。

「…………俺達は店に戻ろう」

「はい」

アギトと星輝は店へ戻るためトルネイダーに乗り走り出した。

その頃、アミーゴの前に一台の黒いボディで前部のハンドルの上に
みたいな形をした金の飾りが取り付けられたバイク・ビートチェ
イサー2000が停まっており、それに乗る男がいた。

「久しぶりのアミーゴ、四年ぶりかな？」

男はアミーゴの事を知っておりヘルメットを脱ぎ取り左ハンドルグリップに掛けると右ハンドルグリップを抜き取り鍵を掛ける。

「オヤっさんはこっちなのかなあ？」

そう呟くとビートチェイサーから降り店の扉を開き店内に入る。

「オヤっさんただい……………ま？」

「いらっしゃいませ」

店内には咲夜一人しか居らず男はそのメイド服の咲夜を見て。

（この店、メイド喫茶になったのか？）

と思つてると注文を聞かれコーヒーを頼む。

（なんか上に上がれなそう……………）

そう思いカウンター席に座る。

そしてまた外で。

「アレは……………」

一台の車が停車する、運転手は長野県警の一条で助手席には森の中で倒れていた服を着替えた少女が座っていた。

「知っているバイクか？」

「ああ、警察が開発したバイク、ビートチェイサー2000だ、まさかな……………」

そう思い車から降りる二人。

「中に入るぞ」

「ああ」

中に入ろうとしたら。

「闇統べる王？」

「お前は……………」

そこに星一と星輝が帰ってきて、星輝は一条と共に居る少女、マテリアルズの一人闇統べる王と再会した。

「知り合いか？」

「まあ……………」

「一条さん？」

「優太……………」

店から先ほど入ったビートチェイサー2000の持ち主おのり小野寺優太ゆうたが出てきて一条と再会した。
ここで二つの再会が起きたのだった。

— — —
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第05話【復活】（後書き）

クウガ出てねーは仕様です。
次回出ます、一条さんマジペガサスが見れます。

A

— 次回予告

A —

優太

「俺は小野寺優太」

真友

「優太？」

闇統べる王

「我が名は闇統べる王だ」

笹山

「未確認生命体が出現しました！」

一条

「また君に余計な寄り道を……………」

優太
「変身！」

A

— 次回

— 第06話

— 【戦士再び】

— 目覚めろ、その魂！

A

第06話【戦士再び】（前書き）

今回はクウガです、ビートチェイサーはこの話が終わると当分出ません。

第06話【戦士再び】

「まさか貴方もこの世界に来ていたとは」

「それは我もだ星光」

マテリアルド、闇統べる王、又の名をロード・ディアーチエは星輝と会話していた。

「今は高町星輝と名乗らせてもらっています」

「高町か……」

「ええ、その方が生活しやすいので」

「なら我も名前……一条、何か名前ないか？」

いきなり優太と星一と会話中の一条に話を振られ戸惑い出た名前は。

「ぶ、ブラックハヤテ号？」

その名前を聞いた瞬間二人は違う話題を話し始めた。

「一条さん……」

「悪い、センスなくて」

優太は俺が考えるかと思いいながらも話を。

「まさか優太は前にここに住んでいたなんて」

「まあね、オヤっさんの知り合いの一文字さんと俺の親父、仕事仲間ですごくここに來てたから」

一文字という名を聞いた星一は聞き覚えがあつた、籐兵衛から何度か聞いた事があるカメラマンの名前だ。

優太は自分が知らない事も知っているとわかつてきた、余談だが最初は小野寺さんと読んでいたが同い年辺りだと分かり呼び捨てで呼んでいる。

「そつといえば一条さんはなんでここに？」

「ああ、それはだな、また未確認対策班に異動になつたんだ」

「そつなんですか！」

その事を伝えると優太は会える機会が多くなると思い少し嬉しそうに声を上げた、まだ幼げな所が残っているのか、子供っぽかった。

「それでこの子も一緒に連れてきたんだ」

王が長野の森の中で見付けて保護した途端異動が決まってしまったため何もできずに一緒に連れてきてしまったのだ。

「ここなら預かってくれると思ってな、優太も当分はここに居るんだろ？」

「はい、任せてください」

「頼むな」

— — — — A

第06話

【戦士再び】

A — — —

「待て！」

G3-Xは逃走するメビオをガードチェイサーで追跡をしていた、左手にGM-01を持ち銃口を前に向け正確に流れ弾の被害が出ないように引き金を引き弾丸を放っていくが当たらず。

.....

G3-Xは集中、狙いを定め引き金を引き銃声が鳴り響くと。

「ギヤアアアアアアアツ!!!!!!?」

メビオは断末魔並みの悲鳴を上げて走りながら苦しむ、振り向いた瞬間右目に銃弾が命中し目玉が潰れ目からは涙と血が混じりながら流れており右目を押さえながら走り右曲がり角を曲がると。

「どっだ……!？」

G3-Xもガードチェイサーを右折するがメビオの姿はなく。

「すみません小沢さん、逃げられました」

【いいわ、ご苦労様氷川くん、Gトレーラーに戻って、紹介したい人が居るわ】

G3-XはガードチェイサーをウターンさせGトレーラーへ戻る事に、だが先ほどの角の建物の壁の間にメビオは息を潜めて隠れておりG3-Xが去ったのを見計らい奥へ消えていった。

Gトレーラーに戻るとオペレーションルームにはいつものメンバー以外にもう一人の女性が居た。

「紹介するわ、彼女は今後から対策班に所属する事になった」

「小野寺真友おのてりまゆです、よろしく願いします」

女性警官の小野寺真友は自分の名を紹介すると頭を深々と下げ礼儀良さを見せる。

今アミーゴに居る優太とは違いこちらの方が大人っぽさを感じる。

「よろしく願います小野寺さん」

「あともう一人居るけど………ちよつと迎えに行ってくれないかしら？」

「もう一人？」と正義は返すと。

「一条薫は知ってるわよね？」

「なんですって！？あの四年前の事件で活躍をしたあの伝説の刑事が！？」

一条は未確認対策班にとっては伝説の刑事となっていた。

「今はアミーゴに寄ってるみたいだから迎えに行つて頂戴」

「わかりました」

正義が行こうとすると真友も着いていくと志願し滝と三人でアミーゴへ行く事に。

「小野寺さんはなぜ刑事に？」

車内では正義が運転しており真友に何個か質問し今の質問に。

「四年前の事件が切っ掛けです、グロンギの殺人ゲームによって数多くの人達の命が犠牲になりました、

そして今はアンノウン、それを食い止めたくて警官に」

「真面目な返事だな」

「私はいつでも真面目ですよ」

やはり年齢からだからか、少し幼さも残しておりウインクまでしている。

「小野寺さんは高校はどこに？」

「私、高校出ていませんよ？」

その発言にどうやって警官になったと思い聞いてみると。

「私、中学卒業してすぐに城南大学に進学したので………」

ここで真友が何者かがわかった、小沢に並ぶ天才だと。

「生物学を専攻してしまして、未確認生命体の細胞等を調べていました」

「それでその生物学の知恵が買われて対策班に」

「はい、まだ未熟者ですがよろしくお願いします」

またもや深々と頭を下げられたため二人もつられて下げてしまうと。

「氷川！前！前！」

「うわぁ！？」

ブレーキを掛けて一度大きな音を立てて回転して危うく事故り掛けたが難は去った。

「す、すみません」

「気を付けろよ」

「はい」

じゃないと戦う交通安全がうるさいと思うがその戦う交通安全は別世界のヒーローだから触れないでおこう。

そしてアミーゴの前に到着、車を停車させて降り、ビートチェイサーに目が入った。

「ビートチェイサー……！」

「確かアレは科捜研が四年前に開発したバイクの……小野寺さん？」

真友は急いでアミーゴの店内に駆け込んだ。

「いらっしやいま……」

咲夜が出入口の近くにいたが見向きもせずがずがと入っていく。

「真友？」

「優太……それに一条さん」

「久しぶりだな」

後から正義と滝も店内に入ってきた。

「氷川さん滝さんいらっしやい」

「おう」

「失礼します」

それから。

「双子？小野寺さんは双子だったんですか？」

「はい、私が妹で優太が兄です」

「小野寺優太です」と自己紹介する優太。

「一条さんも四年ぶりですね」

「たまにメールを送ったりしていたがな」

一条とは双子揃って旧知の仲らしい。

「そちらの方は？」

「我か？」

王が反応し名前を言うと。

「F のボスみたいな……それに厨二」

「誰が厨二だ塵芥」

いきなりの失礼発言にジト目で言う。

「なら私が名前考えます」

違う名前が欲しいと自己紹介のついでに言っていたため真友も考える事に。

「一条では役に立たないからな」

「すまないな……………」

やはりブラックハヤテ号はないだろうと思いつつ自分もこの世界で生活していく故の新たな名前を考える。

「やはり名前は難しいですね、よく津上さんは星輝なんて名前思い付きましたね」

「いやあ〜それほどでも」

本人も気に入っている程のネーミングセンスの良さに誉め、星一は照れる。

「そういえばそろそろ夜も近いですね」

「そうだな……………そうだ、闇に夜で闇夜^{あや}なんてどうでしょうか？」

その真友のネーミングセンスに一同は関心し。

「闇夜か……………気に入った、今日から我は闇夜と名乗る事にする」

闇統べる王は小野寺真友が命名した闇夜^{あや}と名乗る事に。

「今日からこちらに預けようと思っているんだが」

「なら私達の部屋のベッド使ってください」

もともとはここに住んでいたため小野寺兄妹の部屋があるのだ、因みに星一が来た頃は真友は寮に入っていたため知らないのも当然。

「てことは俺の部屋に闇夜が来るのか、俺も当分日本に居るからよろしく、闇夜」

「我こそな」

「ガアアアア…………ア…………」

下水道に逃げ込んだメビオは右目に打ち込まれた弾丸を取り除いていた、無理やりため血はポタポタと滴れ血溜りができていた。

「グ…………ガ…………！」

そして金属が響く音が鳴り響く、弾丸が取り除けたのだ。

メビオらグロンギ怪人は再生が早く今の右目の傷も人間より早く塞がり治ってしまうのだ。

「ゲゲルボ…………ツズギボ…………ゲゲルボ…………ゲゲルウウウ！」

メビオはゲゲルと叫び獣のような遠吠えを上げ地上へ向かって走りだした。

その下水道にはもう一体グロンギ怪人が居たがメビオは気付いていなかった。

そしてメビオは殺人事件を片っ端からお越し始め正義に連絡が入った。

「わかりました、すぐに」

「未確認か？」

「はい、僕が取り逃がした怪人が片っ端から殺害を、すみません」

「謝るのは後だ、さつさと……………」

「行くぞ」と滝は言い掛けたが先に一条と優太が外へ飛び出てしまった。

「一条早いな……………」

「それが一条さんと優太ですから」

「なぜ優太も？」

不思議で仕方なかった、なぜ優太も出たのか。

「それは……………兄は……………」

「クウガですから」

一条は車でサイレンを鳴らしながら走り優太はビートチェイサーに跨りビートアクセラーという警棒みたいなハンドルグリップを右に差し込みアクセルを回して走りだす。

【対策班から各局へ、現れた未確認生命体はグロンギと確認されました】

その入電を聞き無線機を取る。

「それは本当か笹山くん」

【一条さん！？】

アナウンスを掛けた婦警の笹山は四年前の事件でも同じ役割を勤め今に至っている。

「ああ、優太も居る」

「お久しぶりです笹山さん！」

【優太くん久しぶり！】

「笹山くん、グロンギは今どこに？」

再会を喜ぶのは後にし一条は怪人の居場所を問う。

【海鳴市郊外の廃工場に杉田さんと桜井さんが追い込んで応戦中です、急いでください】

「わかった」

無線機を置き通信を切ると。

「一条さん、俺が先に行きます！」

「わかった……………すまない」

「はい？」

突然謝られたため不抜けた返事に。

「また君に余計な……………」

「いいですよ、俺が今できる事をするだけですから！」

アクセルを深く回し加速させ車を追い抜くと左腕を横に伸ばして親指を立てサムズアップをすると再びハンドルに手を置き左折し曲がった瞬間また入電が。

【対策班から各局へ、アンノウン出現との一般市民からの110番、Gトレーラーは 市内の 公園へ向かってください】

他の場所にアンノウンが現れたらしいがそれはGトレーラーに任せる事にしビートチェイサーの後を追う。

「ガードチェイサー、出動します」

正義達はすぐに合流しG3-Xを装着するとガードチェイサーで出動。

真友のポジションはオペレーターである。

「鈴木くん、アンノウンは二体と報告があったわ、G3で出動して」
「わかりました！」

鈴木は別室に入り黒いスーツを着用してG3-Xとは少し違うパワードスーツを装着し仮面ライダーG3となった。
アンノウンが多い時には鈴木も外に出てG3として戦う時もあるの

だ。

G3はもう一台のガードチェイサーに乗り出動、滝も自分のバイクで外へ。

「氷川さん、今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ」

三台のバイクは現場へ到着しアンノウンと戦闘に移った。

廃工場では対策班の刑事達が対未確認用の弾丸を搭載した拳銃とライフルで応戦していた。

「奴は一度戦った事がある！怯むな！」

その中で戦闘を仕切っていたのは高齢者でベテラン刑事の杉田だ、彼も四年前のグロングの事件に大きく貢献した刑事だ。

「ガガッ………グッ！」

メビオは射たれた箇所を押さえる、対未確認用なため効果はやはりあるのだ。

「グッ………！ガアアアアアーツ！！！！！！！」

痛みで頭が狂ったのか、銃弾の雨をもろともせず駆け抜け警官達に襲い掛かるうとした、そのため銃弾も止まってしまい万事休すかと

思われたがバイクのエンジン音が響き渡りメビオを跳ね飛ばす黒いバイク、ビートチェイサーに乗った優太が現れ車体を横に向けながら停車した。

「大丈夫ですか杉田さん！」

「優太くん……！」

優太はビートチェイサーから降りると杉田は他の警官を連れ退避する。

「……………」

メビオと睨み合い、その末腰に両手を何かを包むように添えると銀のベルトが現れる。

「ボセパデスドン、クウガ！」

メビオはそのベルトを見て驚きを隠せなかった、かつて自分達を二度も倒したものと同じベルトだったからだ。

「もう変身しない、と思っていた、もうグロンギは現れないと思った、けどまた現れるなら俺は何度でもお前達と戦う、そう、何度でも」

その言葉を放つ優太は哀しげな表情を浮かべていた、右腕を左斜め上に伸ばしてゆっくりと右へ動かす。

「変身！」と叫ぶと左手でベルトの左側のスイッチを押し右腕を後ろへ引き左側を右斜め上へ伸ばすとベルト・アークルのバックルに埋め込まれたアマダムという石が赤く輝き優太は姿を変えていった。金の三本に分かれた角に赤き優しい眼、赤く燃え上がるような鎧を

した超古代に生まれ現代に蘇った戦士、仮面ライダークウガ・マイティフォームに変身した。

「クウガ……………確か四年前に現れグロンギを倒した仮面ライダーですね」

アミーゴでは正義達がアンノウンと戦っているため今回は休みということで星一と咲夜は残っていた。

「クウガ……………俺達が記憶喪失になる一年前に現れた仮面ライダー……………それがあの優太なんて」

「そうね……………四年前だと彼も高校生のはず……………」

するとそこに籐兵衛が来店。

「聞きたいか？四年前の事を」

「オヤっさん」

「聞きたい、聞かせてくれないか？」

闇夜は興味を持っていた、理由はここに来る途中一条が少しだけクウガの事を話していたからだ。

「悲しい話だぞ……………アレは冬の季節じゃったわ……………」

籐兵衛は語った、四年前の事件の始まりを、城南大学の考古学部が長野県の九郎ヶ岳遺跡を発掘しグロンギの王ン・ダグバ・ゼバを蘇

り大量のグロンギを蘇らせ殺人ゲームであるゲゲルを行い多くの人々の命が犠牲となったと。

その中には優太の両親も含まれていた、二人も考古学者で九郎ヶ岳遺跡について調べていたからだ、その最初の犠牲者であった。

遺品を見に長野県警へ行きそこで一条と出会い、そして発掘し見つかったアークルを見たのだ。

そして警察署にグロンギが現れ警官達を殺害していく様子を見て優太はアークルを腰にはめ仮面ライダークウガに変身し一年にも及ぶ戦いに身を投げたと。

「まだ高校一年生だったんだぞ？

恋もして恋人つくったり夢を叶えるためにもっと頑張る年頃の子供だったんだぞ？

そんな子供がみんなが悲しむからって戦いに身を投げたんだ、自分が一番暴力を嫌っているのにみんなの笑顔を守るために」

「みんなの笑顔を守るために……………」

話している籐兵衛は悲しみが露になっていた。

「そうか……………クウガはそんな悲しみを背負って戦っているのか…

……………」

闇夜は静かに呟いたのだった。

「ハッ！」

クウガは右腕を勢いよく伸ばしパンチを繰り出しメビオの頬にぶつける。

「ぐっ……………！」

右腕を退く時に少し苦痛な声を上げる、怪人であろうと拳を振るうのをよく思っていないから心が痛むのだが。

（こいつらを野放しにしたら俺よりもっと悲しむ人が増える！だから……………！）

誰かが悲しむから嫌いな拳を振るっていく、自分の気持ちを殺しメビオを殴り続けていくクウガ、仕方ない、そうは思いたくない、だが殴らなければ誰も守れない、その思いを秘めメビオと戦う、四年前と同じ思いを秘めて。

「オリヤアアアッ！！！！！」

キックを腹部に浴びせ蹴り飛ばす。

メビオは痛みで我を忘れており構わず攻撃をしてくる。

「うおおおおおーっ！！！！！！！！！」

左でストレートパンチを放ち顔面を殴り付ける、メビオの顔から血が飛び散り自分の体に掛かる、メビオの鼻は曲がっていた、どうやら骨が折れたようだ、頬も膨れておりダメージが現れていた。

「ハッ！」

クウガはメビオを外へ投げ変身ポーズを取り飛ばし一歩後ろへ左足

にいつも笑顔絶やさないでいる、それが優太のポリシーだからだ。

【こちらGトレーラー、アンノウン撃破に成功、後の処理は科学班に任せ帰還します】

G3-X達もアンノウンを倒した所のようにだった。

「うん」

刑事達三人もサムズアップをして返す、優太のポリシーを理解しているからだ。

それからアミーゴに帰る優太。

「よう優太久しぶり」

「オヤっさん！久しぶり！」

「また戦うんだってな、バイクの面倒は俺に任せておけよ」

「お願いします！」

四年前も籐兵衛にビートチェイサーを任せ戦っていたらしく今回も任せる事にしたのだが。

「優太、悪いが暫くビートチェイサーは預かる」

一条によると数年もともにメンテナンスを受けていないため籐兵衛の技量があっても難しい、だから開発した科捜研に預ける事に。

「代わりにトライチェイサーを使ってくれ」

トライチェイサー2000、ビートチェイサー2000が黒いボディに対しトライチェイサー2000は銀のボディのバイクだ。

ビートチェイサーができるまで優太はそのトライチェイサーを使っていたのだ、ゆわばビートチェイサーはトライチェイサーの後継機。

「わかりました」

優太は文句も言わず了承、こういうのはそっちのプロに任せるのが一番だからということもある。

（闇を感じるな……なぜだ？）

優太が帰ってきた……いや、闇夜は優太と会って感じていた事がある、それは闇だ、優太から少し闇を感じていたのだ、闇統べる王、その名は名前だけではなかった。

「優太、聞いていいか？」

「なんだい？」

「まさかと思うがクウガの本質は闇ではないのか？」

その発言に優太、真友、一条は動揺を隠せなかった、まるで本当だと言わんばかりに。

「闇夜……それについては今度話すよ、疲れちゃったから」

優太は自分の部屋へ戻った、部屋は星一が掃除し済み。

「……………気になるな」

最後にそう呟き闇夜も同じ部屋へ入っていったのだった。

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第06話【戦士再び】（後書き）

今回は軽くネタに走っています、もしかしたら今日中には。

次回予告

星一

「今日からバイトのチラシ貼ろうと思っているんですよ」

優太

「ここは海鳴市のショッピングストリート」

星輝

「私達以外の魔導師が………」

クウガ

「黒の仮面ライダー？」

星輝

「緑の仮面ライダー？」

「『いや、どっちもだ』」

星輝

「行きますよルシフェリオン・デストラクター！」

				A
—	—	—	—	
目覚めろ、		第07話	次回	
その魂！	【蘇る明星】			
—	—	—	—	
A				

第07話【蘇る明星】（前書き）

ガイアメモリに独自設定が。

第07話【蘇る明星】

ある日の事、いつものように正義と滝、一条がアミィゴに訪れてきた。

「こんにちは」

「いらっしゃい」

星一も同じように出迎え三人はカウンター席に座る。

「今日はいつもにまして人が多いな」

「そうなんですよ」

自慢気にその内容に乗り頭を掻く。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい、よろしいです」

「では、少々お待ちを」

人が多いのはもちろん咲夜が原因だろう、メイド、美人、ナイスなスタイル、何でもできるというのが人気で遠くからも客が来るようになっていた。

「今日からバイト募集のチラシを貼ろうと思っているんですよ」

「そうか、この店を頼むぞ津上」

「任せてください！オヤっさんのこの店は俺が守っていきますから！」

そう意気込みやる気を見せる。

「優太はどうした？」

「優太は星輝ちゃんと闇夜ちゃんと一緒に町の散歩に」

海鳴市で育った優太が案内すれば星一が知らない所も知っている、
こんないい適任者は早々いないだろう。

「そうですか……小沢さんがルシフェリオンの改良が済んだようです」

「本当ですか！？星輝ちゃん聞いたら喜びますよ、帰ってきたら伝えておきますね」

「はい」と答え正義はコーヒーを飲む。

「お待たせいたしました、ブレンドコーヒーとナポリタンです」

常連と店長が話している中、一人黙々と仕事をこなすメイドが居たのだった。

この事もあり我もアミーゴの常連になろうとする客もいるのだ、咲夜と仲良くなりたあから。

（なんでお客様がこんなに多いのかしら……）

やはり自覚がない咲夜だった。

「ここは海鳴市のショッピングストリート、地元の人ほとんどここで買い物してる所だよ」

— — — — A
第07話
【蘇る明星】
A — — —

優太達が訪れたのは市街地の中心にある商店街だった。

最初に見えたのは自転車屋、マウンテンバイクやママチャリなど置いており販売していた。

「俺も昔ここで自転車買ったんだよね」

「自転車……………」

二人の目はキラキラ光っていた、よく通り抜ける自転車に乗った人を見る度に自転車屋の品物を見る。

「……………乗ってみたい？」

「はい／ああ」

即答だった、優太は自転車を買ったら練習に付き合つと約束をしその場を後にしようとしたら自転車屋の前をスーツを着てリュックを背負った男がマウンテンバイクのペダルを扱いで走らせて「遅刻だぁー!」と叫ぶと店から出てきた店主の老人に「ハヤタさん!おはようございます!」と挨拶してから通り過ぎていったとか。

「ここはハヤシライスがすごく美味しいレストラン、地元の人はアミーゴかここで昼食を食べたりするね」

「ライバル店という事ですか」

なぜかわからないが喫茶店アミーゴの店員の一人という変な自覚があり、星輝はそう言うが。

「いや、この店長とオヤっさん、旧友らしいんだよ、さっきの自転車屋の店長も、だから仲がいいんだ」

そして次の場所へ行こうと歩きだすとまたもやマウンテンバイクの

男が現れてレストランの二階の窓を開けた店主の老人に「モロボシさんおはようございます!」と言ってまた通り過ぎていく、テンパっているのだろうかもう12時前でこんにちはの挨拶の時間帯なのだが……………

「ここは坂田自動車工場、オヤっさんがバイクならここは車って決まってるぐらいに有名な工場」

「自動車……………何かレーシングカーみたいなものもあるぞ?」

「このオヤっさん、昔レーサー目指してて自分と前の工場長が作ったマシンで大会出場するって息込んでいたらしいよ」

外からでも事務所は見え、中に「流星号」という名の設計図がホワイトボードに貼られていた、そしてまた次の場所へ移動するとやはりマウンテンバイクの男が通り過ぎざまに「郷さんおはようございます!」と挨拶してから通り過ぎる。

「あの、先ほどからおはようございますが連続で」

「あ、ダイゴか……………多分テンパってるんだよ、遅刻したと思って、今日土曜日なのに」

それが聞こえたのか派手に転ぶ音が鳴り響いたとか。

「そしてここが北斗ベーカーってパン屋、他の地域のお客さんも来て雑誌で取材されるほどの店なんだよ、さっきのハヤシライスが美味しいレストランもそうだし」

「パンですか……………買って帰りませんか?」

「いいね、買おう買おう」

三人は店内に入り商品を選び始めた。

まだ優太は説明してないがパン屋の二階はパン屋の店主が経営す

るレストランになっていたり。
後はボクシングジムや空手道場と言った施設もあるがそこは興味ない
と思います紹介はしなかった。

「なんとか逃げ切ったな」
「そうだな」

そして人気がない路地裏に二人の変わった服装をし杖を持った男が
突然地面光ったと思ったたら現れた。

「あの白い魔導師しつこ過ぎるんだよ、なんだよあのバカ魔力」
「あの黒い魔導師、速すぎて逃げるのに精一杯だった、更にあの狸
っばいの、あの広範囲魔法なんだよ！危うく逮捕される所だった！」

魔導師……この二人は魔導師らしく何か犯罪を犯してこの世界に逃
げてきたらしい。

「この世界ならまだ管理局も目を付けてないからな、魔導師もいね
ーだろう」
「ほとぼりが冷めるまでここに居座ろっぜ」

男二人はその場から飛び立つ、魔力を放出して。

「っ！闇夜！」

「ああ」

パン屋から出てきた瞬間二人は自分達とは違う別の魔力に気付いた。

「どうかしたの？」

「私達以外の魔導師がこの世界にいます」

「なんだって？」

「まずいな……野放しにしたら管理局が嗅ぎつけて調査するな……」

消えたはずの自分達が見付かったら面倒な事になる、そう思い出した結論は。

「お引き取り願うために私達が相手をして」

「この世界から出ていかせた方がいいな」

「二人だけで大丈夫？それに星輝はデバイス」

「なくてもサポートぐらいはできますよ」

「まあ心配するな、さっさと片付けてくる」

二人は買ったパンが入った袋を優太に渡しその場から走り去り路地裏に入ると空へ白と桃色の閃光が飛び立ったのが見えた。

「一応アミーゴに連絡しておくか」

と携帯で連絡し初めてルシフェリオンの改良が済んだ事を知り自分小沢の所へ行き取りに行く事にした。

「腕は落ちていないだろうな？」

「もちろん、ただ喫茶店の手伝いだけをしてきたわけありませんよ」
バリアジャケットを起動、それを聞き安心したのか笑みを浮かべて
この世界に侵入した魔導師が居る所へ向かうとそこは深い森の中で
隠れるのには最適な場所だった。

「ここだな……………」

「んな罠を仕掛けたかわかりませんから気を付けてください」

もし犯罪者ならば潜伏するために罠を仕掛けるはずだと思い警戒し
ながら歩いていくと。

「なんで魔導師が居るんだよ!？」

いきなり見付かった、罠がなかったのはこの世界に魔導師が居るは
ずないと思い込んでいたからだ。

「やはり魔導師でしたか」

「しかもあの白いのと狸に似てるぞ!」

「白いの」、「狸」と聞き誰を指しているのかがすぐに理解できた。

「彼女達から逃げ切ってきたみたいですね」

「そうみたいだな」

闇夜は自分のデバイス・エルシニアクロイツを出す。

「気を付けてください、彼女達から逃げ切ったんです、実力は相当
なはず」

「わかっている!」

「逃げ切るんだ！逃げてもつと研究するんだ！」

「研究」、その単語からこの二人は違法な研究を行い指名手配され管理局に追われていたと判断した。

「違法研究か………ますますやられるわけにはいかないな」

研究者にとって闇の書は研究しがいがあるロストログア、更には消えたはずなのにまだ存在する闇の書の欠片、これを研究しないで誰が研究するんだ、そう思う。

広範囲に飛ぶように白い魔力でできたナイフが現れそのナイフは敵魔導師に向かって放たれるが避けられる。

「喰らいな！」

砲撃を放つ、星輝が前に出て円形のバリアを張り防ぐ。

「すまん、助かった」

「貴方は攻撃に集中しててください、私が防御に」

役割をちゃんと伝え相手を見る。

「わかった……アロン……ダイトオ！」

白い砲撃アロンドイトを放つ、またもや避けられるのが命中した所からエネルギーの球体が広がり敵魔導師にダメージを与えた。

「やっぱり広範囲の……！」

「おとなしくこの世界から出ていってもらえないでしょうか？」

管理局が感付くと面倒なので」

「ほお……………何かやらかしてこの世界に逃げ込んだのか？」

少し違うがやらかしたのは当たっているため何も言い返せなかった。

「なら、手を組まないか？俺達と手を組んで管理局からさ……………」

「お断りします」

「右に同じく」

きつぱりと断られその事に逆上した二人の敵魔導師は。

「調子に乗りやがって……………例のロストロギア使っぞ」

「ああ」

何か一回り大きいUSBスティックのようなアイテム・ガイアメモリを出す、一つはA、アロマロカリス一つはEエナジーと書かれておりスイッチを押し起動させた。

【ANOMALOC HARIS】

【ENERGY】

電子音が鳴り響くとガイアメモリをそれぞれの箇所差し込み姿を変えた。

「人間が……………怪人に!？」

一人は古代に生息していた海老のような生物に似た牙が目立つアロマロカリス・ドーパント、もう一人は灰色の体で左腕にレールガンが付いたエナジー・ドーパントへと変身してしまった。

「これで形勢逆転だな……ハア！」

エナジー・ドーパントは左腕のレールガンから砲撃を放つ、プロテクションで防ぐが押され気味で闇夜もプロテクションを張り二重のバリアで防ぎ切る。

「強いですね……」

「さすがロストロギアって言った所だがあんなの知らないぞ」

ガイアメモリはもともある仮面ライダーの世界のロストロギアであり、そのガイアメモリを様々な世界に持ち込み高値で売り捌いていたりするがこの世界でも管理局とは表では関係ないが違法研究している局員が裏でガイアメモリは存在し裏で取引を行っている。

「わかりました、闇の書の記憶によるとガイアメモリは様々な生物、物、空想上の物の記憶が詰まっているロストロギアみたいです」

「闇の書？そうか……貴様らは闇の書の欠片！」

今のガイアメモリの知識を言ったためその事が感付かれてしまい闇夜に少しジト目で見られた。

「すみません」

「だが……デバイスがない貴様と我では骨が折れるな……」

ドーパントとの戦いは初めてのためやりにくそうだった、更にはルシフェリオンがないためかなり苦戦を強いられる、そう思った矢先だった。

「グワアアッ!?!」

一台の銀色のボディに赤いライン、金の角のような飾りがハンドルの上に取り付けられたビートチェイサーの強化前のバイク・トライチェイサー2000が突撃してきて二体のドーパントを跳ね飛ばす。

「大丈夫!？」

「「優太!」」

もちろんそれに乗っているのは優太で、トライチェイサーから降りると星輝に水色の待機状態のスタンバイモードの生まれ変わったルシフェリオンを渡す。

なぜこの場所がわかったか疑問に思っていたところ。

「これ小沢さんから、ルシフェリオンが案内してくれたんだ」

「そうでしたか」

「基本はあまり変わってないけどリミッター機能とかって奴搭載して使用者の負担を軽減するシステム取り付けてフレームもオリハルコンプラチナって金属に変えたって」

簡単に聞いたルシフェリオンの説明を星輝にしアークルを腰に出す。

「では……………生まれ変わったのですから名前を……………ルシフェリオン、貴方に私の名を与えます……………」

【スタンバイレディ、セットアップ】

ルシフェリオンから響くとスタンバイモードから杖状の起動状態アクセルモードに変化する。

「貴方の名はルシフェリオン・デストラクターです、行きますよ!」

杖先をドーパントに向ける。

「変身！」

クウガ・マイティフォームに変身しアロマロカリス・ドーパントに立ち向かう。

星輝と闇夜はエナジー・ドーパントに二人がかりで挑む。

「二対一なんて卑怯だぞ！」

「貴方は一人以上の力持っていますから半々ですよ」

「そっか」とエナジー・ドーパントを納得させるとすぐに桃色の魔力スフィアを数個出し。

「シュート！」

ルシフェリオン・デストラクターを振るい放つ、エナジー・ドーパントも魔力スフィアを放ち応戦するが威力が違いため打ち消されていく。

「使用する時だけリミッターを一瞬だけ解除される仕組みですか……」

リミッター機能とは能力を使う時に一瞬だけ解放し無駄な魔力を消費しないようにする機能だった。

「だが魔法は外してるぞ！」

魔力スフィアは外れていったがリターンして背中に命中しダメージを食らう。

「誘導だど！？」

「コントロールもしやすくなっていますね」

クウガはアロマロカリス・ドーパントの口の牙による射撃に苦戦していた。

「オラオラ！避けられるか？」

落ちていた木の棒を拾い。

「超変身！」

変身ポーズを取ると赤から青の身軽な姿に変わる。

マイティからドラゴンフォームに超変身をし木の棒は青く金の線が入った杖ドラゴンロッドに変化。

「姿が変わっただけで！」

アロマロカリス・ドーパントは牙を連射し攻撃するがドラゴンロッドを両手で風車のように素早く回し牙を弾いていく。

ドラゴンフォームはパワーが落ちるが代わりにスピードが上がりその短所を補うのがドラゴンロッドである。

「当たれ当たれ当たれ！」

牙を連射するがドラゴンロッドを高速回転させバリアのようにするドラゴン風車で弾いていく。

「ハアアアアア……………！」

そのまま近付いていきアロマロカリス・ドーパントは後退するが大樹にぶつかり一歩も退けなくなる。

「く、来るなあああっ！」

ドラゴンロッドの両方の杖先がアロマロカリス・ドーパントの顔を直撃し回転を止めると剣を振るうが如く攻撃していく。

「オリヤアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

最後に一突き、スプラッシュドラゴンを炸裂しアロマロカリス・ドーパントは大きな声を上げて爆発し元の魔導師に戻った、一定のダメージを与えればガイアメモリは機能が停止し排出され破壊される仕組みになっていた。

「これで怪人に……………」

「ぐわっ!?!」

エナジー・ドーパントはバインドというリングで拘束する魔法に捕まり身動きが取れなくなった。

「ブラスト……………!」

「アロン……………!」

ルシフェリオンの杖先は変化しバスターモードに変わりエナジー・ドーパントに向けていた。

「ファイアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ダイトオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

二つの砲撃が命中しエナジー・ドーパントを呑み込んだ。

「うわあああああつ!!!!!!!!!!!!!!?」

ダメージが一定を越えたためエナジー・ドーパントも変身が解かれ
ガイアメモリが排出され破壊された。

「さて、この後はどうしますか……………」

するとバイクのエンジン音が聞こえてきた。

「なんだ?」

目の前に前部が黒く後部が緑のバイクが停車、乗っていたのは。

「黒の仮面ライダー?」

「緑の仮面ライダー?」

クウガ側からは黒、星輝達からは緑と別々の意見に別れていたが。

「『いや、どっちもだ』」

バイク・ハードボイルダーから降りたのは右半身が緑、左半身が黒く赤い眼でWでアンテナのような角が付きマフラーが巻かれた仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカーだった。

「君は……………」

「『俺達／僕達は…………仮面ライダーダブル、時空と現実、幻想を越える二色のハンカチさ』」

「仮面ライダー…………ダブル……………」

ダブルはガイアメモリを使用していた魔導師を担ぐ、すると近くにダブルの仮面を模したような装甲者リボルギャリーが停まり中に入る。

「こいつらは俺達に任せておきな」
「……………」

だが星輝と闇夜はこの仮面ライダーが管理局と繋がりがあると思い
すんなりとは返したくなかった。

『大丈夫さ、君達の事は局には伝えない、君達を連れてくる依頼な
んて受けていないからね』

右目が点滅し違う声が響く。

「俺達は私立探偵だからな、今回はこの魔導師捕まえるために来た
だけさ、じゃあな」

ダブルはハードボイルダーに跨り走りだしその後ろをリボルギャリ
ーが着いていきその場を後にした。

「仮面ライダーダブル……………私達が知らない仮面ライダー……………」

ダブルの謎を残しつつ三人は喫茶店アミーゴへ帰っていった。

喫茶店アミーゴの扉と壁に『バイト募集』のチラシが貼られておりそこに一人のセーラー服を着た黒いリボンで髪を二ヶ所束ねてツインテールで髪の色は赤っぱい色の女子高生が通りかかり。

「バイト募集……ここもいいかもしれませんわね」

携帯のカメラでそれを撮影してその場から去っていった。

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第07話【蘇る明星】（後書き）

ガイアメモリは異世界からばらまかれた物でドーパントに一定のダメージを与えればメモリブレイクできるという。
管理局の研究対象ですが違法な研究者が裏にある財団Xの依頼で生産しているような感じです。

次回予告

小沢

「ガイアメモリね……最近出回り始めたものね」

星一

「バイトの面接始めます」

「冥怒アイリと申します」

星一

「合格」

優太

「あの子……まさか……」

A	—	次回	—
—	第08話	<ruby><rb>—	
—	【傷心</rb><rp>—	</rb><rt>じょ	
rt><rp>—	</rb><rt>じょ	ん</	
—	目覚めろ、その魂！	—	
A	—		

第08話【傷心】（前書き）

今回はクウガによくあるような話、傷心は原作のサブタイから。

第08話【傷心】

「ガイアメモリ……最近出回り始めたものね」

ルシフェリオンがルシフェリオン・デストラクターとして復活した数日後、優太と闇夜はGトレーラーのオペレーションルームにいた。闇夜が着いてきたのはエルシニアクロイツにもルシフェリオン・デストラクターと同じ機能を付け加えるため。

「ACCCELプロジェクトってライダーシステムの開発プロジェクトがあるのよ、それはガイアメモリのアクセルメモリを使用して戦うのよ、対ドーパント用にね」

「そうだったんですか」

コーヒーを受け取り飲む優太、闇夜はオレンジジュース。

「そしてそれと関係ありそうな仮面ライダー、ダブルね……」

「なんか時空と現実と幻想を越えるって言ってました」

「管理局とも関係ありそうだったな……我らの事を黙っててくれればいいのだが」

初めて会った人物を早々信用できるわけがないのだが。

「けどあの仮面ライダー、嘘は吐かないと思う」

仮面ライダー同士だからか、優太はダブルを信用していた。

「取り敢えず、ガイアメモリについては私達も調べるわ」

「お願いします」

二人はGトレイラーを後にすると真友と出会う。

「あ、真友」

「優太に闇夜さん、こんにちは」

「やあ」

闇夜は割とソフトに挨拶、偉そうな態度だからか目上に対する礼儀はあまりないよう。

「小沢さんに報告ですか？」

「まあな、ビートチェイサーは？」

「結構ガタが来てまして修理には時間が掛かると風見主任が」

風見志郎、科学捜査研究所の責任者であり対未確認用の新兵器をも開発している。

「ゴウラムは？」

「榎田さん達がちゃんと見てくれていますよ」

榎田ひかり、同じく科学捜査研究所のメンバーである。

ゴウラムとはクウガのパートナーと言える巨大なクワガタの金属の生命体である。

「トライチェイサーとの合体は金属疲労は起こらないようにフリームが変えられていますので」

「合体……………」

合体、その単語に目を輝かせる闇夜がいた、名前が名前だったからそういうの好きなのだろうか。

「まあ待つててください」

最後にそう言い別れて警視庁の本部の外へ、外にトライチェイサーを停めていたのだ。

「じゃあどっかで飯食ってから帰るか？」

「そうだな」

二人はトライチェイサーに乗りその場から走りだした。

A

— 第08話 —

「思った以上に候補者が居るな」

バイト募集のチラシを貼り一週間、この一週間以内に履歴書が十数枚送られてきており面接の毎日を送っていた。

この喫茶店の正社員という正社員は星一だけが頼み込まれて咲夜が副店長代理で立ち合っている。

「これと言っていい子が見付からないわね……………」

面接が終わった者の履歴書を見ながら呟いていた、言葉の通りこれと言ってアミーゴに貢献してくれそうな人材が見付かっていなかった。

「二人決まってるんだけどね……………後一人……………欲しいな」

星一も自分の店のこれからの事に関わる事だから一生懸命だった。

「あ、次の人が来るわ、さっさと準備しよう」
「そうだね」

二人は再び面接の準備に取り掛かる、面接をする日は店を一定時間閉めて休みにはしないようにしている。
場所がないため店内が面接会場となっている。

「次は……この子か……少し期待できるかな？」

次の面接者の履歴書を見て呟く、履歴書の検定等が何を持っているか書かれている欄を見ていたのだ。

「パソコン検定三級に漢字検定二級……数学検定三級にその他もあるもろって、この子本当に高校生？」

決まってる二人の大学生もここまでは持ってないわよ？」

検定の価値を一応知っている咲夜もこの数の多さに驚いていた。

「ちょっと期待してもいいかも」

「そうね」

「そう話しているのもいいですがもう来てますよ？」

そこに突然星輝が現れその発言に慌てる。

「マジで!？」

「どれだけ会話に夢中になっているんですか……長くなりそうだったので紅茶出して外に待っててもらっていますから」

そういう気を使う事ができる彼女に驚愕するしかなく急いで面接の準備を始めた。

「てか時間止めて準備すれば」

その言葉により一瞬で準備が調い面接が始まるのだった。

「じ、じゃ……星輝ちゃんは二階に上がってて」

「はい」と返し二階に上がって終るのを待つ事に、そしてすぐに面接者が「失礼します」と言って入ってくる。

「まずはお名前を」

こういう場だからメイド服ではなくちゃんと私服で上からエプロンを着ている咲夜。
名前から聞くことに。

「はい、冥怒アイリと申します、本日はよろしくお願いします」

面接慣れしているのか、丁寧な自己紹介をする。

「高校の名前と学年は？」

「私立天ノ川学園高校一年生です」

そして数分後……

「結果の方は後日改めて連絡させていただきます」

面接は終了しアイリは帰っていくのを見届けてから二人は見合わせる。

「「スゴい……………」」

同時にその一言を言い放った。

「あの子、本当に高校生かしら？」

あそこまで面接慣れしているとわね」

「そうだね、こりゃ確定だねあの子」

三人の合格者が決まったのだった。

「受ければよろしいのですが……………」

結果がどうなっているか知らないアイリはそこそ不安だった。

「あ、確か今日はスーパーの特売日……………行かないと」

歩道を歩いていると車道をトライチェイサーが通り過ぎていった。
トライチェイサーを横断歩道で一旦止めヘルメットのバイザーを上

げ優太は後ろを振り向きアイリを見た。

「あの子…………どこかで……………」

「どうかしたか？」

「いや、なんでも……………」

信号が変わりトライチェイサーを再び走らせアミーゴへ帰るとちやうど店が開いておりそのままエプロンを着て手伝うことに。

「バイト決まった？」

「とりあえずね」

優太もどんな人物がバイトで来るか気になっていた、そのため星一に聞いてみた。

「大学生の子が二人で高校生の子が一人」

決まった面接者の履歴書を見せると。

「お、蓮子じゃん」

「この子知り合い？」

「あ、高校ん時の同級生」

中にあつた宇佐見蓮子という人物は同級生らしかった。

「どれどれ、我にも見せろ」

「闇夜が見てもわからないよ」

そう言いつつ三枚の履歴書を見ていきマエリベリー・ハーンという名の女子大生の履歴書を見てから三枚目を。

「あ、この子……さっきの」
「本当だ」

「知り合い？」と聞かれたため先ほど見掛けただけと話すが何か引っ掛かっていた。

「やっぱり……会った事がある……」

「会った事が？どこでだ？」

「わからない……だけどどこかで会った事があるのは確か」

アイリの履歴書を見て深く考え込んでいると客が来てしまい対応しまた後で考える事に。

「いらつしやいませ、ご注文は？」

「これで当分は……」

その決まったのを知らずアイリはスーパーで買い物してから自宅であるアパートへ帰宅しようとしていた。

「今日はしょうが焼きをつくりましょう」

夕飯の献立を考えながら歩き、妹と弟達が待つ自宅へ帰宅し初めて面接が合格したと知らされたのだった。

数日後、何事もない日常が過ぎていこうとしていたが。

「まーた脳天から何かに貫かれた殺しかぁ……………」

ある事件現場に河野というベテラン刑事が立ち合っていた。

「河野さん！」

そこに正義と滝、一条も駆け付ける。

「またですか？」

「ああ、これで5件目だ、殺害の仕方が全て死因がアナフィラキシ
ー・ショック死って奴だ」

一条は殺害方法と死因で今回の事件の犯人を割り当てた。

「未確認生命体第14号、固体名はメ・バヂス・バ……………ですよね一
条さん？」

「北条」

だがそれを言う前に北条が横槍を入れるが当たりである。

「またグロンギが起こした事件なのか北条？」

「ええ、私は殺害方法と死因、この二つで第14号が起こした事件
と確信していました」

思い込みが激しい性格だがどの刑事よりも優秀なためその思い込み
が当たる事もしばしば。

「小沢さんに超音波探知機の準備をしておくように言っておいってください」

嫌味な笑みを浮かべると現場を後にした。

「アイツどんだけ小沢にライバル心抱いてるんだよ」

「まあまあ、北条さんはいい人ですから」

その言葉に一旦三人は黙り込むが。

「一条、小沢に超音波探知機を用意するように言っておいてくれ」
「わかりました」

だがそれには触れないようにしようということに決まったが正義はなぜかわかっていなかった。

【次のニュースです、本日午前6時から午前11時に掛けて起きた5件の連続殺人事件を警視庁は未確認生命体のグロンギ怪人第14号の起こしたものと正式に発表しました】

喫茶店アミーゴの店内に置いてあるテレビでニュースが流れており警視庁の発表した内容をニュースキャスターが伝えていた。

「グロンギか……」

優太は仕事そつちのけでニュースを見ていたが。

「優太、仕事仕事」

星一に呼び掛けられ我に戻り途中だった食器洗いを始めた。

「あ、ごめん」

今のニュースではこうなるのも仕方ないと思っていたためしつこくは言わなかった。

「それにしてもグロンギの殺害目的は何かしら、アンノウンはアギトになりゆるものを殺害してるけど……………」

咲夜は疑問視していた、グロンギの殺害理由がわからずにいたからだ。

「グロンギの殺害理由はゲームです」

そこにメガネを掛けて実に頭良さそうに見せている星輝が椅子に立って言う、本当に頭がいいが。

「ゲーム？」

「はい、グロンギ怪人は独自のやり方とルールを決め古代人リント…………つまり現代人を標的にしたゲームを行っているんです」

もちろんこの知識は図書館やネットで、ホントこの世界について勉強をしている。

「そうですよね優太？」

「……………うん」

優太が肯定するから間違いがあるはずなくその事実には怒りが露に。

「グロンギの殺害理由がそんななんて……………」

「それは酷いわね……………」

ゲーム、ただそれだけの理由で人間が人間を殺すのはよくある、だがそれは少数であるのだが、グロンギの場合は大量殺人に繋がるためそれ以上に許しがたい理由だった。

四年前の事件の犠牲者は全員で五万人以上越えているのだ。

「星輝ちゃんはホントなんでも勉強してるね」

「ええ」と返す、闇夜はまだ寝ている。

「最近連続失踪事件も多発しているみたいなのでそちらも気を付けてください」

星輝が見せたのは「連続失踪事件多発！」という記事が載った新聞だった。

「この事件は30件は軽く越えています」

「わかった、そっちなも気を付けるね」

星一が返した瞬間扉が開くのを知らせる金の音が鳴る。

「いら……………あ」

「どうも、今日からお世話になります冥怒アイリです、よろしくお願ひします」

バイトで雇ったアイリがやってきたのだ。

「今日からバイトで土曜日と日曜日はこの時間帯で働く事になったアイリちゃんだよ、みんな仲良くしてあげてねー」

星一が軽く紹介するとすぐに喫茶店で使ってるエプロンを掛ける。

「あの、ここメイド喫茶じゃありませんわよね？」

「え？あ、まあ基本服装自由だから、咲夜さんはメイド服で仕事してるんだ」

やはり一人だけメイドが居るためそう思うのも多少は無理はない。

「メイド服……………」

すごく憧れの眼差しで見えていたがもう一つ。

（あの方、すごく美人……………）

美人にはかなり目が無かったり。

「メイド服着たいなら咲夜さんに言えばサイズ合わせて用意してくれると思うよ？」

そこに関しては感が鋭くそう答えると。

「では今度頼んでみますわ」

「うん、楽しくやらないと続かないからね、楽しくやれるように工夫してね」

そう言う仕事は始まるうとしたが優太の携帯に着信が入り。

「あ、悪い星一、ちょっと用事できた」

それだけを言い残し外へ出ていった。

「あの方もバイトですか？」

「優太は元々ここに住んでいたから正社員扱いかな？」

「そう……………」

アイリは優太の後ろ姿を見て何かを感じていた、かつて自分を守ってくれた戦士に、だが。

（だけどあの方はちゃんと守ってくれなかった……………私のお母さんとお父さんを……………第36号から……………）

心中でそう呟くと残った面子だけで仕事を始めた。

「笹山さん！14号は今どこに!？」

【ごめん優太くん！まだ超音波探知機が機能してなくて!】

トライチェイサーの無線機で本部に通信し笹山と会話していた。

「そうですか……………」

【だけどちゃんと機能したら伝えるから一条さんの連絡待って!】

「わかりました！」

【一条さんはGトレーラーで待機してるから、杉田さんと桜井さんは優太くんが走ってるすぐ近くに居るから】

最後にそう伝え通信を切る。

「……………よし、頑張るぞ！」

トライチェイサーを加速させ車道を駆けのだった。

「御室くん！鈴木くん！探知機の準備はまだなの！？」
「はいただいま！」

Gトレーラーでは小沢は八つ当たりと言わんばかりに二人に指示していた。

「完璧北条に言われたから腹立ててるよな……………」
「そうですね」

角で正義と滝がこそこそ会話をしていた。

「あの二人ホント仲が悪いですから……………」

「てか性格一緒だから反発し合うんだろ？」

「ですよね……………」

カリカリしてる小沢を見て触らぬ神に祟りなし、という言葉を尊重し今は関わらないようにしようところそりGトレーラーを抜け出した。

一条と真友は即避難し車の中。

「あ、氷川さんと滝さんも？」

二人が入ったのはやはりその車だった。

「ええ、お二人には何か今度ご馳走しましょう」

四人は犠牲になった二人にそうしようと誓うのだった。

「すごいね、アイリちゃん、初めてなのに」

営業中のアミーゴでは今日が初出勤にも関わらずアイリは仕事を難なくこなしていた。

「ええ、まあ……………」

接客慣れしてるのか客への対応も良く星一だけならず咲夜も好評価。

「ふわぁ〜よく寝た〜……」

すると眠そうに服を着替えた闇夜が降りてきた。

「何時だと思っっているんですか？もうお昼過ぎてますよ」

一階で勉強中だった星輝に呆れられていた。

「そうか……ん？バイトか？」

「そうですよ、土曜と日曜にシフト入れてる冥怒アイリですよ」

闇夜は椅子に座りテーブルに肘を付いて手で顔を支えて実に行儀が悪い体勢を取るが自分に害が出るわけがないので注意しない。

「お前は今日も勉強か？よく飽きぬもんだな」

「勉強は楽しいですよ？闇夜もやりますか？貴方も天ノ川小学校に転入するんですから少しやっておいた方がいいですよ？」

すごくご機嫌に勉強やろうと勧める、それほど勉強が楽しいというよりは知識を収集するのが好きだからだろう。

「この相対性理論の本は面白いですね」

小学生が絶対読まなそうな本を取り出し見せ付ける。

「お前病気だろ？」

「厨二病という病気の貴方には言われたくありませんが？」

「厨二病言っな！」

星輝は黙認しつつ勉強、闇夜はキーキーうるさく何か言っている、二人の喧嘩はこういう感じなのだ。

「またやってるよ」

「あの二人は……津上さんか十六夜さんのお子さん？」

「いや年が10歳ぐらいしか離れてないから違うよ」

星一、咲夜、優太は21歳だから完全に違う。

「保護責任者かな？9月から天ノ川小学校に転入するんだ」

「天小？私も小学校は天小ですわ」

「そうなの？」

言葉のキャッチボールが成立していた、あっちの喧嘩と違って。

「はい、妹二人も天小の小学五年と三年ですわ」

「あの子達も三年生なんだよ？」

「あら、転入したら仲良くするように言っておきますわ」

「ありがとアイリちゃん」

そこでそうだと言わんばかりに星一が。

「そういえばアイリちゃんって何個も検定持つてて平日も何個も違うバイトにシフト入ってるみたいだね」

バイト面接の時にだいたいこの事は把握してる、平日には放課後にコンビニやファミレス等のバイトのシフトを入れているのとか即に原付の免許も持っていたりとか。

「どうして？そんなに働かないといけないの？」

「面接の時に聞かれてなかったのと言わなかったのですが両親居ないのです」

「両親が？」

「ええ、四年前に……………未確認の事件に……………」

それ以上は言わなくてもわかってしまった、彼女もグロング怪人のゲームの被害者だと、殺されてなくても残された遺族も被害者なのだ。

「目の前で……………」

「ごめん、変なこと聞いて」

「いえ、別に気にしてませんわ……………けど」

話は続き言い放った言葉は……………

「第4号がもつと早く倒してくれていればとよく思ったり……………私、目の前で見てたんです、第36号と戦う所を、あの後ろ姿が忘れられないんです、一度後ろを振り向いたあの後ろ姿が……………」

ここで優太がなぜアイリに見覚えがあるかはつきりわかった。

よく考えてみると優太は16……………早生まれで高校二年生だった当時にクウガとして戦う宿命を背負わされた、アイリは遅生まれだが同じ年齢で変身していたと。

星一と咲夜も遅生まれで4月1日が誕生日である。

学校とかだったら一年上の先輩だが。

「……………憎んでる？」

「少しは」

それだけ聞くと再び仕事に戻った。

「一条さん」

「コーヒー飲むか？」

海鳴公園でトライチエイサーを停車させておりそこに一条がやってきた。

「ありがとうございます」

礼を言い受け取り蓋を開けてコーヒーを飲む。

「どうですか超音波探知機の方は？」

「起動しているが14号は恐らく休憩しているだろう、今回は管理者のバルバがいないから好き勝手にルール作ってるから余裕があるのだろい」

「そうか……一条さんはバルバに会ったんですよね長野で」

長野のでの事は即に関き済みである。

「そうだ、トライチエイサーの調子はどうだ？」

「いいですね、榎田さんにお礼言わなきゃ」

「会ったら言っておくよ」

「よろしく願います」

すると無線機に通信が入りそれに出る。

【第14号に動きが、 地区を南へ移動中です！】

「わかった笹山くん、至急向かう」

優太はトライチェイサー、一条は車に乗り走りだし現場へ移動を始めようとしたが。

【本部より各局、 地区にアンノウン出現】

「 地区つて……………ここから……………」

「優太、14号は氷川達に任せるぞ」

「はい！」

二人はアンノウンが出現した現場へ移動を始めた。

【 地区にグロンギ怪人第14号、 地区にアンノウンが出現しましたので地元の方々は外出をなるべく避けるようにしてください】

アミーゴの店内のテレビでニュースが流れていた。

「咲夜さん」

咲夜は頷く店から出ていった。

「グロンギ……………」

ニュースを黙然と見ているアイリを店長が放っておくわけにはいか

ないため自分がここに残った。

そして優太はアンノウンを倒すためにこう叫ぶ、誰も涙を流させないために……

「変身！」

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第08話【傷心】（後書き）

因みにアイリには元になったキャラが……ミルクディッパーの人じゃありません、あるアニメからです。

ヒントはメイドと冥土、結構卑猥なアニメだったなwww
普通の人には耐えられないので見る時は注意を。

未確認の被害者は殺害された人だけではないと思ったのでこういう話が、原作でも教授の娘さんのこういう話もありましたよね？
因みに今回は三部構成。

次回予告

一条

「14号には逃げられたらしい」

優太

「あの時の子が……………」

闇夜

「思い詰めるなよ、自分を」

笹山

【グロンギ怪人第14号は海鳴市の海岸添いを南へ移動中！】

優太

「アイリ！」

アイリ

「なんでもっと早く来てくれなかったのですか！」

A

— 次回 —

— 第09話 —

— 【困惑】 —

— 目覚めろ、その魂！ —

A

第09話【困惑】（前書き）

クウガのサブタイ的なサブタイが続いていきますねえ。

第09話【困惑】

「終わったか……………」

アンノウンは優太と咲夜が倒しその場はしのいだが。

「14号は逃げられたらしい、アンノウンがあつちにも現れ乱戦になつてな」

「そうですか」

正義達はグロンギを逃がしてしまった模様。

「同時に警戒したのか飛翔せず未だに超音波はキャッチできてない」
「わかりました、俺達は店に戻ります、何かあったら」

一条とは一旦別れ二人はアミーゴへの帰路に着く。

「優太、ちょっと」

そこで咲夜がアイリの過去について教える。

「36号……………そうか……………あの時の子が」

優太も思い出した、四年前の未確認生命体、グロンギ怪人第36号が起こした殺人ゲームの事を、脳裏には両親を殺害されベビーカーの赤ん坊と二人の少女を宿める10歳を少し過ぎたぐらいの少女が、その隣には無惨に頭がなくなった親の体とその体から別れ転がり落ちた頭が。

それを背に戦う銀色の分厚い鎧を纏い剣を持った自分とカマキリに似た鎌みたいなた剣を持った怪人が浮かんでいた。

「あの子が……………あの子があんなに働いてるのは俺のせいか……………」

そう自分を戒め始めた。

「けど、それは……………」

「グロンギのせい……………いや、それを止められなかった俺のせいだよ咲夜」

優太はそう言い返すとトライチエイサーを押してアミーゴへ向かった、その後ろ姿は悲しみを感じられた。

	—	—	—	A
			第09話	
		【困惑】		
A	—	—	—	

【グロング怪人第14号はG3-Xとの戦闘後行方を暗まし……………】

ニユースでは数分前に起きた戦闘の事を報道しており客はもちろん
星一達も視聴していた。

「……………氷川さん……………」

ボソツと名前を呟いているとアイリの手は握り拳になっており震えていた。

【 地区に出現したアンノウンはアギトとかつてグロング怪人を
殺害していった未確認生命体第4号が撃破したとの情報が入って
お
ります
】

「っ！」

第4号、その言葉を聞いた瞬間動揺を隠せなかった。

【第4号は先日のグロンギ怪人第3号が出現した事件に再び現れるようになり活動を再開したと専門が……】

最後まで聞こうとしたが途中で注文が入りそれに対応。

（またあんな事が起きるのですか……色んな人が大事なものを失う）

これから起きる事を予想し不安になりながらも今の仕事を全うしようとしたが。

「アイリちゃん、そろそろ休憩の時間だから休んでいいよ」

星一のその言葉で緊張が解け休憩するために一階の住居に上がる、一階は店員やバイトの休憩所になっているが星輝と闇夜がよく使っている。

「…………ふう…………あら？」

部屋に入るとやはり星輝が居り勉強中だった、闇夜もしていたのがわからずうつ伏せになって爆睡していた。

「確か…………」

「高町星輝と申します、冥怒アイリ」

「呼び捨てですの」

「大抵は」

軽く会話をすると椅子に座り用意した飲み物を飲み一休みに入る。

「……………」

「……………」

「ぐう」……………「ぐう」……………」

聞こえるのは店内の客の声と闇夜の寝息だけ、二人は黙ったままだった。

「……………何をお読みに？」

「相対性理論の本です」

「……………は？」

小学生がそんな本読むか！とツツコミを入れようかと迷っていた。

「趣味で読んでいるのであしからず」

「趣味でそんな本読む小学生なんて初めて見ましたわ」

少し会話が進み始めた。

「読まないのですか？面白いのに」

「相対性理論の本を面白いつて……………一体どんな教育を……………」
「気にせず」

だがすぐに会話は止まり客の声と闇夜のいびきだけが響く室内。

「……………そろそろ休憩時間終わりですよ」

「え？あ、いけない」

そして仕事に戻るアイリを見送ると自分で飲み物を淹れ相対性理論

の本を読み続けるのだった。

「あれ？優太は戻ってない……………」

咲夜が店に帰って来たのだが先に帰ったはずの優太が店内に居なかったのだ。

「優太が帰って来てない……………まあ今はいいかな、忙しくないし、優太は14号を優先してもらおう」
「そうね」

二人が14号について話しているのをアイリが聞いてしまい。

（14号の相手を小野寺さんが？なんで…………？）

脳裏には戦い終わった後のクウガの後ろ姿が浮かび異形な姿が人間の姿に戻る映像が流れた。

（アレ……………今の……………）

12歳ならもうすっかりとした記憶があるはずだがショックが大きかったためうる覚えの記憶だった、だがそれを確かめずにはいられなかった。

だがそれを二人に聞いても流されるだけかもしれない、確かに仮面ライダーの事はできるだけ秘密にした方がよかったため流されるのは当然である。

（もし、あの人が第4号なら……………）

第4号に会わずにはいられない、その気持ちでいっぱいになりなが

らも仕事をこなした、姉弟達のために。

「優太」

「一条さん……真友も」

港にトライチェイサーを止めフェンスに腕を寄せ海を眺めているところに一条と真友がやってきた。

「帰らないでこんな所に居たのか」

「ええ、ちよつと」

理由は聞かなくてもわかった、星一からバイトの事を聞いていたからだ。

「まあいいさ、けどな、お前はそうやって一人で背負い込む性格直した方がいいぞ?」

「一条さんにはやっぱ適わないや」

「はい、コーヒーどうぞ」

「ありがとう真友」

三人で海を眺めながらコーヒーを飲む。

「あの向こう側に居たんだよな俺」

「そうですね……」

グロンギとの戦いから最近までずっと日本には居らず世界中を歩き

回っていた優太。

「……………去年、内乱に巻き込まれたな……………」
「え？」

いきなり言いだす優太、その話を聞く姿勢に入ると静かに語り始めた。

「ある村に訪れてな、その村の人達と仲良くなった、そこで同じように旅してる奴にも会ったんだ」

懐かしそうに語るが悲しげな雰囲気を出していた。

「だけど、旅してる奴さ、政治家の息子で、親と兄がそいつだけ助かるようにして村は内乱に巻き込まれた、そいつが村をなんとかして救おうとした話を政治の道具にしてな」

「アレか……………狭間映司か」

「新聞にも出ていましたね、村を救おうとした悲劇の英雄的な感じで……………ですがなぜいきなりその話を？」

真友が疑問に思うのも無理はない、その内乱の裏側の話と四年前の悲劇の話がどういう関係があるのか。

「俺はまた何も守れなかった、あの子の両親のように、また何も……………」

かつての事件の犠牲者も内乱の犠牲者も同じ人間、だから関係ないという事はなかった。

「……………映司どうしてるかな……………」

最後に呟き話は終わる、波の音が響き渡っていた、もう少しで夏の本番が近いなと感じつつ。

「さて、アミーゴに戻るか」

「そうですね」

優太はトライチェイサーに跨ろうとしたら無線機が鳴り通信に出るとグロンギ怪人14号が動き出したと入電が入り三人は顔を見合せそれぞれの車両に乗り走りだす。

テレビでもグロンギが動き出したと放映されていた。

「お疲れ様でした」

ちょうどよくバイトが終わったアイリはその放送を聞いてから出たため携帯のテレビ機能を付けニュース番組を見て怪人の出現場所が画面に出ておりそれを見ると。

「よし」

原付バイクに乗り走りだし海沿いへ向かう、第4号が誰なのかを確かめるために。

「優太、14号は海岸沿いの上空だ」

「わかりました！」

速度を落として車の横に並んで一条から拳銃を借りるとアクセルをほぼ全開まで回しトライチェイサーを加速させ一条と真友の車からだんだん距離が離れていく。

「変身！」

腰にアークルが現われ右腕を左斜め伸ばしゆっくり右へ動かして左側のスイッチを押し叫ぶとコアのアマダムは赤く光り優太は仮面ライダークウガ・マイティフォームに変身した。

トライチェイサーは優太が変身したのに反応するように更に加速。

「ちょっと君！この先は立ち入り禁止………わあ！？」

メガネを掛けた緑色のショートヘアの髪をした婦警が静止するのにも関わらずアイリは原付でバリケードを突っ切ってしまった。

「うわぁ……………やんちゃだな」埼玉県警から配属になって最初の失敗だよ……………」

婦警はその後ろ姿をただボーッと見ていた。

（この先に行けば4号が……………！）

気持ちを抑える事ができなかった、アクセルを回しトライチェイサーほど出るわけないが加速させ海岸沿いの道路に入ると後ろからあの婦警が乗ったミニパトが追い掛けてくる。

「その女の子！そっちは立ち入り禁止だから早く戻りなさい！」
「いえお構い無く、自分の身の安全は自分で守りますので」

そして距離は離れアイリが乗った原付は見えなくなった。

「……………これじゃあ橘のオッサンにまた叱られるうう……………」
「……………」

海鳴警察署交通安全課、小早川ゆい、上司に怒られると思いミニパトを停車させ頭を抱えるのだった。

海岸沿いの砂浜にトライチェイサーが出るとそこでブレーキを掛け停車させるとタイヤの回転により砂が舞う。

クウガは降りると入電が入り今自分がいる地点に14号が通りかか

ると入り。

「超変身！」

アマダムは緑色に輝き何でも見通せるような緑色の眼に左肩に着いた緑色の肩防具、右の黒い肩防具に緑色の鎧を纏った仮面ライダークウガ・ペガサスフォームに変身。

先ほど借りた拳銃を持つと拳銃も変化、金と緑と黒に着色が施され金色のブレードが二対上下に付いたペガサスボウガンに変化した。

「……………」

空を見上げる、夕暮れ時でオレンジに染まっていた。

ペガサスフォームは視覚、聴覚と言った感覚神経が極限まで発達し赤外線や紫外線も見える形態なのだ。

クウガは14号、空を高く飛ぶ蜂に似たグロンギ怪人メ・バヂス・バを直視、バヂスもクウガを見て倒す絶好の機会だと思い右腕の針を発射する器官を向け放つが。

「……………っ！そこか！」

針を指で挟むように受け止め捨てるとペガサスボウガンの銃口をバヂスに向け引き金を引き空気を圧縮して放つブラストペガサスを炸裂した。

空気の弾丸は一直線にバヂスを捉えていた。

「ゲハアッ！？」

胸を射抜かれバヂスは墜落、ベルトのバックルが割れ海に落ちると海中で爆死した。

「ふう……………」

夕日が沈む海を見ていると背後にバイクのエンジン音が聞こえ振り向くと驚愕した。

「……………っ!」

道路にアイリが居たからだ、ペガサスフォームは制限時間があり50秒過ぎると変身が強制的に解除されてしまったため優太の姿に戻った。

「貴方が……………4号だったんですね……………」

優太は何も言わなかった、何か言っても言い訳にしかないからだ。

「どうしてですの……………」

何言われるかすぐにわかった、自分は彼女の両親を守れなかった。

「どうしてお母さんとお父さんを助けてくれなかったのですの!どうして……………どうして……………!」

ガードレールに手を置きそのまま膝を付いて座り込んで涙を流す、自分が一番見たくない悲しみの涙を見てしまった。

そこに一条と真友の乗った車が近くに停まるのだった。

— — — A
T
o
b
e
C
A — n t —
i
n
e
d
—

第09話【困惑】（後書き）

トライチエイサーとビートチエイサーはかつこよくてかつこよくて、
トライチエイサーも出してしまった。

一番はトルネイダーですが、感想お待ちしております。

次回予告

星一

「帰って来なかったね」

???

「今日の寝床と明日のパンツの準備しなきゃ」

???

「よう、優太、オヤっさん」

優太

「隼人さん！」

アイリ

「優太さん、私……」

クウガT

「オリヤアアアアッ！……！！！！！！！！！！」

「……？」

「ライダー……キイイイイイイイック！……！！！！！！！！！！」

A

—— 第10話

—— 【理解】

—— 目覚めろ、その魂！

A

第10話【理解】（前書き）

オーズっぽい人出てますがまだまだ活躍しません、後最後には龍騎士が。

そしてあの伝説の仮面ライダーも！

第10話【理解】

「優太、昨日帰って来なかったね」

「ここにいてはまたアイリと会い気まづくなりますからね」

バチスを倒した次の日の朝、優太は帰って来なかった、行き先は想像ついていた、タチバナレーシングクラブに寝泊まりしただろうと。

「つたく、あの塵芥……」

「一人で淋しかったのですか闇夜？」

「う、うるさい」

とか言いつつも反応はそうらしく一人の夜が淋しかったらしい。

「バレてますよ？」

「あー聞こえん聞こえん」

耳を塞いで何も聞こえないようにしていた。

「今日、来るかしら？」

咲夜がやつと口を開けた、アイリが来るか微妙だった、昨日の件もあるからだ。

「シフトは？」

「土日祝日に入ってます」

「なんで星輝ちゃんがうちの店のバイトのシフト表持ってるの？」

「コピーしました」

賢く頭がいい子だなあと思いつつ別のシフトの二人を呼ぶべきか考えていると。

「おはようございます」

そこにアイリが入ってきた、ちゃんと休まずきたなと優太が今いなくて良かったという気持ちが半分半分だった。

「どうかなさいましたか？」

全員なぜか「いえ何も」と返し開店の準備を、昨日は初めてだったので午後からだったが今回は午前の開店時間からのシフトになっていた。

「すまないが我は出掛ける」

闇夜は準備のため二階に戻ろうとしたが呼び止められ。

「どちらへ？」

「さっさと戻ってくるように促す」

それだけを言うと二階に上がっていった。

「やっぱり淋しいだけじゃないですか」

星輝も着いていこうと二階へ上がり外出の準備に。

「……………小野寺さんは？」

「えっと……………昨日から帰って来てないんだよね、どこに行ったのかな？」

わざとらしくそう言うがアイリは追及しなかった、あまり関わりたくないと思っていたからだ。

成田国際空港では一人の青年が日本の地に帰ってきていた。

「久しぶりの日本、早く和食が食べたいなあ」

青年はのほほんとしている雰囲気だったが何かを満たされていないようだった、心にぽっかり穴が空いたようにだが。

「おい！和食なんてどうでもいいからアイスを食べせろ！」

後ろから金髪の青年が駆けてきた、どこか最初の青年と似ている。

「そんなに焦るなよアंक……………」
「いいから早く行くぞ映司、ウヴァ達に先越されてたまるか」
「はいはい、その前に今日の寢床と明日のパンツ準備しなきゃ」

青年、狭間映司はざま えいじは空港から出るのだった。

— — — — A
第10話
【理解】
A — — — —

タチバナレーシングクラブでは優太が籾兵衛の手伝いでバイクの整備の手伝いをしていた。

「優太、何かあったか？」

「どうしてオヤっさん？」

「あつちからここに来るなんて何か訳があるんじゃないかってな…

……」

籾兵衛は何かあったと察していた。

「……まあお前が気が済むまでいいいさ、自分から逃げなければな」

「ありがとう、オヤっさん」

工具を使いトライチェイサーの整備を始める。

（……………逃げてるな俺）

逃げていた、自分でも感じていた、自分から、そしてあの少女から。

「だけど優太、焦ったって何も解決しないぞ、ゆっくりでもいい、少しずつ頑張ればいいさ」

籾兵衛の言葉に励まされつつ整備を行う。

するとそこに店の前に一台のバイクが停まる、優太はそのバイクと

ライダーをよく知っていた。

「隼人さん！」

「よう、優太、オヤっさん」

名は一字隼人、フリーのカメラマンだ。

優太の父は考古学者なのだがそれと同時にカメラマンもしていた、そのため隼人とは面識があるのだ。

「隼人、お前いつ……」

「今さっき、日本に来たからオヤっさんの顔を見にね」

隼人は荷物が紐に巻かれて乗せられたバイクから降りると店の中に。

「優太も男の顔に少しはなったな」

「少し……まあ否定はできませんが」

ポットに入ったコーヒーマグカップに淹れ飲み始める隼人。

「隼人、他には何か目的があって来たんじゃない？」

「察しがいいねオヤっさん」

目的があつたようだ。

「ちょっとな……ガイアメモリって知ってるか？」

籐兵衛は聞いたことない反応したが優太は大きく反応。

「優太は知ってるか……この世界にないはずのものが持ち込まれてるんだ」

「隼人さん……………なぜ？」

「ちよつとある探偵から聞いたんだ、異世界にあるガイアメモリがその世界の組織が裏で取引して更にはその取引相手を実験台にしてるって」

ガイアメモリを使用すればドーパントになる、その能力などを研究するために違法研究をする管理局の局員達が不正にガイアメモリを売買していた。

「しかも日本でよ、日本にはいいユーザーがたくさんいるみたいだな」

「だけど……………管理局はこの世界の存在は……………」

「管理局自体はな、その裏にはびこる違法研究者達が気付いたみたいだぜ、その探偵仮面ライダーに言つと」

探偵仮面ライダー、ダブルだとすぐに気付く、籐兵衛は余りにも内容がでかすぎて整理できていないが。

「異世界のアイテムが取引されて怪人が日本に増えてるって事が」

ここまでわかれば十分。

「だから当分は仕事もかねてガイアメモリについても調べるからよろしくな」

「はい」

隼人はレーシングクラブに泊まる事にするらしい。

「それに、グロンギも復活したのも気掛かりだ、四年前と同じ事が起きるんじゃないかと思うと」

その言葉に優太の表情は青ざめる、一番気にしていたからだ。

「……………隼人さん、34号の被害者の人、覚えてますよね？」

「ん？ああ……………夫婦の」

「はい」

「それがどうした」と返されたため包み隠さずアミーゴにその夫婦の娘がバイトで働いておりその少年から逃げてると話した。

「そうか……………気持ちはわからなくてもないな……………目の前に助けられなかった人の娘がいるならなおさらか」

「隼人さん……………俺、どうしたら」

「それは……………自分で最終的に何とかするしかないぜ……………まずは相手に理解してもらおう事から始めたらどうだ？

お前の事を何も知らないんじゃない、そんな気持ちで戦っているのもわからない、すぐにわかるはずもない、

なら少しずつ相手に理解していつてもらえ、わからなくてもないだろう、その子の気持ち」

自分も両親がグロンギの犠牲者、そうだと考え彼女との接点を見付けて少しずつ理解されようと思ひ始めた。

「頑張れ、後輩」

「はい！」

少し瞳に希望が宿り優太はトライチェイサーの整備をてきぱきと済ませてからそれに乗って走りだした。

「理解されずに戦い続けるのが仮面ライダー、だがそれは理解して

もらわないというわけでもない、理解してもらえそうな人がいるんだ、たっぷり理解してもらえよ、優太」

そっ喋ると自分もバイクの整備を手伝う事に。

「ん？」

トライチェイサーを止めヘルメットを取る、ガードレールの中側の歩道に。

「促さなくてもそっちから来たか塵芥」

「闇夜………それに星輝」

歩道には闇夜と星輝の二人が立っていた。

「闇夜は貴方がいないから淋しくて迎えに来たんですね」

「う、うるさい！」

「そっか………ありがとう闇夜」

優太はサムズアップ、つられるゆうに闇夜も。

「なぜか知らんが一人でいるのを極端に嫌うんだ、オリジナルの記憶が少し混じってるみたいだな」

闇夜は自分のオリジナルである八神はやてについて説明をした、はやては一人でいる期間が多かったと。

「ならそのはやてって子は闇夜の兄弟みたいな感じなんだ」

「そうか？」

「うん」

笑顔で頷きトライチェイサーから降りる。

「……………なら、もう一人にしないでくれ……………暇なんだ」

自分から淋しいなんて言わないのはプライドがあるから、暇は淋しいの遠回しで言ったのだ。

「わかった、じゃあ帰るか」

「アイリとは？」

「覚悟ついた、嫌われてるならそれでいい、だけど、理解してもらえないならしてもらっさ」

それを聞きもう何も言わなくていいだろうと思った矢先に。

【優太、聞こえるか？】

トライチェイサーの無線機に一条から入電が入り応答する。

【グロンギ怪人第11号と第21号が目撃された】

「二体同時に!？」

【だが目撃されただけでまだ犠牲者は出てない、海沿いを走っていてくれ】

「わかりました!」、そう言い返すと無線を切りヘルメットを被りトライチェイサーに跨る。

「俺、行つて来る」

「お気を付けて」

「ちゃんと帰つてこい」

「ああ」とサムズアップで返すと足を掛けトライアクセラーを回し走りだした、迷いを切り裂くように。

「……………なあ星輝」

「貴方が考えている事はお見通しですよ、彼女を」

二人はバリアジャケット姿になるとその場から飛び立ちアミーゴへ向かった。

優太に入電が入る少し前の喫茶店アミーゴ。

「こんにちは」

「真友ちゃんいらっしやい」

まだ何もなかったため真友が来店しカウンター席に座る。

（あ、美人）

アイリから見た真友の第一印象はそうだった。

美人には結構目がなかったりするため気になってしまふのだ。

「ご注文は？」

「紅茶で」

紅茶は咲夜の専売特許、咲夜が淹れ始めた、丁寧の手間隙を掛けて淹れていく。

「アレ？」

「優太はいないよ、昨日からオヤっさんの所」

真友はため息、そりゃそうかと思いながら出された紅茶を飲む。

「昨日の……刑事さん？」

「はい、小野寺真友と申します」

「小野寺……？」

真友は自分は優太の双子の妹と教える。

だからと言って今は客、とやかく言う気はないので仕事を。

「昨日の言葉」

だが話し掛けられ足を止めてしまう。

「どうして助けられなかったか、その言葉……」

「本当の事じゃないですの、私だけではなく四年前のグロンギの被害者の遺族の方々だって」

「被害者の……遺族……その被害者の遺族の中に私達兄妹も入っていたとしたら」

その兄妹は優太の事も指している、まさかと思った。

「第0号の最初の被害者の考古学者とカメラマン、私達の母と父だったんです」

当時の新聞でもそう書かれていた、その二人の名字は小野寺。

「優太もアイリさんと同じ事を自分に言い聞かせていましよ、なんでもっと早く力がなかったのか、あれば二人を助けられたはずなのに、と」

「そうだったのですか……」

少し自分が言った事を後悔するが真友は仕方ないと返すと携帯に着信が入りグロンギ出現と聞きすぐに料金を置いて店から出た。

「ただいま戻りました」

星輝達が帰って来たのだが。

「アイリを借りてくぞ」

「え？」

星一は軽く了承、二人はアイリを連れ庭に出てバリアジャケットにセットアップ。

「その姿は………」

「それは後で、行きますよ」

「ちよつとー！」

二人はアイリを掴んだまま飛び立った。

「飛んでるー！？」

「確か海沿い走ってるんだよな」

「ええ、優太を見つけたら後を着いていけば」

星一はそうするとわかっていたたむ二人にアイリを貸したのだ、少しでも優太を理解してくれるようにと。

「さて、オヤっさん、ちょっと出掛けてくるな」

「……………気を付けてな」

「ああ」

隼人は荷物を降ろし白き赤の模様が着いたバイク、新サイクロンに跨り走りだした。

海鳴市の港、倉庫が建ち並ぶが日曜日のため人はいなかったが銃声等が響いていた。

「撃てえ！」

警官達が第11号のタコ種怪人ズ・ダーゴ・ギと第21号のイカ種怪人メ・ギイガ・ギを取り囲んで拳銃を発砲していた。

「ハッ！」

ダーゴは口から墨みたいな塊を放ちパトカーに命中させると爆発、
発火性があるみたいだ、ギイガも同じ能力があり墨を吐き辺りを炎
上させていく。

「変身！」

そこにクウガ・マイティフォームがトライチェイサーでパトカーの
上を飛び越えダーゴに体当たりをし吹き飛ばす。

「優太くん……全員距離を取って仮面ライダーの援護だ！」

杉田の指示で警官達は下がり始める。

クウガはトライチェイサーから降りるとトライアクセラーを引き抜
く。

「超変身！」

アマダムは紫色に輝き姿が変わっていく、紫色の眼に銀色で紫色の
ラインが流れる分厚い甲冑が纏われクウガはタイタンフォームに超
変身、

トライアクセラーも紫でクウガの角を模した鰐が付いた剣、タイタ
ンソードに変化する。

かつてギイガの墨をタイタンフォームの甲冑で防ぎ接近してタイタ
ンソードで倒した事がありこの姿を選択した、ダーゴは違うがタイ
タンフォームなら持久戦に優れているためもあり選択をした。

二体は墨を吐き続けるが分厚い装甲には効かず、クウガはタイタン
ソードのグリップを両手で握って持ち走りだす。

「ハアアアアッ！」

タイタンソードを横に振るうが避けられ墨による反撃を食らう、近かったためか少し後退るが体制を立て直しダーゴに突き刺そうとしたが海からエビ種怪人メ・ゾエビ・ギが飛び出してきて体当たりを食らい阻止される。

「何!？」

ゾエビは三又の槍を持ちクウガに襲い掛かる、さすがに三体は持久戦に優れていてもキツイ。

「くっ!」

ゾエビが槍を振りタイタンソードを弾き飛ばしトライアクセラーに戻ってしまい武器は失ったと思ったが。

「オリヤアアアアッ!!!!!!!!!!」

だがタイタンフォームの武器は剣だけではない、この防御に優れた甲冑とマイティフォーム以上の怪力を誇る姿では素手も武器になるが素早さは逆に落ちる、ドラゴンフォームの逆である。

（けどトドメを刺す事は…………）

その怪力でゾエビを殴り飛ばすとドラゴンフォームにチェンジ、武器となるトライアクセラーが遠くに飛ばされたため素早く回収するためチェンジしたがダーゴとギイガの追撃が迫る。

（近付けない!）

だが、ダーゴの体に火花が散る。

「小野寺さん！」

「氷川さん！」

そこに正義が装着したG3-Xがガードチェイサーで駆け付けGM-01を発砲しダーゴの動きを食い止めていたがギイガとゾエビが同時にクウガに襲い掛かってくるためまだトライアクセラーに近づく事ができない。

「このままじゃ……………」

毒づいてるとバイクのエンジン音が響くと新サイクロンに乗った隼人がやってきた。

「隼人さん！」

G3-Xは退くように呼び掛けたが隼人は新サイクロンから降りる。

「氷川さん、大丈夫です、この人は！」

隼人は両腕を右方向に水平に向け上へ挙げるように大きく回すと左方向へ左腕を拳が上へ向くように曲げ右腕の拳を左に向くように曲げると腰についていたベルト・タイフーンのバックルが開き中の赤い風車が回り出し強い光を放ち隼人は姿を変えた。

「あ、アレは……………伝説のダブルライダーの一人……………！」

隼人の姿は緑のボディに赤の手袋とブーツとマフラーに黒い仮面に触角のような二本の角に赤い二つの眼。

「仮面ライダー2号！」

隼人は仮面ライダー2号に変身、この姿は悪の組織ショッカーの再改造手術を受けパワーアップした姿、仮面ライダー新2号である。

「トウッ！」

2号は高くジャンプをしギイガに突撃。

「ライダーパンチ！」

ライダーパンチを炸裂しギイガを殴り飛ばす。

「今だ優太！」

「はい！」

クウガは一気に飛び込みトライアクセラーを拾い再びタイタンフォームに、同時にタイタンソードにも変化しゾエビに挑む。

「ライダーチョップ！」

次はライダーチョップとギイガに力技で戦いに挑む。

ギイガは墨を吐き切ると煙を噴射し腹部が弱くなる、海水で体を冷やさないといけないがそれが弱点でかつてそこを狙ってタイタンソードを突き刺したが2号にはそのような武器はない、だが2号の最大の武器はその力技である、その特殊な技を持っていない、だがその力技で何度も窮地を潜り抜けてきた、今も、これからも。

「ライダーキック！」

仮面ライダーの基本必殺技であるライダーキックを繰り出し更にギイガを追い詰めていく。

ギイガは墨を吐くがそれが最後で腹部から煙を噴射、チャンスが巡ってきた、2号はジャンプし右足を伸ばし体を捻り回転を加えていく。

「ライダーアアアーツ！^{まんじ}ㄱ키이이이이이이ック！！！！！！！！」

ライダーキックに回転を加えたライダーㄱ키ックを炸裂！

「グゴオツ！？」

2号はギイガの腹部を貫きその背後に立つとギイガは爆散し倒された。

「あれが仮面ライダー2号の力……………」

ダーゴも墨を吐き切り隙が生まれGX-05にGM-01とスコップを直結させ銃身に小型ミサイルGXランチャーを取り付けダーゴに向ける。

「GXランチャー、ファイヤー！」

GXランチャーを放つと衝撃で後退り、弾頭は命中し爆発、ダーゴは爆死した。

「よし！」

「ここですね」

「どこですのこ」

「港の倉庫の上です」

倉庫の屋根に星輝と闇夜、アイリが降り立つ。

「いたぞ」

闇夜が指差す方には下でクウガとゾエビが激しい攻防を繰り広げていた。

「小野寺さん……………」

クウガはタイタンソードを振り下ろしゾエビは三又の槍の間で受け止める。

「優太が言ってたんだ、どんなに人のために拳を振り下ろすのは嫌だって、奴はそれなのに戦えない誰かの代わりに戦って強くならないといけない、そう言っただけ自分が一番傷付く戦いをしてきたんだ」

闇夜は一条や真友から聞いた事をすべて話した、少しでも理解してくれるように。

「なんでもすべて背負い込むんだ、アイツは」

話が終わるとアイリはその戦う姿を見つめる、かつて自分を守って

くれたその姿を。

「うおおおおおおつ!!!!!!」

「っ!!」

力任せに受け止められたタイタンソードを振り下ろし槍を破壊すると右斜めに振り上げ一太刀入れるとゾエビは両腕を挙げて後退り。

「ハアアアア.....!!」

タイタンソードを持った腕を右側の後ろへ引き。

「オリヤアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

大声と共に腕を伸ばしタイタンソードでゾエビを突き刺す、必殺技カラミティタイタンを炸裂、封印のエネルギーを流し込むと封印のマークが現れゾエビは断末魔を上げ爆発し炎はクウガも包むが。

「.....」

炎が消えその中心にはタイタンソードを下に向け腕を降ろしたクウガが微動だにせず立っていると変身を解き優太の姿に戻ると同時にタイタンソードもトリアクセラーに。

「ニッ」

倉庫の上の三人には気付いてたらしく自分が苦しいにも関わらず笑顔を見せサムズアップをする、どんな事がろうとも笑顔を絶やさないのだ。

「優太さん……………」

三人はすぐに立ち去った、警察が来るため色々と。

「すみませんでした」

喫茶店アミーゴ、優太が帰ってくるとアイリは頭を深く下げ謝罪していたが「仕方ないよ」と優太は優しく返した。

「これで夜は淋しくありませんね」

「う、うるさいなあお前は！」

しつこい星輝に半ばキレているが仕方ない。

「闇夜もごめんな、淋しい思いさせて」

「淋しくない！暇なだけだ！今日は絶対貴様の旅の話聞くからな！」

「はいはい」

闇夜は恥ずかしさを隠すために二階に上がっていった。

海鳴市にあるとあるアパートの一室。

「お腹空いたよー!」

「信司早くご飯!」

水色の髪の毛の赤い瞳の少女と茶髪の毛の女性が喚いていた、二人共髪の毛が長いが女性の方は結わいておりポニーテールだった。

「待ってるよ!すぐできるから!」

台所から顔を覗かせるのは一人の青年、名前は城戸信司^{きと しんじ}、ジャーナリスト、主に記事担当。

「漣の奴……早く帰って来いよ……できたぞ」

信司が作ったのは餃子、二人は喜んだ、彼が作る餃子は美味いからだ。

「はい、召し上がれ、美穂、雷夢」

女性の名前は霧山美穂^{きりやま みほ}、少女の名前は霧山雷夢^{きりやま らいむ}、雷夢は美穂の娘という事になっている。

「やっぱパパの餃子美味しいー!」

雷夢は信司を父のように慕っておりパパと呼んでる、美穂はもちろ

んママ。

「信司の稼ぎがよければさっさと入籍して雷夢が私達の子になるのに」

「大きなお世話だ」

信司と美穂は恋人同士であり結婚は考えているが信司の稼ぎが悪いためできない、アパートの家賃もかなり滞納している。

「漣遅えな……………」

餃子を一つ食べもう一人の同居人の帰りを待つのだった。

「今日はここで寝よう」

「今日も野宿か！カプセルホテルがあるだろ！」

「高いしお金の無駄遣い」

海鳴公園の森の中、映司はテントを張っていたがアंकとカプセルホテルに行くか喧嘩になるのだった。

— A

—

—

— —
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A —

第10話【理解】（後書き）

力の2号を表せた気がする。

技の1号？その人は警視総監です。

力と技の3号は現在科学捜査研究所の主任です、4号も。

次回予告

信司

「なんで二人共出てるの？」

星輝

「今何かアホの子の気配を感じたような」

雷夢

「ママ……本当にパパでいいの……」

美穂

「そうね……」

星一

「この感じ、アンノウンじゃない」

信司

「変身！」

A

— 次回 —

— 第11話 —

— 【赤き龍の騎士と黒き

— 水色の雷 —

— 戦わなければ生き残れ —

— ない！ —

A

第11話【赤き龍の騎士と黒き水色の雷】（前書き）

今回も二部構成、次回戦います。

第11話【赤き龍の騎士と黒き水色の雷】

「ただいま」

信司が勤務先からアパートに帰って来たのだが。

「あれ？」

なぜかアパートの前で美穂と雷夢が部屋にあつた荷物を抱えていたのだ。

「あ、あれ？なんで二人共出てるの？」

恐る恐る聞いてみると二人はジト目でこう言い放った。

「滞納してたから追い出された」

悟ってはいた、家賃二ヶ月滞納していたな、それが原因だよな。

「信司……………」

「パパ……………」

捨て犬のようなつぶらない瞳で見つめられるがどうしよもない。

「てか漣はどこに行ったんだよ…………どこまで写真撮りに行ってるんだよアイツ」

もう一人の同居者の事を心配するが今は今日の寢床を探さなければならぬ。

「取り敢えず……………歩こうか？」

二人は頷き荷物を信司が器用に持ち右に美穂、左に雷夢が立ち手を繋いで歩きだしたのだった。

「俺の家は……………」

黒く薄いコートを着た男がアパートの自分の部屋の前に来ていたが誰も居らず表札は外されていたのだった。

	A
—	—
— 第11話	—
— 【赤き龍の騎士と黒き	—
— 水色の雷】	A —

「こんにちは！」

いつもの喫茶店アミーゴ、今日は平日なため客はあまりだった、学校も放課後の時間帯なため下校中の生徒が寄る事も多いこの喫茶店、星一の人柄の良さもあるため女子生徒にも人気。
最近では毎日のように別のバイトに行く前のアイリが来店してくる、一応従業員なため割引される。

「いらっしやいアイリちゃん」

「また来てしまいましたわ」

初めて会った時より店に馴染み明るくなっていた、これが普段の彼

女なのだ。

「よっアイリ」

「こんにちはですわ、優太さん」

優太を名前で呼ぶようになっていた、真友がいるため名字では呼びにくくなったのもあるが少し優太の事も理解したのもある。

「紅茶でいいかしら？」

「はい、よろしいお願いしますわ咲夜さん」

咲夜とは女同士なためかすぐに名前で呼ぶように、星輝と闇夜もある。

「今日もバイト？」

「はい、少し休んだらすぐに」

何気ない会話をしているとまた客が入ってきた。

「隼人さん！いらっしやい！」

「よう優太」

隼人が来店してきた、さしずめ現喫茶店の店長のコーヒーの味を確かめに来たのだろう。

「一文字、津上のコーヒーは美味いぞ」

カウンター席には滝が新聞を読んでくつろいでいた。

「滝！」

「この前の怪人倒した後さっさと帰っちまいがって」
「悪い悪い」

隼人は滝の隣に座りコーヒー注文、因みにその隣にアイリが座っている。

「ほおー、四年前はあんなに小さかったのに大きくなったなー」

隼人はアイリを見て感想を漏らす、言われた本人はちんぷんかんぷんだったが顔をよく見て思い出した。

「あ、あの時の！」

四年前、優太だけが駆け付けたのではなかったのだ、そこに隼人も居合わせていたのだ。

「そう、俺は一文字隼人、仮面ライダー2号さ、普段はフリーのカメラマンをしている」

優太がクウガという事を知っているため自分の正体をバラす。予断だが当時のクウガとグロンギの戦いを写真に収めていたのは隼人である、そのため優太と共に行動していた。

星一と咲夜、正義も仮面ライダーという事ももう知っている。

「2号って……あの伝説のダブルライダーの力!?」

2号の事は一般にも伝説として語り継がれていた。

ダブルライダーとはショッカーやゲルショッカーを倒した二人の仮面ライダーを纏めて表す言葉で2号は力の2号と呼ばれておりもう一人の仮面ライダー、1号は技の1号と呼ばれ歴史の教科書にも載

る程伝説として語られている。

「本当に教科書にまで……………」

「そりゃシヨツカーからクライシスで言った組織と初めから戦ってたんだぜ？無理はないさ」

タバコを吸いながら言う滝、灰皿で処理すると新聞を畳みコーヒーを一口、隼人のコーヒーも運ばれ飲むと。

「本当に美味しいな」

隼人も絶賛していた、これにより星一は更に自信を付けるのだった。

「ありがとうございます」

そしてそろそろ時間だとアイリは店から出ていった。

「星一、そろそろ私達にもおやつを」

奥から星輝が顔を覗かせそう言つと星一はおやつの準備を始めた。

「今日はホットケーキね」

と生地を作ろうとしたその時。

「あれ？アホの子の気配が……………」

休憩室に戻った星輝は何かの気配を感じていた、自分と同じ気配を。

「我也感じたぞ、すぐ近くにいます」

二人は顔を見合せ頷くと休憩室から出て。

「すみません、もう一人前追加で作っておいてください」

「星輝ちゃん？闇夜ちゃん？」

二人はそそくさと店から出ていった。

「一人前？」

「ママ、これからどうする？」

美穂と雷夢はアミーゴから近い小さな公園、名前は石ノ森公園、そのベンチに座ってうなだれていた。

「そうね……信司の給料が入るまで公園の水で凌ぐしかないわよ」

美穂は前科があり就職やバイトしようとも経歴で素性がわかり採用してもらえないのだ。

「ごめんね……ダメなママで」

「いいよ……こうして拾って名前までくれて、ママとパパ、漣がいれば」

「ありがとう……はあ……こうなったら北岡の所に転がりこもつかしら」

二人はため息を吐く、信司は仕事なためまだ帰って来ない。
すると。

「いましたよ」

「本当にいたな」

声が聞こえてきた、雷夢に取っては懐かしい声だった。

「嘘!？」

「雷夢？」

公園に入って来たのは星輝と闇夜だった、それを見た雷夢は走りだし。

「星光————！王様————！」

「雷刃!」

二人に抱き付いて頬擦りをする。

「雷夢？」

そしてアミーゴに。

「美味しい〜！」

星一達にももう一人前を用意する意味がわかった、雷夢はマテリア

ル」の雷刃の襲撃者で又の名をレヴィ・ザ・スラツシャーだ。

「まさか星光に王様まで来てたなんて」

「いえ、今の貴方に雷夢という名前があるように私は星輝」

「我は闇夜という名前があるんだ」

「そうなんだ」！

三人は休憩室でおやつを食べながら会話を弾ませていた。

「すみません、私まで」

美穂は紅茶を飲みながらカウンター席に。

「いえいえ、あの子達の友達の、それもそのお母さんもいるんですから」

先ほどアパートを追い出された事や前科があって雇ってもらえないと言ったら。

「ここで住み込みで働けばいいよ、前科なんて気にしないし」

何分今はかなり儲かってる、バイトも足りないくらいだからちょうどいい。

「あ、そしてその後二人……職があるんだけど給料少なくて」

「そしたら休みの日手伝ってくれればいいよ、空き部屋あるからどつか使って」

「ありがとうございます」

またこの喫茶店に同居人が増える事に。

早速信司に電話する事に、今の時代携帯がないと生きていけないためそれはちゃんと持っていた。

「もしもし信司？漣もいる？」

数分後話は着いて信司ともう一人もそれを了承、仕事が終わったらすぐに来るそうだ。

数時間後、信司ともう一人、アパートの部屋の前で呆然としていた黒い服の男、秋山漣が訪れた。

「この度はありがとうございます」

深々と頭を下げるが。

「いいですって、星輝ちゃん達の友達も見付かって三人揃った事を喜びましょ？」

「はい！」

すると漣は隼人に気付く。

「もしかして一文字隼人さんでは？あのフリーカメラマンの」

「お前もカメラを？」

「はい」

漣と隼人はカメラの話に花を咲かせ始めた。

「星一と咲夜って記憶喪失なの！？」

信司と美穂は二人が記憶喪失という事に驚く。

「もしかしたら昔は恋人同士だったりして」

美穂が冗談混じりに言う。

「っ！」

「星輝！？」

休憩室で勉強中の星輝が鉛筆を折っていた。

「そんな事は……………」

二人は顔を見合せると少し頬を赤く染める、それを感じたのかまた星輝は鉛筆を折る。

「星輝、少し落ち着いたら……………」

「気にしないでください、なんでもありませんから」

なぜか二人はその気迫に圧されていたのであった。

アミーゴでゆったりとした時間が流れていたその頃、滝は呼び出さ

れある事件現場に来ていた。

「またです滝さん」

正義と一条、真友も来ていた、この面子なら未確認の事件であると明白だった。

「今回の事件は目撃者がいましたよ」

今回の事件とはここ最近連続失踪事件が起きており警察が手を焼いていたが。

「目撃者によると被害者は鏡の中に吸い込まれたそうです」

「鏡の中に？」

これは超常現象で未確認生命体と何か関係があるのかと思うと北条が被害者は蜘蛛みたいな怪物に鏡の中に引きずり込まれたと付け加えた。

「鏡の怪物……ミラーモンスター……確か神崎史郎という人物が研究していた」

真友は怪人や怪物を専門とした生物学者だ、警察が未発見の未確認生命体を知っていてもおかしくない。

「神崎史郎……その神崎史郎なる人物は今？」

北条は聞き込みに行こうと何をしているのか尋ねたが。

「無理です、神崎氏には失踪届けが出されており妹もいたようです

が10年も前に交通事故で他界しています」

希望は途絶え一からのスタートを余儀なくされた。

「では一応神崎史郎が使っていた研究室に出向いてみますか」

「城南大学にそのままに残っているはすです、明日にでも」

「では明日に城南大学の前で待ち合わせで」

北条と真友は仲がなぜか良かった。

（小沢さんより話がわかる人だ）

という事だった。

そして、次の日の10時過ぎ頃、滝と一条、真友と正義と北条は城南大学の神崎史郎が使っていたがその神崎史郎も居らず、研究室はそのままになっていた、もし行方不明となったら三年はそのままではないならないという大学の方針である。

「ここが神崎氏の研究室です」

中に入ると使われていないからかホコリっぽく書類や研究器具などが散乱していた。

「ミラーモンスターは昔神崎先輩に一度だけ聞いた事があるんです、鏡の中の世界、ミラーワールドに生息する怪物で現実の空間だと1

0分ぐらいしか活動できないらしいと」

書類等を手に取り見ていると滝が何かの資料を見つけた。

「こりゃ…………おいみんな！これ見ろよ」

その資料を見せる、その内容は13人の神崎史郎が作ったライダーシステムで変身した仮面ライダーを戦わせるという内容だった。

「仮面ライダーに殺し合いかよ…………笑わせる…………コイツよほど頭がイカれてみたいだな」

能力を発揮するにはミラーモンスターと契約するとも書かれていた。

「神崎先輩…………これは……………」

だがそれには続きがあった。

「このライダーバトルは最後の一人の変身者の願いを叶える代わりにその変身者の命を代償にもらう」

ここまでならとんでもないものだが。

「その生命エネルギーを妹の神崎優衣に注ぎ蘇生させる……………」

ここで神崎史郎がなぜライダーバトルを仕組んだかわかった、妹を蘇らせるために勝者の命をもらうという事だった。

「神崎先輩…………妹さんの死を受け入れられなくてこんな事を……………」

「純粹だったのでしょうね、神崎氏も」

北条は腕を組み回りを見渡すと掛け時計が目にとまり時間が今の時刻ではないのに気付く、恐らく妹の神崎優衣の死亡した時間なのだろうと思いい注意深く見ていると後ろに何かの封筒が見つかりそれを手に取る。

今の時点ではライダーバトルはまだ行われているものかと思っていたが。

封筒の中身は手紙だった。

「もしこの手紙を読んでいるのならライダーバトルは行われなかった歴史を辿っているようだな……………ライダーバトルは行われなかった歴史？」

再びライダーシステムの資料をよく見るとそのライダーはカードを使い戦うらしく中にタイムベントというカードがあった。

「優衣を復活させる事はできた、だが二十歳までしか生きられない、長く生きさせるには勝者の強い生命エネルギーが必要だった、だが優衣はそれを拒んだ、俺は優衣が生きる事が幸せだと思っていたが違った、逆に苦しめていた、それがわかりライダーバトルが始まる前の時間にタイムベントで戻しライダーシステムを回収しようとしたのだが」

タイムベントはタイムスリップするためのカードのようだった、もしかしたらミラーモンスターの餌食になっている末路を辿っていた歴史もあつたかもしれない。

「タイムベントを多様し何度もライダーバトルをやり直した事が原因か、ミラーワールドとミラーモンスターは消えずに残ってしまい、

更には時空も歪み始めてしまった」

時空が歪む、もうその異変に巻き込まれたものが四人ほどいた、マテリアルズと咲夜だ。

「ミラーワールドに入るには俺が作ったライダーシステムでしか入らない、そのため俺は四人の人物にライダーシステムとなるデッキを渡した」

その四人の人物の名前は……

「仮面ライダー龍騎、城戸信司、仮面ライダーナイト、秋山漣、仮面ライダーゾルダ、北岡周一、仮面ライダーファム、霧山美穂の四人に託した」

名前も丁寧に書かれていた、中には今アミーゴにいるのも。

「彼等と出会う事があれば手助けしてくれ、残りの8個のライダーシステムは研究室の金庫に入っている」

ここで読み進めていた北条は疑問を感じた、ライダーシステムは13個、なのに残り8個は矛盾していると。

「神崎氏はなぜ……13人なのに……」

だがこのままいても何も始まらない、そう思い研究室をまた捜査すると大学側に話を付け五人は城南大学を後にした。

「ちょうどお昼ですね……」

「北条さんも一緒にどうですか？ランチが安くて美味しい喫茶店が

あるのですが？」

「喫茶店………まだ範囲ですね、いいですよ、あなた方がよく行く喫茶店の料理の味を私が見極めてあげましょう」

そのデカい態度に苦笑しつつアミーゴへ向かった。

「美穂ちゃんそれそっちね」

「はい」

アミーゴは昼食の時間帯のため大変込み合っていた。

「まさか俺まで手伝わされるなんてな」

隼人もいた、来店してゆつくりしていたら混んできて手伝う事に。

「隼人さん、これアッチのお客さんに」

「おう！」

すると滝や一条達が来店してきた。

「一条さんに真友達いらっしやい」

優太が出迎えカウンター席に案内。

「ここがあなた方の言う喫茶店アミーゴですか」

北条は物珍しそうに店内を見渡す。

「注文は？」

とりあえず日替わりランチセットを注文する。

「またバイトの方増えてませんか？」

「ええまあ」

咲夜が答え正義は美穂を見る。

この美穂が手紙に書いてあった霧山美穂とも知らずに。

「はい今日は野菜たっぷり和風パスタです」

今日はそういうメニューらしく一口、食べる。

「……………美味……………」

北条も絶賛だった。

「プロ並みの腕……………レストラン開けますよ？」

北条は三つ星レストランなどよく通っているため味はわかる方。

「そう言っただけだと嬉しいですねー」

そるから一条達は捜査に戻りミラーモンスターについて調べる事に。

「忙しいなあアイツら」

隼人はそう漏らし見送るのだった。

仕事で取材に出掛けている信司と漣は仕事場に戻ろうとしていた。

「なかなかないな…… スクープって」
「当たり前だろ」

二人はだらだらしていた、信司は肩掛けバックをぶら下げ漣はバックとカメラをぶら下げて歩いていると耳鳴りみたいなものが聞こえてきた。

「信司」

「ああ！」

二人は走りだし路地裏に捨てられていた鏡の前に立つとポケットから信司は龍の顔を模したマーク、漣はコウモリの顔を模したマークの黒いカードデッキを出す左手で持ち鏡に写すと腰にVバックルというベルトが現れる。

「「変身！」」

信司は右腕を左斜め上に向け漣は右腕を軽く曲げて拳を上に向けデッキをVバックルに装填すると何個か影がオーバーラップし姿を変える。

信司は鉄の仮面にその奥に赤い眼が見える赤いスーツに銀色の鎧が着いた仮面ライダー龍騎、漣は鉄の仮面にその奥に青い眼が見えダ

イクブルーのスーツに騎士のような鎧を着けた仮面ライダーナイトに变身した。

「んしゃっ!」

龍騎とナイトは鏡の中に入っていった。

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第11話【赤き龍の騎士と黒き水色の雷】（後書き）

タイムベントの多様してしまっただせいで次元が歪んでマテリアルズや咲夜がこの世界に、次回戦います。

次回予告

信司

「……………コアミラーを潰さない限りミラーモンスターはミラーワールドから出続ける」

雷夢

「パパとママは仮面ライダーなんだ！カッコいいだろう！」

美穂

「この子と出会って良かったって思ってるわ」

星一

「じゃあ一緒に戦いましょう！」

信司

「ああ！」

A

一次回

— 第 1 2 話

【終わらせるための

一戦い

戦わなければ生き残れ

—
ない
！

A

第12話【終わらせるための戦い】（前書き）

今回は自分が好きな昭和ライダーのダブルライダーの1号の技と2号の力を受け継いだあの人と4号が少し登場します。

後、ダブルライダーとV3で短編書こうと考えています、THE FIRSTとTHE NEXTのダブルライダーとV3を共演させてみたくて、そのうち投稿します。

第12話【終わらせるための戦い】

それから数日、信司達はアミーゴに馴染み、信司と漣土曜日と日曜日の休日は手伝いをしていた。

その間、未確認対策班は神崎史郎の足取りと親しかった友人がいな
いか探していた。

「やっぱり変わった研究をしていたのですから知り合いが少ないのも無理はないと思うのですが？」

だが親しかった友人どころか知り合いも数えるほどしかおらずほとんど神崎史郎の行方も知らずましてや何を研究していたのかも知らなかった。

北条は嫌味を言うように言っていた、誰も反論できず頭を悩ましていた。

「真友、他にいないのか？神崎史郎の研究を知る親しかった人物は？」

「今考えていますから」

一条に言われ思い出そうと頭を抱えていると。

「あ！いました！一人だけ神崎先輩の研究を知ってそうな方が！」
「誰だそいつは！？」

滝がいち早く声を上げると真友は。

「ダブルライダーの特徴を受け継いだ三番目の方です」

A — — — — —
— 第12話 —
— 【終わらせるための —
— 戦い】 —
— — — — —
A — — — — —

「星輝ちゃん！ちょっと俺出掛けてくるから！」
「お気を付けて」

喫茶店アミーゴでは星一はアンノウンを感知し店から出ると伝え飛び出していった、今日は着いてくる気はないらしい。

「ねー、なんで星一よく店からいなくなるの？」

まだ雷夢には教えてなかったらしい、星一や咲夜、優太や隼人が仮面ライダーという事を。

まあアミーゴに住むものと言うこともあり星輝と闇夜は雷夢に四人が仮面ライダーだと教えた、驚くと思っていたのだが。

「僕のママとパパも仮面ライダーだよ？」

その発言に衝撃が走った、互いに正体隠していたのとまさか仮面ライダーがやってきてそれに拾われていた雷夢が。

「それ、本当ですか？」
「うん、本当」

雷夢は嘘がヘタ、それを知る二人は本当だと確信し今いる美穂に聞こうと店内に出る。

「すみません美穂、少しお時間いいですか？」

「え？別にいいわよ」

やはりつられたのか、メイド服を着ていた美穂は休憩室の中に入り
四人も仮面ライダーだと話すのだった。

その頃、信司と漣は取材の途中だった、珍しく特ダネが入っていた
のだ、内容は怪奇メダル怪人、人を襲う、という内容だった。

「最近変わった事件多くなってるな……………」

信司は取材した内容を書き込んだメモを読んでいた。

「そうだな、グロンギ怪人も復活しアンノウンも動いているからな」

最近事件を起こす怪人達の事を話しながら二人は次の目的地へ到着
しようとしていたが銃声が鳴り響き互いの顔を見合わせ頷き合うと
その元と思われる方へ走りだした。

その先ではパトカーがバリケードを作り警官隊が銃でアントロード
の大軍を攻撃していた、相手が大軍のためG3-Xに出動を要請し
侵攻を食い止めていた。

「漣、ありやヤバいぜ」

「だな……………」

辺りを見渡し鏡がないか探していた、すると銀のバイクと白バイが
アントロードの大軍を跳ね飛ばしていく。

「皆さん逃げてください！」

白バイはガードチェイサーに乗ったG3-Xだが装着者は違っていた、正義はGトレーラーに戻るのに時間が掛かりそうな時は鈴木が装着し戦うのだ。

警官隊に退避するように促すG3-X（鈴木）、銀のバイクからや
はり。

「星一！？」

星一が降りて腰にはオルタリングが。

「変身！」

走りだし両側のスイッチを同時に押すとアギト・グランドフォーム
に変身した。

「アイツも、仮面ライダーだったとは……………」

二人はアギトとG3-X（鈴木）を見て。

「漣、行くぜ」

「ああ、お前の言う通り人を助けるためならライダーを助けてもいい」

鏡がある場所を見付け前に立ちデッキを構えた。

「鈴木さん！俺が半分引き付けますからもう半分は！」

「わかりました！」

鈴木は戦場に装着者として出るのはまだ慣れていない、だが星一と
いう戦場に慣れた経験者が引っ張り指示し上手く戦わせていた。

【津上くんの指示はもつともだわ、GX-05で一掃するのよ】
「了解！」

ガードチェイサーの後部に取り付けたGX-05を持ちパスワードを入力しガトリングに変形させる。

「行きます！」

GX-05の引き金を引きアントロードを次々と撃ち抜いていく。
一方アギトはアントロードに囲まれ後ろから羽交い締めになれていたがストームフォームにチェンジしオルタリングからストームハルバードが飛び出し羽交い締めになっているアントロードにエルボーし離れさせそれを持ち振り回し自分だけの空間を作る。

「ハアアアアアア……………！」

振り回していると突風が吹き、アントロードを次々と嵐のような突風が吹き飛ばし爆発し倒していく。

「しまった……………！」

だが倒し損ねたアントロードはGX-X（鈴木）の元へ、だがそこに。

「んしゃっ！」

「ハッ！」

ドラグセイバーという剣を持った龍騎と巨大な黒い槍ウイングランサーを持ったナイトが現れ倒し損ねたアントロードを斬っていく。

「あなた達は……」

「通りすがりのジャーナリストだぜ」

「信司！」

声を聞いて初めて二人が信司と漣だと認識。

「倒し損ねた奴等は俺達任せろ」

「お願いします！」

ストームハルバードを仕舞いグランドフォームに戻ると今度はフレームフォームとなりフレームセイバーを握る。

「ハッ！」

アギトは走りだしアントロード達はそれに着いていき一列となっていく。

フレームセイバーのクロスホーンが開くと後ろに振り向き刃を横にし走りだしアントロードを次々と連続で斬っていく。

「ハアアアアアーツ、ハアツ！！！！！」

最後の一体を一閃するとアントロードは次々と爆発していく。

「GXランチャー、発射！」

最後にG3-X（鈴木）がGXランチャーを発射し残ったアントロードを全滅させた。

「助かりました、ありがとうございます」

G3-Xは仮面を取り素顔を露にすると三人も変身を解いた。

「二人共……………」

「わーい！今仕事だから後でな！」

信司と漣は次の現場へ向かった。

「ジャーナリストって忙しいなあ〜」

その頃、警視庁の科学警察研究所、訳して科警研に真友達は訪れていた。

「榎田さんこんばんは」

そこにメガネを掛け白衣を着た女性が出迎えた。

「一条くん、真友ちゃん久しぶり〜」

彼女の名前は榎田^{えのきだ}ひかり、科警研の責任者の一人であり四年前のグ

ロングの事件で警察や優太をバックアップした一人でもある。

「主任達ちよ〜ど警視總監の所に行っちゃってるから〜コーヒー飲んで待ってて」

榎田は科警研で使われている休憩室に招き入れコーヒーを用意する。

「まさか科警研のあのお二人がデストロンと戦った伝説のライダーだったとは」

北条は驚きを隠せなかった、科警研の最高責任者は様々な成果を上げているのを知っていたがかつて悪の組織デストロンを壊滅したものは知らなかったからだ。

「まさかあの二人がここまで上り詰めてるとは……………一人は警視總監、長くFBIにいる俺より出世してやがるよ」

滝はぼやいていた、長く警察関連の仕事に就いているのに出世できなくて、だが口で言っているだけでさほど気にしていない。

「来たわよ、風見さん、結城さん、こちらです」

そこに入ってきたのは二人の男だった、一人の名前は風見志郎^{かざみ しろう}、もう一人は結城丈二^{ゆづき じゅんじ}、科警研の最高責任者の二人でありもう一つの姿がある。

「お久しぶりです滝さん」

「ああ、久しぶりだな」

二人は滝とも面識があった。

「すみません、突然お邪魔してしまい」

「別に構わないさ」

結城が答え本題に。

「風見さん、神崎史郎先輩とは親しかったですよね？」

「まあな、ミラーワールドの研究を何回か聞いた事があった、そのミラーモンスターと契約して力を最大限に発揮する仮面ライダーも」

今までより有力な情報が得られそうで北条も真剣に聞いていた。

「そこまで調べがついてるなら大学の研究室には行ったのか……」

「はい、神崎先輩は今どこにいるかわかりますか？」

神崎本人を見付けミラーワールドを閉ざす事が一番の近道だと思い率直に聞くが。

「奴はもうこの世界にはいないだろう」

思いもよらない言葉だが納得もできた、タイムベントを使い過ぎ神崎自身も次元に飛ばされたのだらうと。

「だが奴は最後にライダーになるためのデッキを残した、四人の若者に渡して」

「城戸信司さんと秋山漣さん、霧山美穂さんに北岡周一さんですね？」

風見は頷き話を続けた。

「そうだ、俺も四人はどこにいるか分からない、だが会えば力にな
つてくれるはずだ」

「そうですか………ありがとうございました」

話はここで終わり北条は別行動に。

「滝さん、一文字先輩戻っているんですね？」

「ああ、よろしくぐらい伝えておいてやるからお前達も本郷警視総
監によく伝えておいてくれ」

「わかりました」

隼人とも知り合いで互いの知り合いによろしくと伝えると約束を交
わしそれぞれの職場に。

「アミーゴに行くか」

「そうですね」

真友達はアミーゴに行く事にし車に乗り走りだした。

「まさか仮面ライダーがこんな近くいたなんてな」

「俺もまさか雇ったのが仮面ライダーだったなんてすごい偶然」
「まさかここに集まっていたなんて」

その夜、真友達も招きアミーゴは閉まっており互いが仮面ライダーだと教え合っていた。

「まさか伝説のカメラマンがダブルライダーの片割れだったとは……驚きました」

「俺もこんな所で同じ道に進んだ後輩に会えるなんて思わなかったぜ」

少し複雑な気持ちだったが隼人はニツと笑いながら漣と話していた。

「信司達はやっぱり願い事があったから仮面ライダーに？」

龍騎ライダーズの事は真友が説明してくれていたためなぜ生まれたか知っていたが聞かずにはいられなかった。

「俺は……意識不明の恋人を助けたかった」

「小川恵理さんですね」

神崎の研究に携わっていた一人の生徒であるが原因不明の事故でなおも意識不明で関東医大病院で入院していた。

「ああ、歴史が変わってもミラーワールドの研究はそのまま残り恵理は俺の契約モンスター、ダークウイングに襲われた記憶はそのままだった」

ダークウイングというコウモリのミラーモンスターが原因だが更なる追撃を避けるため漣はダークウイングと契約しナイトとして戦っ

ている。

「私はお姉ちゃんを蘇らせたかったけど歴史が変わったから死ななかつた事になつたけど……………」

「恵理と同じく意識不明で入院しているんだ」

美穂の姉、霧山美優も神崎の研究に携わっていた、ダークウイングの襲撃でタイムベントを使う前は死亡したがこの時間軸では意識不明に同じく関東医大に。

「信司は？」

「俺は……………戦いを止めるため、人を守るためだけに戦つてたけどそれが自分の願いつて気付いたんだ」

信司はタイムベントを使う前の時間軸ではライダーバトルを止めるため、人を襲うミラーモンスターだけを倒していた、それはライダーバトルがなくなった今の時間軸でもそうだった、なぜ三人は変わる前の記憶を覚えているのかはデッキを手にしたからである。

「なんで神崎つて人はママ達選んだのかな？」

まだ何も知らない雷夢達の疑問ももつともだ、信司ならともかく漣と美穂は。

「私達は信司に会つて変わったからかな？一番近くにいて影響受けちゃつたのよこのバカの」

「まっただな」

「バカはないだろバカは」

全員信司はバカだと納得していた、見た目や雰囲気からしてバカっ

ぽかったから。

「だけど俺はお前を唯一の友だと思っている、いや、相棒か」

「そうだな、俺が記事でお前が写真だからな」

二人を見て隼人は自分の相棒を思い出していた。

（俺が力であいつは技、コイツらも一緒か）

少し笑みを浮かべていた、同じような役割だなと。

「私も信司と会えて良かった、このままじゃずっと詐欺師のままだったし」

警察組は驚いた、逮捕するべきものが近くにいたことに、だがもう判決は着いていたらしい、白で、もう一人のライダー、ゾルダとなる北岡が弁護士のためなんとか無罪になったらしい。

「北岡……あ、思い出しました、確か死刑判決が出そうな相手を白にするスーパー弁護士」

警察内部でも知られた名前で無罪判決されよく思わない刑事達も多いが。

「まあだけどギブアンドテイクなんだよね、すごい多額なお金依頼で巻き取って知らない人の治療費に当てる、助ける代わりに病人も助けるみたいな、それでお姉ちゃんの入院費払ってくれるし」

「僕も会った事ある、助手の五郎ちゃんの料理美味しいんだよね」

根っからの悪人ではない、その事がわかると見方も少数だが変わる、

ほとんどは綺麗事で片付けるが。

「どんなに汚い世界でも綺麗事が現実になったら素晴らしいもんね」
優太はその考えに共感できていた、金を巻き取るのはあれだが病人を助けるのはいいことだと。

「そうだな……世の中理不尽な事が多いからな」
「最近新聞を真剣に読むと思ったたらそんな事考えられるようになっていたなんて」

「お前はいちいちうるさいな、別にいいだろ？」

途中二人はまたまた軽く喧嘩になり掛けたが。

「二人共々喧嘩はダメだよ」

そこで雷夢が止めに入り止まる。

「ホントに姉妹みたいよね」
「そうですね」

星一と咲夜はそう話した、だが二人が失った記憶はそれに関係しているものがあつた、優太と真友の関係のように……………

そして次の日だった、アントロードがまたもや再び大軍で現れたと警視庁に通報が入りGトレイラーは出動、G3-Xは正義、今回はG3を装着して鈴木もまた前線に出る事となった。

「アンノウンですか？」

喫茶店アミーゴにいた星一もアンノウンの気配を察し店を咲夜に任せて出ようとしたら。

「俺達も行くぜ」

「ああ」

信司と漣、そして優太も現場に向かう事に。

「お気を付けて」

「うん、じゃあ行ってくるね」

星一は星輝の頭を撫でてから店の外に出ていき四人はそれぞれのバイクに乗り走りだした。

「星輝を拾ってくれた人、カッコいいね」

「あなたを娘にしてくれた信司もカッコいいですよ」

互いに拾ってくれたものがカッコいいと誉め合っていた。

「優太もカッコいいだろ……………」

闇夜は少し恥ずかしげに呟き咲夜と美穂はその三人を微笑みながら見ていた。

「アンノウンがこんなに………！」

先に到着したG3-X達、現場には大量のアントロードが、中にはフォルミカ・エクエスも数体見え隠れしていた。

「鈴木さん、バックアップをお願いします」

「わかりました」

G3はGM-01を持ち銃口をアントロード達に向け引き金を引いていき弾丸を放っていく、G3-Xは腕に装着する超高周波振動ソード、GS-03デストロイヤーを装着、ブレードが展開すると走りだし敵をばっさばっさと斬っていく。

「グギヤアッ!？」

左手にはGM-01を持っており至近距離で放ちアントロードを一

体倒す。

「数が多いです!」

G3はGM-01に銃口が大きくなり破壊力がある砲弾を放てるG
G-02サラマンダーを連結させアントロードを倒していく。

「やってますね」

そこに星一達が到着、信司達の腰には即ちVバツクルが巻かれていた。

『変身!』、そう叫び四人同時に変身すると走りだす。

「んしゃっ!」

龍騎は決め台詞を放つと同時にアントロードを殴っていく。

ナイトはナイトバイザーというフェンシングの刃のような剣を抜き斬っていく。

「超変身!」

クウガはすぐさまタイタンフォームとなりトライアクセラーを抜き
タイタンソードに変化させ敵を斬る。

「ハ、オリヤアアアッ!!--!!」

斬られた敵は次々と封印のマークが現れ頭に輪が現れ爆発していく。

「ハッ!」

アギト・グランドフォームは素手でアントロードの大軍の中を掻い潜りその中でフレイムフォームとなり回転斬りを繰り返して一閃。

「多いな……………よし」

龍騎は左腕のドラグバイザーという龍の頭を模した道具にデッキからカードを抜き装填すると【STRIKE VENT】と響き右腕に龍の頭を模した武器ドラグクローが装着され。

「ハアアアアア……………ハアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

その口から炎が放たれドラグクローファイヤーを炸裂、アントロードの軍団を燃やしていきG3-XのGX-05と共に数を減らしていく。

【FINAL VENT】、次はナイトがナイトバイザーにカードを装填、グリップの飾りがコウモリの形を模しており装填する前は羽根を広げたような形がすると閉じたような形となる。

ミラーワールドからコウモリ型のモンスター、ダークウイングが飛来しナイトの背中と合体、飛び立つと足にウイングランサーを取り付けるようにアントロードに向かって突貫するとダークウイングはマントとなりナイトを被いドリルのように高速回転して放つ必殺技、飛翔斬を炸裂し一列に貫いていった。

「信司！」

クウガ、アギト、龍騎の順に並ぶとクウガとアギトは基本形態に戻る。

「ライダーキックでトドメだ！」

「一緒に戦いましょう！」

ドラグバイザーにファイナルベントのカードを装填するとミラーワールドから赤い龍型のモンスター、ドラグレッダーが出てきて龍騎の回りを舞う。

アギトの足下に紋章が現れそれを両足は吸収していきクウガの右足に封印のエネルギーが貯まっていく。

龍騎はジャンプ、体を捻るように回転するとドラグレッダーも舞い飛び蹴りの体勢になりドラグレッダーは炎を放ち勢いを付け放つドラゴンライダーキックを炸裂した。

続いてマイティキック、ライダーキックが炸裂し残っていたアント
ロードは全滅したのだった。

「どうかしたの氷川くん、鈴木くん」

中には滝達が加わる前のメンバーしかおらず二人は思った事をぶつけようとしていた。

「小沢さん、アンノウンの動きと数は以前より更に激しく、増えています、更にはグロンギ、ミラーモンスター、ドーパントと怪人の種類も増えています」

今回の大量に現れたアントロードに不安を覚え前線に出ている自分達の考えをぶつけたのだ。

「なのでもっと武装を強化しないといけないと思うんです、G3-Xよりももっと強力な……………」

小沢はその話について「そうね」と目を逸らしながら言うしかなかった、まるでもうその武装はできているのかのように、それから小沢以外は帰宅しGトレーラーに残る小沢はモニターを見ていた、それにはG3-Xに似たライダーシステムの設計図が写っていたが角は二本に別れ右肩には『G4』と書かれていた。

「これを世に出すわけにはいかないのよ……………これに代わる安全なシステムを……………まずはアクセルドライバーとバーストドライバーの開発を進めない」と

図面の下にはこう書かれていた、『PROJECT G4』と。

— — —
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第12話【終わらせるための戦い】（後書き）

まさかの最後にG4の匂いがプンプンするものに、PROJECT
G4やります。

次回予告

鴻上

「ハッピーバースデー……！！！！！！！！」

ゆい

「ここでテント張って野宿するのちょっと控えて………」

映司

「はい」

ウヴァ

「お前達の欲望、解放しろ」

映司

「仮面ライダーは助け合いでしょ！変身！」

A

一回

—

— 第13話 —

— 「メダルと欲望と

— 仮面ライダーオーズ」 —

— 俺が変身する！ —

A — — —

第13話「メダルと欲望と仮面ライダーオーズ」(前書き)

今回はオーズ!

第13話【メダルと欲望と仮面ライダーオーズ】

ここは鴻上ファウンデーションという会社の会長室、その中で一人の男が歌いながらスポンジケーキにクリームを塗っていた。そして塗り終わると真ん中にチョコレートでOの文字を三つ並べて描くと「ハッピーバースデー!!」と叫び綺麗に箱に入れラッピングするのだった。

A

— 第13話 —
— 【メダルと欲望と —
— 仮面ライダーオーズ】 —

—

A —

喫茶店アミーゴから近い石ノ森公園、そこに一つのテントが張っていた。

「こらこら、こんなところでテント張っちゃダメだよ」

そのテントは映司とアंकが張った物であり石ノ森公園の近くを通り過ぎようとしていた交通安全課の小早川ゆいの注意を受けていた。

「ごめんなさい」

「フン」

アंकはそっぽ向いて機嫌が悪い雰囲気を出していた。

「アंक、お前も謝れ」

「……………」ごめんなさいい」

反省の色は見えなかったがとりあえずこれで済ませ注意だけで済み

ゆいは帰った。

映司はまた警察の厄介になるわけにはいかなかったためテントを片付け始める。

「次の寝床探さないとな……………」

テントを片付けている映司を余所にアंकはベンチに座っていた。

「少しは手伝えよ」

「やなこった」

その光景を……………

「変な奴等がいるな」

闇夜がそれを見ていたのだった。

「あら闇夜」

「なんだアイリか」

アミーゴに寄ろうとしていた下校中のアイリと鉢合わせる。

「なんだとは何ですか?」

「まあいいではないか、今日も来るのか?」

「当然ですわ」

二人は歩き出す、道路ではミニパトと交通違反犯した乗用車とカーチェイスを繰り広げていたが気にするほどではなかった。

「闇夜はなんであそこに?」

「少しお使いをな、まったく、我は王なのに」

「小さくて可愛い王様ですわね」

「う、うるさい！」

よくアイリに手玉に取られるがさほど嫌ってはおらず、むしろ懐いているのだ。

「そういう所が可愛いのですわ」

「うゝ」

顔を真っ赤にしてそそくさとアミーゴの店内に入り休憩室に一直線、後からアイリが入り中には星一、咲夜、優太、バイトの宇佐見蓮子^{つまみれんこ}とマエリベリー・ハーン、皆からはメリーと呼ばれてる大学生で優太の同級生であつた女性達が店員として働いており、

カウンター席には滝と隼人、何かとにらめっこしている星輝が座つていていつものメンバーが居た、

美穂はアミーゴばかり世話になっている訳にはいかないと前科が有っても職に就ける仕事を探しているためここにはいない。

「アイリちゃんいらつしゃい、紅茶でいいよね？」

「はい」

元気よく返し椅子に座ると紅茶を出されゆつくりと飲む。

話のネタはないかと思ひそれで先ほど石ノ森公園で見たやり取りを話していた、先の映司達を見ていたのは闇夜だけではなかったのだ。

「へえ、旅人っぽいね」

自分も旅人のためそう察していたがまさか自分の知り合いとは思つても見ないだろう。

「優太も旅人だからね、よ！2000の技を持つ男！」

「誉めても何も出ないぞ蓮子」

アイリは星輝が見ている物に気付いた、それは帳簿だった、小学生が売り上げ等の帳簿を確認しているのかと思いきや。

「違いますよ、覚えているんです、帳簿の付け方を」

テレビのニュースでよくやる帳簿の偽造等の特集するコーナーを見てそれで興味が湧き図書館でそれに関する本を借りてそれとアミーゴの帳簿を見合せ付け方を覚えているのだ。

「興味を持ったなら調べないと気が済まないですよ」

「それはいい事ですわ、うちの妹達にその爪のあかを飲ませたいですわ」

「だけどホント小学生が簿記に興味を……」

滝は見てもさっぱりと表情だけで語り。

「本郷なら見れば解るだろうな」

「当たり前だろ、IQ600の天才で今じゃ警視庁の警視総監なんだから」

本郷猛、警視庁の警視総監であるがかつてショッカー、ゲルショッカーを全滅させたダブルライダーの片割れ、仮面ライダー1号なのだ。

「津上、コーヒーもう一杯」

「分かりました」

休憩室から気持ちを落ち着かせた闇夜が出てきてジュースを頼むとアイリはそろそろバイトがあると立つ。

「もう行くのか？」と闇夜は淋しそうだったとか、挨拶し会計はバイト代から出してもらう事になっているため店から出た。

「やはり淋しいんですか？」

「うるさいなあ、我をそんなにからかって楽しいか！」

また喧嘩になるが、何か発言してるのは闇夜で星輝は無視しているが。

「そついや雷夢見ないな」

「雷夢ちゃんなら出掛けてますよ」

その頃、先ほど道路でミニパトとカーチェイスしていた交通違反の乗用車の運転手は銀行から現金を盗みだし気付かれずに逃げていたのだがそうとは知らないゆいのミニパトが追い掛けていたのだが振り切られてしまい今もお窃盗犯は逃げていた。

「まったくなんだよあのミニパトの婦警、目がこええーよ！」

涙目になっており車を郊外の雑木林に停めて休んでいた、トランクに詰めた札束や宝石を見てニヤついており数えていると背後に気配を感じて振り向く。

「うわああああっ!!!!!!!!!!」

クワガタのような頭となっている緑の虫のような怪人がそこに立っていたのだ。

「お前の欲望、解放しろ」

怪人は銀色のメダルを投げると窃盗犯の額にコインの挿入口が現れその中に挿入されると体が何枚もの銀色のメダルが出現し離れるとミイラのような怪人、白ヤミーとなり、窃盗犯は恐れをなしてトランクを捨てて逃げていった。

白ヤミーはそのトランクの中身の札束や宝石を食い尽くしていくと街へ向かってゆっくりと歩きだす。

「クズヤミーも作っておくか」

怪人はメダルを何枚か出しそれを割って白ヤミーに似た怪人クズヤミーを生み出し白ヤミーを追い掛けていくように街へ向かった。

白ヤミーは海鳴市の銀行を襲撃し現金やら宝石を食べ尽くしていく。

「うわああああっ！！！！ 化け物おおおっ！！！！！！！！」

職員は混乱していたが警報装置を押したため警官隊が到着するがそれは一般の警官隊で未確認対策班の警官隊じゃなかった。

「未確認？ こりゃ対策班の管轄だろ！」

だが見過ごすわけにはいかないため拳銃で発砲するが対怪人用ではないため効果はなく白ヤミーは銀行の中の金品を食べ尽くし体が変化、カマキリみたいな人型ではなく獣型の怪人、オトシブミヤミーに変化してしまう。

「変わった！？」

パトカーをその巨大な足で踏み潰していき警官隊は退避を始めた。オトシブミヤミーは次の銀行を襲うため建物の屋上に上りそこから巨大な足を伸ばして素早く移動を始める。

「た、大変だあゝ！」

その事件現場を雷夢が見ており急いで買ってもらった携帯でアミーゴに連絡を取った。

「え？ 怪物！？ わかった、すぐに行くよ」

星一は受話器を置き怪物が出たと伝えるとテレビでオトシブミヤミ
ーが映っておりその巨大さを見る。

「デカいな……………総力戦だな」

隼人がそう言うとき星一、優太、咲夜は頷き。

「蓮子、メリー、ここ任せるよ」

「わかった！」

「気を付けてね」

優太はサムズアップすると店内から出てトライチェイサーにトライ
アクセラーを差し込む。

「星輝ちゃん、闇夜ちゃん、蓮子ちゃん達と上手くやってて

「はい、わかりました」

「ああ」

星一と咲夜、滝と隼人も出て星一のバイクに咲夜が乗り全員走りだ
した。

「映司、ヤミーだ」

「ホントか！？」

石ノ森公園でテントを片付けていたアंकはなぜかヤミーの気配を
感じそれを伝えると映司は近くに置いてあった黒い自動販売機にヤ

ミーを作った銀のメダル、セルメダルを入れボタンを押すとバイク、ライドベンダーに変形するとそれに乗りアクセルを回して走りだすとアंकも置いてあったライドベンダーに乗り映司の後を追う。

「こつちだよ！」

星一達は現場に到着、雷夢が指を差した方向にはオトシブミヤミーが銀行の金品を貪り尽くしていた。

「アレか……………」

オトシブミヤミーはまた一回り巨大化しこのままでは海鳴市中の銀行の金品が貪り尽くしてしまうかもしれない！

それを食い止めるべく仮面ライダー達はもう一つの姿に変身をする。

「行くぞ！ トオウ！」

先に2号が動き出しジャンプしライダーパンチを炸裂しオトシブミヤミーの頭部を攻撃するとセルメダルが散らばる。

「メダル？」

アギト・グランドフォームはセルメダルを拾い疑問に思うが今はそれより敵である、クウガ・マイティフォームはトライチェイサーを駆りオトシブミヤミーに前輪キックを食らわせる。

「星一！」

「あ、はい！」

Gアギトとアギト・アースフォームはクロスホーンを開かずライダーキックを炸裂し攻撃していきもう一度攻撃を仕掛けようとしたがクズヤミーが現れ妨害する。

「なんだコイツら!？」

クズヤミーはオトシブミヤミーを守るように立ちはだかりライダー達を妨害する。

「ライダーチョップ！」

2号はライダーチョップでクズヤミーを一体倒すが数は減らずにいた。

「数が多い………！」

すると一台のバイクが突っ込みクズヤミーを跳ねていく。

「誰だよ、危ないぞ！」

クウガが注意を促すとそのバイクの運転手はヘルメットを取り顔を露にした。

「映司!？」

「その声……優太!？」

ライドベンダーに乗っていたのは映司で、降りると腰にベルトを着

け右側に丸いアイテムと左側に何かの収納ケースが現れる。

「まさか……………それは！」

2号は気付いた、映司が何するかを。

映司は三枚の赤のタカ、黄色のトラ、緑のバツタのコアメダルという物をバツクルの凹みに入れていき傾けると右側に掛けられたオースキャナーを持ちそれをスライドさせ読み込ませる。

「変身！」

【タカ！　トラ！　バツタ！　タツトツバツ！　タトバ・タツトツバ！】と歌みたいな音声が流れ映司は姿を変えた、頭は目は緑でタカみたいな頭の形で赤く腕は黄色いラインが流れトラのような爪が付いており足には緑のラインが流れ胸に上からタカ、トラ、バツタの絵が描かれたオーラングルサークルが付いた仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身した。

「映司が仮面ライダー……………」

クウガは普通の反応見せるが。

「今の歌？」

「あなたはそこなのね」

Gアギトは歌に反応していた。

「オーズ、仮面ライダーオーズ！」

大剣メダジャリバーを持ちオトシブミヤミーに向かって走りだす。

「確かアイツは……………光太郎から報告があつた、南米で見たつて仮面ライダー……………」

「光太郎さんが!?」

光太郎、みなみこうたろう南光太郎、仮面ライダーの一人仮面ライダーBLACK RXで悪の秘密結社ゴルゴム、クライシス帝国と戦い抜いた男である。

「セイヤーツ!」

襲い掛かるクズヤミーを一閃していき次々と元の半分に割れたセルメダルに戻していく。

「ハアアアアアツ!!!!!!!!!!」

メダジャリバーを振り回してから振り上げ叩き付けるように斬り剣は地面を抉る。

オトシブミヤミーは自ら相手をしようと向かってくるとメダジャリバーに三枚セルメダルを挿入しオースキャナーでスキャニングすると【トリプル! スキャニングチャージ!】と流れ居合いの構えを取る。

「ハアアアアア……………セイヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

メダジャリバーを振り上げ衝撃波が放たれオトシブミヤミーを一閃するが回りの建物も切り裂いてしまった、だが一瞬ずれ落ちるが元に戻りオトシブミヤミーだけが爆発しセルメダルに戻る。

「あの怪物、メダルでできてたんだ」

すると赤い右腕がやってきて驚いている変身を解いた星一達を余所にセルメダルを吸収していく。

「大量大量」

そうこれこそがアंकの本体なのだがあの体は一体……………

— — — A
T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
—
A — —

第13話「メダルと欲望と仮面ライダーオーズ」（後書き）

グリードが復活したのは南米にある遺跡という事に。

次回予告

映司

「アイツの体……弟のなんだ」

アंक

「アイス食わせろ」

雷夢

「いーやーだー！」

信司

「狭間映司か……………」

映司

「手が届くのに伸ばさなかったら一生後悔する、だから手を伸ばすんだ」

【ラタツラタツッ！ ラトラータッ！】

A

一回

— 第 14 話

—【兄弟とアンクと灼熱】

【コンボ】

俺が変身する！

A

第14話【兄弟とアंकと灼熱コンボ】（前書き）

ラトラーターの挿入歌を推奨したいと思います、後本編のサブタイの表示が変わりこるからオーズの使えるメダルは………になります。ちゃんとラトラーター聞きながら書きました。

第14話【兄弟とアंकと灼熱コンボ】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

カマキリ×1

チーター×1

「まさかもうオーズとアंकがこっちに来ていたなんてね」

ある廃工場の中、窃盗犯にセルメダルを入れヤミーを生み出した虫の怪人のウヴァと最初に喋った猫科の頭がライオンみたいな怪人のカザリと頭が鯨みたいな水棲怪人のメズールとサイみたいな頭部に象みたいな鼻が付いた重量系の怪人ガメルがいた。

この四体はグリードと呼ばれる幹部クラスの怪人でそれぞれ違った種類のヤミーを生み出す。

「次はどうする？」

メズールは艶やかな声を上げながら問うと「僕が行く」と力ザリが名乗りを上げた。

「僕自身今のオーズの実力とこの時代にいる仮面ライダーって戦士達の実力確かめなくなっちゃった」

「一人じゃ危険じゃないかしら？」

「そうだね、ウヴァ、君も協力してくれないか？ 二回もヤミーを生み出して二体ともオーズに倒された君の感想を聞きたいからね」

嫌味だと分かる言い文を聞きウヴァもそれほどバカではないため快くないが仕方ないと思いオーズを倒すため協力する事に決めて二人は行動に出た、ヤミーをより強力にする欲望を持つ人間に怪物を生み出させるために。

第14話

【兄弟とアंकと灼熱コンボ】

喫茶店アミーゴでは映司と腕だけではない体もあるアंकを招き入れなせオーズになったのか、あのヤミーという怪物はなんなのかを聞いていた。

「俺がオーズに初めて変身したのは今から三週間前、俺は南米の航空にいたんだ」

ここからは映司の回想、今から三週間前、南米の空港に映司は降りターミナルを出ようとしたら前に映司に似た青年が立つ。

「映也……………」

狭間映也^{はざま えいや}、映司の弟であり今は高校生なのだがこの場にいたのは。

「兄さん、帰るつもりなの？」

「……………ない」

「どうしてさ！」

映也は映司に詰め寄り問い質す。

「あの人達の所為で何人の人が犠牲になったと思ってるの？」
「それは……………」

二人の父と兄は政治家である村に滞在していた映司だけが生き残るようにその村を内争に巻き込ませ、その村を救うために映司、優太と住人は頑張ったが救えずその村で一番に仲良くなった少女は目の前におり手を伸ばしたが届かず爆炎に呑み込まれ跡形もなく吹き飛んでしまいそれは父親と兄の政治の道具として美化されて使われしまった。

「俺はあそこには戻らない、だからお前も父さんと兄さんを許せないから狭間の性を使っているんだろ？ 母さんの」

狭間の性は父親ではなく母親の性なのだ、これは父親と兄への反発から来ており名字を母親の物へ変更したのだ。

「……………そうだよ、俺だってあの二人は許せない……………けど兄さんは逃げてるだけじゃん！」

「うるさい！ 映也……………頼むから放っておいてくれよ」

声のトーンを下げ伝えると。

「兄さん、あの時から変だよ、何か空っぽになってる、何とか……………欲が無くなった？」

「……………そうだな」

映也の言葉は本当だった、自分の欲を殺して誰かの欲のために生きていて自分の中は空っぽだった。

「もういいだろ、お前は日本に帰れよ」

「兄さんを連れて帰るまではずっと着いていく」

「あのなあ……」

怒鳴ろうと息を吸うと突然爆音が響き爆風でガラスが割れ客達はその事に混乱する。

「な、なんだ!?!」

中側から響いたものだった振り向くとそこには人型でカマキリみたいなカマキリヤミーが空港口ビーを破壊していた、破壊した跡から四体の怪人が現れた、それがウヴァとカザリ、メズールとガメルだった。

「未確認!?!」

怪人を見て叫ぶ映也、そこに赤い腕、アंकが転がるが目に入らず、アंक自身も気絶していた。

「メダルが足りないわね」

「アंकの仕業だね」

二人の近くに転がったアंकに目が入り近づく怪人達、なぜ近付くか混乱した頭では理解できず。

「邪魔だ、退け!」

ウヴァは頭から電撃を放ち。

『うわああああつ!!!!!!?!?』

その電撃で吹き飛ばされアंकも意識を取り戻し今の状況を把握した。

「映也！　しっかりしろ！　おい！　映也！」

アंकは振り向く、そこには頭から血を流して倒れた映也と軽傷で済んだ映司がいた。

「兄さん……………逃げて……………俺はもうダメだ」

「そんな事言っくなよ！　諦めるなよ！　映也！」

映也は目を瞑り意識を手放すとそこにアंकが右腕に付く。

「何してるんだよお前！」

アंकを引き離そうとするが首を掴まれ。

「俺が離れたらこの人間は死ぬぞ？」

風前の灯だった映也の命はアंकが憑依した事により長らえていたのだ。

「この人間助けたいなら俺も助ける、取引だ」

映司は弟の命には代えられないと思い取引を了承するとアंकはオズドライバーを出し映司の腰に装着させる。

「まさかアंक……………！」

「止めさせなきゃ！」

グリード達は走りだし飛び掛かるがもうコアメダルは挿入されておりオースキャナーを持ち。

「うおおおおおおおつ!!!!!!!!!!」

スキャンしあの歌が響き渡ったのだった。

その後何とかグリード達を撃退しカマキリヤミーを倒した映司、そこにライドベンダーに乗った黒服の男達が現れた。

「何ですかあなた方？」

「狭間映司、そしてグリードの一人、アंक、俺達と来てもらおうか？」

今は従うしかない、アंकもなぜグリードを知っているかが気になるため着いていく事にしあるホテルで国際テレビ電話で鴻上ファウンデーション会長鴻上光生と話しグリードやコアメダル、セルメダルを研究しそのグリードが封じ込められた棺桶を輸送しようと空港に置いていたら復活してしまいあのような惨事となってしまった。グリードは欲望がもつとも渦巻く日本へ向かったと聞かされた、日本なら数多くの悪の組織が活動し残党も多数いたため欲望が尋常ではないほど渦巻いていたのだ。

映司はオーズとなった事に責任を感じグリードとヤミーを倒す、それが義務と思いアंकもメダルを集めるため映司に着いていく事にし日本へ飛んだのだった。

そして現在……

「アंकの体……弟のなんだ」

「ああ……父さんと兄さんとは余り考えが合わなくて同じ考えを持ってた映也と母さんだけでは仲良かったけど母さんは数年前事故で」

母親は亡くなっているのだと察しこれ以上は聞かない事に。

アंकが簡単にヤミーとグリードの違いに説明した棒アイスがグリードでそれに棒が無くなったのがヤミーだと、実にわかりやすかった。

「まさか我が公園で見掛けたホームレスみたいな奴がそんな物を抱えていたなんて……」

闇夜は自分の目が節穴だつと戒める。

「別にあなたの所為では……」

簿記の勉強しながら星輝は答える、話はちゃんと入っているようで帰ってきていた信司に「聖徳太子か」と言われていた。

「だけど映司のお兄ちゃんとパパ、酷いね」

雷夢はご立腹だった、先話を理解したのかそのために映司の苦勞

していると感じていた。

「もうあの二人とは縁を切ったようなもんだから」

その話が終わると星一が「ここに住む？」と聞いてきた、部屋はまだ余りがあるため空いているしもう少しバイトが欲しいというものもあり聞いてみたが映司は断ろうとしていたのだが優太と信司にも進められ。

「構いませんよ私も」

「私も大丈夫よ、賑やかなのは楽しいし」

星輝と咲夜も賛成。

「ありがとうみんな」

映司とアंकは喫茶店アミーゴで住み込みで働く事にした。

その頃、ウヴァとカザリは欲望に塗れた手頃な人間を見つけその間にセルメダルを投げ込む。

「その欲望、解放しろ」

ウヴァが目をつけた人間から白ヤミーが生まれるとカザリが目をつけた人間にセルメダルが纏われ急にその人間は自分が買い込んだコンビニ弁当を貪り始めた。

「僕のヤミーの方が早くできそうだね」
「そうだな……………」

二人は白ヤミーがどんな姿に成長するかを待つ事にし夜は更けていくのだった。

そして翌日の早朝。

「……………そうか、優太の所に住み込みで働く事にしたんだよね」

映司は目覚め起き上がると着替えて一階に降りて朝日を浴びようと庭に出るとそこには星一と星輝が菜園の手入れと野菜の収穫していた。

「二人とも朝早いね」

「映司おはよー」

「おはようございます」

映司も挨拶を返し手入れを手伝う事に。

「これ全部星一が作ったの？」

「三年前からね」

「三年前？」

星一はまだ話していなかった、自分が記憶喪失だと、それを教える
と映司は「自分より空っぽ」と呟くが。

「そうかな？　あまり実感ないなあ、俺の欲望ってなんだろう？」

星輝に問い掛けると。

「あなたの欲望はこの野菜が育つ事と居場所を守る事ですょ」

「あ、そうだった」

笑いながら返し「居場所？」と映司は疑問文で声に出した。

「俺が戦う理由、みんなの居場所を守りたいから戦う」

「居場所を……」

「それと野菜を育ててるのはこの野菜が育っている内は世の中捨て
たものじゃないじゃん」

野菜が育っていれば世の中平和、単純だが一番大切な事かもしれない。
い。

「それが俺の欲望かな？　食べてみる？」

採れたてのトマトを渡し映司は嚙り付き「美味しい」と呟いた、星
一が言うにはある人のお墨付きらしい。

「記憶はあまり気にしてないんだ」

普通なら取り戻したい、だが星一は違った。

「みんなと出会えたから、オヤっさんに滝さん、隼人さんに優太や真友ちゃん、信司と漣に美穂ちゃん、一条さんに氷川さん、小沢さんと御室さん、

雷夢ちゃんと闇夜ちゃん、そして咲夜さんと星輝ちゃんに、映司にも出会えた、だから今のままでもいいかなって」

それが今の星一の正直な思いだった、その欲望だけで十分、他はみんなにあげるという感じだった。

映司は自分の欲望残さないで他のみんなにばかり欲望を与えている、そう考えているとアंकに呼ばれ振り向く。

「ヤミーだ」

「わかった……じゃあ行ってくるな」

「行つてらっしゃい」

映司とアंकはヤミーが現れたと思われる場所へ向かう。

「あなたは行かなくていいんですか？」

「え？ 行くよ？」

「後から行つてかつこよく登場ですか」

「ん？ 取り敢えずこれの手入れ終わったらね」

二人は農作業に黙々と取り組むのだった。

「ここだな」

現場に到着するとそこには揚羽蝶に似た虫型怪人、アゲハヤミーと猫に似ているが太った猫科怪人、ネコヤミーが暴れていた。

「ウヴァとカザリのか……いや、本人達もいるみたいだな」

ウヴァとヤミーも柱の陰から出てくる。

「よくわかったね」

「今日こそお前のメダルを貰う！」

ウヴァとカザリが走りだすとオーズドライバーを腰に装着しコアメダルを三枚挿入しオーズキャナーを持ちスキャンする。

「変身！」

【タカ！　トラ！　バツタ！　タツトツバ！　タトバ！　タツトツバ！】

映司はオーズ・タトバコンボに変身しメダジャリバーを持ち構える。

「ハアアアアッ！！！！！！！！」

メダジャリバーを振るうが避けられ背後から攻撃を食らい火花を散らし前に向かって倒れるがすぐに立ち上がる。

さすがに不完全でも幹部級の怪人二体相手はキツいのだ、グリード達はコアメダルが足りていないため不完全のまま蘇っているが実力はオーズより上だった。

「くっ……………うおおおおおおおっ！！！！！！！！」

だが諦めず剣を握り大振りで攻撃していくが当たらず逆襲を受ける。

「おい映司！ 何やってんだ！」

グリードを相手にしている間ヤミー二体は破壊活動をやめない。

「アंक？ 人間と手を組むのやめて僕達の所に来た方がいいんじゃないのかな？」

カザリはアंकを自分達側に引き込もうと呼び掛けアंकは考え込むが。

「ガアッ！？」

「な、なんだ……………！？」

そこに正義が装着したG3-Xと星一が変身したSアギトが到着した。

「星……………！」

「ごめん遅くなった！」

「新しい仮面ライダー……………」

SアギトとG3-Xが戦闘に加わりオーズは力ザリ、Sアギトはウヴァ、ヤミーはG3-Xが相手をする事になり戦闘は再び開始される。

「ハ、ハッ！」

「速い！」

ストームハルバードを振るいウヴァに攻撃を仕掛ける、嵐の力を宿るストームフォームの素早さにウヴァは着いていくのにとった。

「ハアアアアッ！！！！！」

素早く斬り掛かりウヴァの右肩を霞める。

「なっ……………！」

それに動揺した瞬間ストームハルバードの刃で胸を刺されセルメダルが飛び散るとコアメダルが一枚飛び散りそれをSアギトは掴む。

「俺のメダ……………ウヴァッ！？」

刺したまま下へ振り下ろし蹴り飛ばしアंकにコアメダルを投げ渡す、それはクワガタメダルだった。

「やっぱりこっちに着いた方が特だな力ザリ！」

してやったという感じで力ザリに言つと。

「後悔するよきつと」

「どっちが」とアंकが呟くとカザリの胸に黄色い長く鋭い爪が食い込む。

「なっ……………！」

「セイヤーッ！」

「ガッ!？」

鋭い爪トラクローで引き裂くと爪の間に黄色いライオンメダルが挟まっていた。

「まさかこれほどのものとは……………」

「逃げるよ」

ウヴァとカザリは不利と判断し逃走するが深追いはせずアゲハヤミとネコヤミーを睨む。

「映司、あのネコヤミーの中には人間が入ってる、カザリのヤミーは寄生型でな、その人間を使って欲望を集める」

「どうすれば？」

「これ使え」

アंकはチーターメダルを渡す。

「ライオン、トラ、チーターを使えばコンボが使えるが……………危険だ」

「そう」

危険と言われたが気にせずその三枚のメダルを挿入していく。

アアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

X字にトラクロード切り裂くガツシュクロスでネコヤミーを倒すとセルメダルが散らばり三枚握りメダジャリバーに挿入しオースキヤナーでメダルを読み込ませ「トリプル！ スキヤニングチャージ！」と流れアゲハヤミーに向けメダジャリバーを振るいオースバツシュでアゲハヤミーを倒した。

「倒せた……………」

助けだした人間が無事だと確認すると気が抜け変身が解除され倒れ意識を手放した。

「だからあれほどコンボは使ってたのにな」

アंकは呆れていたが満足気だった、クワガタ、ライオンメダルを二つも手に入れたからだ。

（それにコイツらといえばメダル集めも）

星一達と行動した方がメリットがあると考え当分はこちら側にいようと思うのだった。

オースが使えるメダルは……………

タカ×1

ト	ラ	×	1
バ	ッ	タ	×
			1
ク	ワ	ガ	タ
×	×	×	×
			1
カ	マ	キ	リ
×	×	×	×
			1
ラ	イ	オ	ン
×	×	×	×
			1
チ	ー	タ	ー
×	×	×	×
			1

第14話【兄弟とアंकと灼熱コンボ】（後書き）

トライドベンダーはまだまだ出ません、次回もオーズ回、予告の表示も変えます、枠に入れるのが大変なんですよこれが。

ウヴァさんの悲鳴がウヴァッ！なのは仕様です（笑）

感想お待ちしております、感想制限も解除しているのでどうぞ。

次回予告

オーズ

「すばしっこい奴だな！」

真樹

「ヤミーはまだ出るでしょう」

闇夜

（優太が戦う回数が減るからな……………）

アंक

「これは儲けたな」

隼人

「やめとけ……………」

映司

「次は本当に殴りますよ？」

【ガーツタガタガタキリッバ！ ガタキリバツ！】

次回『第15話【ぶちギレと傷跡と分身コンボ】』

第15話【ぶちギレと傷跡と分身コンボ】（前書き）

傷跡の意味は後半でわかります。

第15話【ぶちギレと傷跡と分身コンボ】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

ライオン×1

チーター×1

「ハアアアアッ!!」

橋の上、そこで映司が変身した足がチーターで頭がタカ、手がカマキリのオーズ・タカキリーターと優太のクワガ・マイティフォームが水棲系怪人のサメヤミー二体と戦っていた。

映司と優太は近頃海鳴市で爆発事件が多発しておりその調査をしていた、だが爆発は炎によるものではなく水が飛び散った後が残っ

ており今いる橋の上でサメヤミーを見付け戦闘に突入していたのだ。オーズは腕のカマキリソードで攻撃しようとするがサメヤミーは地面の下を水中を泳ぐように移動しトリッキーな攻撃で翻弄していた。

「すばしっこい奴だな！」

オーズはアंकから預かっていたクワガタメダルを出しタカと入れ換えてスキャン、頭部がクワガタでオレンジの眼のガタキリーターにチェンジ、コンボは消耗が激しいためタトバコンボしか使わせてもらえないのだ。

外出の際渡されるメダルは絶対にコンボが揃わないように渡されておりアंकも考えていると実感する。

「ハアアアアッ！！！！！」

クワガタヘッドの角の間から電撃が放たれ地面の下のサメヤミーに命中し地上に飛び出す。

「今だ！」

メダルをオースキャナーでスキャンしカマキリソードにエネルギーが貯まっていきそれでサメヤミーを切り裂き倒すと後の一体はマイティキックで倒された。

「これでよし！」

二人は変身を解いてハイタッチ。

「ヤミー倒したしこれで大丈夫だろ」

これで爆発事件も収まる、すべて終わったと思ったら。

「それはどうでしょう」

後ろからメガネを掛け腕に人形を乗せた男が歩いてきた。

「誰？ まさかヤミーの親？」

「そう捉えても構いませんが先ほどのヤミーはまだ出現するでしょう」

深く問い質そうとしたが男は構わず引き返しその場から去った。

「なんだったんだあの人？」

「さあ？」

「あらら、二体やられちゃったわね」

橋の柱の上からメズールが先の戦闘を見ていた、サメヤミーはメズールが生み出したものだっただけだ。

「まあいいわ、まだあの子達は残ってるし」

余裕を持ちメズールは柱から飛び降り川の中に飛び込んだ。

第15話

【ぶちギレと傷跡と分身コンボ】

「なんだろ……………あの人」

アミーゴに戻ると優太と映司は先ほどの男について話していた。

「どんな男だったんだ？」

闇夜に聞かれて二人は考え込む。

「なんか……………世の中と拒絶しているような……………感じたよな？」

「うん、そうだね」

それを聞いてますます分からなくなってきた、ふとテレビに目をやるとニュース番組が放送されておりそのニュースの内容を見て目を見開いた。

「爆発事故だつて!？」

もう終わったと思った事故がまた多発しているという内容だった。

「メズールのヤミーか」

そこにアंकが降りてきて「どういう事だ？」と闇夜が問う。

「メズールが作るヤミーは大軍だ、てめえらが倒したサメヤミーもその内の数でまだいるだろ」

あの男が言っている事は本当だった、そう思っていると映司はいても立ってもいられなくなり立ち上がるアミーゴから出ようとする。

「映司、受け取れ」

アंकはタカ、トラ、バッタ、チーター、クワガタのメダルを渡し
タトバコンボ以外のコンボを使えないようにメダルを渡した、映司
の消耗をよくないとするアंकの考えであった。

「行つて来る!」

映司は店から出てライドベンダーに乗り走りだした。

「俺も行つて来る」

優太も出ようとしたら。

「我也去く」

闇夜は着いていく事にしトライチェイサーに乗り出発し残ったアンクはアイスを食べていた。

「……………うまつ……………」

だが気付いていなかった、アンクは闇夜に一枚メダルを盗られていたのに、それに気付いたのは10本目のアイスを食べようとし腹を下しトイレに行った時だった。

「あのクソガキいいー!」

「うるさい」

その叫びをその一言で切り捨てる星輝のだった。

「若いな」

隼人は出ていった二人を見て若かかりし頃の自分を思い出し少し複雑な気分と共に微笑んでいた、まだ戦いは続くという怒りを露にしないように。

その頃、鴻上ファウンデーションが所有する鴻上研究所では映司達に忠告した男、研究所の責任者の真樹清人^{まき きよひと}が職員の一人を監視していた。

「彼の欲望は順調に成長しているようですね」

その職員は机の上で組み立てている物、それは時限爆弾の起爆装置だった、この一連の事件はこの職員が起爆装置を使い起こしていたものでサメヤミーの親でもありその職員の部屋にはヤミーの卵がその片隅の天井で不気味に輝いていた。

【ドクター真樹！】

真樹は自分の実験室に入り鴻上とテレビ電話で通話していた。

「メダルシステムの方は順調に開発が進んでいます」

【素晴らしい！ そのメダルシステムは是非狭間映司^{はざま へいし}くんに与えてくれたまえ】

鴻上はオースにメダルやセルメダルを使用するメダルシステムを集中的に与える事を提案し真樹は納得する素振りを見せていたが内心は納得はしていないようだった。

通話が終わると真樹は再び先ほどの職員の監視、いや、観察をしに戻っていった。

「あの人を探せばヤミーの巢は見つかるかもしれない」

映司は真樹の居場所を探せばヤミーの元が見つかるかもしれないと
考え探そうと思うが手掛かりは無かった。

「手掛かりはないのか……………」

「ごめん、無い」

闇夜は軽いため息を吐いた、手掛かり無しに人を探そうとしていた
のだから。

「あ！」

映司は声を上げた、目の前にいたライドベンドーに乗った人物に目
が入ったからだ。

「後藤さん！」

それは鴻上ファウンデーションのライドベンドー隊の隊長、後藤慎
一郎いちろうだった。

「なんだ？」

素っ気なく返すと自分達が探している男の特徴を聞いて知らないか
を尋ねると。

「鴻上研究所の所長の真樹博士だな、このライドベンドーやお前の

メダジャリバーを開発したのも真樹博士だ」

腕に人形を乗せた男、その特徴ですぐに真樹だと判ったようだった。

「鴻上研究所……………」

「行くなら着いてこい、俺も行くところだ」

二人は礼を言い後藤の後を追いつけ鴻上研究所に向かうがそれをしていく者がいたの知る由もなかった。

「ここだ」

後藤は案内するだけで後は勝手にやれと研究所の中に入って行った。

「忙しい人だな後藤さん」

「そうだな」

優太と闇夜はそれぞれの感想を洩らしているとそこにライドベンダーがまた一台停まる。

「アंक！？」

アंकが追い掛けてきたのだ。

「ガキ！」

アंकの目的は闇夜のようだ、映司からは「まさかロリコン？」と疑惑を掛けられたがもちろん違う。

「コイツ、カマキリのコアを盗みやがったんだよ」
「ホント？」

闇夜の手の平にカマキリメダルが置いてありアंकはそれを取ってしまう。

「油断も隙もありやしねーな」

ご立腹だった、優太はなぜ盗みだしたか聞いてみた。

「……………映司に……………コンボ使って欲しかったから」

コンボを使えば消耗が激しい、それを知っているのになぜと思った。

「コンボ使えばどんなに強い敵でも倒せるんだろ？　なら……………消耗は激しいが戦う回数が減るではないか」

消耗が激しくても戦いが早く終わる方がいい、そう思い盗みだしたようだった。

「闇夜ちゃん、俺は大丈夫だよ、だから心配しないで」

微笑んで頭を撫でてそう言い納得させた。
だが誰も闇夜の真意を知らなかった、映司の為ではなく、優太の為だった。

（誰かが戦えば優太が戦う回数が減るからな……………）

という理由なのは誰も知らない、優太本人も、すると自転車を扱ぐ職員が現れアंकはそれがヤミーの親と察するとこの職員が爆弾魔ではないかと疑惑を掛ける。

「俺が追い掛ける！」

優太と闇夜はトライチェイサーで男を追跡を始めると更にサメヤミーが現れ映司はすぐに頭はタカ、腕はトラ、足はチーターのオーズ・タカトラーターに変身して追い掛けた。

「まだ居るみたいだな」

研究所を見るとヤミーの気配を感じていたのだが。

「この気配……………メズールとガメル……………ヤバいな」

オーズはサメヤミーを追跡していると目の前にメズールとガメルが立ちはだかる。

「グリード！」

「ご機嫌よく、オーズの坊や」

メズールは相変わらず艶やかな声を上げ話し掛ける。

「ここから先は行かせないわよ？」

「行かせない！ 行かせない！」

ガメルは突っ込んできて体当たりを食らわせようとするがオーズはチーターレグの素早さで避けるとトラクローを展開するが前からメズールの水流を浴び吹き飛ばされる。

「ぐわあっ！？」

立ち上がるとガメルに突進攻撃を受け弾き飛ばされるとアंकが戦場に入り渋々ライオンメダルを出す。

「映司！ コンボで片を付けろ！」

ライオンメダルを渡しオーズはラトラーターコンボにチェンジしライオディアスを炸裂するとメズールは熱に弱い為倒れ青いウナギメダル、ガメルも多少ダメージを受けた為灰色のサイメダルを噴出させアंकはそれを握り取る。

「これは儲けた」

アंकがニヤついた瞬間オーズは何者かの攻撃を受け吹き飛ばす。

「カザリ！」

そう、カザリが現れたのだ、突然の事で反応が追いつかず連続で攻撃を受け耐えられるダメージが越えてライオンメダルとチーターメダルを噴出してしまった。

「返してもらっよ、僕のメダル」

カザリはライオンメダルとチーターメダルを取り込み胸部に鎧が纏われる。

「残りのトラメダルも返してもらっよ」

メダルが噴出してしまい変身が解除され更にコンボで消耗した体でカザリに迫られ万事休すかと思っただった。

「オラアアアアッ！」

そこに滝が乗ったバイクが突っ込みカザリを跳ね飛ばした。

「大丈夫か狭間！」

「滝さん！」

優太から連絡を受けて救援に来たようだった。

「ライダーキック！」

そこに隼人の変身した2号がライダーキックを炸裂し一ヶ所にまとまったカザリ、メズール、ガメルを蹴り飛ばすとメズールからシャチメダルにタコメダル、カザリからチーターメダルが噴出しキャッチし映司に投げる。

「映司！」

「ありがとうございますー文字さん！」

奪ったメダルを投げ渡すとすぐにドライバーに入れて頭が青いシャチのような頭部で眼が黄色、腕がトラで足がチーターのシャチトラーターに緊急でコンボチェンジ。

「これは分が悪いわね……………」

「退散してここのヤミーは諦めよ、あの親警察に捕まっちゃったし」

その爆弾魔の職員は優太が警察に通報、未確認関連でもあるため一条と真友が対応していた。

「器物損壊の容疑で逮捕する」

「う……………連続爆破記録が……………」

リュックから起爆装置やらそれを書いたノートが出てきて完璧な証拠のためすぐに逮捕された。

「一件落着ですね」

「ありがとうございます」

拳をぶつけ合うと優太達は研究所に引き返した。

「そうね、ガメル」

「は、はい……………」

ガメルは地面に穴を空けてカザリとメズール達はそれで逃走した。

「困りますね」

そこに真樹が現れた、二人のライダーは変身を一時解く。

「あんな、あのまま爆弾魔を野放しにしていたらどうなってたか分かるだろ？」

滝は怒りを抑えつつ真樹に問うが。

「私はヤミーとグリードについて観察していたのですが……………あなた方の所為で失敗です」

映司達がやった事を非難し自分の研究のためなら犠牲は問わない考えだった。

「あなた方仮面ライダーには困ったものですよ」

冷やかだった、その態度で怒りが込み上げ映司は真樹に詰め寄る。

「何ですか？」

そして拳を挙げ殴り掛かりそうだったが。

「やめとけ……………」

後ろから隼人に腕を掴まれ「なぜ止める」と怒鳴り聞こうとしたが。

「一文字さん……………その顔……………」

隼人の顔にさつきまで無かった傷跡が浮かんでいた、これは改造手術の名残で怒りが頂点に達すると浮かんでしまう、

隼人はその異形の証を見られるのを嫌った、今なら隠すはずだがそれをしなかった、目の前にいる後輩を止めるために。

「お前がその博士を殴りたい気持ちはわかるさ、だけど今は生まれてくるヤミーを倒すのが先決じゃないか？」

その怒りとは裏腹に優しい声で話す、怒りに任せ正論を言っても反発されるだけだからと。

「……………はい」

映司は拳を下ろすと肩に手を乗せ「だが」とまだ話は続く。

「後はお前の好きなようにしろ、俺はもう止めねーから」

隼人は離れ新サイクロンに手を置き気持ちを落ち着かせていた、映司は爆弾を必要以上に気に掛けるのはやはり内争に巻き込まれた村がトラウマになっているからだ、

隼人もカメラマンの端くれ、戦場に出向いて戦争の真実をカメラで撮影してきたため映司と同じ、いやそれ以上に爆弾や戦争に関する事を憎んでいる。

「伝説のダブルライダーもやはり人の子ですから……取り敢えずさつさとヤミーを片付けてください、実験はし……」

目を瞑ってから開くと目の前に映司の拳が迫っていたがすん止めだった、腕の人形は落ちそれを見ると。

「すみません……今は話し掛けないでくれませんか？ 次は本当に殴りますよ？」

しばらく沈黙が続いた、いつも優太みたいにニコニコしている映司が怒りを露にし迫力が凄まじかったからだ、それには歴戦の勇士の滝と隼人もだがアंकも言葉を失い、真樹は慌て始め人形を拾うと研究所の中に走って逃げ込んだ。

「……………」

その後も沈黙は続くがサメヤミーが中から大軍で出てきた。

「一文字さん……滝さん……手、出さないでください、俺一人で終わらせます」

それには了承し。

「アंक、緑のメダル三枚貸して」

アंकも映司の迫力に負けクワガタ、カマキリ、バッタのメダルを渡すと三枚を挿入しスキャンする。

「変身！」

【クワガタ！ カマキリ！ バッタ！ ガーッタガタガタキリッバ

！ ガタキリバツ！

頭部はクワガタ、腕はカマキリ、足はバツタの緑のコンボ、ガタキリバコンボに変身する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

今の自分の怒りを表すかのように雄叫びを上げて走りだすと次々と分身していきサメヤミーの数を上回る。

「アレがコンボの力が……………」
「すごい数だな」

カマキリソードを構えサメヤミーを次々と斬り付けていく。

「ハアアアアアッ！！！！！！」
「デリヤアアアッ！！！！！！」

同じ声は何重にも響きサメヤミーは数を減らされていくと残り一体となりメダルをスキャン、「スキャンングチャージ！」と響きバツタレッグが変化し一斉に高くジャンプし必殺キック、ガタキリバキックを繰り出し一斉に突貫！

「ハアアアアア……………セイヤアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

沢山のオースの必殺技を受けサメヤミーは爆発、炎の中から一人に戻ったオースが現れ変身が解ける。

「俺、ちゃんと一人に……………」

倒れ掛けたが隼人が支える。

「ラトラーターだけではなくガタキリバまで……………更にはコンボを連続で使ってやがるのに肉体は耐えていやがる……………メダル集めの才能あるな」

オーズが使えるメダルは……………

タカ×1
トラ×1
バッタ×1
クワガタ×1
カマキリ×1
チーター×1
サイ×1
シャチ×1
ウナギ×1
タコ×1

第15話【ぶちギレと傷跡と分身コンボ】（後書き）

一人オールライダーキックWWW

次のコンボは何が出るかな？

次回予告

小沢

「変身者ね……………」

優太

「風見さんに結城さん！」

「本日付で未確認生命体対策班所属となりました照井竜斗です」

星輝

「だいたいの内容は理解できます」

竜斗

「貴様がWのメモリの持ち主……………」

Cアギト

「今日についてないわね……………」

「ブイスリヤアアーツ!!!!!!」

次回『第16話【加速するA / その名はアクセル】』

第16話【加速するA／その名はアクセル】（前書き）

少しタイトルにこだわり過ぎている気が……気のせいですか？
後投稿時間は午前の8時か午後の8時に絞り込まれて……因みに午後の6時も当てはまります、18時ですから。

第16話【加速するA/その名はアクセル】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

「できたわ!」

Gトレイラーの中、小沢は何かを完成させた、目の前にはバイクのハンドルを模したドライバーと持ち手がバイクのハンドルグリップ

を模した大剣が置かれていた。

「後は変身者ね……………」

Aのマークが描かれた赤いガイアメモリを出す、スイッチを押すと【ACCEL】とガイアウィスパーが鳴り響き机に置くとメモリはもう一つEと描かれた物が置いてあった。

「さて、焼き肉食べてから帰ろう」

小沢はドライバー、大剣、ガイアメモリを保管庫に入れ鍵を掛けてからGトレーラーを後にした。

第16話

【加速するA / その名はアクセル】

「また来たぜ津上」

隼人が来店してきたのだが。

「いらっしやい隼人さん、そちらの方達は？」

だが隼人だけではなく男が二人いた。

「風見さんに結城さん！」

「久しぶりだな優太、この前は真友と会ったな」

一緒に来店してきたのは隼人の後輩で1号の技と2号の力を受け継いだ仮面ライダーV3である風見志郎と仮面ライダー4号、ライダーマンである結城丈二だった。

「あなた方が！」

星一も風見や結城の事は優太や隼人、滝から聞いていたため初対面に喜んでいた、自分の先輩が自分の店に来てくれたのを。

三人はカウンター席に座るとコーヒーを用意する。

「本郷は？」

「仕事があるようなので来れませんよ」

本郷は警視總監、そんな簡単に暇が取れる訳がないためアミーゴには来れなかった、二人はちょうど暇を貰えた為隼人と共に来店してきたのだ、アミーゴを継ぎ自分達の後輩である者達を見るに。

「ふわぁ～おはよう～うございませす」

二階から着替えているが寝呆け本を持った星輝が降りてきた。

「おはようつてもう12時過ぎだよ?」

言葉通り12時過ぎておりこんにちはの時間帯だった。

「そちらの方々は?」

風見と結城と出会うのは初めてのため二人は名乗り星輝も名前を名乗る。

「風見志郎と結城丈二」……………あ、隼人が言っていた」

やはり基本呼び捨てだが気にしない先輩ライダー達。

「また本読んでいたの?」

「はい」

カウンターに置いたのは真友から借りた大学生が使うような工学系の分厚い本だった。

「読んだら止まらなくなってしまう……………ふわぁ」

大きなあくびをすると結城が話し掛けてくる。

「君、内容解るのか?」

「だいたいは理解できます、これを読むのは今回で五回目ですから」

結城は驚愕した、小学三年生の少女が大学生が使うような工学系の本の内容を理解できるとは。

結城も天才と呼ばれて一人であった、悪の組織デストロンに援助さ

れ大学に通い能力を開花していたがデストロンの本質を理解していなかったため知らず知らずの内に人々を不幸にし、部下も失い復讐に走った男でもあった。

「結城丈二、理解できない所もあるので教えて頂けないでしょうか？ 隼人からあなたは天才と聞いているので」

子供からの頼みを断るわけにはいかない、そう思い結城は快く了承し質問に答えていたりわざとそれを解りやすい問題にさて出題したりとする。

「この二人は相性いいかもな」
「そうですね」

理系な二人のやり取りを見て述べると二階から私服に着替えた咲夜が降りてきた。

「買い出し行ってくるわ」
「気を付けてくださいね」

店の備品を買いに咲夜は出掛けていき風見は何か引っ掛かる。

（彼女も確かアギトだが……………気のせいかな？ 津上に似ていた気が……………）

思い過したと考え何聞かれても何も無いと返した。

「そういえば最近変な事件起きてますよね」
「あの凍結事件だろ？ 部屋をまるごと凍らせる」

海鳴市……いや、この海鳴市がある風都府全域で奇怪な凍結事件が起きていた、部屋をまるごと凍結させ殺害するというものであり犠牲者は何人も出ていた。

「確か滝もその事件現場に行くからいないんだよな」

「そうだったんですか……となると氷川さん達も今日は来ないかな？」

警察組は来れないだろうと思いつつ午後の一時を過ごしていた。

その事件現場では滝と正義が訪れていた、凍結事件は未確認対策班の山となったのだ。

そして今日、対策班に新しく警官が配属される事になっていた。

「もう時間は過ぎてますよね？」

「ああ、時間にルーズな奴みたいだな」

合流の時間は過ぎており現場に入らず待っているとその警官ではなく。

「氷川さん、滝さんともつす」

「城戸さんに秋山さん」

代わりに取材で信司と漣がやってきた。

「お仕事ですか？」

「ああ、凍結事件を調べにな」

漣はカメラのシャッターを切り外から事件現場の住宅を撮影する。

「なんで現場入らないんですか？」

その訳を説明していると側に赤いカスタムバイクが停車しそれに乗った赤い革ジャンのライダーはヘルメットを取り降りて立ち入り禁止のテープを潜り二人に警察手帳を見せた。

「本日付で未確認生命体対策班所属となりました照井竜斗です、階級は警視です」

階級を聞き驚く、正義は自分より年下なのに階級が高く滝も若いのに地位が高いと。

「遅いぞ」

「すみませんでした、途中で少々トラブルに巻き込まれてしまったので」

深くは追及せず三人は事件現場の部屋に入る。

「氷川さんや滝さんからなら何か聞けるかな？」

「あの二人なら聞けるだろ、次の現場行くぞ」

この二人は別の凍結事件の現場へそれぞれのバイクで向かった、いい記事が書けそうと思いながら。

現場に入った三人は部屋の惨状を見ていた、部屋中凍結しており家具も何もかも。

「酷いですね……………」

正義がボソツと呟き竜斗を見ると何やら怒りと憎しみ、悔しさが露になっておりそれほど今回の事件を起こした未確認が許せないのだと想像していた。

「今回の7件目の犯行で全て同一犯と見て捜査をしているようだ」

先ほどの敬語と打って変わって竜斗はタメ口となっていた、階級はそっちが上でエリートだから仕方ないと思い流していた。

正義は氷で咲夜のアギト・コールドフォームを思い出していたが違うだろと片隅にやるがこの事によりあらぬ誤解が生まれるとは誰も思ってもみなかった。

「照井さん、やはり未確認生命体の犯行だと思いますか？」

ふと聞いてみると竜斗は目を吊り上げ睨み、胸ぐらを掴んで壁にぶつけ「俺に質問するな」と言い返しこれはイカンと思った滝は注意する、階級が上でも正義が年上、竜斗は滝に言われると反省したのか謝罪し外へ出た。

「とんだ暴れ馬かもな」

「ですね」

その後を追い掛け外に出ると携帯に着信が入り通話に出る。

「はい……………北条さん？ はい、わかりましたすぐに現場に」

北条からの通話を切ると二人にまた凍結事件が起きたと伝えその事件現場に向かう事に、数分し北条が待つ現場に、今回は室内ではな

く野外で河川敷の下での犯行みたいだった。

「部分的に凍結……前の7件とは少し違うな……」

今回ののは部分的に凍結しているだけで派手に凍っているわけではなかった、だがあり得ない場所が凍結したため北条は三人を詠んだのだ。

「今までとは違いますが何か関係があるのではないかと思ったのですが今までの7件は死亡者が出ていたが今回は出ていなかったらしい。」

「目撃者によるとアンノウンが現れたらしいです」

今回はアンノウンによる犯行と思い込み始めていたが。

「ですが何かに斬られて一瞬で凍結し死亡したようなのです」

そこで正義は察した、ここの氷は咲夜による物と、ここの凍結はさほど気にしなくてもいいと伝え現場から離れる。

「なぜここの現場は気にしなくてもいいと判断したんだ？」

答えるべきか迷った、彼女や彼等を仮面ライダーと教えていいのか。

「答える！　なぜそう判断したんだ！？」

竜斗は取り乱しまた掴み掛かるが滝に制止される。

「落ち着け照井、仮にも階級が高くて氷川はお前の先輩だぞ？」

冷静さを取り戻すと「すみませんでした」と謝る、何か焦っていると感じるが何かがわからない、何か聞こうとすれば先みたいに怒りだすかもしれないと思い打ち解ける事ができないでいた。

取り敢えず事件の被害者の関係を考えてはどうやら無差別のためゲロンギのゲゲルと判断して調査する事に一度Gトレーラーに戻る。そこで自己紹介を済ませると移動の間小沢は保管庫にしまっていたドライバーとメモリを見せた。

「これはガイアメモリ……………」

「そうよ、輸出先は判らないけど上からこれを使えるようにしてくれと資料だけ渡されて作った物よ」

ドライバーはアクセルドライバー、ガイアメモリはアクセルメモリ、大剣はエンジンブレード、ガイアメモリではなく似せて作ったエンジンメモリの説明に入る。

「これを使えば仮面ライダーアクセルに変身できるの」

「アクセル……………」

竜斗がじつとそれを見つめていると。

「変身者決まってるのよね……………」

御室が「なりたい」と言うが流され鈴木に宥められ。

「俺が……………なります」

「あなたに使いこなせるかしら？ 能力は未知数で危険な代物よ？」

「覚悟はできています、一年前の8月からずっと」

「一年前の8月」、その言葉に引っ掛かる滝はある予感が過る。

（まさかコイツ…………復讐のためにそれを手に…………）

滝は竜斗に少し注意するようにした。

すると入電が入り海鳴公園で未確認生命体が出現したと入り種族は言わなかったから為、まだ確認されていないと判断しGトレーラーは現場へ急行した。

「また怪人に……………」

咲夜は帰りの途中、アギト・コールドフォームに変身し白い毛並みを持った怪人と戦闘していた。

先もアンノウンが居り時間を止めてすぐさま倒したが今回は少し訳が違っていた。

（ドーパントみたいなよね）

その怪人はドーパントらしく人間が変身したもので簡単にはトドメ

といかないらしくコールドセイバーを持ち交戦していた。

（まったく、今日は付いてないわね……………）

今日一日の出来事に呆れつつドーパントに剣を振るうが避けられ、アギトから冷気が放出されているため半径4、5メートルぐらい地面が凍結していた。

「早く終わらせたいから我慢なさい」

鐐のクロスホーンが開きセイバースラッシュを炸裂する体勢に。ドーパントは逃げ出そうと背を向けるが気付けば目の前にアギトが来ており一閃されると氷の用意に砕け散った。

「身代わりか」

どうやら氷で作った身代わりらしく取り逃したようだった、そこに実験を兼ねてアクセルドライバーを腰に巻き思いエンジンブレード何とか持った竜斗が到着しアギトの回りを見て瞳孔が開く。

「貴様が……………」

突然呟き始めアギトは竜斗を見る。

「貴様がWのメモリの持ち主か……………」

いきなり何を言い出すかと思いきや去ろうとしたが竜斗はアクセルメモリを出し起動させ【ACCCEL】とガイアウィスパーが流れ。

「変…………身っ！」

アクセルメモリをドライバーに挿入、右グリップのパワースロット
ルを回すとまた【ACCCEL】と流れ竜斗の姿は変わる、赤い装甲
に青く輝く眼の仮面ライダー、アクセルに。

「仮面ライダー……！」

それにはさすが驚き身構えるとアクセルはエンジンブレードを構え
て襲い掛かった。

「何！？」

いきなり襲い掛かるがコールドセイバーでエンジンブレードを受け
止めると上へ上げようと力を入れる。

「何で襲うのかしら？」

「とぼけるなWのメモリの持ち主！ 貴様が一年前に凍結事件を起
こしたのは知っているんだぞ！」

身に覚えがなく更に訳が分からなく対応に困っていたが手加減した
ら負けると感じ全力を出す事に、戦うにつれアクセルは今のが初め
ての変身でこれが初戦闘だと判り一度叩きのめしてご奉仕しようと
考えた。

「あなたが何なのかは知らないわ、けど立ちはだかるなら容赦しな
いわ」

「それは俺の台詞だ！ 家族の仇！」

アクセルの「家族」という言葉を聞くと動きが止まる。

「家族……………」

薄らとしか思い出していない記憶が少しだけ蘇る、脳裏に幼い頃の自分であるう少女と姉であるう女性、弟であるう少年と砂浜で走り回るのを。

「ボケツとするなあああーっ……………!!」

隙ができてしまい体にエンジンブレードによる重い斬撃を食らい火花が散り後退るとアクセルドライバーの左グリップのマキシマムクラッチレバーを切り【MAXIMUM DRIVE】と流れると右足に炎が宿り。

「ハアアアアアアアッ……………!!」

飛び跳ね上段回し蹴りを繰り出すアクセルグランツァーを炸裂しCアギトはコールドセイバーでガードするが威力に耐え切れず蹴り飛ばされ変身が解け地面に後ろへ滑る。

「女か……………まさか貴様みたいのがWのメモリの持ち主だったとはな」

「一体何の事よ……………」

「とぼけるな！ 一年前の8月、俺の家族を殺したのを忘れたとは言わせない！」

一年前、だが咲夜にはやはり身に覚えはない、一年前だとまだ幻想郷にいた時だ、そうとも知らないアクセルはそのまま命まで奪おうとエンジンブレードを振り上げる。

「くっ……………!!」

ここまでと感じ目を瞑るがいつまで立ってもエンジンブレードを振り下ろしてこない、目を開けるとアクセルは桃色に光帯で締め上げられ身動きが取れなかった。

「なんだこれは……！」

「何とか間に合いましたか」

そこに現れたのはバリアジャケット姿の星輝、拘束魔法のルベライトを使いアクセルを拘束したのだ。

目の前から突然咲夜が居なくなった、横を向くとその咲夜を抱き抱えた赤い仮面、緑色の眼、白いマフラーに緑のスーツの仮面ライダー、風見志郎が変身した仮面ライダーV3が抱き抱えていた。

「仮面ライダーV3……！」

V3の事は歴史等で知っていた、V3は咲夜を下ろすとアクセルをその深い緑色の眼で睨む。

「なぜ邪魔をする！ そいつは俺の家族を殺した犯人なんだ！」

もし犯人だとしても命を奪うのはやり過ぎている、V3はその気持ちがよく分かって、よく判るからこそ今は気持ちを鬼にし制裁を加えるべく構えるとジャンプし。

「V3イイイ………キイイイイイイック！！！！！！！！！！」

必殺のV3キックをアクセルに食らわした、装甲が厚くかなり手加減したため外傷はないだろう、V3キックの衝撃で変身が解け竜斗

の姿に戻る。

「なぜなんだ仮面ライダーV3！　なぜ俺の家族の仇を取らせてくれないんだ！」

心の叫びをV3にぶつけた、V3は変身を解き風見の姿に戻った。

「彼女はお前の家族の仇じゃないからだ」

「なんだと……」

頭に血が上っていたため気付いていなかった、変身が解かれたのに
も関わらずガイアメモリは噴出していないのに、自分は冷気で回りを凍らせていただけで家族の仇だと思い込んでいただけだった。

「とんだ見当違いでしたね」

星輝はもはや呆れを通り越していた。

「なぜあなたが？」

「星一があなたの帰りが遅いと心配していたので私と風見で探していたらここに」

どういう系列でこの場に來たか説明を加え風見は竜斗に近寄る。

「なぜ彼女を仇だと思い込み襲い掛かったか話してくれるか？」

竜斗は朦朧としながら従いその場を後にした。

第16話【加速するA／その名はアクセル】（後書き）

誤解で襲い掛かりました、咲夜さん災難。

なんか風見さん登場させて満足している自分がいたりする（笑）

感想お待ちしております。

メダルは変わらないか映司が関わらない話では最後にメダルは表示無しで。

次回予告

竜斗

「一年前……俺は父親と同じ警察官の道を歩んでいた」

風見

「父と母、妹か……」

「やっぱりこの世界が一番ガイアメモリが流通してるみたいだね、章太郎」

「フェイト……！？」

アクセル

「さあ……振り切るぜ！」

次回『第17話【加速するA/もう一人のライダー】』

第17話【加速するA/もう一人のライダー】（前書き）

前回の続き

第17話【加速するA / もう一人のライダー】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

第17話

【加速するA / もう一人のライダー】

前回、竜斗は氷を使うからと頭に血が上りアクセルとなり見境なく咲夜の変身するアギトに襲い掛かり倒してしまいがそこに星輝と風見が変身するV3が現れそれを食い止め頭を冷やさせる事ができ事情を聞く事に、一年前の8月に何が起きたかを……

「一年前……俺は父親のと同じ警察官の道を歩んでいた……」

Gトレーラーではなくアミーゴで過去を語る竜斗、先の戦いで居合わせた風見、咲夜、星輝以外に隼人、結城、滝、小沢、正義、星一、優太、そして籐兵衛がそこに居た。

店はCLOSEになっているため第三者が入る事はないだろう。

「だがその8月のある日、事件が起きた、俺が帰ると部屋の中は凍結していた、何もかもすべて」

語っている内に憎しみと怒り、悲しみが露になってくる。

「リビングに入ると凍り付いた父、母、そして妹がいた、父は最後にこう言ったんだ、“Wのメモリ”と、それ言った後三人は俺の前で砕け散った……その時から俺の復讐は始まったんだ、Wのメモリ、ガイアメモリへの」

一年前ではガイアメモリの事件の件数は今ほどではなかったため真剣には取り扱われなかった、竜斗はその言葉を話したが信用されず更に復讐の炎を燃え上がらせたのだ。

「父と母、妹か……」

風見は竜斗のその復讐心を一番理解していた。

「志郎」

深く考え込んでいて少し上の空だった風見に気付いて籐兵衛が話し掛ける。

「そんなんで科警研の主任が勤まるのか」

「すみませんオヤっさん」と謝ると背中をポンと叩かれ少し落ち着くためコーヒーを飲む。

（俺も昔はああたったな）

昔の事を思い出し自分にできる何かを捜査さがし始めた。

「連続凍結事件が多発していたから頭に血が上っていた……済まなかった」

先ほど思い込みで咲夜に挑んで更には必殺技を食らわしてしまった事に謝罪を入れる。

「いいわよ、別に……それに」

「まだ家族を記憶がある方がマシよ」と繋げた。

「十六夜？」

「気にしないで」と更に繋げる。

その意味を一番理解しているのはこの中ではただ一人だった。

（咲夜さん……………）

ここで咲夜が戦ったドーパントは何のメモリかだ、Wのメモリならすぐにでも探し出してやろうと飛び出しかねなかったが。

アイスエイジ
「ICE AGEよ」

それでは最初にWのスペルが当て嵌まらない、それを聞き気落ちする竜斗だが。

「見つからないという事はないさ、気落ちするな」

復讐を否定する気はなかった、かつて自分も復讐のために仮面ライダーになるうとしていたからだ。

「照井くん、アクセルドライバーとアクセルメモリはあなたに預けるわ」

小沢が唐突にその件について話し始めた。

「初めてなのにあそこまでアギトに対抗できる人材は氷川くん以外他にはいないからよ、引き続きアクセルとしてよろしくね」

「……………わかりました」

竜斗にとってWのメモリに復讐するための力が自分の元にあるのは好都合であった、いつ出くわしても戦えると。

「だけど、アイスエイジのメモリの所有者は一体……」

今はそれが問題だった、アイスエイジ・ドーパントの正体がわからないままでは事件は多発し続ける一方だ。

「十六夜さんは見なかったんですか？　メモリの所有者を」

「音が聞こえたただだから……」

正義の質問の答えは虚しく、結局は一からの捜査であったが。

「ところで星輝ちゃん」

今度は星一が星輝に話し掛けた、俺はもうお見通しだと言う感じで。

「感が鋭いですね」

竜斗以外はガイアメモリの出所と輸出先がどこから知っているため気付いた、所有者は異世界の人間だと、小沢はガイアメモリは元々異世界の物と説明した。

「確かに……これはオーバーテクノロジーですから」

納得せざる得なかった、後アクセルドライバーとエンジンブレード、エンジンメモリは送られてきた設計図を元に製作したのだ。

「結城主任、あなたですよ、この設計図を送ったのは？」

小沢は結城が自分より天才でガイアメモリさえあればそれ専用のシステムを作るかもしれないと考えたからだ。

「確かに……ドライバーとブレードは私が作ったが……アクセスルメモリは送られてきたんだ」

予想は半分的中していた、だがメモリの出所は結城にさえ判らなかった。

「話を戻します、確かに魔力は感じています、ですが」

一旦区切り回りが注目する中、小学三年生は口を開いた。

「相手も相当なやり手のため各地に魔力反応を残して攪乱しながら犯行に及んでいるのでピンポイントには判りません」

最後に「すみません」と繋げ終わらせると星一か頭を撫でてきた。

「謝らなくてもいいよ、相手が魔導師って事が判っただけで十分だから」

「……………はい」

後の捜査は正義ら未確認対策班に任せ星一ら民間人側は報告を待つ事に。

「やっぱりこの世界が一番ガイアメモリが流通しているみたいだね
章太郎」

「ああ」

いつもの石ノ森公園、そこに黒いソフト帽子を被った青年と髪の毛にクリップを挟んだ少年が後部がメタリックグリーン、前部がメタリックブラックのバイクの前で会話をしていた。

「フィリップ、当分はこの世界に留まった方がいいな」

「うん」と返す少年フィリップ。

「管理外世界に逃げ込まれるのが色々厄介なんだよな……協力者もないし、更には並行世界の地球」

「僕達の素性を明らかにしてもいいような人いないかな」

「いたら苦労しねーよ」

さすらいの私立探偵の青年、左ノ森章太郎は少し呆れながら返すと急に腹の虫が響く。

「そついや調査ばかりで昼食ってねーんだよね……」

「この公園に来る途中に喫茶店在ったからそこに行かない？」

「喫茶店か……ハードボイルドな俺にピッターだぜ」

章太郎がバイク、ハードボイルダーを押して歩き始めた。

「だけどここ、俺達の地球に似てるよな」

「そうだよ……風都の中に海鳴市があるのもね」

会話からして二人はこの世界の人間ではないようだった、目的はガ

イアメモリが関係しているが他は不明、だが今は自分達の空腹を満たすために歩いているのは確かだ。

「ここ……あれ？」

二人はその喫茶店の前に到着するがその店は閉まっていた、さつきまで開いていたはず、そう思い次の店を探そうと考え歩き出そうとしたら。

「あれ？ お客さん？」

後ろから声を掛けられ振り向くと水色の長い髪 of 八重歯が目立つ少女が立っていた。

「フェイト……！？」

「え？」

章太郎は思わずその名を口に出しその少女、雷夢は首を傾げた、「フェイト」、この名前は自分にすごく関係がある人物だからだ。

「あ、人違いみたいだ」

「お兄さん達お客さん？」

「そうだよ」とフィリップが会話に入る。

「だけど開いてないみたいなんだよね……」

雷夢は察した、CLOSEの札出したまま営業しているのではないかと、やはりその店は喫茶店アミーゴだった。

「ちょっと待ってて」

雷夢は扉を開けると店内では星一と咲夜、優太がゆっくりしていた、客は隼人としかない、風見と結城は一度科警研に戻った。

「あ、雷夢ちゃんお帰り」

「やっぱり、お店の札CLOSEのままだったよ」

その事に気付きだから隼人以外の客は来なかったと納得してこの人達抜けてるな〜と思い章太郎とフィリップを店内に招いた。

「あ、お客さん！？　いらっしやいませ！」

すぐに対応し咲夜がオーダーを聞く。

「取り敢えず……コーヒー」

「僕も同じの」

星一はすぐにコーヒーの準備を始めた。

（ここ、メイド喫茶なのか？）

（そういう訳ではないみたいだと思うよ？）

章太郎とフィリップは口に出す会話ではなく魔導師同士の通信の念話で声に出さないで話す。

「雷夢ちゃんはコーラでいい？」

「うん、王様ももう少ししたら帰ってくるんじゃないかな？」

雷夢が言う王様はもちろん闇夜で、闇夜は何をしているかと言うと

町中を歩いて甘い物の食べ歩きをしているのだ。

「夕飯用意しておくから上で三人で食べておいてね」

「はい」と元気よく返事している側、出されたコーヒーを飲む章太郎とフィリップ、そのコーヒーの味が今まで飲んだ物より美味いと感じていた。

「美味しいだろ?」、隣から隼人に話し掛けられ頷く二人。

「……………」

その中、優太は感じていた、この二人と会った事があると。

「あの…………どこかでお会いしたことありませんか?」

思い切って聞いてみた。

「どうだフィリップ?」

「うーん…………少し気になってたけど……………」

二人も考え込んで思い出そうとする。

「星一、お茶ください」

二階から星輝が降りてきた、彼女を見た章太郎とフィリップは。

「「あつ! あの時!」」

「え?」

「氷川さん、先ほどはすみませんでした」

Gトレーラーに戻った警察組、竜斗は正義に心から謝っていた、付け上がり過ぎていたと。

「いいですよ、僕も北条さんに言われた現場でちゃんと十六夜さんの話を話していれば」

「ま、私としてはアクセルの力を試す事ができたからいいけど」

開発者として実践によりデータが取れた事に満足していた。

「十六夜さん……………」

正義は少し同情していた。

「さてと、どうする？ ドーパントはどこから現れるか判らねーぞ？」

滝の言葉で捜査の続きに戻り次にドーパントが出現する場所がどこかを調べなければならぬが相手は愉快犯、それも異世界の人間、逮捕したら少し厄介だが放置するわけにもいかない、考えていると入電が入る。

【本部から各局へ、未確認生命体が海鳴署を襲撃していると報告が入りました、未確認生命体対策班はすぐに海鳴署に急行してください】

まさかドーパントから動き出すとは思ってもみないチャンスだとそれと危険でもあった。

「氷川くんはG3-Xを着着してガードチェイサーで出動、鈴木くんはG3の装着を準備して待機」

小沢は竜斗を見て。

「照井くんはアクセルに変身しバイクフォームで海鳴署に急行、滝さんをお願いします」

「オツケー、新人のボックスは俺と氷川に任しな」

竜斗はアクセルドライバーを腰に着けアクセルメモリを出しスイッチを押し【ACCEL】、ガイアウイスパーが鳴り響き。

「変………身っ！」

一気にドライバーに挿入しパワースロットルを回しまたガイアウイスパーが流れバイクのエンジン音が響き渡ると照井竜斗は仮面ライダーアクセルに変身を遂げ作戦室の扉は開く。

「行つてきます」

アクセルはそこから飛び出ると宙でバイクのような姿、バイクフォームに変形し道路に降り急加速で走りだし海鳴署へ急行、

後をG3-Xと滝が追い掛ける、アクセルの方がスピードを上回っていた。

「速いな〜アイツ」

「そうですね」

夜道、風見はアクセルが走り去るのを見送る。

「頑張れ、後輩」

静かに激励を飛ばすのだった。

海鳴警察署、そこにアイスエイジ・ドーパントが警察署を襲撃し対策班の警官隊と交戦していた。

「そんな物効かないわ!」

発砲しているがアイスエイジ・ドーパントに有効なダメージは与えられずどんどん詰め寄られていく。
すると赤いバイクのような物が現れアイスエイジ・ドーパントに体当たりを食らわせると人型となり仮面ライダーアクセルとなる。

「仮面ライダー……！」

アクセルはエンジンブレードを持ちアイスエイジ・ドーパントの方を向き。

「さあ……振り切るぜ！」

走りだす、足を上げて走のではなく地面を滑るように、タイヤが擦れる音が響きながらアイスエイジ・ドーパントに接近しエンジンブレードでまずは一閃。

「ハアアアアッ！」

アイスエイジ・ドーパントから火花が散るとそれを皮切りに斬撃を食らわしていく、一度振り下ろすとすぐに背後に回り込み背中を斬り付ける。

「コイツ…………まさかダブルと同じ系列の…………貴様は一体誰だ！」

「俺に質問するなああああああつ……………！」

質問した事により逆上しエンジンブレードによる一撃が更に重くな
っていく。

「デリヤアアアツ!!!!!!」

回転斬りを食らわせるとそのまま足を上げ回し蹴りも食らわせ蹴り飛ばすとエンジンブレードにエンジンメモリを挿入し【ENGINE】とガイアウィスパーが流れ更に【MAXIMUM DRIVE】と響き必殺技を放つ状態となり右斜め上に振り上げ左斜め下に振り下ろ

してから真ん中の辺りを回転斬りで一閃し背を向けるとAの文字が浮かび上がり、必殺技ダイナミックエースを炸裂。

「うわあああああつ!!!!!!!!!!!!!!?」

アイスエイジ・ドーパントは断末魔を上げ爆発。

「絶望がお前のゴールだ……………」

炎が収まるとアイスエイジメモリが落ちそれは割れ使用者は倒れ警官隊に確保、逮捕されて海鳴署に連れていかれアクセルドライバーを外し変身を解除した。

「Wのメモリの所有者は一体……………」

G3-Xと滝が駆け付けるが後の祭りだと知り緊張感が解けGトレーラーに戻っていった。

Gトレーラーの作戦室。

「素晴らしいわ、もうあんなにアクセルを使いこなすなんて」

小沢はご機嫌だった、もうアクセルには何も言う事はないと。

「これで戦力がまた増えましたね小沢さん！」

「ええ」と返し次のライダーシステムの開発の事を考えていた。

（これでG4を世に出さなくて済むわね……………）

自分が開発した悪魔の兵器を形にする事なく対策班はこれで戦っていけそうと少し安心感を持つ。

「それじゃあ今日は焼き肉行くわよ！ 私の奢りよ！」

Gトレーラー組の夕飯は焼き肉に決まるのだった。

「まさかあの時のライダーが君達だったなんて」

喫茶店アミーゴ、章太郎とフィリップが前にドーパントの変身者を連れていった仮面ライダーダブルと知り会話を弾ませていた。

「まさかこんな所で会えるとは思わなかったね」

「そうだ……………ん？」

章太郎は何かを聞いたそうな星輝を見た、さしずめ管理局との関係

だろう。

「俺達は管理局とは仕事の付き合いでな、ガイアメモリが流通している世界を行き来する時空探偵さ」

この世界では私立探偵と名乗るつもりである、ここが管理外世界だからだ。

「だからあくまでも管理局にはガイアメモリを回収、又は破壊するように依頼されているから管理外世界に魔導師がいようとガイアメモリとは関係なければ報告しない主義でな、そいつらにはそういった生活があるからな」

自分達の事はどうやら言わないようだが少し警戒をし見る事に。

「だけど……………」

星輝や雷夢、そして闇夜を見て気になる事が。

「俺達が知ってる魔導師に似てるんだよ、お前達三人が」

察した、その三人は自分達の元になった魔導師の少女達と、雷夢に至ってはその名前を聞いていた。

「深くは追求しねーよ、フィリップもいいな？」

「わかってるよ章太郎」

闇の書の事は知っていた、その魔導師の少女達からマテリアルの事は聞いていた、ほとんど事情は知っていたが報告する気はない、この世界で今は彼女達は暮らしている、雷夢は両親になってくれる人

もいる、その生活を壊したくないからだ。

「当分はこの世界にいるよ」

「ああ、この世界が一番ガイアメモリの売買率が高いんだ」

章太郎達はこの地球に留まりガイアメモリが関わる事件を追い掛けると言い。

「暮らす場所ないならここの空いてる部屋使っていいよ？」

店長の言葉でまたこの喫茶店に住人が増えた。

第17話【加速するA/もう一人のライダー】（後書き）

章太郎の名前の元は原作者の石ノ森章太郎さんの名前からです、翔太郎ばっかこだわっていたので漢字を変えたりとかして、左の文字も石の文字に似ていますしちょうどよかったかと。

星一も星の字がしょうとも読めるので最初は“しょういち”にしようかと思いましたが“せいいち”に。

氷川さんは真の正義という感じで。

優太は………どこかのアギトに変身するクウガの息子です。

狭間映司は人間とグリードの間という意味です、信司は漢字を変えたのですが信じるを掛けて信司で漣と美穂はただたんに一文字変えただけ………

次回予告

章太郎

「燃え方が変だな」

滝

「ショッカー戦闘員にゲルショッカー戦闘員、デストロン戦闘員だと………！」

フィリップ

「さあ、検索を始めよう」

次回『第18話【Wの検索／悪の組織の影】』

第18話【Wの検索／悪の組織の影】（前書き）

二時間後に次話投稿されます。
今回はあの組織の影が……

第18話【Wの検索／悪の組織の影】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

夜の海鳴市に消防車のサイレンが響き渡る、その音はどこかで火災が起きているという証拠だった。
そこでGトレイラーもその現場へ急行していた、対策班がなぜ火災現場に出向くかと言うと消防隊員では入れない場所や怪人が出るか

もしれない、

対策班はレスキュー隊としても活動しているのだ、そのため小沢は今レスキュー用のG3システムのようなライダーシステムを開発中なのだ。

「G3-X及びG3出動！」

正義のG3-X、鈴木のG3はガードチェイサーで出動し現場へ一足先へ急行し到着。

「対策班です！」

「まだ中に人が、我々ではどうにもならないんです！」

消防隊員は現状を報告し二人は小沢が開発中のライダーシステムの装備である消火器型の武器、GR-07ホエールを持ち火災現場の有名ブランドメーカーのWindScaleの建物の内部に突入。

「突入します！」

G3-Xが前を行き炎をGR-07を使い鎮火していき先に進んでいき消防隊が手を付けられない場所に入る。

「見つけました、救助します！」

G3は被害者を救助、急いで現場から脱出、その後鎮火され事は一時的に収まった。

第18話

【Wの検索／悪の組織の影】

「また火災でしたね」

Gトレーラーの中、スポーツドリンクを飲み休憩を取る正義と鈴木、ここ最近数件にも及ぶ火災現場に急行しレスキュー活動を行っていた。

「そうよね……………死者も出ているからね、こちらら原因を早く掴みたいわ、未確認なら尚更よ」

小沢の話聞き早くこの連続火災事件の真相を突き止めようと夜は遅いが捜査が始まるのだった。

鎮火された後の火災現場、そこに章太郎が来ていた。

「燃え方が変だな」

章太郎は滝と共に現場の中に入っており火災の中心となった場所になっていた。

「左ノ森もそう思うか……」

「これは燃えたというよりは高熱で溶けてその熱で火災が起きたという感じですかね」

中心となった場所には燃えかすはなくポツカリ穴が空いていたからだ、少し回りが焦げ臭いとかではない違う臭さを鼻で感じていると。

「滝さん、お客さん来てますね」

「そうだな」

【MASQUERADE】とガイアウイスパーが何重にも鳴り響き二人の回りに頭部が骨のような模様になり首から下は黒いスーツの怪人、マスカレイド・ドーナントが何体も現れ取り囲むが、その中に黒いタイツとマスクを全身に被い体の模様が骸骨みたいで腰に鷲のような物とサソリのようなマークが刻まれたバックルのベルトを巻いた怪人も混ざっていた。

「ショットカー戦闘員にゲルショットカー戦闘員、デストロン戦闘員だと……！」

かつて世界を支配しようとした悪の組織シヨツカー、ゲルシヨツカー、デストロンの戦闘員だった。

「これはただの事件じゃなさそうだな、お前が担当するガイアメモリ関連の事件も」

「いや、今までこんな事は……」

章太郎も今まで一つ一つの世界でこういう風に何かの組織が出てくる事はなく管理局が開発し違法研究員が研究を続けて流出したガイアメモリだけでしか事件は起きていなかったが今回はこの世界の組織、シヨツカーらが関わっており予想外の事だった。

「来るぞ！」

「イーッ！」

シヨツカー戦闘員は殴り掛かってくるが滝は素早く屈み拳を避け伸び切った腕を掴んで背負い投げをし投げ飛ばす。

「ハッ！」

章太郎も向かってくるマスカレイド・ドーパントに蹴りを食らわし横から襲い掛かるのは水平チョップで攻撃。

「イーッ！」

デストロン戦闘員は鉄パイプを持ち章太郎に振るうが掴まれ奪い取られ自分の武器で攻撃される。

「やるじゃねーか左ノ森」

「探偵ですからね、こういう危険な依頼や仕事するには生身でも戦

えるようにと俺達のオヤっさんにも言われていたので」
「なるほどな」

マスカレイド・ドーパントは拳銃を持ち発砲してくるがゲルショット
カー戦闘員を盾にし避け持っていた剣を滝は奪い取りそれで戦って
いく。

「これも使つか」

Sのギジメモリを出しスイッチを押し【STAG】とガイアウイス
パーが流れ一回り大きい携帯電話に挿入するとクワガタメカに変形
し飛んで戦闘員達に体当たりを食らわしていく。

「ありやなんだ？」

「メモリガジェットってメカの一つ、スタッグフォンです」

後証拠としてカメラ型のメモリガジェット、バットショットで写真
を撮影してから赤い二つのスロットがあるダブルドライバーを腰に
着ける。

「夜中なのにご苦勞だねえ……………まあいいか」

アミーゴにいるフィリップの腰にダブルドライバーが現れると緑色
のCのメモリ、サイクロンメモリを出し起動させ【CYCLONE】
とガイアウイスパーが流れる。

「行くぜフィリップ」

章太郎も紫のJのメモリ、ジョーカーメモリを出し起動させ【JOKER】と鳴り響く。

「「変身……！」」

まず最初にフィリップがサイクロンメモリを右側のスロットに挿入するとそのメモリは消えフィリップは目を瞑り倒れるとその消えたメモリは章太郎のダブルドライバーに転送され深く挿入し左スロットにジョーカーメモリを挿入してスロットを展開、Wの文字のような形となり【CYCLONE】【JOKER】と再び鳴り響くと強い風が章太郎を中心にし吹き荒れ戦闘員達は後退り危うく滝も吹き飛ばされそうに。

「すごい風だ！」

後退り章太郎の姿は変わっていく、右半身は緑で胸に黄緑のライン、

左半身は黒く紫のラインが流れ合わせるとWの文字が浮かび真ん中の仕切るような銀の帯、

セントラルパーテーションが縦に流れ額にWのような角、二つの赤い眼にマフラーがなびく、風と切り札の力を持つ仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカーに変身した。

「これが仮面ライダーダブル……………」

滝はその姿をある二人の仮面ライダーと重ねていた、緑の半身は仮面ライダー1号、黒い半身は仮面ライダーBLACK RXと。

「さあ、お前達の罪を数えろ……………」

そう言い放つとダブルは走りだし上段回し蹴りでマスカレイド・ドパーントを蹴り飛ばしショッカー戦闘員を殴り飛ばす。

「速い！」

滝も負けていられないと思い向かってくる戦闘員をばったばったと倒していく。

「すごいね滝和也」

左眼が点滅しフィリップの声が響く、ダブルは章太郎の体をベースに右半身はフィリップの意識が憑依し変身するのだ。

「ああ、生身だって言うのに」

「こちとら修羅場を多く潜り抜けてきたんでな」

二人……………いや三人はばったばったと戦闘員を倒していくとデスト

ロン戦闘員はロケットランチャーを持ってきた。

「まさかここでぶっ放すつもりかよ!？」

「逃げるぞ左ノ森、フィリップ!」

ダブルと滝は走りだすとデストロン戦闘員はロケットランチャーを発射し柱に命中し爆発し戦闘員達を巻き込み後ろから炎が迫ってくる。

「「うおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」」

爆風に吹き飛ばされる形で建物の窓から飛び出すと建物は崩壊した。

「証拠隠滅か……………?」

「取り敢えず写真は撮りましたから……………」

崩れた跡を見て後は対策班に任せようと立ち去った。

そして夜が更けてその昼過ぎ。

「寝みいゝ……………」

章太郎はカウンターにうつ伏せになって眠そうだった。

隣ではフィリップと星輝が本を読み逆方向では隼人と滝が濃いコーヒーを飲んでいた。

「左ノ森、お前もコーヒー飲んでおけよ、眠気覚めるぞ?」

章太郎は起き上がりコーヒーを飲んでいく。

「だけど前の調査じゃ何も出てこなかったのに今回になってドーパントとそのシヨツカーって組織の怪人が出たって事はただの火災じやなかったんですね」

数件にも及ぶ火災事件を何件が増えた辺りに不振に思い章太郎が積極的に調べ回っていたら昨夜の調査でドーパント絡みだけではなくシヨツカー絡みというのも判った。

「まさかシヨツカーが動いてたなんてな……………」

「月にいるアイツやアマゾンにいるアイツに海にいるアイツや空を飛んでそうなアイツとヘリのパイロットになったアイツに伝えておくか」

隼人が連呼するアイツとはすべて仮面ライダーの事である。

「そうだな、本郷と風見、結城には俺が言うておく」

「頼んだぞ滝」

シヨツカーが裏で動いているとなると歴代のライダー達に伝えて各国でその動きを掴まなければならないのだ。

「まともな悪の組織はクライシス帝国で終わってますよね」

星輝が会話に入る、歴史でも取り扱われている仮面ライダーの歴史では長く続いた悪の組織はクライシス帝国で後はすぐに壊滅させられたと記されていた。

「真と勝、耕司だな、クライシスの後の組織を壊滅させたのは」

「その方達の順番からだとしん、Z.O、Jですね」

「ちゃんと調べてるな」

隼人は真剣に仮面ライダーや悪の組織を調べちゃんと覚えている星輝を褒める。

「伊達に理のマテリアルとは呼ばれてませんよ」

「この世界の仮面ライダーの歴史は深いな……………」

章太郎の世界は元々は仮面ライダーの世界ではないが並行世界に足を踏み入れた事によりフィリップと出会いダブルとなったのだ。

「本当は深くなくていいけどな」

隼人はそう言う。

「取り敢えずフィリップ、検索頼む」

「オッケー章太郎」

フィリップは立ち上がると精神を集中し始める。

「何やってるの？」

「フィリップは“世界の本棚”^{ほし}って様々な世界の記憶がすべて存在する空間にアクセスできるんだ、情報源はすべてフィリップの本棚から調達してる」

簡単に言えばすべての世界の記憶をそこから調達でき捜査にも役に立つという事だが。

「だけどキーワード絞り込まないと見付からないんだよ」

ある程度のキーワードや手掛かりを教えないと欲しい情報が探しだせないという。

「いいな……………」

星輝は憧れの眼差しだった、その空間なら本をたくさん読めてすべての世界の知識を身に付けられるからだ。

「キーワードをお願い」

今フィリップの意識は沢山の本棚がある空間に一人でポツンといた。

「まずは火災」

章太郎がキーワードの一つを言うと本棚から本が飛び出しなくなっていくがまだまだ多い。

「次は溶ける」

その言葉を入れると更に少なくなるがやはり絞り込めていない。

「次は臭い、焦げ臭いじゃない………なんたる………あの臭いは………」
「おそらく硫黄か何かだろ」

滝の言葉をキーワードで入れて更にドーパント、ガイアメモリと絞り込む、今回のマスカレイド・ドーパントでガイアメモリが絡んでいるからであろう、

キーワードとして入れ最後にショッカー、ゲルショッカー、デストロンと言った悪の三組織の名前もキーワードに、
すると本棚は少なくなり一冊の本が残った。

「メモリが何か判ったよ、マグマだ」

溶岩の記憶を持つマグマメモリで変身するマグマ・ドーパントだと判った。

「だけどショッカーとの関係はロックしてあつて判らなかつた」

いくら世界のすべてが詰まった本棚でも読めない物もある、今回はショッカーより先にドーパントを何とかするのが先決であり次の探索を始めた。

「僕なりにはもうキーワードは絞り込めてるんだよね、火災の被害にあったのはブランドメーカーの Wind Scale に関係する建物ばかりだからもしかすると思つてこの一年間でクビにされた社員で行方不明の人物検索したら一人いたんだよ」

一年間で一つの会社でクビになる社員なんて数える程度という考えが当たった為に使用者は絞り込めていたのだ。

「てことはまたWindScaleを狙って……………」

「有り得るよ、昨夜の現場から近いのは……………海鳴デパートだ、犯人は夜にしか放火してないから待ち伏せしておいた方がいいね」

そして夜中の時刻を回った頃、閉店時間となり警備員しかいない海鳴デパートの前で男が一人居りガイアメモリを出した、この男がMのマグマメモリの使用者だった。

男はマグマメモリを起動させ腕に挿入すると炎が形となった怪人、マグマ・ドーパントとなる。

「復讐するんだ……………俺のデザインを受け入れなかったWindScaleの商品を扱う店や会社を！」

手に炎を出し今にでもデパートに放とうとしていた、今回は隠密に中からではなく派手に正面から放火しようとしていた。

「待ちな！」

上から声が響く、デパートの屋上に月を背にする影が三つあった。

「もうこれ以上やらせねーぞ、Fire Man」

真ん中に章太郎、右に黒いライダースーツを着て黒いマフラーを巻き骸骨の絵が描かれたヘルメットを被った滝、左に隼人が立っていた。

マグマ・ドーパントの回りにマスカレイド・ドーパントやショッカー、ゲルショッカー、デストロン戦闘員が現れた。

「行くぜ、滝さん、一文字さん」

ダブルドライバーにはサイクロンメモリが刺さった状態でフィリップの意識はもう憑依していた。

「ああ」

「いつでも」

滝は手に火薬やスタンガンを内臓したグローブを握る。

「変身！」と二人は一斉に叫び章太郎は左スロットにジョーカーメモリを挿入し隼人も変身ポーズを構え。

【CYCLONE】【JOKER】とガイアウィスパーが鳴り響き章太郎はダブル・サイクロンジョーカーに変身、隼人も2号に変身。

「じゃ……………行くぜ……………！」

滝は2号に掴まりダブルと同時に屋上から飛び降りる。

「まずは俺から！」

地上が近くなると滝は離れて戦闘員にスタンガンを仕込んだブーツでキックを食らわせてから着地。

「勢いあつたのによく無事だな……………」

フィリップは関心していた、滝の丈夫さに。

「章太郎、フィリップ、お前はマグマ・ドーパントを、雑魚は俺達に任せろ」

「頼みましたよ先輩！」

ダブルはマグマ・ドーパントに向かって突貫する。
滝と2号は並んで立ち戦闘員の大軍を見る。

「この前より数が多いな……………昨日ので奴ら警戒したな」
「だな……………だが、たいした事ないな滝」

二人は拳を構える。

「ああそつだな、本郷ならこう言つぜ、今夜は俺とお前でダブルライダーだってさ」

「いい事言つな本郷も、んじゃやってやろつぜ滝、この番外編ダブルライダーで」

戦闘員は一斉に走りだし接近してくる。

「だな！」

二人も走りだすと腕を引き。

「「ライダーダブルパンチ！」」

滝はグローブを握った手で、2号もライダーパンチを同時に繰り出し何体かまとめて殴り飛ばす。

「イーッ！」

武器を持ち襲い掛かるがある戦闘員は剣を奪われ、またまたある戦闘員は槍を奪われ倒されていく。

「おっと！」

ダブルはマグマ・ドーパントの火炎攻撃をかわしつつ接近しキックを食らわせるがその足がジューと音を立て煙を上げ焦げる。

「熱いな……………！」

すぐに距離を取り。

「ここはサイクロントリガーがいいよ章太郎」
「オッケー」

青いTのトリガーメモリを出して起動させジョーカーメモリと入れ替え【CYCLONE】【TLIGGER】とガイアウィスパーが鳴り響くと左半身が黒からメタリックブルーでラインが水色となり手に青い銃型の武器トリガーマグナムが握られたサイクロントリガーにハーフチェンジ。

「ハアッ！」

引き金を引き風の弾丸を連射、サイクロントリガーは連射性に優れた姿なのだ。

弾丸はマグマ・ドーパントの体に命中し火花を散らしていく。

「効いてるね、このまま攻撃してトドメはジョーカーエクストリームだ」

「オッケーフィリップ」

連射しマグマ・ドーパントに反撃をさせず追い込んでいく。

再びサイクロンジョーカーに戻りジョーカーメモリを右側のマキシムスロットに挿入し【JOKER】【MAXIMUMDRIVE】と流れダブルを中心に突風が吹き荒れる、ダブルは宙に浮かび足を向けマグマ・ドーパントに突貫すると。

「ジョーカーエクストリイイーム！」

必殺技の名前を叫ぶとセントラルパーテーションを中心に右のソウルサイド、左のボディサイドと別れ先にボディサイドが突っ込み最後にソウルサイドが突っ込んでジョーカーエクストリームを炸裂しマグマ・ドーパントは爆発、炎が収まると使用者の放火魔は倒れており隣にはメモリブレイクで破壊されたマグマメモリが落ちており元に戻ったダブルが立っていた。

「後輩は終わったみたいですよ先輩？」

「じゃあ俺達も……トオウ！」

高くジャンプし同時に飛び蹴りを放つ、ダブルライダーの合体技であるライダーダブルキックで残りの戦闘員を一掃した。

「これで終わりか」

ダブルと2号は変身を解いて放火魔に近寄り気絶しているのを確認

する。

「後は滝さんお願いします」

「ああ、コイツからはたつぷりとシヨツカーの事を聞いておきたいからな」

第18話【Wの検索／悪の組織の影】（後書き）

因みにG3系でオリジナルライダー作ります、名前は……………GR
かレスキューで。

次回

星一

「ピーマンのケーキ」

「お婆ちゃんのお家どこなの？」

籾兵衛

「バイクだろ？」

星一

「国枝先生！」

Gアギト

「なら俺と咲夜の最強キックで倒しましょう！」

次回『第19話【超加速！最強のキック！】MACHINE
ORNADER』

第19話【超加速！最強のキック！〜MACHINE TORNADO〜】

今回はやっと咲夜にマシンが……………因みにタイトル通り変形して最強キック放ちます。

第19話【超加速！最強のキック！〜MACHINE TORNADO〜】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

とある会社の部屋の中、社員が数名デスクワークに励んでいた。
そこで一人がタバコを吸い始めるが上司が注意してきた。

「今は禁煙タイムだぞ、吸うなら喫煙所で吸いたまえ」

部下は渋々部屋から出て喫煙所に、上司は首元に一瞬痛みを感じつつお茶を飲むと蒸せた、中になぜか灰が入っていたからだ、そして書類の上に零れ落ちる灰、前を向くとガラスに写る灰になっていく自分、そのまま上司は完全な灰となり不可能犯罪により殺害されたのだった。

「どうかな？」

今日のアミーゴは定休日、星一、星輝、咲夜以外のメンバーは泊まり掛けで出掛けていた、優太と闇夜は科警研でビートチェイサーの整備の立ち会いに、信司と漣は取材、雷夢と美穂は美穂の姉のお見舞いに、

章太郎とフィリップはガイアメモリの事件っぽい事件の捜査に、映司とアंकは鴻上の所に出掛けていた。

「どうかな？ ピーマンのサラダ？ ドレッシングはオリーブオイルと塩コショウなんだけど……」

星一が作ったものはピーマンを生で細かく刻んで作ったサラダだった、

試食はもちろん目の前にいる星輝と咲夜、もし二人が美味いと頷けばメニューに載せる。

『美味しい』

二人同時にそう言う、その言葉に星一は笑顔となり自分もサラダを食べる。

「生でピーマンを食べるなんて……………炒め物が強いイメージがあるので新鮮で斬新ですね」

まるで評論家のような感想を述べる星輝、彼女の言う通りピーマンは焼く、炒めるという印象が強いが生で食べれない事はない、トウモロコシも生で食べれるのだから。

「レシピ教えてくれるかしら？ 幻想郷に帰ったらお嬢様達に振る舞いたいから」
「いいよ」

今回はピーマンの料理が多かった、何でも菜園で大きく育って艶が良かったらしく数も揃っていたからだ。
テーブルの上にはピーマンの野菜炒め、ピーマンの肉詰め、ピーマンのスープに。

「で、これは……………」

何やら緑色のケーキがあった、二人はもしかやと思い恐る恐る聞いてみると。

「ピーマンのケーキ」

ニツと笑いながらそのケーキの元の名を口に出した。

『……………』

これは美味しいのか、いや、食える代物なのかと思い始めた、星一はいろんな発想で料理作るがよく変なものも作るため不安だった、だが美味しいかもしれない、その変なものも美味しかったから。フォークを持ちケーキを切ってその一切れを刺して口に近付け思い切って食べてみた。

『美味しい』

やはり美味しかった、どんな変な料理も美味いと言わせる星一の技術は天下一品、喫茶店ではなくレストラン経営もできるのではと思い始めていた。

「作り甲斐あったよ、星輝ちゃん、咲夜」

星輝はそのままだが咲夜にはさんが無くなっていた、どういう訳か聞いてみた。

「なんかわからないんだけど………咲夜さんって呼ぶのに違和感を感じてきたからさ、後敬語も、ダメですか？」

問うと咲夜は首を横に振る。

「そんな事ないわ、私も感じていたし」

「咲夜………」

「星一………」

なぜか見つめ合って手を握り合いかなり咲夜も悪乗りしていると。

「あなた方は何やっているんですか」

いつものツツコミがこの空気を切り裂くがいつもよりものすごく重く、鋭かった。

ある高速道路下の道路、一台のカスタムされたバイクが走っていた、運転手の男と老婆を乗せて。

「お婆ちゃんお家どこなの？」

「うーん……アッチ！」

「アッチじゃ判らないよ」

バイクを一時停めると老婆は歩道に降りる。

「近いからここでいいわ」

「本当かな」と少し疑うがそんな疑いがどうでもよくなるものを貰う。

「芋羊羹じゃない！」

芋羊羹をお礼に出したのだ、男は芋羊羹が大好きらしく優太が見た

ら良い笑顔というぐらゐの笑顔で芋羊羹を頼張った。

第19話【超加速！最強のキック！】MACHINE TORN
ADER】

「咲夜も悪乗りが過ぎますよ」

「我ながら調子に乗り過ぎたわ」

今のはかなり反省していた、今日はメイド服ではなく白いワイシヤツに紺のネクタイとミニスカートという私服の姿だった。

「もしかすると本当に恋人同士だったりして？　さん付けで呼ぶのに違和感があったから」

「もしかしたら婚約者かもしれないわよ？」

「そんな、まさか」

すべて冗談として話す二人だ冗談だとわかっていても割り切れない少女がいた。

（冗談なんですよ、この会話は冗談なのに……………この胸にこみ上げて来るものは一体……………）

星一と咲夜が仲良く話しているのを見ると胸が締め付けられる思いに見舞われ胸が本当に痛くなる事が多くなってきていた、まるで彼に惚れているかなように、だが彼女はそれを否定する、彼女は彼を倒して越えるべき目標、そう思い込む事や読書により痛みから一時的に解放していた。

「そういえば咲夜、この前バイクの免許の試験受けたけどどうだったの？」

この間、咲夜はバイクの免許の取得試験を受けたらしい、記憶喪失でもちゃんと免許は取れる法律があるためそこは問題ない。

「バッチリよ、後はバイクを買えばすぐに現場に移動できるわ」

「というかあなたには時を操る能力あるのですから必要ないような

……………」

時を止めて移動すればバイクより速いが普段移動する時を考えれば足がある方がいいと伝える。

「確かに」

「そうだ、今からそのバイク買いに行かない？」

「いいわね」

咲夜が使うバイクを購入する為に店から出た、どこのバイク屋に向

かうしたらあそこしかない。

「オヤっさんこんにちは」

「よく来たな、まあ上がれよ」

もちろんそのバイク屋とはタチバナレーシングクラブ、隼人も整備を手伝っていた。

「バイクだろ？ その事ならもう用意してある」

用意か早いと思っている仮面ライダーみんなバイクが必要、色んな仮面ライダーの親父として手助け、特訓してきた立花籐兵衛は咲夜用にバイクを制作していたのだ。

「星一のバイクは隼人が使ってる新サイクロンを元になっているからな」

それは初耳と星一は思い星輝は店内のバイクを見渡していた。

「星一のは新サイクロンだが、咲夜のはオフロードのモトクロスとかで使うような奴で志郎が使うハリケーンをベースにした奴だ」

籐兵衛は一通り説明すると車庫の奥からそのハリケーンを元に作られたオフロードの銀色のバイクを押してきた。

「トライチェイサーとビートチェイサーのノウハウも活かしたから

な……………乗りこなせるか？ バイク初心者か？」

「人並みには乗りこなしてみせますよ」

籾兵衛が所有するモトクロス場に移動する、隼人や滝が前々からそのマシンのテストをしていた為、性能は問題ないが乗り手がその性能に振り回されないかである。

「ん？ てことはオヤっさん、俺のも新サイクロン並みの性能なの？」

「ああそうだ、お前がコイツを初めて乗って乗りこなした時は心が折れ掛けたよ」

懐かしそうに話すが内心悔しいという思いが。

「お前も隣走っていてくれないか？」

「わかりました」

星一は自分のバイクに乗ると後ろに星輝が。

「しっかり掴まっててよ」

「わかってますよ」

降ろすつもりはなく咲夜の隣に並ぶ。

「じゃあ最終テスト始めるぞ！」

「はい」

ヘルメットを被りアクセルを回してエンジンを鳴らし暖める。

「よーい……………スタート！」

隼人の合図で同時にアクセルを回し走りだすのだが。

「って咲夜あ!？」

咲夜はアクセルをすぐに全開にし急加速させ星一を追い抜く。

「オヤっさん……………アイツ、モトクロス出たら優勝狙えるんじゃない…」

……………
「狙える、てか狙わしたい」

星一は心配ないだろうとバイクを停めて咲夜の運転テクニックを眺めていた。

「いやあ作った甲斐があつたがこう簡単に乗りこなされるとはな…」

……………
「まあちゃんと乗りこなせた方がコイツも喜ぶんじゃないんですかオヤっさん？」

隼人の言葉に「そうだな」と返すと。

「それではありがたく使わせてもらいます」

「ああ、なんかあつたらすぐに来いよ」

「これからどうしますか？」

レーシングクラブを後にしてこれからの事を星輝はどうするか聞いてみる。

「そうだな……………咲夜のバイク購入祝いでツーリングに行く？」

「それはいいわね」

「賛成です」

星一はいい場所があると言い先に走りだし後を咲夜が追う、このままだと海鳴市の郊外に出て山道の道路に入り風を切りながら疾走する、新バイクと共に。

「ここなら思い切り走れるでしょ？」

「そうね」

走っているとそこに一台のバイクが、先ほど高速道路下で老婆を乗せて走っていたものだ。

（アレ……………このバイク見た事あるような……………）

三台並んで走っていると後からやってきたバイクが加速してその先で停車すると二人も停車させる。

「久しぶりだな……………星一」

前のバイクのライダーはヘルメットを取り素顔が露に、その顔を見た星一は急いでヘルメットを取り喜びの笑顔を浮かべていた。

「国枝先生！」

近くのパーキングエリアに訪れそこで国枝東と軽く食事をする。
くにえだ あずま

「町でお前に似た奴見たから追いついたら案の定だよ」

「俺もあのバイク見た時見覚えあるな」と思ったんですよ、そして
らまさか国枝先生のあのスゴいバイクだったなんて」

「俺のMySpecialさ」

星一と国枝は二人で会話を弾ませていたが誰なのかわからない咲夜
と星輝は困っていた、それに気付いた国枝は。

「俺は国枝東、心理学者で星一のカウンセリングを担当したんだ」

三年前記憶喪失で海鳴市に流れ着いた沈んだ星一のカウンセリング
を担当したのが国枝だった、籐兵衛ともバイクの関係で面識があり
籐兵衛が国枝にカウンセリングを頼んだのだ。

「そうだったのですか……………私は高町星輝です」

「十六夜咲夜です」

二人は自己紹介すると国枝は首を傾げた。

「もしかしてお前の妻子？」

名字が違つたためそんな事あるわけなくもちろん冗談。

「んなわけ……」

「そんなわけないです!」

星一ではなく星輝がそれを全否定、迫力に圧倒され国枝は「そ、そうか」と返しコーヒーを飲む。

「どうかしたの星輝ちゃん?　なんか最近変だよ?」

「なんでもありません、なんでも」

最近冗談でも星一の、女性関係に反応するようになっており自分でも気付いていたがやはり飛び越えたい壁とかそう思い片付けていた。

市内某所、対策班の警官隊はある一人の女子生徒をマークしていた、その生徒は冒頭で灰となつた会社員の娘だからだ、対策班はこれをアンノウンによる犯行と見てマークしているのだ。

「……………何事もなければいいのだが……………」

一条と北条もその中におりマークという名の護衛をしていた。

「いや、私の経験上アンノウンは必ず血縁者を狙ってきます」

近くにはGトレーラーが待機しており竜斗はいつでもアクセルに変身できる体勢に、正義もG3-Xを装着。

「さて、出てきたらしっかり倒せよライダー」
『はい!』

すると警官隊の一人が物陰から見えていた腕を見付ける。

「いたぞ!」

その声で姿を隠していたアンノウンが、カブトムシのような姿で盾と斧を持つビートルロードのスカラベウス・フォルティスが姿を現した、マークしていた生徒は悲鳴を上げ後退り警官隊が近寄り拳銃を構える。

「氷川、照井!」

無線機で合図、GトレーラーからG3-Xとアクセルが出勤しフォルティスの前に立つ。

『っ!』

パーキングエリアにいた星一達はアンノウンの気配を察知した。

「国枝先生！ 暇があったら喫茶店来てくださいね！」

「お、おう……………」

星一達は国枝をその場に残しバイクに乗り去っていった。

「星輝ちゃんは途中で降りてね」

「いや……………現場まで連れて行ってください」

いつもの事だから深くは気に留めなかったが。

（まさか私も……………）

二人の腰にオルタリングが現れ。

『変身！』

星一はアギト・グランドフォーム、咲夜はアギト・アースフォームに変身した、

Gアギトのバイクはトルネイダーに変化しEアギトのオフロードバイクはトルネイダーに似たデザインだが金と赤ではなく銀と青のトルネイドチェイサーに変化した。

G3-Xはフォルティスにパンチを食らわせようとしたが盾で防がれた、だが直撃ではなく不思議な力に防がれている感じで盾には触

れていなかった。

「あの時のアンノウンと同じだ……………」

過去に同じような能力を持ったアンノウンと戦った事があった、その時に星一はアンノウンの能力により倒さなければ24時間後には死ぬかもしれないが何者かの力が働きトルネイダーに新たな力が加わりその力でアンノウンを倒したのだ。

「さあ、振り切るぜ！」

エンジンブレードによる重い一撃を食らわせようと振り下ろすが盾で受け止められ弾き飛ばされる。

「何……………ハアアアアッ！」

立ち上がりもう一度振り下ろすがやはり受け止められ斧で攻撃され吹き飛ばされる。

「GX-05使います！」

GX-05を持ち弾丸を連射するが盾ですべて防がれ弾は地面に落ちる。

「あの盾がある限りこちらの攻撃は通じない……………」

北条は拳銃を構えていたが撃っても盾があるため当たらないと思い引き金を引かずにいたが。

「一条さん？」

隣にいたと思っていた一条がいなく驚いているとフォルティスの頭部の角から火花が散る、ビルの屋上からガラスが反射する光が見えていた。

「一条さんですね」

それは一条がライフルで狙撃したのだ。

そこにGアギトとEアギトがトルネイダーとトルネイドチェイサーで到着。

「津上さん！ 十六夜さん！」

バイクから降りるとG3-Xとアクセルは横に並び。

「津上さん、あのアンノウン、あなたを殺し掛けたサソリのアンノウンと同じような盾を持っています」

「あの盾を……」

Gアギト自身その盾の力は恐ろしい物と理解していた。

「なら俺と咲夜の最強キックで倒せばいいですよ！」

「私も？」

G3-Xは判ったがEアギトとアクセルは判らなかった。

フォルティスはアギト達を見て目標を変えようとしたが星輝を見て何かを感じていた。

（やはり）

フォルティスは星輝の方を向いて接近していく。

「星輝ちゃんを狙ってるのか……………！ とりあえずバイクに乗って、氷川さん達にはあのアンノウンの動きを止めておいてください」

「はい！」

GX-05をフォルティスに向け連射、アクセルもエンジンメモリをエンジンブレードにセットして光弾を放ち動きを止めているとアギト達はそれぞれのバイクに乗り走りだす。

「行くよ！」

更に加速するとGアギトは飛び上がるとトルネイダーは縦にスライドしスライダーモードという形態と変形、それに乗る。

「嘘……………！ あれ？ 言う事効かない……………」

突然トルネイドチェイサーが思い通りに動かなくなり焦るが同じように飛び上がるとバイクは左右に開くように変形しクロスホーンを模したような角が飛び出る、トルネイドチェイサー・スライダーモードとなりその上に足を置く。

この形態に変形できたのはトルネイダーの近くを走っていてアギトの力であるオルタフォースが干渉し変形できるようになった。

「これが……………」

「行くよ！」

Gアギトのクロスホーンは展開し。

「ええ！」

Ｅアギトのクロスホーンも展開、フォルティスに向かって加速していく。

「照井さん、もういいですよ！」

「アレは……」

G3-Xとアクセルはそこから離れるとフォルティスは盾を構える。

ハッ！

二台のマシンは急停車しその反動で飛び出し。

ハアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!

トルネイダーとトルネイドチェイサーを使って繰り出すライダーキック、ライダーブレイクを同時に炸裂する。

「グオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！？」

だがライダーダブルブレイクには通用せず盾は砕かれフォルティスに直撃すると二人のアギトは地面に着地し少し滑ると足の裏から火花が散っていきゆっくりと速度が落ちていき止まる。

フォルティスは大爆発を起こし絶命した。

「これでよしだね……」

「そうね」

変身を解くとトルネイダーにも普通のバイクに戻る。

「まさか変形するなんて」

やはり驚きである、姿が変わるだけでなく変形までとは。

「だから星輝ちゃんは途中で降りた方がいいって言ったんだよ」

星一はぶんすか怒っていた。

「確かめたい事があつたんです」

「確かめたい？」

その言葉には気になり問うと。

「私も……………目覚め掛けているかもしれない……………アギトみたいな力に」

「星輝ちゃんが？」

頷いて返すと。

「雷夢と闇夜に聞いたのですがあの二人はまだアンノウンに襲われていないんです、

もしかすると魔力も関係していると思いますが……………私の場合は……………」

超能力が目覚め掛けているからだ、と。

「いつから気付いてたの？」

「信司達が来た頃から……………アンノウンの気配を感じれるようになって……………」

「そっか」と返すと。

「なら頑張って星輝も守らないと」

「星一………私は」

「あなたを倒したい」と言おうとしていたがそれは星一も判っていたが。

「だって星輝ちゃんは俺にとって大事な家族の一人なんだから」

ニコツと笑うとその笑顔を見て軽く頬を赤く染める。

「……………ありがとうございます」

それを隠すように後ろを向き少しにやけていた。

「じゃあ帰ろうか？」

「はい」

星一、星輝、咲夜は自分達の家でもある喫茶店アミーゴに帰っていた。

星一……………私は嘘を吐きました、本当は最初にあなたの未来が見えてしまったのを……………

ですがそれは言わないでおきます、その未来を変えてくれると信じていますから……………

あなたが私の前から消える未来を……………

第19話【超加速！最強のキック！】MACHINE TORNADO！

トルネイドチェイサーのスライダーモードはガタツクエクステンダーの変形を想像すれば……………
当分アギトが続きます。

次回予告

正義

「検査の結果が出たみたいです」

咲夜

「私の未来、見えたりしないの？」

籾兵衛

「忙しくなるぞ」

国枝

「催眠療法って奴だ」

星一

「アイツには勝てないと思います」

第20話【記憶の欠片】（前書き）

星輝のレベルが高い……………レベルはESPのが。
理由はあとがきで。

第20話【記憶の欠片】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

「検査の結果出たみたいですよ」

喫茶店アミーゴ、今日は正義だけが来ており隼人もおらずバイトの
店員達もおらず星一と星輝、咲夜だけしかいなかった。

「星輝さんの能力は接触感応能力サイコメトリーと精神感応能力テレパス、予知能力フレイグと三つの能力があると小沢さんが」

数日前、Gトレーラーの設備で星輝はESPエスパー測定の検査を行い今日はその結果報告に。

「通りで人の考え見抜けると思ったら」

「今までの人の考えを読んだの全部超能力!？」

「なわけありませんよ」と返す、信司達がここにやってきてから能力が目覚め始めていた為、最初の頃のは彼女の感だろう。

「ほとんど精神干渉系ですね」

「後レベルなのですが……………驚く事に高レベルなんです、レベル6だと……………」

最高であるレベル7の一手手前だった、だがなぜ気付いてから能力を使っている気配を見せなかったのか。

「ルシフェリオンのリミッターが働いたのでは？」

ルシフェリオンのリミッターはエスパーの力を抑えるESPリミッターの技術も使われている、星輝の超能力にも反応して力を制限していたのだろう。

「小沢さんからこれを預かっています」

正義が出したのは星の飾りが付いたピアスだった。

「なんでも小沢さんに内務省の超能力支援研究局のB・A・B・E・L・で知り合いがいてその人にこのESPリミッターを作らせたそうです」

小沢は星輝も女の子だからデザインに気を使い名前の一文字でもある星の飾りを付けたピアスにしたらしい。

「小沢さんも女の子だったんですね」

「本人の前で言ったら殺されるわよ？」

咲夜が会話に入ってくると正義は帰ろうとする。

「コーヒー飲まないんですか？」

いつもならコーヒーの一杯を飲んでから帰るのだが急いでいるようだった。

「すみません、今日是对策班の会議があるのでゆつくりできないんですが……アイスコーヒーを一杯お願いします」

正義はアイスコーヒーを注文して一気に飲んでからリミッターの説明書を置いてからアミーゴを出て本部へ帰った。

「今日は氷川さん達の方が忙しいな」

「そうね、今日は私達が暇よね」

今日はいつもより店は繁盛しておらずバイトのシフトが入っていた蓮子とメリーに連絡して休みにしているぐらい客が入ってこなかった。

「ところで星輝」

咲夜が話し掛けてきて「何んですか？」と返し話を聞く。

「予知能力があるのよね？　そしたら誰かの未来、見えたりするの？」

「ええ………まあだいたい興味無いので忘れていますが見えるには見えます………」

だが、自分が一番最初に予知した未来が星一の未来とは切り出せなかった、そんな未来になるはずない、なってたまるか、と思うからである。

「私の未来が見えたりしないの？」

誰もが気になる事だから仕方がない、咲夜に至っては自分の記憶が戻るか戻らないか、それが気になるのだ。

「……………あ、アンノウン」

咲夜の未来を予知する前にアンノウンが出現する予知をし数分後、本当にアンノウンは出現した。

第20話

【記憶の欠片】

アンノウン退治から星一が戻ってくるがやはり客は来ないが。

「ま、これでアンノウンが私を狙う理由が増えたって事ですな」

最近になって雷夢も闇夜の近くにもアンノウンが現れた為、魔力を持つ者も狙うと判り自分には三つの超能力でレベル6という高レベルである為、更に狙ってくるだろうと判断していた。

「そうよね……襲ってきても超能力じゃ対抗というよりは逃げに等しいし」

「忘れてませんか？ 私は魔導師ですよ？」

「そういえばそうだったわね」

だが最近は竜斗を止める為に拘束魔法を使った程度、あまり使わなくなっていた。

「まあ何が来ようと俺が守るから安心して」

前までなら自分の身は自分で守る、そう言っていたが今では。

「頼りにしてますよ」

素直にその言葉を受け入れ星一に信頼を寄せていた。

タチバナレーシングクラブでは……………

「隼人！ アマゾンに連絡が付いたぞ！」

「アマゾンに？ アイツが一番連絡付かなそうなのにな」

アマゾン……………やまと だいすけ 本名山本大介、仮面ライダーアマゾンである、ゲドン、
ガランダー帝国と戦い抜いた男だ。

「近い内に日本に戻るみたいだ」

「そっか……………アイツが戻るのは心強い……………そうだ、敬介にも連絡付いた」

「敬介にも……………そりゃいい」

敬介、じん けいすけ 神敬介、仮面ライダーXであり悪の秘密組織GOD機関と戦い抜いた男だ。

「こりゃー忙しくなるぞ、アイツらの事だ、マシンもボロボロだろ」
「だろーな」

昔からの仲間とまた再会できる、その喜びとまた組織が動き出したという複雑な気持ちを感じていた。

「次は……宇宙^{ソラ}にいるアイツに連絡取らないとな」
「まずはNASAに連絡してからじゃないとな」

複雑な気持ちを消す為にカッカッと笑いながら話す二人。

「そんじゃ俺はアミーゴ行ってきます」
「星一によろしくな」

隼人は新サイクロンに乗りアミーゴへ向かった。

「……………どうですか？」

アミーゴにまた視点を戻すと星輝が野菜スープを作っていた、今度は料理に興味を持ち始め星一と咲夜に味見をもらっていた。

「さすが星輝ちゃん、味付けバッチシ」

指でOKのサインを出し咲夜も頷く。

「美味しいわ」
「先生が良いからですよ」

ニコツと笑い二人にお礼を言っていると隼人が来店。

「お、いい匂いするな」
「隼人さん！ このスープ飲んでみてください」

その野菜スープを器に入れカウンターに出す。

「匂いはこれか、ではいただきます」

スプーンでスープを掬い口に入れ味わう。

「お、美味しいなこれ」

「高町シェフの自信作ですよ」

「シェフだなんて……………」

恥ずかしそうだったがまんざらでもなかった。

「よっ、高町シェフ」

「隼人まで…………でもありがとうございます、コーヒーも淹れましようか？」

コーヒーの淹れ方もマスターしており自分のブレンドを出す。

「さすがだな」

そのコーヒーを飲みつつ雑談に。

「星輝ちゃんって初めて会った時はすごく表情固かったよね？」

「そうですか？」と返すと「そう」と繋げる。

「あの時はすごく警戒されてたからな」管理局の局員じゃないかとかって」

「まあ確かに…………アギトに助けられてそのアギトが星一と知った

時はすごく恥ずかしかったですからね？」

正義感に溢れ毎日鍛練して過ごしてしっかりしている人物だと思っ
ていたからだ。

「そんなに正義感に溢れて毎日鍛練して過ごしてしっかりしている
男じゃなくてごめんね」

「いいですよ、今じゃあなたがアギトで良かった、そう思ってます
から」

微笑みながら互いを見合わせる二人。

「俺から見ても星一はちゃんと仮面ライダーやってると思うぜ？
優太もやってるしさ」

「いや、照れますね」

その反応が津上星一なのだ、そう思うのだが。

（だけど……記憶を失う前もこんな人格だったのか……）

あくまでも星輝が信頼を寄せているのは今の津上星一だ、だがそれ
は記憶喪失により性格が変わっているかもしれない、そう思うと記
憶は戻らなくてもいいかもしれないと思い始めていた。

そこに客が一人来店した。

「国枝先生！」

「来てやったぜ星一」

それは国枝だった、コーヒーを頼むと隼人に自己紹介をする。

「なあ星一、ちょっと大雑把に試してみたいものがあるのだが……
…いいか？」

「大雑把に別に構いませんよ？」

大雑把には国枝の口癖である、星一もそれを知っているためそれに
合わせた言葉で了承した。

「催眠療法って奴だ、それで少しでも記憶が戻るかもしれない」

記憶を取り戻す為の療法だった、星輝はやはり記憶が戻ったら人格
が変わるかもしれない、そんな不安に見舞われていたが星一はやる
と言ってしまう、本人にその意志がある以上は止める事はできな
かった。

星一と国枝は休憩室に行き隼人と咲夜と三人で店内に残った。

「星一も隅に置けないな」

「そうですね」

星輝の想いに気付いていたがそれは言わないでおこうと二人の考え
は一致していた、その想いは未来になれば届くと信じつつ。

休憩室、ライトを持ってきてカーテンを閉めてその灯りを星一に向
けて照らす。

「深呼吸をしての力を抜いて……自分の意思が体から離れていく
ような………」

暗示を掛けるように言葉を述べていく国枝、その言葉通りに力を抜いていく星一。

「三年前、お前は何をしてたんだ？」

まずは三年前の事から、海鳴市に流れ着いた時の事を思い出せば過去に繋がるからだ。

「……………高校……………調理師学校卒業して……………地元のレストランに就職……………しました」

国枝は星一が話す内容をメモを取っていく。

「その時に同学年で仲のいい友達いたか？」

「はい……………沢山、だけど……………一番は一緒に通っていた姉さんでした」

姉がいるのは知っていた、だがなぜ同学年なのに姉が出てきたか。

「……………双子の……………姉さん……………」

風都に向かう船に乗っていたのは知っていた、年上の姉もいるのが、だが双子の姉は初耳だった。

「年上の姉さんの名前は？」

「……………津上……………咲奈……………」

まずは年上の姉の名前を聞き次に双子の姉の名前を問う。

「津上……………津上……………」

名字で止まってしまった、だがすぐに名前を口に出すが部屋の外で話を聞いていた星輝達もその名前に驚愕する事になるとは。

「津上……………咲夜……………」
『っ!』

隼人と星輝は咲夜の顔を見た、咲夜自信自分の名前が出た事に驚いていた、だがまだ名前だけであるのだが、十六夜は自分がメイドを勤める屋敷の主人に貰ったもの、もしかすると。

「双子の姉さん、津上咲夜は自分に似ていたか？」

「……………いいえ、二卵性児で似てなく……………咲夜は……………銀髪でした」

だんだんと今この場にいる咲夜と特徴が同じとわかってきた、咲夜もその話を真剣に聞いていた、自分の記憶が戻るかもしれないと。

「……………咲奈姉さんに……………お揃いの懐中時計を買ってもらいました……………裏に自分の名前が刻まれた物を……………」

「年上の姉さんは何していた？」

次は津上咲奈の事を聞き出そうとした。

「風都大学に……………通って……………ああ……………姉さん……………な
んで自殺なんか……………会わなきゃ……………姉さんの恋人に……………」

「その恋人の名前は？」

「名前……………名前……………うっ!」

星一の表情は苦しみのもに変わった、これ以上やると記憶喪失が悪化しかねない、今回はここまでにしようとか催眠療法を終わらせた。星一は少しの間このまま寝かせておき目を覚ましたら先ほどの事を話そうという事に。

「咲夜……何も覚えていないのか？」

「はい……ですが……」

店内では咲夜の記憶について話していた、そして自分が持つ懐中時計を出し裏を見せる。

「この潰れた文字、もしかしたら津上とローマ字で刻まれていたかもしれません」

結局のところ、本人にも解らなかったが今回の星一の催眠療法は一時的なもので目覚めたら忘れていると国枝は説明した。

「だがこれでアイツの家族構成が判ったな、年上の姉と双子の姉がいたのが」

それから星一は起きたが国枝の言う通り忘れており先ほどの事は心の中にしまっておくという事になった、下手に教えて混乱し人格が崩壊しかねないかもしれないからだ。

「じゃあ俺は帰るから、なんか思い出したら連絡しろよ？」

国枝は店から出た。

「咲夜？　どうかした？」

「何でもないわ、何でも……………」

先ほどの事が気掛かりだった、もしかしたら星一が自分の記憶の欠片の一つかもしれないからと。

「……………星一、咲夜、アンノウンです」

アンノウンの出現を予知、二人もアンノウンが出現したのを感じ星一と隼人は共にその場へバイクで駆る。

「アイツだ……………！」

現場に行くとそこには黒豹の杖を持つ怪人、クイーンジャガーロードのパンテラス・マギストラだった。

『変身！』

隼人は2号、星一はアギト・グランドフォームに変身、パンテラス・マギストラに戦いを挑む。

「今回はお前とダブルライダーか」

「なんかいいですねこれ！」

「ああ」

パンテラス・マギストラは杖を振るってくるが二人は避ける。

「ライダーパンチ！」

2号は力強いパンチを放ち殴り飛ばす。

「フ！」

だが今まで戦ってきたアンノウンとは違いパンテラス・マギストラは強く念力を放ってきた。

「強いな……………！　だが負けん！」

「はい！」

Gアギトは接近してパンチやキックを繰り返して攻撃するが相手はその動きに着いてくる。

「くっ……………！」

だが勝たなければならない、負ければ大事な人を守れない、その守るものの為にも。

「ハアアアアア……………！」

拳に力を込めてライダーパンチを放つGアギト、パンテラス・マギストラは後退るとその上を2号は飛び上がり前にチョップを浴びせ

だが炎の中から何かの影が写っていたのを直視、その炎を見るGアギトと2号、すると炎は消えその影は姿を現したが実体があるかないか判らない薄い姿だった。それがそれを見たGアギトは震えていた。

「ああ……………」

「星一？」

鯨のように見え仮面ライダーのような複眼を持つアンノウンだったが、だが今回は顔見せ程度のような感じだった。為そのアンノウンは姿を消した。

「ハア……………ハア……………」

変身が解けると星一は顔に大量の汗を流しており脅えていた、さっきのアンノウンを見て。

「大丈夫か？」

「え、ええ……………隼人さん、俺」

星一は話し掛けた、その口から出た言葉は……………

「アイツには勝てないと思います」

第20話【記憶の欠片】（後書き）

なぜあんなにレベルが高いのかはPROJECT G4やる際に分かる人は分かるかと、レベル高くないと……………G4が困りますから（笑）

こんなにレベルが高くてバベルは何もしないのかと言うとその話はやる予定なのでそこでようやく天使にも悪魔にもなれる少女達が出ます。

そして次回は因縁のアンノウンが。

次回予告

映司

「星一、休んだ方がいいんじゃない？」

咲夜

「その鯨のようなアンノウン、見覚えあるの？」

星輝

「今度の定休日、付き合ってもらえませんか？」

Gアギト

「き、貴様は……………」

水のエル

「それは我等の主人が愛せないからだ」

次回『第21話【アギト敗北】』

楽しみに、沢山の感想お待ちしております。

第21話【アギト敗北】（前書き）

今回はシリアスが多くアンノウンの目的が完全に明らかになって知っているとありますが。

第21話【アギト敗北】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

「……………」

パンテラス・マギストラとの戦いから数日後、星一は炎の中で見たアンノウンの姿を見てからというもの、一日中ボーッとしている日

が続いていた。

「星一？」

咲夜が話し掛けても星輝が話し掛けても反応を示す事無く、コーヒーが満杯なのにも関わらずカップに淹れ続ける時もあった。

「星一さん、どうかなさいましたか？」

今日はシフトが入っていたアイリに優太は問われるがやはり「わからない」と答えるしかなかった、誰も分からないいいからだ、隼人も、なぜあのアンノウンを見たからこうなったかが。

「大丈夫ですか？」

「……………最近信司のミスより星一の方がミス多くなってるから……………重症だよ」

この店にはいい比較対照ができるバカが居る為ちょうどよかった。

「何かものすごく失礼な事を……………」

その信司はというと取材があつた為、土日にも関わらず本職の方を優先していた、もちろん漣も。

「ホント大丈夫？」

美穂も星一の状態を心配していた、いや、星一に関わる者誰もが心配していたが一番気に掛けているのは他でもない、高町星輝だった。

「星一……………」
「……………」

その彼女に話し掛けられても反応を見せない、ただ黙々と作業を続けていくだけ。

星輝は能力を使おうとしたがやめた、これはルール違反だと思い、彼から何か言うのを待とうと考え聞くのも能力使うのをやめたが。

「ッ！」

無意識に予知能力が発動してしまいまた星一の未来が見えてしまった。

脳裏に流れたのは鯨のようなアンノウンに一方的に攻められるGアギトが水の中に落ちて浮き上がったこないという津上星一の敗北を意味する未来だった。

「そんなはずない！」

その予知を否定したい、そう思った星輝は声を上げてしまっていた。

「どうかしたの星輝ちゃん？」

それには星一は気付き話し掛けるが「何でもない」と返してしまい自分が予知した未来を話すべきか迷い始めていたがそれを話すと自分は星一を信じていない事になる、そんな板挟みの中、高町星輝として生きているシュテル・ザ・デストラクターは苦悩するのだった。

第21話

【アギト敗北】

「……………」

やはりまたボーツとし蛇口から流れる水をひたすら見つめているだけだった。

その所為か、店内は明るい空気ではなくどんより湿った空気だった。

「星一、休んだ方がいいんじゃない？」

「僕もそう思うよ星一」

映司とフィリップにそう言われるが店長だから出ていなきゃいけないという責任感があり断る。

「休んでおけよ、コーヒーぐらい俺が淹れるから」

「章太郎のコーヒー、コーヒーじゃなくて水だからダメ」

「ガッ!？」と章太郎はプライドをずたボロにされた気持ちに見舞

われ固まる、確かにと全員頷いていた、章太郎のコーヒーは水ではないから。

「そうだよね……………」

「フィリップ……………お前までえ……………」

少し明るくなった感じだったがやはり星一はボーッとしていた。

「映司、ヤミーだ」

アंकがヤミーの気配を感じて一階に降りてきた。

「わかった」

映司とアंकの二人はヤミーの出現場所へライドベンダーで向かった。

「星一」

咲夜が話し掛けてきた、さっき反応したからすぐに言葉を返す。

「その鯨のようなアンノウン、見覚えがあるの？」

もしかしたら自分の記憶に繋がるかもしれない、聞かずにはいられなかった。

「……………ある」

間が空くが答えを返し次のように述べた。

「だけど俺はあのアンノウンには勝てない、多分咲夜も」
「やってみないと分からないじゃない」

星一は言葉を返すのをやめ黙々と作業を続けた、不安を残してだが。

「星一」

今度は星輝が話し掛けてきた。

「今度の定休日、付き合ってもらいませんか？」
「え？」

そして今度の定休日……

「ホントに一緒に行かなくていいの？」

なぜか星輝は待ち合わせしたいと言いだす、星一はいつものようにバイクで行こうとしていたらしいがどうしてもとそれで。

「はい、2時半に海鳴公園で待ち合わせですよ？ 分かりました？」
「分かってるよ」

「2時半になるまでどこかで暇をつぶしたりして遅れないように来てくださいね」

そして二人は時間になるまでそれぞれの行きたい場所に出掛けて行った。

「私はやっぱりここなんですよね」

やはり星輝は海鳴図書館に来ていた、読みたい本が揃っているこの施設は星輝にとっては楽園であった。

（待ち合わせに間に合うようにしないと）

ニコニコしながら本を選んでみると棚と本の隙間からその次の列の棚の本を取ろうとしている少女がいた。

「取れない……………」

背伸びし手を伸ばすが取れずにいたが。

「使いますか?」

そこで星輝が子供でも取れるようにするための土台を持ってきた。

「ありがとうございます」

その少女はニコツと笑いお礼を言った、星輝はその少女を見てビツクリしていた。

（月村すずか……………!）

そう、この少女はオリジナルでもある高町なのはの親友の一人、月村すずかだった、だが彼女はこの世界の月村すずか、並行世界の存在、星輝はすぐにそれを理解する。

「どうかしました？」

「あ、いえ……………何んでもありません」

異世界のあなたを知っているなんて言っても理解もされないだろうと冷静さを取り戻して考え、彼女は好意的に話してくるため自分もその話に乗る。

二人は場所を変えて図書館から出て近くにある井上公園に訪れその自動販売機で缶ジュースを買い飲んでいた。

「星輝ちゃんは石ノ森公園の近くの喫茶店で住んでるんだ」

自分達がどこに住んでいるかを話題にし話していた。

「私は郊外にある森の中に建ってるお屋敷で住んでるの」

「そうなのですか」

次に家族構成を聞き自分が知るのとは違っていた為、やはり並行世界の月村すずかなのだなと、実感していた。

「星輝ちゃんのお父さんとお母さんは？」

「私は……………孤児でその喫茶店の店主に引き取って……………」

あながち間違えではないが自分は孤児であると偽り話すと謝られる。確かに孤児に親の事を聞くのは共通して基本的タブーであるためで

もある。

「謝らないでください、気にしてませんから」

浮かない顔になってしまったさすがに気を使い、気遣いの言葉を述べる。

「星輝ちゃんしっかりしてるね」

やはり大人っぽいからかよくそう言われている、星一にも。

「そんな事ありませんよ、私もまだまだ子供ですから」

ニコツと笑いながら返し話を続けていく。

「星輝ちゃん、この後暇かな？」

星輝と話していて楽しかったのか、もつと話したいという気持ちから出た言葉だったが。

「あいにくこれから待ち合わせの用事があるので」

待ち合わせの用事、その言葉により出た答えは「デート」だった、ずかはその単語を言うか否定ではなく、「そうです………」と恥ずかしさが混じっていた肯定の言葉が返ってきた。

「そろそろ時間なので私はこれで」

待ち合わせ場所の海鳴公園へ行こうとしたら呼び止められ携帯持っていないかと聞かれはい、と答えるとメールアドレスの交換を求め

られ応じた。

「ありがとゝ星輝ちゃん」

「いえいえ」

事実上初めてのこの世界での同い年の友達だった、雷夢や闇夜といった同じ世界の同じ生まれ方をした友達はいたがこの世界は初めてだった。

「今度メールするね」

「お待ちしています」

二人は別れを告げてそれぞれの道へ歩いていった。

「すずか」

すずかを呼び掛ける青年が駆けしてきた。

「太牙お兄ちゃん」

それはすずかの兄の月村太牙^{つきむら たいが}だった。

太牙はすずかを迎えに来たのだろっ、近くに車が停まっている為、それに乗り先ほどの事を楽しく話す。

「いい友達になれそうか？」

「うん！ 星輝ちゃんすごくしっかりしてるもん！」

嬉しそうに笑顔で答え太牙はホッとする。

「ならいい、今度家に連れてきたらどうだ？」

「絶対そうする！　ところでお父さんと渡くん、アッチ行っただの？」
「ああ、母さんは家にいるが父さんはな」

父さんとは前に一度出た事がある月村音也であり渡もさすがの双子の兄。

「“フランちゃん”と楽しく遊んでるのかな？」

「楽しいには楽しいが………かなり神経すり減らして遊んでるだろ、死なないように」

どんな物騒な遊びをしているか気になるが今は語らないでいいだろう。

星一は待ち合わせ場所へ向かっていた、本屋で料理の本を立ち読みし時間を潰してから海鳴公園へ向かっていたら。

「っ！」

こういう時に限ってアンノウンが、待ち合わせに間に合うように早く倒そうと思いその出現場所へ走って向かう。

「変身！」

変身ポーズを取らず走りながら叫ぶと金色の光に包まれてその光が弾け飛ぶと星一はアギト・グランドフォームに変身し川の上に掛かる橋の上に立ち止まるとそこにはシャチの怪人、オルカロードのケトス・オルキヌスが剣を持ちまたもやアギトになるかもしれない人間をその剣で殺害してしまっていた。

間に合わなかったと思いつつこれ以上被害者を増やさない為にGアギトは再び走りだしケトス・オルキヌスに戦いを挑む。

「ハッ！」

「遅い……………」

海鳴公園にはもう星輝が到着して星一が来るのを待っていた。

「もうすぐで2時半なのに……………遅くなるならそれで連絡をしてくれても……………」

6月下旬の気温、梅雨も明けかけ、ポカポカしていた、ベンチに座り本を読んで待ってようと思いい適当なベンチがないか探す。

「フ、ハッ！」

腕を思い切り伸ばしてパンチを繰り出しケトス・オルキヌスの顔を殴る。

「ハッ！」

次に回転し後ろを向きながら足を勢いよく伸ばしてキックを放ち鳩尾を蹴り飛ばす。

「ハッハッ！」

連続でパンチを二発食らわすとケトス・オルキヌスは後退るが川からもう一体力二に似た硬い甲羅で体が被われ右手にハサミ状の武器を持った怪人、クラブロードのクルスター・パレオと

ピラクルに似た三つ又の槍を持つ怪人、フィッシュロードのピスキス・アラパイマが飛び上がり橋に立ちGアギトを囲む。

そこですぐさまストームフォームにチェンジしストームハルバードを抜く。

「ハアアアアア……………！」

ストームハルバードを振り回し風を巻き起こしていき近付けなくし、ピスキス・アラパイマに向かって走り出す。

ピスキス・アラパイマも槍を持ち振り回すがすべて受け止められハルバードスピンドルで切り裂かれ絶命。

「ハッ！」

ジャンプすると今度はフレイムフォームにチェンジしフレイムセイバーを抜くとクロスホーンが展開され落下の勢いを使い刃を下に向けセイバースラッシュを炸裂しクルスタータ・パレオの硬い甲羅と剣を受け止めようとしたハサミごと切り裂き、真つ二つになり左右に倒れ炎上。

ケトス・オルキヌスは剣を振るうが弾き飛ばされ蹴り飛ばされる。

グランドフォームに戻ると頭のクロスホーンが展開し足下にアギトの紋章が現れる。

「ハアアアアア……！」

一歩下がり姿勢を低くするとバネのように勢いよく高くジャンプし体を丸めて一回転し右足を伸ばし一瞬加速する。

「トリヤアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

ライダーキックを炸裂、ケトス・オルキヌスの胸に命中し後ろへ飛んで今度は体を伸ばして後ろへ曲げながら一回転し道路に着地、相手に背を向けクロスホーンが閉じるとケトス・オルキヌスは爆死した。

「早く行かないと」

約束の時間はとくに過ぎていた、怒っているだろうと思ひ体の力を抜いて変身を解こうとしたら殺気を感じ振り向くとそこには前に見た鯨に似たアンノウンが巨大な鯨の尻尾に似たような刃が付いた斧を持ち立っており硬直してしまった。

「き、貴様は……！」

脳裏に荒れ狂う海の中の船の甲板でこのアンノウンに襲われている
場面が浮かび上がる。

「フッ……………ハアッ！」

鯨のアンノウン、ロード怪人の中で最高クラスのエルロードの怪人、
水のエルは腕を前に伸ばし手の平から衝撃波を放ち硬直したGアギ
トを吹き飛ばす。

「うわあああっ！？」

停車していた車のフロントガラスに激突しガラスを割る、衝撃の痛
みに耐えながら立ち上がろうとすると目の前に水のエルが迫ってお
り斧を振り下ろしてきて横に転がり避けるとアスファルトの上に落
ち斧は車を真つ二つに切り裂き爆発。

「お前は一体……………！」

斧を掲げる水のエルを見上げてその姿を確認するとまた脳裏に荒れ
狂う海の上の船の甲板で今と同じような場面が浮かび上がる。

（やはり俺はコイツと……………！）

次にその水のエルに飛び掛かる銀色のアギトが脳裏に映る。

（咲夜……………？）

それは咲夜が変身するアギト・アースフォームに酷似していた。
だがまた斧が襲い掛かり避けて立ち上がり構えるが体が震えていた。

「ハアアアアア……………」

水のエルはヒレのような飾りをひらひらとなびかせながら歩きGアギトに近付いていく。

「ハアアアアア……………！」

Gアギトはやけくそになりライダーキックを放つ体勢に入る。

「ハッ！」

ジャンプしてキックを食らわせようとしたが水のエルは再び衝撃波を放つ。

「うわあああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

Gアギトは弾き飛ばされ橋から飛び出しそのまま川に落下し沈んでしまった。

水のエルはそれを見下すように水面に浮かぶ泡を見つめているとサイレンが鳴り響きそこにGX-05とアクセルが到着。

「今までアンノウンと違う」

戦いの経験からか、すぐに水のエルが今まで戦ったアンノウンとは違うと察し十分警戒しながらGX-05を構える。

「どうする？」

「僕が先に仕掛けますから照井さんは撃ってる隙に」

G X - 0 5 の引き金を引き弾丸を水のエルに向け放つ。

「わかった……………さあ、振り切るぜ！」

アクセルはエンジンブレードを持ち走りだす、弾丸は水のエルの体に当たるが射たれた個所はまるでゼリーやどろどろとした液体のようになり穴が空いた状態となりダメージはないようだった。

【ENGINE】【ELECTRIC】

エンジンブレードに電気が纏いそれを振るうが斧で防がれ衝撃波で吹き飛ばされる。

「照井さん！ 大丈夫ですか！？」

「ああ……………」

倒れたアクセルは立ち上がりエンジンブレードを構えるが。

「ただの人間か……………」

「喋った……………」

まともに話すアンノウンなど初めてで少し驚くが滅多にないチャンスだと思い質問してみた。

「なぜお前達アンノウンは超能力やそれに似た能力を持った人間を殺すんだ？」

まずは相手の目的を知ろうとその質問をすると。

「それは我等の主人が愛せないからだ」

「主人？」

その主人を聞いてみると。

「人間を生み出したもの……すなわち神だ」

「神だと……！」

まさかアンノウンを操りその背後にいるのが神だとは、その真実に驚きつつ水のエルは話の続きを語る。

「神は人間に力など不要だと思っている、その力を持った人間を取り除くべく我々はアギトになりうる者を狩っている」

「そんな事の為に……」

だが間違えではなかった、ショッカーだってその強大過ぎる力を持ち世界を支配しようとしていた、ESPもそうだ、ESPを持った事により自分の思い通りになると勘違いし犯罪を犯す者もいる、もしそれがアギトになったら取り返しの付かない事になる為、アンノウンやそれを操る神がやる事は間違えではないがそれを認めると自分がやってきた事を否定する事になる、いや、認めたくないからその行いをG3-X、氷川正義は否定する。

「そんなの、横暴だ！」

「どうか、今さっきアギトになった者をこの下に落とした」

その言葉に動揺する、自分達を知るのは星一か咲夜、G3-Xはもう一人知っていたが今はこの場にはないので除外。

「黄金のアギトをだ」

黄金と聞きすぐに星一と判る、水のエルは「その力を棄てる事だ」と言い残しその場から姿を消した。

「待て！」

「照井さん！ 今は津上さんを！」

すぐに星一の搜索を手配し川の中をくまなく探す事に。

「こつちに来て〜！」

声が聞こえる…………聞いた事がある…………

- 星一く追い付いてみなさうい -

咲夜の声が聞こえる…………なんで？ 最初に呼んだのは…………
死んだ姉さん……………なんで……………咲夜と一緒に……………

- これは私からの卒業祝いね -

あ、懐中時計だ、裏に俺の名前がローマ字で刻まれてる……………あれ？ そっちは……………『SAKUYA TUGAMI』……………！

津上咲夜……………そうだ……………！

俺達は風都行きの船、あかつき号に乗って色んな人と話していると晴れていたのに嵐に突然見舞われて大きな波や強い風や雨が吹き荒れ……………あのアンノウンが現れて襲ってきたんだ……………そこで俺達はアギトになったんだ……………そうだ……………咲夜は……………俺の……………

「星一……………」

星輝は携帯で通話を掛けるが繋がらずずっと待った、日が暮れて夜になるまで、9時ぐらいになると咲夜が迎えに来て星一が行方不明となったと聞いて自分の予知が本当になってしまったと……………

第21話【アギト敗北】（後書き）

正義には大切な役割があるのでアンノウンに話し掛けましたな。
当然またオーズの話が続きます、アギトの話とオーズの話が中心の
ような感じですかね？

次回予告

メズール

「カザリ、あなたのアイデア使ってみたわよ」

ガメル

「面白い！ 面白い！」

星輝

「星……………」

映司

「大事な人がいなくなるのは確かに悲しい……………俺達もそうだった
から」

【シャシャシャシャウタ！ シャシャシャシャウタア！】

星輝

「集え明星！　すべてを“守る”……“光”となれ！」

次回『第22話【涙と合成ヤミーと海のコンボ】』

第22話【涙とXと海のコンボ】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×2

トラ×1

バッタ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

チーター×1

サイ×1

シャチ×1

ウナギ×1

タコ×1

「カザリ、あなたのアイデア使ってみたわよ」

廃工場の中、グリードはそこを住み家、メズールとカザリは話していた。

「そう？ どうだった？」

「成功よ、ガメルのサイヤミーに私のメダルを入れたら違うヤミーになったわ」

カザリはやっぱりと笑いながら呟く。

「ガメルは欲望に忠実だからね、メズールの欲望が合わさればセルが沢山稼げるね」

「ええ、そう言えば最近ウヴァを見掛けないわね」

「ウヴァはウヴァなりのやり方でセルメダル稼いでるよ、クズヤミーしか使う脳がない虫頭だから」

若干ウヴァの事を馬鹿にし自分達も他に欲望塗れの人間がいなかったら探そうと廃工場から離れる。

その頃ガメルはメズールと共に生み出したエイとサイのヤミー、エイサイヤミーと共に行動していた。

エイサイヤミーは地面を踏み付けると強い揺れが起き繁華街にいた人々に回りに落ちていたゴミが浮遊し飛んできた。

ガメルは前に夫婦喧嘩を見てその妻がサンダルを投げたところを見てそれを面白がりサイヤミーを作ったところ、メズールがそのヤミーにセルメダルを入れてエイの特性を持つエイサイヤミーとなったのだ。

「面白い！ 面白い！」

ガメルは両手をバンバン当て大きな音を上げながら喜んでいた。
エイサイヤミーは重力を操る事もできその能力で物を浮かしているのだ。

「ガメルの……いや、メズール？ どっちだ？」

映司とアンクは駆け付けるが、アンクはエイサイヤミーがどのグリードが作ったヤミーが判らずにいた。

「お前でも判らないヤミーがいるなんてな」

「うるせえ！」

映司の言葉にイラつくがセルメダルは欲しい、アンクはコアメダルを渡す。

「変身！」

タトバの組み合わせのコアメダルをドライバーに挿入しオースキヤナーに読み込ませオーズ・タトバコンボに変身しメダジャリバーを抜き構えて走りだす。

「ハアアアアアー！！！！！！！！」

まずはエイサイヤミーにメダジャリバーで一閃するのだがそれに気付いたガメルは。

「邪魔するな！」

自分の遊びが邪魔をされたため怒りだし突進をしオーズを跳ね飛ば

す。

「ガメルが邪魔だな……………映司！ これ使え！」

アंकはクワガタメダルとウナギメダルを投げる。

オーズはそれを受け取りタカとトラを入れ替え読み込み頭部がクワガタヘッド、腕はウナギアームで足はバツタレッグのガタウバに変身。

「これで！」

両腕についている鞭、電気ウナギウィップでガメルを巻き付け拘束。

「うわゝ離せゝ……………わゝ！」

その鞭から電流を流し電撃攻撃を食らわせクワガタヘッドの角から放つ緑色の電気を加える。

「痺れるゝ」

ガメルは倒れると体に電気が走っておりコアメダルが二枚噴出した。

「映司！ これ使ってすぐに奪え！」

アंकはチーターメダルを投げ渡しガタウターにコンボチェンジして走りだしすぐに二枚のゾウのメダルを回収する。

「よし、これ……………うわあっ！？」

背後から突風が放たれ吹き飛ばされるがメダルは放さなかった。

「カザリい！」

そこにカザリが現れた。

「僕のメダル、返してもらっよ」

カザリは走りだす、オーズはチーターレッグで走りだすのだがエイサイヤミーが自分の能力で電灯を浮かして投げ飛ばし直撃。

「ぐっ……………！」

倒れ込むとカザリの爪がオーラングルサークルに突き刺さりダメー
ジが一定値を越えてしまった為、変身が解除されドライバーに挿入
されていたコアメダルは噴出しチーターメダルはカザリに、ウナギ
メダルはアंकに、クワガタメダルはどこかへ飛んでいつてしまっ
た。

「返してもらったよ、行くよガメル」

「俺とメズールのメダル返してもらってない！」

「メズールと一緒に取り戻そうって言ってたよ？」

「本当お？」

カザリは「うん」と頷いて返す、ガメルの扱いは心得ているためメ
ズールの名前を出せば言う事を聞くのだ。

「わかった」

「じゃあね」

ガメルとカザリはその場から去りエイサイヤミーもいなくなってい

た。

「映司い！」

アंकはコアを奪われヤミーを逃がした事に激怒し掴み掛かる。

「これがあるからいいだろ」

二枚噴出した代わりにゾウメダル二枚が手に握られていた。

「プラマイゼロ、これでいいだろ？」

正論であった、アंकは何も言い返さず映司を放した。

「まあいい、次ちゃんとやればな」

アंकは歩きだし帰路につき映司は立ち上がりそれを追い掛ける。
クワガタメダルはカザリ達に奪われたと思っていたがそのクワガタ
メダルは飛ばされて空いていたマンホールに落ちていたのだった…

………

第22話

【涙とXと海のコンボ】

「星輝く出てきてよ」

「星輝、王の命令だ、早く出てこい」

雷夢、闇夜は星輝の部屋の前に立ちドアをドンドンと叩いて呼び掛けていた、星一は警察の必死の捜査にも関わらず見付からず死体も出てこなかった、まるで消えたように、その為、ショックで引きこもってしまったのだ。

「引きこもっても星一は帰って来ないぞ」

「そうだよ！ だから部屋から出て待とうよ」！

だが反応はなく、まったく出てこなくまるで誰もいないのではないかというぐらいに、おかしいと思い開けてみる、鍵は開いていた、部屋には誰もおらず窓が開いたままだった。

「まさか……………」

その頃星輝は魔導師姿となり空を闇雲に飛んでいた、何も目的もなく。

（何しているんでしょうか私……………星一は私にとって……………私にとって……………）

分からなくなってきた、最初は警戒して敵意むき出しに、そしてアギトやオリジナルを越えたい、その目的の一つだった、だが今は何なのか分からない、
自分にとって津上星一とはどんな存在なのか、ただの友人、親代わり……どれも当て嵌まらない、一体………思考を巡らせていると気付いたら海に着いていた、灯台の屋根の上に降り海を眺めていた、ただじつと。

「星一……………」

一回目を瞑るがすぐに開く、頬をなぞる感触がしたからだ、その頬を触ると少し湿った、自分は泣いていると気付いたのだ、泣くほど悲しい、星一が自分にとって大きい存在だったのだろうと気がき始めていた、父であり、兄である、そして……………

「帰りますか……………あの二人も心配していますよね、勝手に出ていったんですから」

飛び立とうとしたら急に灯台は揺れ。

「なっ……………!？」

その所為でバランスを崩し足を滑らせそのまま下へ落下してしまう。

「くっ……………!」

そのまま飛ばうとしたがあっちこっちから物が飛んでくる、これはただ事ではないと考えたがこのままでは自分は地面に激突してしまう、どうにかしようと地面を見ていると上手く考えられないため目

を瞑り思考を巡らせていると。

「はっ……………!?!」

落下せず突然何かに抱き抱えられた感触がし目を開けると。

「仮面ライダー……………!」

銀色の仮面に赤い眼、黒いVのようなアンテナに灰色の体、黒いマフラーに赤い胸の仮面ライダーが抱き抱え星輝を助けた、灯台の下に降りると星輝を降ろす。

「あなたは……………」

仮面ライダーは何も言わず崖から海に飛び降り特殊な機材が搭載された赤と白のバイク『クルーザー』に乗り海の上を走り去った。

「隼人と同じ感じがした……………あの仮面ライダーも改造人間……………」

バリアジャケットを解除し私服に戻るともう少し歩いてから帰ろうと砂浜に降り歩きだす。

なぜ灯台が揺れ物が飛んできたかというときサイヤミーが能力で物を飛ばしていたのだ、そのおかげで体に付いていた卵から大量のエイに似た小型ヤミー、エイヤミーが産まれ人々を襲っていた。

「つまんない」

ガメルはあくまでもエイサイヤミーが物を飛ばしているのを見る為にサイヤミーを生んだ、その為エイヤミーには目もくれずエイサイヤミーがどこかへ去るとそれを追い掛ける。

他の場所でもエイヤミーは人々を襲っており映司はオーズ・タトバコンボに変身しメダジャリバーを抜いて戦っていた。

「コイツら……数が多い！」

「読めたぜ、ガメルのヤミーにメズールがメダル入れたんだ、ガメルは一番欲望に忠実、

その為セルメダルは欲望に代わり稼げないがメズールのヤミーがその欲望を食べば大量にヤミーが生まれる、だから二つの種類を持つヤミーが生まれたんだ」

アंकはそうのように解釈しているが今のオーズはそんな事よりも目の前にいるエイヤミーの相手に忙しかった。

「コイツら数が多過ぎる……これなら！」

オーズバッシュで一気にエイヤミーを倒していくが数は減る気配がなく時間が掛かりそうだった。

灯台の近くでもエイヤミーは大量発生しており近くにいた人々に襲

い掛かっていた、騒ぎに気付いた星輝はその現状を見てセツトアップしようとしたが人前ではできない、ならこのエイヤミー達を自分に注意を向けおびき寄せればと考え。

「こつちです！」

石を投げ付けるとエイヤミーは思惑通り自分に注意が行き向かってくる、星輝は砂浜の方へ走り人氣が無くなったのを見計らいバリアジャケットにセツトアップ、ルシフェリオンを持ち海の方へ飛ぶ、海上で砲撃を放ち片付けようと考えたのだ。

「ここまで来れば……………」

エイヤミー達の方を向いてルシフェリオンを前に向け魔力を集結させていく。

「ブラスト……………ファイヤアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

砲撃魔法ブラストファイヤーを放ちエイヤミー達は砲撃に包まれセルメダルに戻り海中に沈んでいった。

「これで……………」

だが生き残りが一体いた、気付いた時には海面に飛び出し体当たりしようとする、このままではぶつかると思ったならエイヤミーは真つ二つとなった。

「あなたは……………！」

エイヤミーを倒したのは先ほど自分を助けたクルーザーに乗った仮面ライダーだった、グリップに L R S H が書かれた洋服のボタン並みの大きさのスイッチが並べられた剣、ライドルホイップを握っていた。

「まさか君みたいな女の子がそんな力持っていたなんて」
「まさかあなたに二回も助けられるとは」

仮面ライダーは変身を解き、男の姿となる。

二人は海上で話すのもあれだと考え砂浜へ移動。

「俺は神敬介^{じんけいすけ}、さっき見た通り仮面ライダー、仮面ライダーXだ」
「仮面ライダーX……………GOD 機関を壊滅させた伝説の仮面ライダーの一人……………」
「よく知ってるな」

星輝も自分の名前を名乗る。

「本に書かれていますから……………」
「そうか……………」

波が揺れる音が響き渡る。

「どうしてそんなに悲しそうな顔をしているんだ？」

彼になら話してもいい、と思い敬介に話した、津上星一の事、仮面ライダーアギトの事、そして自分の事を。

「そうか……………その男は君にとって父であり、兄である存在だったんだな」

「はい」と静かに返す。

「俺もそうだ、GOD機関にオヤジを殺され、俺も死に掛けてたところをオヤジの改造手術を受けこうして生きている」

「敬介……やはりあなたも仮面ライダーですね……隼人や志郎、丈二のように」

敬介は星輝が自分の先輩ライダーの知り合いと初めて知り滝や籐兵衛、優太とも顔見知りと知った。

「あの人達に会ってるんだ……優太は元気にしてるか？」

優太のもう一人の師としてダグバとの戦いからその後を気にしていた、今も平和の為に戦っていると少し切なそうな表情に。

「そうか……優太も俺や風見先輩達と同じような境遇だから心配してたんだ、まさかまだ戦っていたなんてな」

「みんなの笑顔の為にを口癖に」

「アイツらしい」と言い内心ホッとしていた。

「もし暴走したら俺達に殺してくれて頼んだぐらいだからな」

「アルティメットですか……」

敬介は静かに頷いて返す。

「そしてある姉弟の親を守れなかった事を後悔し、それをバネにして戦い抜いた、俺達のように」

ある姉弟とはアイリ達の事だろうと思ひ敬介の話を聞いていると空が急に暗くなり上を見上げるとエイヤミーの大軍が飛翔しており海の中に潜っていく。

「アレはさっきの……………」

バイクのエンジン音が聞こえ振り向くとメダジャリバーを持ったオーズがライドベンダーに乗りやってきた。

「星輝ちゃん！」

「映司！」

「仮面ライダーか」と敬介が問うとオーズは「はい！」と答える。

「どこいった？」

エイサイヤミーとはぐれたガメルがやってきてオーズを見た途端敵意を剥き出しにする。

「オーズ〜！ メズールのメダル返せ〜！」

先ほどのカザリの言葉を忘れたのかオーズに突進するが避けられ背中を切り裂かれる。

「痛い〜！」

すると海から巨大なイトマキエイヤミーが現れた、エイサイヤミーは海中に潜みエイヤミーを呼び寄せそれを吸収した為巨大化したようだ、イトマキエイヤミーは怪光線を眼から放ちオーズを攻撃。

「うわあっ!？」

爆風に吹き飛ばされ堤防の壁に激突しずり落ちる。

「映司！ 何やってんだよ！」

後から来たアंकに怒号を浴びせられるがイトマキエイヤミーとガメル
の攻撃によりなかなか反撃に出られなかったが。

「大・変・身……!!」

敬介は両手を上へ広げ体でXのような形を取ってから右手を左斜め
上に向けてからジャンプ、そして着地する時には仮面ライダーX、
又の名をXライダーとなりライドルのSのスイッチを押しライドル
スティックとして持っていた。

「仮面ライダー……!!」

「仮面ライダー…… エエエエーックス!!!!!!」

ライドルスティックをXを描くように振るい名乗るとガメルに向か
って走りだす。

「この怪人は俺がやる、君はあの巨大な怪物を」

「わかりました！」

かと言ってどうするかを考えていた、タトバコンボは水中を泳げな
い、するとアंकがシャチ、ウナギ、タコのメダルを投げ渡す。

「それで戦えるはずだ！」

アंकも泳げないタトバで無茶させるほど鬼ではないためメダルを貸したのだ。

オーズはシャチ、ウナギ、タコとメダルを挿入しオースキャナーで読み込ませると「シャシャシャシャウタ！ シャシャシャシャウタアッ！」と歌が流れオーズは頭は青くシャチのような形で眼は黄色いシャチヘッド、腕はウナギアーム、足はタコのような吸盤がついたタコレッグのシャウタコンボに変身した。

「これなら！」

オーズはジャンプし液状化し海に飛び込んでエイサイヤミーを追跡する。

「ハッ！」

ライドルスティックを巧みに扱いガメルに接近を許さない。

「近付けない」

「フ、ハッ！」

「うわあ」

思い切り突かれ遠くへ吹き飛ばされる、そこにカザリが現れた。

「もう僕の言葉忘れて……………まあいい」

カザリの爪はXライダーに向けられた、カザリは走りだし攻撃を仕掛けるがライドルスティックによる攻撃で返り討ちに合う。

「さすが伝説のライダーのXライダー……………容赦ないね」

カザリは仮面ライダーの事を知っていた、理由はこの時代についてもっと知るために。

「だけど二対一、僕達の方が上手だよ？」

「それはどうかな？」

「何？」

そこでガメルの叫び声が聞こえてきた、振り向くと身体中から煙を上げ倒れ込むガメルだった。
ルシフェリオンの先から煙が上がっていた、星輝は砲撃を放ったようだ。

「二対二の間違いですよ」

「そうみたいだね」

「ガメルは私が食い止めます、Xライダー、あなたはカザリを」

「おう！」

それぞれ戦うべき相手が決まりその相手に挑んでいく。

海中のオーズはエイサイヤミーの爆弾攻撃を掻い潜り追跡していた。

「ハッハッハッ！ セイヤアアアアーツ！！！！！！！！」

液状化を解きタコのように足が八本となりイトマキエイヤミーの腹の足と蹴り合いをする末、その足を回転させ切断する。

イトマキエイヤミーは怪光線を放ち牽制しながら逃走を測る。

「逃がすか！」

オーズは再び液状化し追跡。

ドルのスイッチを押し起動させたライドループに拘束される。

「星輝ちゃん！」

「はい！」

星輝は飛び立ち自分の目の前に魔力スフィアを形成し魔力を集結させていく。

「集え明星……
“居場所を守る光”
となれ！」

ルシフェリオンを大きく振り上げ。

「ルシフェリオン！」

振り下ろし前に突き出すように向け巨大な砲撃を発射した。

「ブレイカアアアアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!」

ルシフェリオンブレイカーはイトマキエイヤミーを呑み込み、大爆発を起こしセルメダルに戻り辺りに散らばるとアंकはそれを回収していく。

「星……待ってますよ、あなたの居場所で」

何かが吹っ切れたようだ、敬介との交流があつたからか、それとも本当はめそめそしてただけ最初から決心がついていたのか、それは星輝自身にしか分からない、

いや、敬介との交流があつたからだ、吹っ切れていた、だが気持ち
はもやもやしていた、誰にも話さず一人で抱え込んで。

自分にとって星一が何なのかわからず、だが気付いたのだ、星一は

父であり、兄であり、そして自分は彼に恋していると気付いたのだ。

（私、待ちますね、あなたが帰ってくるのを、この町で）

オーズが使えるメダルは………

タカ×2
トラ×1
バッタ×1
カマキリ×1
ライオン×1
チーター×1
サイ×1
ゴリラ×1
ゾウ×2
シャチ×1
ウナギ×1
タコ×1

第22話【涙とXと海のコンボ】（後書き）

次回も昭和ライダーレジェンド回。

スーパー1はこなたパパのおかげで有名に……………

次回以降はストロンガーの兄貴が……………

後タカメダルの数増やしました、二枚じゃアंक動けねーと思い。

次回

星輝

「では行ってきます」

『金だぁ！』

「オマエ、泣かない、元気出す」

映司

「大切なのは自分が何かしたかです！」

太牙

「貴様に姉さんと妹に手は出させない！ サガーク！」

「アアアア〜マアアア〜ゾオオオ〜ン！！！！！！！！！！」

次回『第23話【トモダチとハダカと重力コンボ】』

第23話【トモダチとハダカと重力コンボ】

カウント・ザ・メダルズ、現在、オーズが使えるメダルは……

タカ×2
トラ×1
バッタ×1
カマキリ×1
ライオン×1
チーター×1
サイ×1
ゴリラ×1
ゾウ×2
シャチ×1
ウナギ×1
タコ×1

「では私、今日と明日、友達の家で寝泊まりしますので
「気を付けてね」

星輝は友達……すずかの家に遊びに行く為、荷物を持っていた。

「では行つてきます」

そして星輝はアミーゴを後に。

「星輝、明るくなってきたね」

「ああ」

雷夢と闇夜は星輝が見えなくなるまで見送る。

「昔のアイツからは考えられないな」

「うん、冷たかったのに今じゃ………星一のおかげかな？」

「だろうな」と闇夜は答えると。

「さあさあお嬢さん方」

「今日は星一がいなくても関わらず客多いんだから手伝った手伝った」

後ろに信司と優太が立ち店の手伝いをするように促す。

「星輝は店の手伝いしてから出掛けたんだから」

帳簿や食材等の在庫をチェックを担当していたり、小学生が在庫管理ってどんだけと普通は思うがこの中で一番向いているのは星輝の為。

「わかったよ〜パパ〜」

「ああ、すぐに手伝うか」

二人も変わりつつあった、彼等と接している事により、大きく。四人は店の中に入ろうとしたら金が落ちる音が聞こえた、セルメダルかと思い振り向くとそこにはセルメダルではなく……

『お金？』

1円玉や10円玉、50、100、500円玉がチャリンチャリンと空から落下していた、更には千円札や五千円札に一万円札に今どき珍しい二千円札がひらひらと落ちてきていた。

『金だあ！』

『金が落ちてきたぞお！』

地元の人々は金に目が眩み道路に落ちる金、特に万札を拾う。

「まるでハイエナだな」

信司はそう言つと。

「信司、ハイエナが獲物仕留めてそのおこぼれをライオンが食う事が多いんだぜ？」

「嘘お！？」

信じられない豆知識を優太から聞くと闇夜が。

「てか一条に連絡しなくていいのか？」

この惨状を見て確かにと、道路も人々の所為で渋滞になっていたり、

泣き叫ぶ子供を放置して金に目が眩む親達も増えてきた、これはイカンと警察が来るまで自分達がこの混乱を静めようとするのだった。

星輝もすずかとの待ち合わせ場所、井上公園に向かっている途中でアミーゴの近くで起きている事件が起きていた。

「金……金があればなんでもできると言いますが」

できないものもある、例えば大切な人が自分の元に帰ってくる事とか。

「この混乱を静めなければ……」

どうすれば静められるか考えていると目の前に泣き叫ぶ男の子が、親が金に目が眩んだ為放置されてしまったのだろっ、昔の自分ならそのままだった、だが今はできない、その男の子の元に駆け寄ろうとしたらいつの間にか一人の、男がいた、左腕に腕輪を嵌め腰に何か変わった顔のようなバックルが着いたベルトに薄い野生児がジャングルで着るような衣服を。

「お前、泣かない、元気、出す」

日本語が少し危つく片言だった、だが笑顔は心を持った人間と同じ笑顔……いや、それ以上の笑顔だった、その笑顔を見て男の子は泣き止むと男は近くで泣いている子供を宥めに行く、人々が目を眩ましている金を踏み付けて。

「私も……………」

星輝もその男と同じ事をするために、数分するが混乱は収まらず、困っていると怒号や泣き声の中から、心地がいい音色が響いてきた。

「バイオリン……………」

それはバイオリンの音色だった、音楽も少しかじっている、だがこの曲の名は知らなかった、その音色は人々の心を落ち着かせた。人々は我に戻り自分達の子供の元に戻っていった。

「今の演奏は誰が……………」

人々はその場から去る、そこに残ったのは札や100円玉等々と先ほどの男だった。

「オマエ」

男は話し掛けてきた、何かと思うと。

「一緒に、子供、落ち着かせた」

自分の行いの事だった、どうって事はない、そう思っていると男は両手の指をその指の間に組んで小指を立てた。

「だから、オマエとオレ、トモダチ」

唐突だった、いきなりトモダチと言われたが嫌ではなかった、理論とか理屈で動くような男ではない、そう思い「はい」と答えると。

「星輝ちゃん」

呼ばれた、男の後ろから歩いてくる身長と半分ぐらいあるケースを持ったすずかと、すずかと同じ身長ぐらいの金髪の少女が歩いてきた。

「すずかと……………」

金髪の少女には見覚えがあった、この世界のと自分が知っている世界のとは直接の面識はないが知っていた。

「アリサ・バニングスよ、すずかの友達の」

やはりそうだった、並行世界のアリサ・バニングスがこの世界にいるという事はこの世界の高町なのはもいるのではないかと考えたが喫茶店アミーゴがあるのは自分が知ってるもう一つの海鳴市にある翠屋という喫茶店、

すると自分がこの世界の高町なのはこの事になると考えたがそこまでにした、関係ない、今を生きているからそれでいいと。

「コイツ誰よ？」

アリサは男を見て問い掛けると。

「オレ、アマゾン、ブラジルのアマゾン川から来た」

名前通りだった、アマゾン川なら誰もが知っている。

「今、星輝と、トモダチに、なった」

先ほどすずかが星輝と呼んだ為名前が分かりトモダチとなったと言
う。

「否定はしません、確かになりました」

アマゾンは一コツと笑い、無邪気な笑顔だった。

「それと、さっきの音楽、オマエの」

「え………あ、はい」

すずかは肯定した、先ほどのバイオリンの音色は彼女が流したもの
だった。

「オレじゃ、騒ぎ、止められなかった、アリガトウ」

自分はただ子供を宥めただけ、それしかできなかったがすずかはそ
れ以上の事をしてくれた、そのため礼を言ったのだ。

「いえいえ、アリサちゃんに後押ししてもらえなかったら………
何も………」

「だけどすずかの演奏は人を落ち着かせたり癒したりする効果ある
んだから」

すずかに特別な力があるのかと思っていると青年がやってきた、太
牙だった。

「すずか、アリサ、そろそろ」

「あ、ごめんお兄ちゃん」

「彼女が？」

星輝を見てこの前すずかが話していた少女だと思い聞いてみると頷いて返す。

「ん？」

アマゾンとは牙とすずかを見て何かを感じていた、それは太牙もだった。

「貴様………何者だ？」

アマゾンから人間ではない気配を感じていた、それはアマゾンもだ、太牙とすずかからただならぬ気配を感じていたが。

「オマエもイイ奴、だから倒さない」

それだけを言い残し去っていった。

「まさか……………」

星輝は彼が何なのか気付き始めていた、実証はないが感が鋭い彼女はもう、隼人、風見、結城、敬介と同じ悪と戦う者だと。

第23話

【トモダチとハダカと重力コンボ】

星輝が太牙が運転する車に乗りすずかの自宅へ向かっている頃、映司とアंकは黒いアゲハ蝶のヤミー、クロアゲハヤミーと遭遇し映司はオーズ・タトバコンボに変身してメダジャリバーで応戦していた。

「セイヤツ！」

メダジャリバーを大きく振るうがクロアゲハヤミーは空を飛んで避ける。

「しまっ……………うわぁーっ!？」

クロアゲハヤミーは羽根を羽ばたかし鱗粉をばら撒く、鱗粉を浴びたオーズの体から火花を散らす。

「空を飛ぶ……………厄介だな……………」

すると何かを思い出す、前に戦ったエイサイヤミーが重力を操った、ガメルも操る事ができる、なら今手元にあるガメルのメダルなら……………と考えたがコンボを使わせるべきか考えたが、その結果使わ

せないと決めシャチメダルとウナギメダルを投げ渡した。

「それ使っておけ！」

「コンボじゃないんだ………まあいいや！」

メダルを入れ替え読み込みシャウバとなりウナギウィップをクロアゲハヤミに巻き付け電流を流して地上に落とす。

「次はこれ使え！」

次にカマキリメダルを投げ渡し今度はシャキリバにチェンジ、カマキリソードを構えて走りだす、クロアゲハヤミは飛んで逃げようとするがシャチヘッドから水流を放ち羽根を濡らし飛べなくし動きを止めてカマキリソードによる斬撃を食らわしていく。

「そろそろ！」

【スキヤニングチャージ！】と必殺技の体勢に入り目の前に三つの円が現れ走りだしそれを潜り抜けていくオーズ、腕を広げカマキリソードで切り裂こうとしたその時、背中に砲弾が命中し爆発。

「うわああああっ！！！！！！？」

「何？」

横を向くとバズーカを構えた後藤がいた、バズーカの砲弾でクロアゲハヤミを倒そうとしたらしいが誤ってオーズに命中してしまったのだ。

オーズは大きく吹き飛びクロアゲハヤミは逃走する。

「待て！」

追い掛けようとしたら突然水流に流され壁に激突。

「メズール！」

「ウヴァのヤミー見たから来てみればやっぱり」

少しご機嫌な妖艶漂う声で話すメズールとガメルがいた。

「オーズ、メズールのメダル、返せ！」

ガメルは突進し立ち上がるオーズを吹き飛ばすとダメージの限界が越えたのか変身が解けシャチメダルとカマキリメダル、入れ換えて使ったウナギメダルが吹き飛び三つ共メズールが回収しカマキリメダル以外は全て取り込む。

「残りも返してもらわよ」

ゆっくりとアंकに近付くが。

「チツ……………ガメル！」

「ん？ あっ！」

アंकはタコメダルを遠くへ投げ飛ばした、ガメルはそれを追い掛け走り去った。

「あら……………ガメル！ 待ちなさい！」

一人ではさすがに分が悪いと悟りメズールはガメルを追い掛けて去った。

「助かった……………」

映司はアंकに掴み掛かれるのかなと思いきや掴み掛かったのは後藤の方だった。

「お前、なんでオーズの邪魔した？」

今回の敗因は後藤にある、それは分かっていた為映司ではなく後藤に怒りの矛先を向けた。

「ヤミーを倒そうとして何が悪い？ 射程内に入ってきたオーズが悪いだろ？」

悪怯れる気はないらしく言い返す後藤はオーズが邪魔をしたと言いつ張る。

「てめえが何もしなければヤミーは倒せてたんだよ！」

メダルが奪われた事に苛立っている為後藤を右腕で殴ろうとしていたが映司に止められる。

「まあまあ落ち着いて二人共！」

「てめえは悔しくねーのか？」

後藤にそこまで言われているにも関わらず何も言い返さない映司。

「取り敢えずヤミーとグリードを追い返したんだ、今はそれをよしとしようよ、あのままだったらメダルどころか俺達の命も危なかったと思うし」

正論であつた、それには二人は言い返す事はできなかったがそんな映司に後藤は苛立ちを返せなかった、なぜこんなへらへらしている奴が仮面ライダーなんだと。

「俺にオーズの力があれば……………」

後藤が呟くと映司は「なら順番に変身しますか？」とあつさり後藤にオーズの力を貸そうとするが。

「バカ、オーズはその封印解いたお前にしか使えねーんだよ」

映司以外には使えないらしくそれを知り謝るがその行為が更に苛立たせる。

「もういい、お前みたいな目の前の事しか考えていない奴と一緒にいると腹が立つ」

後藤は世界を守るといふ行いがしたく鴻上フアウンデーションのライドベンダー隊に入ったのだがその行為からまったく掛け離れ危険な存在をみすみす逃がした映司を非難し、これ以上いても仕方ないと思ひ会社へ戻った。

「すずかの家、広いですね」

その頃星輝は月村邸に到着しその広さに驚いていた、最近の子供らしいところも見せている為当然の反応かもしれない。

「そりやすすかの親はなんたつて……むぐう!？」

アリサは何か余計な事を言おうとしたのが慌ててその口を後ろから
すずかが塞ぐ。

「なんでもないからね」と言うが、星輝はもつと彼女達と近付きた
い、そう思い先ほどの行動やアマゾンの言葉から何か隠し事がある
と察し、自分の秘密を明かす事にした、魔導師や異世界の人間だと
証拠に魔導師姿やルシフェリオンを見せた。

「Oh Beautiful」

アリサは英語で美しいと言った。

「本当に魔法使いなんだね!」

「ええ、まあ」

昔の自分ならそう簡単に正体明かさないなと思いき星一の影響受けた
かと思っていた。

すずかも自分達家族の秘密を話し始めた。

「私、人間とファンガイアって言う種族のハーフなんだ」

ファンガイアとは、バンパイア、吸血鬼の元になったとされる種族
である。

星輝はファンガイアの事は本で知っていた、昔は人間の生命エネル
ギーを主食にし暴れていたが今では姿を見せなくなり絶滅説や生存
説が謡われていた。

「私のお父さん、月村音也は人間で母さんの魔夜がファンガイア

のクイーンなんだ」

ファンガイアにはチェックメイトフォー、最高クラスのファンガイアの事を言いその称号でキング、クイーン、ビショップ、ルークとありキングとクイーンが高い地位である。

「だけど音也さん、人間でキングやってるからね」

「うん、ダークキバにも変身してね」

「ダークキバ!？」

ダークキバとは仮面ライダーの一人で変身するにはファンガイアの中でも相当な魔力が必要とするためただの人間がなれるのかと疑問に思っていたが。

「だがお父さんは自分の体とファンガイアと同じ性質を持った体に改造手術をしダークキバに変身し25年前のキングを倒したのよ」

そこにすずかの10年後を描いたような姿の女性、姉の忍が紅茶を入れ持ってきたのだ。

「25年も……相当歳食ってますね……」

歳食っても若い姿の人間を知っている為さほど驚かなかった、ファンガイアならなおさらだろう。

「初めまして、姉の月村忍よ」

忍も名前を名乗り後双子の兄で渡がいるらしいが音也と共に出掛けているらしい、なんでも婚約者の所に。

「そうなのですか……………」

婚約者という単語を聞き少し羨ましいと感じていた、自分も星一と婚約できれば星一の未来は頂いたとも当然なのにか。

「っ！」

だがその考えはすぐに吹き飛んだ、外に得体の知れない物が一瞬目に写り込んだからだ。それを教えると忍は警備員達に警備の強化するように携帯で指示をする。

「まさか……………」

鋭い感が何か気付いていた、先ほどの現金バラ撒き事件と関係があるのではないかと。

その頃、先ほどの行為が正式な指示ではなく勝手な行為という事で鴻上から謹慎を言い渡されたのだが後藤はライドベンダーで走りだそうとしていた。

「後藤くん」

そこに真樹が現れた、いつものように腕に人形キヨちゃんを乗せながら。

「真樹博士……………」

自分を笑いに來たのだと思っていると。

「私は今、メダルの力を自由に制御できるシステムを開発しています」

それには興味が湧き試作品ができたなら是非自分に使わせると言うがそのまま去られた、舌打ちをし仕方ない、無い物は無いと考え走りだした。

「お、狭間やないか！」

「筑波さん！」

ヤミーを探していた映司は旅仲間の筑波と出会うが何か違和感を感じていた。

「筑波さん関西人でしたっけ？」

「えや？ まあそつやで」

おかしいと考えているとアंकが。

「コイツ、ヤミーの親だ」

「えっ！」

筑波からヤミーの気配を感じ取り映司に耳打ちをする。

「どうしたんや？」

「あ、いや……………」

直接言うのは不味いと思い止まるがクロアゲハヤミーが近くに現れた。

「ヤミー！」

映司はオースドライバーを腰に装着するが。

「あーご苦労さんや」

だが筑波はクロアゲハヤミーを迎えた、そして持っていた札束を持ち帯を取り上へ向け投げた。

「何しているんですか！」

「何って……………人の為や」

なぜかと思ひ話を聞く。

「金持ちは銀行に金溜め込んで誰も他人の為に使おうなんてしないやろ？ だからボランティア活動も遅れるし他国の貧しい人々も救えないんや！」

貧しい人々を救う、それが筑波の欲望だった、確かに映司もそれはわかる、だがやり方は間違っている、それははっきりと分かった。

「あなたは……………間違ってますよ！」
「なんやと？」

そこに騒ぎを聞き付けた後藤がやってきて映司の言葉を耳にする。

「確かにお金は大事です、お金持っている人は自分の為や政治の道具にしか使わない！ だけど今のあなたも同じです！ あなたは人の為にやっている気になっているだけです！」

反論できなかった、映司の言う事は正論だが、政治家も人の為にやっている事も自分の為で自己満足、やっている気になっているだけだった、映司はその事をよく知っているから言える。

「大事なのは自分が何をしたかです！ だから俺は今、自分にできる事をやります！」

映司はメダルをセットし。

「仮面ライダーとして！ 変身！」

オースキャナーで読み込ませオーズ・タトバコンボに変身した。

「狭間が……………」

オーズはクロアゲハヤミーに斬り掛かり攻撃を食らわせていく。

「そうだ……………俺もだ……………世界を守ってる気になってただけで何もしていない……………」

後藤も考えを改めていた、オーズは攻撃を一旦止め回りにいる人々

を庇いながらクロアゲハヤミーの攻撃を体で受け止めていく。

「俺は……………」

クロアゲハヤミーは空を飛び鱗粉攻撃をする、メダルチェンジしようともできず苦戦しているとクロアゲハヤミーに何か巻き付く。

「蛇！？」

蛇に似たメカだったがそれは蛇ではなくウナギだった。

映司は蛇が苦手で取り乱していたが。

「それはウナギだ！」

後藤はオースに教え落ち着かせるとその隙にアंकはメダルを投げ渡した、灰色のメダル三枚だった。

「それでトドメだ！」

「ああ！」

メダルをセツトし読み込ませ「サイ！ ゴリラ！ ゾウ！ サゴゾ……………サゴゾオ！」と流れ頭部は灰色でトンがった赤い眼のサイヘッド、腕は太いゴリラアームにゾウレッグのサゴゾコンボにチェンジ、腕をオーラングルサークルに叩き付けドラミングするとウナギカン解いた飛び立とうとするクロアゲハヤミーは重力を操られた所為で落下、地面に足がめり込む。

オースキャナーでメダルを読み込むとクロアゲハヤミーは無理やり近付かされていきそして強烈な頭突きサゴゾインパクトを食らわれ撃破し変身が解け映司は倒れるが支える者がいた。

「後藤さん……………」

後藤だった、映司の事を認めた後藤は力尽きた体を支えていたのだ。

「狭間……………わい……………」

筑波は関西弁はなぜかそのままだったが映司の言葉が胸に響いたのか反省していた。

「いいですよ、間違いに気付いてくれれば」

「俺、どっかのボランティア活動に参加する所から始めるよ」

「それがいいですよ」

筑波はそう言い残し別れを告げてから去ると。

「俺、後藤さんの事、嫌いじゃないですよ」

微妙な言葉を言う微笑む映司と固い表情の後藤と外方向いてるアンクがその場に残った。

なぜ筑波の関西弁が抜けない原因は、彼の欲望は困っている人に現金を渡す以外にもう一つ、自分が有名になればもつと金は入る、有名になりたいという欲望もありクロアゲハヤミーからキアゲハヤミーというアゲハヤミーの黄色いバージョンが生まれ有名になりたい欲望はキアゲハヤミーが集めていたのだ、

まずは喋り方と思い関西人の口が上手い人間を襲いその喋り方を筑波に与えていたがそれには本人も気付いていなかった。

そしてキアゲハヤミーが狙うのはすずかのバイオリン技術だった、その演奏があればもつと有名になれると考えた為襲おうとし屋敷の森に潜んでいたがそこに……

「見つけたぞ」

太牙が立ちふさがった。

「貴様に姉さんと妹に手は出させない、サガーク！」

円盤状で青いディスクを乗せたような生物サガークが飛んできて腰に装着するとジャコードーという武器を手にしサガークに突き刺すと青い眼の白く蛇を模したような姿の仮面ライダーサガに変身しジャコードーを抜くと赤い刃が伸びる。

「やっぱり！」

星輝やすずか、アリサ達が出てきてしまいサガは中に戻るよう促すがキアゲハヤミーは三人襲い掛かったその時だった！

「ガアアアーツ！」

何者かが飛び付いて地面に叩き落としたのだ、それは……

「アマゾン！」

昼間に会ったアマゾンだった。

「オレ、オマエ達、トモダチ、だから守る」

キアゲハヤミーに敵意を剥き出しにすると両手を広げこう叫んだ。

「アアアアゝマアアアゝゾオオオゝン!!!!!!!!!!!!!!」

するとアマゾンは赤い眼でトカゲのような姿に変身した。

「やっぱり！ ゲドン、ガランダー帝国を壊滅させた！ 仮面ライダーアマゾンだったんですね！」

アマゾン……山本大介は仮面ライダーだった。

「まさか先輩に当たる男だったとは……………」

サガも驚いていたが今はキアゲハヤミーだ。

キアゲハヤミーは鱗粉攻撃をしようと空を飛ぶがアマゾンライダーはそれに掴み掛かりまた地面に落とすとサガがジャコーダーでキアゲハヤミーを斬り付けていく。

「キキイーツ！」

腕のヒレで同じように相手を斬り付けていくアマゾンライダー、決着はすぐに着いた。

ジャコーダーから赤い刃が伸びキアゲハヤミーを貫き動きを止める

と。

「大！ 切！ 断！」

腕のヒレで思い切り切り裂く大切断でキアゲハヤミィを両断し倒し
両者は変身を解いた。

「大丈夫か？」

聞くまでもないが心配性な部分があるのか聞いてくるアマゾン、三人は「はい！」と返しアマゾンは笑うのだった、新しいトモダチが増えたのに喜びを感じつつ。

オーズが使えるメダルは……………

タカ×2
トラ×1
バッタ×1
ライオン×1
チーター×1
サイ×1
ゴリラ×1
ゾウ×2

第23話【トモダチとハダカと重力コンボ】（後書き）

次回の予告やるとかなりのネタバレ含みますのでタイトルだけで。

次回『第24話【蘇る記憶】』

第24話【蘇る記憶】

「こっちに追いで」

どこかの砂浜、白い帽子を被りワンピースを着た女性が手招きをしながら走っていた。

「待ってよ、姉さん」

茶髪の少年と銀髪の少女が走って追い掛け……

その手を握るのだった。

「姉さん！」

バツと起き上がり荒い呼吸を調え横を向いたりする、自分がいる部屋は知らない場所で戸惑っていた。

「ここは……………」

窓からは湖が見えた、綺麗な湖が。

「俺は……………」

水のエルに敗北し川に落とされたその後の事は覚えていなかったが。

「そうだ、俺、すべて……………全部」

だがここにいる星一は今までの彼とは違かった、そう、すべて思い出したのだ、失われていた記憶を。

「行かなきゃ……………」

ベッドから降りるが傷がまだ癒えてはおらず座り込んでしまっ。

「木野……………哲也さんの……………所に……………」

何とか立ち上がり部屋から出る、そこは長い廊下でどこかの屋敷の中だった。

星一は走ろうとしたが激痛が走りゆっくりと足を一步步ずつ動かし歩いていき出入口を探す。

「……………」

だがだんだんとその足取りは重くなり止まってしまった、星一は恐怖に見舞われていた、また水のエルが現れるのではないかと。

「また……………アイツが現れたら俺は……………」

また戦ったら自分は負けて今度こそ死ぬかもしれない、そう思っていた。

足を上げてゆっくり歩きだすと曲がり角に差し掛かり曲がろうとしたら「死ぬまで借りてくぜ」と声が聞こえた瞬間星一は誰かと激突し倒れた。

「あだだ……………痛えー」

星一とぶつかったのは金髪で白黒の服と黒いトンがり帽子を被った少女だった、近くには竹箒や本が転がっていた。

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫！？」

星一はすぐに駆け寄り怪我がないか見る。

「だ、大丈夫だぜ！こっちも前見ないで飛んでたから」
「よかった……………」

すると少女を追い掛けてきたのか紫の長い髪にパジャマっぽい服を着た少女が早歩きでやってきた。

「つ、捕まえたわ魔理沙……………ハア……………ハア……………」

息が上がっており星一は彼女がすぐに喘息持ちだと判った。

「喘息持ちですか？」

「え、ええ……………てあなた目が覚めたのね」

聞かれて「あ、はい」と答える。

「コイツが紅魔館の前に流れ着いてた人間なのか」

「紅魔館！？」

その反応に二人は星一がこの屋敷、紅魔館の事を知っていると分
かり疑問に思う。

「紅魔館を知ってるの？」

「はい、そしてここは幻想郷……………」

「お前……………外来人だよな？」

星一は静かに頷いた。

「俺は津上星一、あなた方が言う外の世界から来た人間です」

今、星一がいる場所は幻想郷と呼ばれる日本のどこかにある空間
だった。

「わたしは霧雨魔理沙きりさめ まりさだぜ」

金髪の白黒少女の名前は霧雨魔理沙。

「私はパチュリー・ノーレッジよ」

紫の髪のパジャマの少女はパチュリー・ノーレッジである。

「あなた、来たことあるの幻想郷に？」

「聞いた事があるんです、姉に」

「姉？ 誰だよそいつは？」

星一は今は近くにはいないが自分が帰る場所にいる彼女の名前を口に出した。

「紅魔館のメイド長、十六夜咲夜……………いや、俺の双子の姉さん、津上咲夜」

第24話

【蘇る記憶】

「あのメイド長の！？」

「本当なの？」

星一は頷くと自分が身に付けていた銀の懐中時計を二人に見せ納得させた。

「みたいね……………」

「はい」と力強く答えるがやはり体が痛むのか苦痛の表情を一瞬

見せた。

「まだ体が痛むじゃないの」

「大丈夫ですよ、俺…………強いですから」

だがその笑みは弱々しいものだった、さっきの力強い返事とは裏腹に。

「どこがだよ、そんな辛そうな顔で笑いやがって、本当にお前メイド長の弟なんだな」

「咲夜も？」と魔理沙の言葉に返すと二人は頷く。

「そんなに動きたいならこの屋敷の当主に会いなさいよ」

「……………はい」

姉が三年間もお世話になっているんだ、そう考えたら会わない訳にはいかないと感じ。

「いつもなら咲夜が案内するけど……………今は外の世界なんでしょ？」

「喫茶店、任せたままですね……………」

「じゃあわたしが案内するから本の件は諦めな！」

「却下」

「……………当主の部屋は」

数分後、他とは少し違う扉の前に星一達は立っていた。

「ここだぜ、その部屋は」

「自分が案内したように言わないの」

礼を言ってからドアノブに手を掛けて回し扉を引き「失礼します」と挨拶してから入る、その奥に机が置かれ椅子に座ったコウモリのような羽根を生やし赤い瞳の少女が座っていた。

「あら、流れ着いた人間起きたのね」

「津上星一です」

「私はこの紅魔館の当主、レミリア・スカーレットよ」

互いに自己紹介すると。

「咲夜お茶も……そうだった、咲夜はいないのよね」

この感じから咲夜はこの屋敷にはいなくてはならない必要不可欠な人物なんだと理解できた。

「俺が淹れましょうか？」

「あなたに淹れるの？ 私好みの」

「はい、俺の記憶が間違いなければ」

自信があった、彼女が淹れる紅茶は誰かの好みであるものだと思っ
付いており淹れ方やブレンドなどは舌で覚えていた。

「いいわ、厨房貸して上げるからワゴンも持ってきてここで淹れな
さい」

「かしこまりました……お嬢様」

「っ！」

星一がその言葉を使った瞬間、彼女の目には今はいないメイドの姿が重なった。

それを気付かず星一は部屋から出て廊下で待っていたパチュリーと魔理沙に厨房の場所を聞いてそこへ向かった。

「なんで……咲夜の姿が重なったのかしら……」

それからワゴンにティーポットやカップ、お湯等に乗せてゆつくり丁寧に紅茶を淹れ始めた。

「これで最後に」

一つのティーカップの中の紅茶に星一は指に切り傷を入れて血を一粒淹れる。

「どうぞ」

カップを渡すとゆつくりとレミリアは紅茶を飲み始めた。

「あ……美味しい……というよりは私がいつも飲んでた咲夜の紅茶」

「はい、そっくりそのままの手順ですから」

ニツと笑い答える星一に対し「やっぱりね」とカップを皿に乗せ

て呟いた。

「私は運命を操る程度の能力を持っているの、だから自分の未来が見えたりする時があるわ、

この紅魔館のメイド長の咲夜と同じ紅茶を飲ませてくれる男を見たのよ」

「それが俺だと？」

「ええ、あなたは咲夜とはどんな関係なの？」

聞かれると双子の姉弟であると答え今は自分の喫茶店に居ると伝えた。

「そう、本当に運命かもしれないわね、姉の咲夜がここでメイドをやって居なくなると入れ替わるように弟のあなたが来たのだから」

「そう………かも、しれませんがね」

「で、あなたは何に怯えているの？」

さすがは自分の姉が仕えていたお嬢様、今の状態が変だと気付いていた。

「………少し………戦うことに」

「戦うこと？　というときはやはりあなたもアギト？」

その質問に静かに頷くと話を続けた。

「見るとアンノウンに手も足も出ないで完全に敗北したような感じね」

「おっしやる通りです………それも二度目です」

相手が水のエル、名前はわからないが特徴を教えあかつき号が嵐

に巻き込まれて甲板に現れてアギトに変身してしまった自分と姉に襲い掛かりやはりその時も手も足も出ず、記憶喪失だったことも教えた。

「そう……二度も敗北して完全に戦意喪失したってことね」

紅茶を飲み切ると机にカップを置くと罅が入り割れてしまった。

「くだらないわね、実にくだらないわ」

その見下すような言葉にはさすがの星一も怒りを露にした。

「あなたに何がわかるんですか！？ あんな強い奴と戦って二度も負けて……それも攻撃もできずに！」

「そうね……確かに、もし記憶が戻らないでそいつとの戦いが一度だけだったらどうするの？」

その意味は記憶が戻ってるから二度も敗北したと強く印象付けているから弱気になっている、だが戻らず一度だけの敗北だったらどうしていたかを聞いている。

「そしたら……勝てるように頑張りますよ」

「ならなんでそうしないの？ 咲夜も可愛そうね、こんな恥ずかしい弟を持って」

何も言い返せなくなってしまっていた、彼女の言う通りだからだすべて。

「それに、あなたは一人で戦っているの？」

「……いえ」

優太や正義、信司など沢山の仲間がいる、なぜ一人で戦っている気になっていたのだろうか、
水のエルという強敵が現れ焦っていたのだろう。

「まあ咲夜も同じ感じだったわね……………」

「え？」

「あの子がアギトになった時、未確認……………アンノウンと戦えるのは自分だけなんだって焦っていたわね、
この幻想郷にはアンノウンと対等に戦える妖怪や人間がいるのよ、
魔理沙もその一人よ」

一旦区切りを入れて紅茶を淹れるように命じる、やはりお嬢様だから、頼むのではない、それに応じ紅茶を淹れ始める。

「その考えを正させたのはこの幻想郷を隠す博麗大結界を管理している巫女よ」

「姉さんを変えた人が……………会ってみたいな」

「会って来たら？ まだあなた外の世界に帰り方知らないし、帰る時はその巫女の神社から出るし」

「はい」

星一はワゴンを押して部屋から出た。

「……………咲夜に似てないようで似てるのね、羨ましいわね」
「だろうな」

「あら、盗み聞き？ 音也」

吸血鬼は日光に弱いたためカーテンを閉めきっているが窓は開いている、カーテンを余り開けないで部屋の中に入ってきたのは月村音

也だった。

「渡は地下かしら？」

「ちゃんとフランと遊んでるぜ」

行儀が悪く机の上に座った。

フランとはレミリアの妹、フランドール・スカーレットのことである。

「そう……あの子も五年もしたら大人になってくれるかしら」

レミリアはこう見えても500歳は越えている、やはり吸血鬼という妖怪なため寿命は長かった。

「さあな、そこは渡がカバーしてくれるだろ」

「しっかりしてるものね……」

「大丈夫だ、お前もフランも似てるところは沢山ある」

「ホントかしら？」

「俺が女に対して嘘を吐いたことがあるか？」

「あるわよ」

即答だった、バカにしたように笑い。

「だけど、あなたが嘘を吐いてる時とない時ぐらいは分かっているわよ、今のは吐いていない」

「ああ、似てるよ、意地っ張りな所が」

「うるさいわね、あそこまで子供じゃないわよ」

「そっいつ反応するから子供なんだよ」

完全に音也に遊ばれている、それには気付いていたがなかなか抜

け出せない、音也がかなりのやり手だからだ。

「あなたには適わないわねホント、愛する女のために自分の体を切り刻むなんて」

「それが俺の愛へのこだわりさ」

「ホントに飛ぶの？」

「飛ぶぜ？」

紅魔館の庭、魔理沙が箒に跨っておりその後ろに星一が乗り肩を掴んでた。

「しっかり掴まってるよ！」

「うっ……ふえっ!？」

返事を返そうとしたがいきなりしかも高速で飛び始めたたむ間抜けな声を上げてしまった。

「いきなり飛ばないでよ！」

「わたしは最初から最後までクライマックスなんだぜ！」

そのまま湖を越え、そして森の上を通過し木で建てられた建物が集まる人口密集地を越えるとまた森に。

「ほら！ あそこに神社が見えるだろ！ アレが博麗神社！」

目の前に鳥居が立派に立つ神社が見えてきた、それが博麗神社はくれいである。

「立派だねー」

「いーや、あそこほとんど賽銭貯まらないから外見だけだよ」

酷い言われようである、境内に降りるが。

「多分れいむ霊夢はいないと……あ、霊夢ってのはこの神社の巫女な」
「なんでいないの？」

「この時間帯は縁側でお茶飲んでるはずだからさ、縁側にいないから出掛けてるんじゃないかねーか？」

この前お茶の葉がない言ってたし里に出掛けちゃったかも」

「ふーん」と返すと魔理沙はすっからかんの賽銭箱の上に座る。

「綺麗な空気……」

「だろ？ 外の世界から来た人間から聞くと都会って所は空気が汚いんだろ？」

「うん、だけど綺麗にしようって努力してるけどね」

星一はその場に座り込み空を見上げる。

「日射しも気持ちいいし、咲夜はこないい所を守ってたんだ」

「そうだが、自分は居場所がない、

だけどその居場所を作ってくれた人がいるここを守りたいってな」

「そっか……………」

「そういえば記憶喪失になる前の咲夜ってどんな感じだったんだ？」

記憶喪失の後の咲夜は知っているが昔の事は知らない、今近くにその昔の事を知る弟がいる、少しの好奇心から出た質問である。

「俺とは正反対でクールなんだけど、明るい時は明るい人だよ、なんでもできるけど、料理は負けなかったよ、引き分けだけど」

「なるほどな、余り変わらねーじゃん」

「俺もだけどね」

ニコニコと笑うが、やはり津上咲奈の死があり暗い雰囲気になってきた事があったようだった。

「咲夜も、記憶戻れば……………いや、忘れていた方がいいかも、

姉さんが死んだこと、忘れていた方が……………」

「星一？」

「俺も、記憶戻ったから戦うのが怖くなってるんだ、なら覚えてない状態が」

「そんな事、ないんじゃないか？」

賽銭箱から魔理沙は降り、立つとゆつくりと星一の隣に。

「誰だって戦うのは怖いだろ？　それが普通なんじゃないのか？」

「それが普通？」

「ああ」とゆつくり頷き話を続ける。

「覚えてる覚えてないの前に、戦うことに対する恐怖がないとダメな気がするぜ、怖いからこそ逃げちゃいけないとわたしは思う」

「魔理沙ちゃん……………そうかもね」

少し微笑む、その刹那顔が真剣なものとなり立ち上がる。

「アンノウンだ……………」

「マジかよ」

星一は走りだし階段を駆け降りていく。

「アンノウンの気配を察したら回りが見えなくなるのも同じだな」

その後を魔理沙は追うのだった。

博麗神社周辺の森の中、その中に一人の紅白の巫女服に赤いリボン、黒髪の少女が身構えていた、彼女こそが博麗霊夢である。

「まったく、買い物帰りにアンノウンに出くわすなんて……………最悪ね」

お札を何枚か片手に持ち回りを飛び交う黒い鴉のようなクロウロードの怪人、コルウス・イントンススが霊夢を狙っていた。

「闇雲に投げても当たらないわよね……………」

身構えたまましているとイントンススは槍を召喚し突貫するが間一髪のところを避けるがそれがずっと続く訳がない。

「咲夜がいたらな……………」

毒づいているとイントンススはまた突撃してくる、だが霊夢はその真っ直ぐ向かってくる瞬間を逃さなかった、自分も真っ直ぐお札を何枚も弾丸のように投げる、それにイントンススは直撃し地面に落下する。

「これなら!」

このまま滅多打ちにしようとしたのだが背後に気配を感じ振り向くとそこには同じくクロウロードのコルウス・ルスクスが迫っていた、万事休すかと思われたその時だった。

「おりゃああああっ!」

「うげっ!?!」

ルスクスは魔理沙が乗る高速で飛行する箒に弾き飛ばされ木に激突した。

「魔理沙!」

「危ないところだったな!」

箒から降りると槍を持ったイントンスと刀を持ったルスクスは立ち上がる。

「だけど変わらないわよ？」

「いや、心強い助っ人がいるぜ！」

魔理沙が向く先には木の枝に乗った星一がいた。

「人間！？」

「それもただの人間じゃないぜ」

星一は構えると腰にオルタリングが出現しゆっくりと右腕を伸ばす。

「アレって咲夜と同じ！」

「ああ、アイツの名前は……アイツから言わせるか」

「ハアアアア………変身！」

オルタリングの両側のスイッチを押すと賢者の石は赤、青、金色と順番に輝いた、いつもとは違う感じで金色の光に包まれるとそこから飛び降り、二人の前に立ち光が飛び散ると胴体はグランドフォーム、左腕はストームフォーム、右腕はフレイムフォームとなった三位一体の姿、仮面ライダーアギト・トリニティフォームに変身した。

「咲夜と同じアギト！？」

「津上星一、十六夜咲夜の双子の弟で仮面ライダーアギト」

名乗りを上げるとクロウロードはアギトが現れたのに驚きを隠せ

なかった。

「アギト……………！」
「アギト！」

だが自分達の使命は力を持つ者の抹殺、そのため武器を構えて走りだす。

「……………ハッ！」

左側のスイッチを押すとストームハルバードが飛び出しイントンスの腹部に直撃し突き飛ばすとそれを持ち刃が展開する。

「上手い……………！」
「てか後ろ！」

ルスクスが後ろから斬り掛かろうとしてきたがストームハルバードで刀を受け止められ右側のスイッチを押しフレームセイバーを出し握る。

「しゃがんで！」
『え？』

言われた通りしゃがむと頭上をフレームセイバーの刃が通過し刀を弾き飛ばす。

「危な！ 振るなら振る言いなさいよ！」
「ぐめんぐめん」

フレームセイバーをルスクスに投げ付け腹部に突き刺す。

「ぐがあっ!？」

するとクロスホーンが展開しルスクスの体は燃え上がり爆発した。

「ハッ！」

飛び込みフレイムセイバーを回収するとイントンススが迫りくる。

「星一後ろ！」

魔理沙が呼び掛けるが振り向かず構えたままだった。

「ハアアアアア……………！」

イントンススは槍で突き刺そうとしたのだが自分の武器が届く範囲内に入ってくると振り向きストームハルバードで槍を弾きフレイムセイバーで腹部を貫く。

「タアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ストームハルバードで一閃、更にフレイムセイバーで追い討ちとファイヤーストームアタックを炸裂しイントンススは断末魔を上げ爆死した。

「本当に、咲夜の弟なの？」

「完璧みたい、レミリアのお墨付きだぜ」

「アギトは力を抜くと変身が解除されるのだった。」

第24話【蘇る記憶】（後書き）

これからトリニティが基本フォームとなります。

次回予告

咲夜

「どこか一緒に出掛けない？」

星輝

「いいですね」

深海

「G3-Xやアクセルにはとても興味があるんです」

咲夜

「星一は私のなんだったのかしら……………」

星輝

「私は……………」

咲夜

「思い出した……………星一は私の弟よ!」

次回 第25話【咲夜】

第25話【咲夜】（前書き）

今年最後の投稿ですね多分。
ではお楽しみください。

第25話【咲夜】

喫茶店アミーゴ、店長がいない店では副店長である咲夜が切り盛りしていた。

「咲夜、これが昨日の帳簿です」

「ありがとう星輝」

星輝や他のメンバーと協力しながら。

「紅茶飲む？」

客が少ない時間帯のため自分達店員もゆっくりできるため新聞を広げ記事を読みながら紅茶を飲んでいた。

「いただきます」

カウンター席に座ると咲夜は新聞を軽く畳んで適当な場所に置くと紅茶を淹れ始める。

「はい」

どうも、礼を言いカップを受け取るとゆっくりと赤茶色い液体を

口に含み流し込み喉を暖めていく。

「今日は少ない（客が）ですね」
「そうね」

緩やかな空気だと思いきやそうでもない、星輝が咲夜を見る目が鋭いものだったのだ。

「……………あなた、怖いわよ？」
「いえ、普通です、これがいつもの目付き……………のはず」

一方的な敵意を向けていたのだ、星輝が咲夜を恋敵だと思い。皆さんご存知だろうが咲夜と星一は少女が思っているようなそんな関係ではない、むしろ自分の姉になる相手かもしれない。

「敬介さんが来た時から何か変よ？」

この状態になったのは自分の気持ちに正直になった時からである。

「別に恋敵だとは思っていませんからね？」

確実に思っている、彼女も少女が好きな相手が星一なのは理解している。

「あなた、今正直に言っただわよ？」

「お気になさらずに、十年もすればあなたよりいい体格になっていると思いますから、特に胸が」

「……………私のはただ着痩せしているだけよ、ペタンコ」

「そうですかPAD長」

「影薄」

悪口の言い合いが始まり何か実力行使に出て砲撃とナイフが飛び交いそうだった、喧嘩を売ったのは星輝なのは明白。

「王様く止めなくていいの？」

雷夢が服を引っ張って聞くと。

「触らぬ神に祟りなしだ、祟りに遇いたいかな？」

ことわざを言い逆に聞くと首を横に振り関わらないことに決めた。

「そうだねー、やらせておけばいいか！」

「ああ」

店内から何か大きな音が聞こえ休憩室にナイフが飛んで入ってきたり魔力スフィアが飛んできたりとしプロテクションで防いで凌いでいた。

その頃、いつもの常連客である正義と言ったG3ユニットの小沢や小室、鈴木は警察の幹部らに呼ばれ会議室を目指していると。

「これはこれは小沢さん与其他皆さん」

北条が現れた、めんどくさそうに何？、と返す。

「自衛隊から研修でG3ユニットに配属されることになったんですよね？」

「そうよ、それが？ あなたには関係ないでしょ」

「どーせまた歓迎会は焼き肉なんでしょうね」

あなたの事は全部お見通しなんですよ、という感じで聞いたのだが。

「残念ね、焼き肉は行かないわ」

「な、なんですって！？」

自分の思い込みもとい読みが外れた事に驚愕しているがその間に様々な思考を巡らせていた。

「最近私達、焼き肉食べに行ってないの」

三人はその言葉に頷き北条はなぜ！？、と言わんばかりの反応を示すと。

「私達が今度焼き肉食べに行く時は津上星一が帰ってきた時よ、これで納得してくれるかしら？」

ドヤツとしながら言い行くわよ、と繋げると四人は歩きだし会議室へ向かった。

「なるほど……………なら私は喫茶店に行き、十六夜さんの作るランチを楽しんで彼の帰りを待ちますよ、彼の料理は美味しいですから」

いつの間にか彼も喫茶店アミーゴの常連客となっていた。

そして、小沢達は会議室に入ると三人の幹部に一人警官の制服ではない、自衛隊の制服を着た女性が座っていた。座りたまえ、と言われ四人は並んで席に着く。

「彼女がG3ユニットの責任者兼開発者の小沢すみれ」

次々とメンバーの紹介をしていくと最後に四人に。

「そして今回、自衛隊から研修にきたのが彼女、深海理沙一等陸尉だ」

五人は一礼すると話が始まった、警察と自衛隊の目的は人々の平和を守ることであるということなどを。

長い話が終わり会議室から出ていき深海と軽く会話をした、G3-Xやアクセルに興味があるなど、数分間話すとかのと別れ歩きながら小沢は我慢し思っていた事を口に出した。

「嫌ね、なんか」

「深海さんがですか？」

小室は誰もがその流れならそう思うことだと考え彼女の名前を出したが。

「違うわよ、空いた穴を埋める感じがして嫌なのよ私は」

空いた穴は星一の事だろう、その話で鈍い小室や鈴木でもすぐに

理解した。

「そうですね確かに」

「新しい仲間ならその仲間がいる時に迎えたかったわ……………」

しみりとした空気、歩いて格納庫に向かっていている途中ずっしりとし立派な体格をした男が歩き寄ってきた。

「本郷警視総監！」

彼の名は本郷猛、警視総監である。

「やあ小沢くん、そして氷川くん達」

四人はまさか警視総監と出会うとは思わなかったためかなり焦っており緊張していた。

「そんなに緊張しなくてもいい、特に君にはそんな風に接してはもらいたくはないな」

正義を見てそう言う、だがその本人はどういう意味が分かっているなかった。

「氷川くん、喫茶店に行くなら伝えておいてくれ、一文字にな」

本郷はそれを伝え去っていった。

「まさか……………」

「まったく、変な事で喧嘩しおつて」
「すみません」

アミーゴ、これ以上喧嘩が長引けば店が壊れると感じ闇夜が仲裁に入り王の威厳を見せるかのような態度で説教をしていた。

「星一が帰ってきた時の事を考えるとこれは絶対にいかな」
「そうだ、いかなぞ」

雷夢が同じような事を言つとなぜあなたにも言われなきゃならない、という目になるが闇夜の説教は終わらない。

「なんだその目は！ この塵芥あ！」

小沢の手で改造したエルシニアクロイツを出し杖先を向ける。

「まあよい、これに懲りたら喧嘩しない事だな」

説教は終わりずしと休憩室に入っていた。

「だけど星るんもこんな風に喧嘩するんだね」

ニヤニヤし小馬鹿にしたように言われるが何も言い返せず。

「けどそんな星輝、いいと思うよ、昔の感情を表に出さない冷めた反応より」

「雷夢……………」

ブイ、とピースを作りニツと笑ってから休憩室に入っていた。

「そっか……………」

「咲夜？」

突然何かがわかったように呟き。

「似ているのよ、私とあなたが、だから私も向きになったと思う、紅魔館に来た頃は冷めていたから」

「咲夜……………私の方こそすみません、喧嘩振って」

互いに非があるのを認め謝る二人、そして笑って許す、それが一番理想的な謝り方かもしれない。

「いいわよ、けど星一とはそんな関係じゃないと思うのよ、何か知らないけど」

星輝でもその言葉の意味は分からなかった。

「そうだ、今度休みの時、一緒に出掛けない？ 二人だけで」
「え……………」

思い起こせば星一との買い物は叶わず、塞ぎ込んで立ち直ってか

らは店を手伝い咲夜の補佐をしてきた。

「私もあなたも働き過ぎだと思っうのよ、どう？」

顎に指を当て視点を上に向け考え。

「よろしいですよ、咲夜」

「決まりね」

咲夜はニコツと笑い予定を作り今度の休みは出掛ける予定ができた。

「仲直り早っ」

「いいではないか、仲直りは早い方がいい」

休憩室、お茶を飲みながら闇と雷は話しているのだった。

そして咲夜が休みの日、海鳴市の中心の町に行きデパートに入っていた。

「服を買いに？」

「ええ、少ないのよ、もう少しね」

咲夜の私服はワイシャツ、ネクタイ、ミニスカートと星輝に似た服装だった。

「この服装落ち着くわね」

「ええ」

何気なく服装の話をしていたらその話題で盛り上がり服屋に入り様々な服を見て試着してまるで姉妹か親子、友達かのような雰囲気を出していた。

「これもいいと思わない？」

「オレンジですか……少し明るすぎませんか？」

「いいえ、似合うと思うわよ？ きつと」

色で少し口論となるが最終的にはそれを着て気に入り買い物籠に入れる。

「やっぱり似合うわね」

「あ、ありがとうございます」

自分の好みの色ではあるが実際着ると恥ずかしい、好みだが合わないと思っていたからだ。

「買ってあげるわよ？ 明るい服も増やした方がいいし」

「はい」

ここは素直に返事を返した、誉められた事により欲しいと思って

いたのだ。

「咲夜は？」

「私は……結構迷っているのよね……夏物も欲しいし、いつまでここにいないから」

商品を手に取り鏡の前でそれを体に重ねたりし迷っていた。

「これなんてどうでしょうか？」

「青か……いいわね、これにしようかしら？」

「いいと思いますよ」

選び終わると会計を済まし服屋を後にしデパートの中のレストランに寄った。

「うーん、店の仕事手伝っていると変な所見てしまいますね」

「その気持ちわかるわ、この前メイド喫茶行ったけどただメイド服着ているだけだし」

何を言っているんだと見られるが彼女の本職はメイドのため仕方ない。

「この後はどうします？」

「そうね……あなたが行きたいなら図書館に行く？」

「今日はいいです、特に読みたい本はありませんので」

食事を終えデパートを後にしばらく歩いていると隣側の道路に一台の車が止まり窓が開く。

「氷川さんじゃないですか」

「どうも、星輝さん、十六夜さん」

それは正義が乗っておりたまたま見かけたから話し掛けたのだらう。

「事件ですか？」

「ただの見回りです、津上さんがいない分、僕が一番頑張らないと」「そうね………付き合い長くて一緒に戦ってるからね」

正義と星一の友情は固いものだと思えて知る。

「ええ、あの人は何があっても帰ってきますよ、彼はそういう人です」

微笑む正義、二人もつられて笑うのだが。

「っ！」

「アンノウン！」

アンノウンの気配を察知し正義の無線機にも入電が入りアンノウン出現と入る。

「どうやら目的は」

「そのようね」

正義はGトレーラーと合流するべく走りだした。

「今日はバイクじゃないのよ………」

「咲夜、飛べますよね？」

「ええ、飛ぶなら気を付けないと」

二人は人気がない路地裏に入ると星輝はバリアジャケットにセツトアップ、共に空へ飛び立った。

「今回は私も援護します」

「頼むわよ」

「G3-X、装着完了しました」

「じゃあ頼むわよ氷川くん」

返事を返すとガードチェイサーに跨り荷台から降り道路を走る。作戦室には深海もありG3-Xを見てやついていた、何かを企むような顔だった。

「あなた、戦闘中なのに緊張感がないわね」

その表情を見られ注意を受け無表情に戻し仕事に取り組む。その深海の怪しさを鈴木は気付き始めていた。

（この人、何か裏がある……………少し調べてみるか……………）

こう見えても鈴木は気になると調べないと気が済まない性格なのである。

（深海理沙、何かあるわね）

それには小沢も気が付いていたが確かな証拠がない、ここは上記の性格で情報収集にすぐれた鈴木に任せ今は正義ら仮面ライダーのバックアップに取り組む。

港の工場施設、そこにフクロウに似たオウルロードのウォルクリス・ウルクスとハヤブサに似たファルコンロード、ウォルクリス・ファルコが人々を襲っていた。

両者共空中戦にすぐれており厄介な怪人であるのは確かである。そこにサイレンを鳴らしガードチェイサーに乗ったG3-Xが駆け付け、停車させガードアクセラーを抜いてから降りGM-01を持つ。

「カアアア……………」

G3-Xに敵意があると判断、一斉に飛び立ち高速で飛行し突撃をするがギリギリのところを回避し発砲しウォルクリス・ウルクスが打ち落とされ地面に転がる。

「上手いわ氷川くん」

小沢が誉めの言葉を言い更に追撃と銃撃をするが後ろからウォルクリス・ファルコが迫っておりこのままでは直撃だと思われたが。

「ハッ！」

しゃがみ、ガードアクセラーを握り真上に来た瞬間突き上げ腹に

直撃させるとそれに怯みその刹那、GM-01の銃撃を受ける。

「ぐうう……………」

立ち上がるとG3-Xのパンチによる連続攻撃を受けるウォルクリス・ウルクス、そして蹴り飛ばされ工場の敷地内に置かれていたドラム缶の山に突っ込みその下敷きとなる。

「ガアアアッ！」

ウォルクリス・ファルコが立ち上がり後ろからまた襲い掛かるうとしたが桃色の閃光がそれを吹き飛ばした。

「星輝さんに十六夜さん！」

駆け付けたのはEアギトと星輝だった。

「あの少女は？」

深海は仮面ライダーを知っていても星輝の事を知らないため問うと小沢は簡単に説明。

「因みあの娘はエスパーでプレコグでレベル6なのよね」

何気なく小沢はエスパーであるのも教えると深海は気付かれぬように笑みを浮かべた。

「そうですか……………」

それによりある計画が加速するとはまだ誰も知る由もなくその計

画に必要な物がこのGトレーラーにあるのは誰も知る由もない。

（小沢すみれ、あなたが封印したG3-Xの兄弟と言えるシステムは私が手にするわ……………フッフ、そしてまさかこんな世界でマテリアル、しかも理の……………更にプレコグ、最適だわ）

「来ます！ パイロ……………シューター！」

魔力スフィアを放ち飛行するウォルクリス・ファルコとウォルクリス・ウルクスに直撃した。

「フ、ハッ！」

落下したウォルクリス・ウルクスにキックを連続で繰り出し攻撃していきウォーターフォームとなりウォーターハルバードで流水に流されるが如く振るっていく。

「グッ、ガッ！？」

ウォルクリス・ウルクスはWアギトの速さに着いてこられず翻弄される一方だった。

「ブラスト……………！」

その掛け声が聞こえた瞬間、ウォルクリス・ウルクスに一太刀入れ怯んだ隙に離れる。

「ファイアアアアアーツ!!!!!!!!!!」

砲撃が放たれウォルクリス・ウルクスを吹き飛ばし大ダメージを与える。

「グオオオオオツ!!!!!!!!!!?」

地面を跳ねながら転がり込み立ち上がり爆煙から飛び出してきたのはアースフォームに戻りクロスホーンが展開しライダーキックを炸裂するEアギトだった。

「グワアアアアアアアアツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

ライダーキックは直撃、ウォルクリス・ウルクスは後ろへ大きく飛ばされ海に落ちると爆発、それにより水濺きが上がり虹ができる。

「ナイスよ、星輝」

「ええ」

G3-Xの方も決着が着きそうだった。

GX-05を起動させGXランチャーを装着しGM-01を連結させる。

「ルベライト!」

飛行しようとしたウォルクリス・ファルコに光の輪を巻き付け拘束。

「GXランチャー、ファイヤ!」

GXランチャーは発射され直撃し爆発、ウォルクリス・ウルクスは頭に光の輪が現れ爆死した。

「やりましたね」

「ええ」

Eアギトは落ち着きがなかった、まだ敵の気配がしているからだ。すると海面に水柱が立つ、何事かと思い見上げるとそこにいたのは水のエルだった。

水のエルを直視したEアギトは仮面の下、見開いていた、恐怖によるものだったそれは。

「咲夜？」

異変に気付いた星輝が話し掛けるが気付く素振りが見られない、その隙を狙われ水のエルは衝撃波を放つ。

「プロテクション！」

その刹那、プロテクションを張り衝撃波を半減するが碎かれG3-Xともども吹き飛ばされてしまった。

「ぐわあああつ！！！！？」

「うぐつ！！？」

倒れ込むがすぐに立ち上がり、水のエルも港に降り戦斧を持ちゆつくりとEアギトと星輝の方に接近する。

G3-Xが弾丸を連射するが水のエルには通用せず、衝撃波により吹き飛ばされ更に仮面が損傷し壁に激突し突き破る。

「正義！
咲夜！」

「私は……私は……コイツを知ってる」

そこ言葉は記憶を失う以前の事を思い出している事だった。

「まさか……記憶が？」

「わからない……けど私はコイツには……」

水のエルはなおかつ接近してくる、G3-Xが出てこず、Eアギトが戦えない今、ここは自分がなんとかしてでも切り抜けるしかないかった。

（闇夜！ 雷夢！ すぐに優太と信司を連れて港の工場施設に来て下さい、大至急ですよ！）

念話で二人に伝え答えを聞かないで切りルシフェリオンを持ち身構える。

「パイロ……シューター！」

パイロシューターを放ち直撃させるが効果はなく、水のエルについた傷はすぐに消える。

「なら消し飛ばすのみ！」

空へ舞い上がり水のエルにバインドを巻き付けルシフェリオンを
向け魔力スフィアを構成していく。

「ルシフェリオン！ ブレイカアアアアーツ！！！！！！！！」

「！！！！」

ルシフェリオンブレイカーを放ち光は水のエルを呑み込んでいく。

「やりましたか？」

無傷はないと思っていた、だが炎を纏った衝撃波が襲い掛かり防ごうとするのだが間に合わず。

「うわあああつ！！！！？」

直撃、バリアジャケットが焼け焦げ煙を上げながら地面に落下しゴムのように跳ねた。

「ぐっ……………！」

ルシフェリオンを使い立ち上がるうとするのだが気付くと足が目に入り、エルが立っていた、そして戦斧を振り上げていた。

「人ならざるもの、この世には必要ない、眠れ」

そう呟くと戦斧を振り下ろした、もう終わった、そう思ったその時、鉄がぶつかり合う音が響いた、見上げるとそこにはCアギトがコールドセイバーで戦斧を受け止めていた。

「ごめん星輝」

「咲夜！」

戦斧を上げようと力を入れるがなかなか上がらず。

「落ち着く時間ができたわ、最初は恐かった、けど見ていると怒りが沸き上がってきたのよ、コイツは倒さないといけない、そう思ったわ」

「何を言っている？」

「あなた、あかつき号で私を襲ったアンノウンよね」

Cアギトの物言いはどんどん思い出している感じだった。

「私と………星一を襲って海に落とした」

「なるほど、あの時のか」

Cアギトは鼻で笑い。

「思い出したわよ、お前がなんなのかで星一は私にとってどんなものなのかを、そう、私の本当の名前は津上咲夜、星一の姉よ！」

完全に思い出したその時、ウォーターフォームの防具も付きCアギトは星一のトリニティフォームに当たるトライフォームに変身、更に冷気が辺りを漂う。

「これは………！」

水のエルの足下が凍り身動きが取れなくなる、星輝も寒さを感じていたが彼女には被害がなく。

「ハアアアア………」

オルタリングにドラゴンネイルと呼ばれる爪のような装飾品が取りつき賢者の石は青白く輝く、TRYアギトの鎧は氷のようなでこぼこした物になり腕に鋭いエッジが付きクロスホーンは展開、ダー

クブルーに変色し眼も青くなる、アギト・ブリザードフォームに変身、コールドセイバーはいつの間にか龍のような形をした双剣が連結したダークネスカリバー・シングルモードに変わっており水のエルを上回る力で戦斧を弾き上げそのままダークネスカリバーで切り裂くブリザードブレイクを食らわすと水のエルの体は凍り付いていく。

「ぐおおおおっ！！！！！！？」

水のエルは光の球体となり逃走し事実上BDアギトの勝利となった。

「咲夜……………」

星輝は戦いが終わったのを確認し立ち上がりバリジャケットを解除。

「私は星一の双子の姉だったのよ……………」

それをもう一度彼女に向け伝えたとG3-Xが立ち上がり歩いて寄ってきた。

「十六夜さん、さっきの話、微かですが聞いていました」

「間違いないわ、星一は紛れもなく私の弟よ」

G3-Xにも伝えるが仮面は破損していた。

その後、G3-Xは当分出撃ができない状態で竜斗や鈴木が今より頑張らないといけなくなった。

第25話【咲夜】（後書き）

深海の正体はかなり分かりやすいですね。
鈴木の情報収集はユウスケから…………

次回予告

星一

「アンノウン……………！」

タウルス・バリスタ

「人は人のままでいろ！」

霊夢

「アンタなんか命令されたくないわね」

魔理沙

「わたし達はわたし達で自分を守るぜ」

星一

「お前らなんか道案内される筋合いはない！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2287x/>

魔法少女リリカルマテリアル 仮面と魔導師の物語

2011年12月31日15時59分発行